

のび太のBIOHAZARD
Extream Unbreakable
Memories

ジャン=Pハブナレフ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2004年7月 東京のとある街—— ススキが原で人々が暴徒化し次々と死傷者が現れた。無人島の旅から帰ってきたのび太たちは一瞬で地獄へと向かいあつてしまった！逃げ延びたのび太たちは同じ生存者である仲間たちと共に戦う！様々な仲間たちと共に戦う中で結びついた絆で生き残れ！

目次

第1章	Nightmare City	
Crisis		
第1章	Nightmare city	
1話	サバイバルの始まり	8
第2話	探索開始	22
第3話	見えない恐怖	33
4話	迫るタイムリミット	47
第5話	勇気を胸に	64
第6話	突然の襲撃	74
7話	進め勇者たち	84
8話	陰謀の裏山	89
9話	戦慄！館に潜むモノ	99
10話	地下坑道	112
11話	明日へと	125
12話	裏切りの真相	135
第13話	暴君登場！黒い野望を打ち砕け！！	143
14話	命がけの防衛戦	149
15話	決戦！！脱出の時	158
第2章	the lost city	
16話	新たなる戦いへ	172
第2章	the lost city	
設定		183
第17話	悪夢再来	187

er	第3章	25話	24話	232	23話	22話	21話	213	20話	202	第19話	第18話		
	five years after	戦いの準備	壊滅		迫り来るカウントダウン	最悪作戦	悲しみから…		テレビ局のラビリンス		大橋を救え！新たな力	襲撃ティンダロス	—	
		247	238			223	218						193	
	設定(第4章)	36話	35話	34話	33話	32話	31話	30話	29話	28話	27話	第26話	設定(第3章)	
		アンブレラ壊滅！	戦場の基地	猛獣島	3度目の脱出	話まさかの共闘作戦	捕縛	夜戦	下水道	狙撃手を追え	追跡者を振り切れ	帰還	—	
		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
		373	363	352	340	333	323	314	309	302	291	279	262	256

第47話	救済の時	452
第46話	最後のゲーム!	443
第45話	謀略の結果	432
426		
第44話	戦慄のプラーガ強化体!!	421
421		
第43話	逆襲のチームバイオ!	416
第42話	鳥かご	411
第41話	解放	406
第40話	魔蜂の蹂躪	399
39話	プラーガの脅威	392
38話	新たなる敵	382
37話	新たなる脅威	

第48話	明日へ	479
第48話	友は永遠に…	472
最終話	日常の中へ	459

第1章 Nightmare City Crisis

第1章 Nightmare city crisis

S 設定

*カッコ内は年齢

ドラえもんキャラクター 全8名

野比のび太 (11) CV大原 めぐみ

ご存知ドラえもんの主役で天才ガンマン。今回の事件にもその技術が役に立つ。原作のドラえもんよりも若干キャラが違うような感じで振舞っているが、内心本人が一番怖がっている。イメーজカラーは黄色

ジャイアン (11) CV木村 昴

近所のガキ大将だが、のび太たちを守るために戦う。キャプテン経験があつたため、いざという時の臨時リーダー。しかし、いつときの感情任せに行動しやすくもなっている。イメージカラーはオレンジ

源 静香 (11) CVかかずゆみ

のび太の未来の婚約者。怪我の手当てがうまく聖奈とは仲がいい。しかし、戦闘力は他と比べるとあまり高くはないがアシストといった後方支援関係は得意。イメージカラーはピンク

骨川 スネ夫(11) CV関 智一

いつも自慢ばかりしているヘタレ。咄嗟の勇気での実行力はメンバーの中でも随一。スネ吉によりハッキングを多少かじっていたためメンバーからの一応の定評はある。しかし、反撃には弱い。イメージカラーは緑

ドラえもん(?) CV水田 わさび

22世紀から来たロボット。今回はひみつ道具のほとんどをキャンプが終わった後、メンテナンスに出したためほとんどしか道具を使えない。今回はタヌキ呼ばわりせず、にネコだと言われたら素直に納得する人がいるため心中は少し複雑。イメージカラーは水色

出木杉 英才(11) CV荻野 志保子

天才であり、のび太の恋のライバル。とはいえ今回はのび太たちを纏め大人たちにも提言をする頼れる仲間。以外にも射撃の腕は微妙。

趣味は大学教授の研究を調べる。イメージカラーは白

田中 安雄(11) CV鈴木 健一

のび太のクラスメイトで晴夫と行動している。グレネードを持たせたらのび太に勝るとも劣らない実力を発揮する。聖奈に片思い中。趣味はゲーム。イメージカラーは浅葱色

馬場 晴夫(11) CV小西 克也

のび太のクラスメイトであり、安雄の相棒。安雄と違って武器はショットガンで戦うことが多い。普段、滅多に動かないから今回の事件で体重が減り、痩せられるのではと本人はいう。

趣味は大食い。イメージカラーは空色

のびハザキヤラ全8名

緑川 聖奈(13) イメージCV釘宮 理恵

のび太の学校の卒業生。趣味はテニスで運動神経も中々。行動力があり、単独で動いてしまうのもしばしば。イメージカラーは深緑

翁蛾 健治(13) イメージCV赤羽根 健治

聖奈の同級生。名門の家系に生まれるもその流儀などに束縛されるのが嫌なため、金髪になっている。見た目がアレでもタバコは吸ってない模様。趣味はナイフ集め。イメージカラーは山吹色

山田 太郎（6） イメージCV茅野 愛衣

のび太の学校の1年生。未っ子型なので基本的に戦えない。本人曰くメンバーのよき癒し役かもしれない。趣味は動物を見ること。イメージカラーは朱色

金田 政宗（41） イメージCV大友 龍三郎

のび太の街の町内会長だがとてつもないビビリ。自分だけ助かりたいと思っている。のび太たちを逆撫でするかのような自己中心的な発言で死亡フラグを積みまくるが…

趣味は金貨集め。イメージカラーはグレー

桜井 咲夜（13） イメージCV南條 愛乃

聖奈の同級生その2。父親が武闘家で特に空手と剣道がうまい。とはいえ年相応のおしゃれをしようと考えている。趣味はスポーツ観戦。イメージカラーはクリームゾン

白峰 大貴（13） イメージCV岸尾 だいすけ

聖奈の同級生その3。聖奈には嫉妬らしきものを覚えるが恨んではない。のび太たちの兄貴ポジションでよく周りを引っ張ろうとする。趣味はプラモデル。イメージカラーは黒

富藤 雪香（13） イメージCV喜多村 英梨

聖奈の同級生その4。かなり気が強く、大人でもタジタジになるほど。しかしそれと同時に周囲から煙たがられないように配慮はしており、時折姉貴とも呼ばれ頼りにされ

ている。趣味は少女漫画集め。イメージカラーは藤色

久下 真二郎（25） イメージCV緑川 光

警官。とはいえまともな正義感はなく給料目当てでほぼ警官になったようなもの。しよつちゆう女性にイジられる。趣味はコンビニのアイスを食べること。何かあるとすぐ昇給を考えている。

イメージカラーは藍色

オリキャラ 全5名

大橋 佑太（16） イメージCV梶 裕貴

孤児院出身で運動神経はまあまあで勉強はそれなりにできる。夏休みもあつてか孤児院を訪ねた時に事件に巻き込まれる。孤児院にいたからか初対面の人が多いと周囲のチームワークを考える。なにやら女性のペンダントを持つてるようだが…

趣味はアクション映画でイメージカラーは紫。

青木 優作（26） イメージCV宮野 真守

ナルシストで自分を天才ととにかく自称する小説家。しかし、面白い小説を書くためにあえて専門外なことを積極的に学ぶ努力の天才。人の役に立とうとするときの彼の行動力は計り知れない。趣味は様々な学問の知識を得て小説を書くこと。イメージカ

ラーは青

赤田 陽介（23） イメージCV池田 純矢

陽気な関西弁で話す青年。バイクで全国を旅しようかと考えていた無職。とにかく勢い任せで計画性がない。そのせいでよく周りに止められたりもする。趣味は旅行。イメージカラーは赤

翡翠 瑠璃子（26） イメージCV高垣 彩陽

清楚な感じで一見大人しそうだが、自分の意見を伝えたり作戦を練るメンバーのブレーンの1人。なお料理の腕は微妙。趣味はスイーツ屋巡り。イメージカラーは瑠璃色

笹木 月夜（24） イメージCV小松 未可子

一人称がボクのボクっ娘。翡翠とは同じ会社で働いている。スポーツ好きだが女子力関係のスキルは微妙。女性社員や男性社員を纏める役が多いため尊敬されている。趣味はアウトドアスポーツ。イメージカラーはラベンダー

（以下、本作の特徴）

- * 武器は一応全員はハンドガンとナイフのどちらかを装備している。
- * キャラが多い分、武器や戦い方は大体異なる

* 参考作品は本家と本家2にG、G2、無理ない1と5、Another Edition、Insensitivity、Destiny、ソード低難易度&高難易度、Arrangement Mode、 β 、Escape Islandの全16種類

* 可能な限り過去ののびハザ作品の要素を元に書いてますが作品ごとに取り入れる量に偏りがあります

1話 サバイバルの始まり

2004年7月、野比のび太たちは無人島のバカンスに出かけた。彼らにとつても楽しい2日間だった。そして帰宅の日で、彼らは長い悪夢に陥ることになることを知る由は無かった。

ここは、のび太の部屋。静かな場所にピンク色のドアが開いた。

「うわーすげー楽しかったぜー！」

「ママに早く会いたいな。」

最初に出て来たのは剛田ごうだ武と骨川たけしスネ夫だった。ちなみに武は皆からジャイアンというあだ名で通じている。

「いざ何日も家族に合わないとなるとさみしいものね。」

続いて現れたのは源みなもと静香と野比しずかのび太だった。そして最後に出てきたのは22世紀の未来からやってきたドラえもんというネコ型ロボである。しかし、ネコというには些か欠陥が見えるがここではあえて語らないようにしよう。

「ありがとうドラえもん。楽しかったよ。」

「お安い御用だよ、のびた君。じゃあ僕は先にママに挨拶してくるよ。」

そして5分後にジャイアンとスネ夫と静香は家に帰った。
「それじゃ俺たちも帰るからな。」

《／u

のびたがママのいる台所に行くところ、ドラえもんが落ち着きがなぜか無かった。

「ああ、のび太くんか。実はママの様子がおかしいんだ。さつきから呼びかけてもずっと反応しないんだ…」

「えー？ どういうこと!？」

のび太はママに近づいた。

「ママはどうし…うわー!」

「なっ!」

顔が歪んだのび太のママがこつちを向いたので二人は咄嗟に逃げた。その足元には顔を食い挟られてた。パパの遺体があった。

「…ッ逃げよう! ママの様子がおかしい! きつといたずらに違いないよ!」

「え、うん! ごめんねママ!」

2人が外に出ると町のあちこちから火が出ている。

「これはどうなって…!」「くつ、来るなあああ!!」

「あれは神成さん!」
かみなり

神成はのび太たちが遊ぶ空き地の近くに住む中年である。よく空き地で野球をする時にしよつちゆう盆栽を壊される不運な人でもある。

「ぎゃあああああ!!!」

「そんな…あの神成さんが…!」

「いたずらじゃ…ない…」

2人が唾然としてしているとゾンビたちが振り返った。

「ツ、行くよ!のび太くん!ここは逃げるんだ!」

「う、うん!」

神成さんが2人の目の前でゾンビに喰われて死んだ。その事実を目の当たりにしてしまったのび太たちはゾンビに気づかれないようにとにかく逃げ回った挙句、倉庫に入った。

「これは?」

のび太が倉庫に入ると警官の死体から何かを見つけた。するとドラえもんは息を飲んだ。

「これは銃だ…のびた君。取り敢えず今はこれを使って逃げよう。」

「これは使いたくないけど…仕方ないよね…ねえ、ドラえもん。」

のび太は真剣そうにドラえもんを見た。

「なに?」

「そういえば、この状況を打破する道具は?」

するとドラえもんは頭を下げた。

「ごめん!今どこでもドアをはじめとしたいくつかの道具は残念なことにメンテナンス期間と重なっちゃったんだ!」

「そんな〜!」

のび太が膝をついて倒れた。

「こんな時にも役に立たないなんて…!ごめん。」

のび太がため息をついた。

「分かったよ。こういうのはいつものことだから…まずは学校へ行こう!みんなが心配だ!特に静香ちゃん!」

「もう…!」

《u》

2人はすぐに倉庫を出た。辺りを見回したが幸いゾンビは来てはいなかった。するとすぐ近くに一人の青年が走ってやって来た。

「おーい助けてくれ!奴らに追われてんだ!」

青年の後ろからはゾンビと化した警官2体が襲って来ているのが2人にもわかった。

《u》

「でも…」

のび太は銃を構えるも一瞬躊躇してしまった。

「のびた君早くあの人を助けよう！彼を助けないと僕らも危ない！」

「…うん！」

「来るぞ！」

3人がゾンビを前に武器を構えた。

のびたはさっきのハンドガンで応戦した。

(ごめんなさい…！)

のび太は銃を使う躊躇いを押し殺しゾンビに発砲した。しかしゾンビは歩いてきたためさらに数発打ち込むとそのうちの一発が急所に当たったのかゾンビは地面に倒れ二度と起き上がらなくなった。

(僕は…これをそれなりに使えるようだ。役に立たないと思う特技が役に立っている！)

「やるな！ええと…とりあえず行くぞ！」

「はい、空気砲！」

ドラえもんは空気砲で応戦したものの、威力が高くないため10発撃ってようやく1体の動きを止めた。青年も攻撃することがごとく外れていた。

「くそっ！燃費が悪すぎる！」

「行くぞー！」

「はい！」

続いて青年とのび太の連携でゾンビに膝をつかせた。

「あああああー！！！」

ゾンビが唸り声をあげた。

「今だ！打て！」

「はい！」

空気が砲が頭部にヒットし、ゾンビは倒れた。

「やったな。おっと、自己紹介がまだだったな。

俺は^{おおはし}大橋 裕^{ゆうた}太だ。よろしくな」

大橋が手を差し出して順に2人と握手した。

「野比のび太です。」

「僕、ドラえもんです。」

3人は学校へと歩き出した。

「なんじゃそりゃ？見たことねえやつだな。まあいいか。

にしてもだ……この町はどうなってるんだ？夏休みつてことで、孤児院の父さんのところに行っただが、なんかあったらしくてな。そんでみんな町の外に避難したのを知ったら

バットでゾンビの頭を潰したジャイアンはすぐさま警官のフォローに回った。
「武さん！」

静香とスネ夫は閉められた鍵を開けようと奮闘していた。

「無理をするな武君！」

「分かってます！そんなことよりまだまだ来ますよ！」

バットを持ってジャイアンは勇敢に立ち向かい、警官はハンドガンでジャイアンを援護していた。

「あれはジャイアン！」

「知り合いか？」

「はい！友達です！」

のび太は首を縦に振った。

「じゃあ助けないと。おいゾンビども！俺たちが相手だ！」

大橋がハンドガンを構え、ゾンビたちの背後に立って攻撃した。

「あいつはさっきのハンドガン！挺渡したやつか。やれやれまた会うとはな……」

大橋が施設を出る頃、警官は大橋に事前に防衛用としてハンドガンを渡していたのだ。もつとも今回の事件では一般人が防衛用に武器を所有することが推奨されていたのだが……

「のびたさん!」

静香が目を輝かせた。スネ夫も針金を鍵穴に通して開錠に努めているとカチツという音が聞こえた。

「よし!早くこつちへ!」

スネ夫が武器を持って真つ先に中へ入った。

「急いで!」

「分かつてる!」

そう言うのと久下とジャイアンと大橋が入り口のゾンビを倒すとそのまま保健室に入った。

《u》

「なんだね!君たちは?」

そこには数人の男女と子供がいた。

白毛の中年が狼狽していた。

「あなたは!もしかして、この学校の生徒会長だった緑川みどりかわ 聖奈さん!?」

スネ夫が制服をきた女子を見た。

「ええそうです。よろしく。」

聖奈がお辞儀すると金髪の褐色肌の青年と赤キャップの少年が近づいて来た。

「さて落ち着いたんで自己紹介するか！」

俺は翁蛾おうが 健治けんじだ。」

「僕は山田やまだ 太郎たろう！」

「うん、よろしくね」

「チツ、金田だ……」

金田が不機嫌そうに目をそらした。

「俺は大橋裕太です。でもってこいつらは野田のぶちとドリえもんです。」

「違います！野比のび太とドラえもんです。」

のび太が怒りながら大橋を見た。

「ありや？」

「まあまあ。ドラえもんに関してはタヌキよりはマシだよ。」

スネ夫が小声でのび太に囁いた。

「なんやなんやお前、タヌキって言われんのか？かわいそやなく」

陽気そうな青年が笑いながらドラえもんを見た。

「僕は狸じゃあない。ネコ型ロボットです!!」

「ネコお？」

青年が目を細めてドラえもんを見た。

(どう見てもネコやないやろ。けつたいな…)

すると警官が手を挙げた。

「おいちよつといいか？なんか俺たちだけ省略してやしないか？

俺は久下^{ひさした}、こんな頼りにならなそうな感じだが一応警官だ。」

それに合わせるようにジャイアンたちが皆の前に立った。

「俺は剛田 武で、その女の子が源 静香。でもって、こいつは骨川 スネ夫。あの骨川財閥の御曹司で心の友さ。」

「ほんまに!?あの骨川財閥の?」

「あの…まだあなたの自己紹介がまだなんですけど…」

静香が青年に言った。

「おつと悪いな！俺は赤田^{あかだ} 陽介^{ようすけ}。よろしく頼むわ！本当はあと1人おるんやけど時期

に来るから待っててな。」

「そこには救急箱が緊急用でいくつか置かれていますますが別に持っていつでも構いませんよ。」

聖奈がのび太たちに説明した。

「ありがとうございます。」

「これで怪我の治療もできるわけか。」

久下が中身を確認していた。

「なあ、久下さん。あいつらはなんなんだ？一体どこから来たんだ？」

ジャイアンがバットを拭きながら確認中の久下を見た。

「さあな、分かっているのはやつらが2日前から突然暴徒として現れたことぐらいだ。それから1日で街の大半が奴らに襲われ、街の住民は順次救助要請でほとんどが保護されたが、現地の警官は確保次第に避難準備を進めろという指令が下ったんだ。」

「そうなんですか……」

「太郎くんは大丈夫？」

静香が包帯を出したが太郎は首を横に振った。

「僕のパパとママが火事で……」

「そんな……」

静香が息を飲んだ。

「しっかしどうする？今どうすりゃいいのかなんぞまるでわかんねえぜ。」

健治がソファアに座りながら天井を見ると扉が開いた。

「じゃあ、学校を探索して脱出方法を探せばいいんじゃないかな？」

入ってきた人影と声にのび太たちは驚愕した。

「出木杉（君、さん）！」

出木杉できすぎはのび太の同級生で、優れた頭脳の持ち主でのび太にとって恋のライバルでもある。

「今までどこにいたんだ？」

スネ夫が首をかしげた。

「ごめん、ちよつとトイレに入ってた。」

「出木杉にもそういうところがあるんだね、意外…」

のび太が感心していた。

「じゃあ、話を戻すね。僕らは孤立していて救助が来ないかもしれないかもしれない。だから、自分たちで生き抜くんだ。取り敢えず3つのグループに分かれようか。」

「私はいかんぞ！ あんなところになど行けるか！」

金田が震えながら頭を抱えていた。

「つたく、協調性がねえおっさんだな。」

大橋が頭を掻きながら金田を見た。

「まあ、そないなオツさんは無視して決めまようや！」

赤田が大橋の肩に手をポンと置いた。

するとドラえもんが手を挙げた。

「すまないけど僕は道具のメンテナンスを済ませたいから残らせてもらおうよ。」

「うん、戦力的に少しは有利になりたいからね。頼むよ！」
出木杉が首を縦に振った。

その一言で3つのグループにくじで分けられた。
まず探索内部はのび太と赤田にスネ夫、健治、太郎に決まった。

続いて外はジャイアン、出木杉、久下、大橋

留守は金田、ドラえもん、静香となった。

「じゃあ、任せたよ！ジャイアン！出木杉！久下さん！大橋さん！」

「おう！任しとけ！」

命がけの脱出劇がいまここから始まった。

第2話 探索開始

ジャイアンたちが外に出るのをのび太たちは見送った。のび太は振り返ってスネ夫たち4人を見た。

「じゃあどこに行きます?」

特に行くあてもなかったのび太たちだったが、太郎が手を挙げた。

「ひとまず、近くの教室をぜえーんぶ探せばいいんじゃないかな?」

現在のび太以外の装備は健治はナイフのみで赤田とスネ夫はのび太同様ハンドガンのみで太郎は丸腰である。

「まずは連絡手段から確保しようぜ!職員室に行けばきつと携帯が手に入る!」

「せやな、だつたら行動あるのみや!」

赤田が職員室に入った。すると一体のゾンビが襲ってきた。

「ああく!」

「()は俺が!」

赤田がハンドガンで何発か命中させた。

「続いてこいつでしばき倒したるで!健治!」

「任せな！」

健治が背後に回り込んでナイフでゾンビの頭を斬りつけ素早く離れた。嘯み付こうとしたゾンビは地面に倒れ、最後はのび太により頭部を撃たれ倒された。

「やるな、のび太！」

「いえいえ本物の銃の扱いはまだまだですよ。それに健治さんのナイフテクニクもさすがです。あつ！」

のび太が照れながら机を探っていると携帯電話を発見した。

「いくつか携帯電話を見つけました！ついでに充電のプラグもありました！」

「よし、これで連絡できる！」

「じゃあ次行くぞ！いつまでもこないなとこに残ってるわけには行かへん！」

赤田がさつきと部屋を出た。のび太たち内部チームは途中の教室を調べながら調理室に入った。しかし、途中の教室にはめぼしいものは無かったり、入れないよう封鎖されていた。

「たいした食料は無いみたいだな。まあ、夏休みだし供給がねえのかもな。」

一行は調理室全体の探索を行ったが、あったのはからの冷蔵庫と鍵のかかった部屋だけだった。

「うん？この扉…開いてる？」

スネ夫が鍵のかかってない扉を開けた。すると奥の部屋で太った容貌の少年が倒れていた。

「お前はスネ夫…それにのび太…？」

「晴夫！」

「誰だ？」

「どうしたんだ晴夫!？」

のび太が晴夫を助け起こした。

「お兄ちゃん大丈夫？」

「どう見ても大丈夫じゃあねえだろ。」

健治が顔に手を置いて呆れながら言った。

「おいのび太。晴夫を保健室に運ぶぞ！見た所大した怪我じゃない！まだ手を施せば助かる！」

スネ夫とのび太が晴夫に肩を貸した。どうやら晴夫はゾンビと戦い、逃げる途中で大きく階段から転倒したため軽傷を負ったらしい。

「ちきしょう…：ビビリで運動神経なさそうなのび太に負けるなんて…」

「余計なお世話だよ！」

「なんや無事やないか、アホ！」

のび太と赤田が苦笑いを浮かべながら晴夫を担いで行つた。

「これを…」

「なんだよこれ？」

スネ夫が赤いカードキーを受け取つた。

「何か今後の探索に役に立ちかもしれない。今学校は奴らが現れたせいで防火シャッターが封鎖された状況にあるんだ。これは恐らく2階へと続く防火シャッターの起動キーだ。」

「ああーありがとうー！」

のび太たちは2階の防火シャッター起動キーを手に入れた。そして晴夫は手当てを受けて保健室のベッドで眠つた。

一方、外部チームではジャイアン、出木杉、久下、大橋が学校の正門の前に立つた。

「さてと、これだけ街が広いと学校よりも探すのに苦労するな、どうする？」

辺りを見回しながら、大橋は尋ねた。

「俺は署に行つて生き残りの確認をして来る。見つけ次第そいつらを連れて合流するつもりだ。今はとりあえず署より学校に集まって戦術を練り直す必要がある。」

「それじゃあ、俺と出木杉はコンビニで食糧とかを仕入れて来ます。」

「名案だね、武くん。食糧は重要だ。飢え死には勘弁だ。」

出木杉が首を縦に振った。そしてすぐに久下と赤田は署にジャイアンと出木杉は食糧と銃弾と武器を仕入れに向かった。

コンビニ前はゾンビの数は少なく、それほどの戦いもなくジャイアンと出木杉は急ぎコンビニへ入った。

「どうやら、奴らは今はいいようだ。急ごう!」

2人がコンビニに入ると僅かな食糧が荒らされて無くなっていたのに気がついた。

「一体誰が、俺らよりも早くに取ったんだ?」

「分からない…けどこれだけあればいいだろう…」

そしてジャイアンと出木杉は裏口から脱出すると近くに銃が幾つかと弾が落ちていた。た。

「こここの周辺に立て籠もってたやつが残したのか?」

「武くん危ない!」

すると後ろからゾンビが襲ってきた。

「(っ)いっ!」

ジャイアンのパンチがゾンビの腹部に命中し体勢を崩した。

「このっ！」

出木杉のハンドガンが正確に頭を撃ち抜いた。

「流石だな出木杉。お前とは初めて組むが中々だ。」

ジャイアンが銃と弾を拾った。

「けど、扱うようになってまだ数日だ。にしてもここに銃と弾があつたのは妙だな……」

出木杉が難しそうな顔を浮かべた。

「もしかしたらここで立て籠もつてた人が戻ってきたのかもしれない……」

ジャイアンはたまたま見つけた死体に手を当てた。

「すいません、これ……もらいます！」

ジャイアンと出木杉は武器と弾をバツクに入れてその場から去った。

一方、久下と大橋は警察署に入った。2人は散らばつて建物全体を探した。

「久下さんこっちはダメだ。全滅してる。」

大橋たちが一通り建物を見たが、警官たちは中にいた警官たちはゾンビに殺され、中には一般市民を守つて死んでいた。

「そうか……クソッ！」

久下は壁を殴った。大橋も顔を曇らせたがすぐにカバンから何かを取り出した。

「だが見てくださいいハープがあった。取り敢えずこれで全部です。」

あつたのは、緑10本と赤10本と青紫20本のハープだった。

「ああ…これは死んでいったあいつらの分だ…」

「はい！それじゃ…」

すると窓から、犬のゾンビと数体のゾンビが飛び出してきた。

「こいつは犬!?!犬までゾンビに…」

「まあまあやつつけりや何だっていいでしょ!」

二人ともハンドガンを構え、ゾンビたちを牽制したが犬ゾンビが殊の外素早く、簡単には死ななかつた。

「くそ、どうすりゃいいんだよ。こいつすばやいn…」

大橋が必死に狙い撃とうとしたが、背後から警官ゾンビが襲ってきた。

「危ない!」

久下がとつきに声をかけた。

「食らいやがれ!」

するとゾンビが遠くから頭を撃たれ、その場に倒れた。そこにはジャイアンと出木杉が立っていた。

「武君!」

なんと2人はは見たことない銃を使っていた。

「これはショットガンですよ。」

その横から出木杉がショットガンを見せた。

「そしてこれはスナイパーライフルですよ！精密射撃ならお任せです！」

「おおすげーなあー！」

大橋が感心する中、久下はそれらの銃がもともとあつた場所に覚えが無かつたため首をかしげた。

「（これをどこで？）」

「ええツと…その辺で手に入れました！」

ジャイアンがアハハと笑いながら久下を見た。

「おいおい…」と久下が突っ込んだがこの場ならしやうがないと思つたのかそれ以上は言わなかつた。

「まあいい！敵は倒した。行くぞ！」

「はい！」

そして、彼らは食糧（大体2、3日分）と銃弾10発のマガジンにショットガン、スナイパーライフル、日本刀、猟銃を運んだ。

ジャイアンたちが学校の通りに入ろうとしたところ、その先でゾンビに追われる女性
がいた。彼女は緑のワンピースと黒のヒールを履き、必死に逃げていた。

「ハアハア、助けて！誰か！」

「あれは犬とゾンビ！」

ジャイアンが武器を構えた。

「待て！ここは俺が行こう！」

大橋は自信満々に飛び出して行ってゾンビの前に立ちはだかった。

「こつちだ！」

「はい！」

大橋もゾンビたちに二度も遅れを取ることはなく、すぐに追い詰めていた。

「すごいな！奴らをすぐに倒すなんてね。けど……！」

しかし犬はゾンビよりも比較的素早く動くため簡単には倒せなかった。

「つたく、とつととやられてくれってのに！」

「ここは僕が！」

出木杉がスナイパーライフルで狙いを定めて狙撃した。ライフルの弾丸はゾンビの

急所に当たった。

「やったな出木杉！」

「助かった！」

ゾンビたちを一通り倒したジャイアンたちは女性とともに学校の近くまで歩き出した。

「ありがとうございます。私は翡翠　瑠璃子、普段OLを務めています。」

「よろしく！翡翠さん。」

大橋が一礼すると翡翠が微笑んだ。

「こちらこそよろしく久下さん、大橋君、武君、出木杉君。ええつと…君たちは何処から？」

「近くの学校からです。それに翡翠さん、この先街を動くことになると丸腰はまずい。」

「これ使ってください。」

出木杉はマシンガンを1挺渡した。

「ありがとう。でもこんなもの私には…」

「きもちはわか r…」

と久下が言うとした。

「気持ちにはわかりますけど生き残るためです。」

出木杉の言葉に翡翠は首をゆっくりと縦に振った。

「分かりました。いざという時は…ですな？」

「……………」

久下は不満そうに2人を見た。そして1分後探索組は学校に集まった。

第3話 見えない恐怖

「生存者が1人増えたぞ。翡翠 瑠璃子さんだ。」

「ええつと…翡翠です。」

「よろしく翡翠さん！」

太郎が挨拶するが、翡翠自体はドラえもんを変な目で見た。

「あの…そちらの方は一体？」

のび太が慌ててドラえもんの紹介をした。

「ネコ型ですか…未来も変わったロボットを作るんですね。」

「そうなんですよ…はははは…」

ドラえもん自身が苦笑いを浮かべるとジャイアンたちが早速全員に防衛用武器を渡した。

「これをみんな一個づつ持ってつてくれ！」

「これって、武器?!」

「もし奴らが来た時に備えて持ってつてくれ！」

するとドラえもんが立ち上がった。

「ここからは僕も行くよ！秘密道具の調整は済ませたから！」

ドラえもんは現状戦闘用のひみつ道具しか使えなかったがどれも威力が貧弱で今後の行動に支障が出るとドラえもんが判断し、改造を施したのだ。

「じゃあ、メンバーを変えよう。これで遠くも行けるだろうからなるべく探索に割く人員は少ない方がいい。だから、慎重に決めようよ。」

「確かにそうだな。探索範囲が広がれば自ずと危険がやって来るし大勢では動けない感じか。」

健治が腕を組んだ。

「そうだね。じゃあ変えようか」

「私は晴夫くんの手当てに引き続き当たるわ。」

「静香さん、私も手伝います。ある程度知識のある人が2人いれば問題ありません。」

「聖奈さん…ありがとうございます！」

聖奈も手を挙げた。

「じゃあ、僕はこの防火シャッターを起動させに行くよ。」

「じゃあ、僕とスネ夫君が護衛するね。」

「ドラえもんはともかくどうして僕がく!?」

「うるせえ！出木杉の考えを分かってやれ！」

ジャイアンの怒鳴り声でスネ夫は渋々出木杉とドラえもんについて行くことになった。

「健治にいちやーん！僕もついてくよ〜！」

「つたく、死んでも知らねえからな！」

「武くん、俺は今度内部の方の探索に当たる。一応内部の仲間との合流を果たしたいんだ。内部の方に行かせてもらおうぞ。」

「わかりました。のび太！メンバーチェンジだ！」

「うん！」

内部班 のび太、赤田、久下

外部班 ジャイアン、太郎、翡翠、健治

シャッター班 ドラえもん、出木杉、スネ夫

待機班 静香、聖奈、金田、大橋

(晴夫は治療中なのでノーカウント)

シャッター班は防火シャッター起動キーを制御する教室に入った。

「あつたよ。この装置のはず……」

すると近くに人影が居た。

「誰だてめえらー！」

辺りを見回すと3人には腕を負傷した青年が睨みつけていた。

「あなたは白峰さん!？」

「白峰さんって…この学校の先輩で聖奈さんと同んなじ中学の?」

出木杉が首を縦に振って白峰に近づいた。

「ああそのようだね。取り敢えずドラえもん君は彼の治療を!スネ夫君、これを!」

「オツケー!」

そう言うとスネ夫は間髪なしに起動キーを挿し込み2階のシャッターを開けた。その瞬間天井のダクトが開いた。

「なんだ?」

「まさか、奴らか!くそまだ死んでないのか?」

ダニの怪物が現れたが何故かすぐに逃げた。

ダニの怪物の予想外の行動に一同はポカンとしていた。

「あいつ何がしたかったんだ?」

白峰が呆れ気味にいうと窓を破ってゾンビが現れた。

「くっ新手のゾンビか!」

ドラえもんが改造空気砲でゾンビの頭部を撃ってひるませた隙に出木杉は頭部にハ

ンドガンでゾンビたちの頭部を打ち込んだ。

「へえ…やるな出木杉！」

「本当にさつき持ち始めたのにな。」

白峰も自分で立ち上がった。

「いやいや僕は2体倒すに相当苦勞したし、まだまださ。銃に関しては初めて僕が扱いつらいと思ったよ。」

出木杉がポケットに銃を入れた。すると、のび太から連絡が入った。

「出木杉君、防火シャッターが開いたけど出木杉君たちがやったんだね。」

「うん」

「のび太。僕たちはこれから合流した白峰さんと体育館の様子を見てくるよ。」

「わかった。」

のび太は通信機を切った。

「ここには数日前から生存者たちがまとまってたんだ。俺もそんなかで何人かの大人と協力して守ってたんだが今日になって突然防火シャッターが降りちまったんだ。」

「そうだったんですか…」

「ああ、それである怪物に襲われたんだ。やつは酸を吐いてきてな。肩がやられちまっ

てたんだ。正直お前らには感謝してる。」

そして体育館に入った白峰たちは見たものを前に愕然とした。なんとそこにいた生存者は全滅していたのだ。

「嘘だろ！一体何が！」

「死んで…いる？」

白峰はそこで起こったことが信じられなかった。

「白峰さん上だ！危ない！」

突然の上からの攻撃を咄嗟にかわした白峰が見上げると天井にはカメレオンのような化け物がいた。

「G S Y A A A ……!!!」

「ママァー！」

スネ夫は尻込んでしまった。

「くそ、くらえ！」

出木杉とドラえもんがハンドガンとショックガンを構えると化け物の姿が消え、体育館は静寂に包まれた。

「なっ！消えた!?!」

「カメレオンの奴はきつと擬態しているんだ！」

一行は額から汗を流した。カメレオンは特にこちらを襲ってきはしなかった。そのまま静寂が訪れた。

「何かまずい……逃げよう!」

一行はなんとか出口まで走ってその場を去ることができた。

するとさっきの化け物の咆哮が聞こえた。

「なんなんださっきのは?」

「分かりません。けどもしかしたらさっきの咆哮で奴はどこかに逃げたに違いない。取り敢えず一旦保健室に戻りましょう! 奴は近くににいるに違いない! 今の僕らじゃあじゃあいつは倒せない!」

出木杉たちは逃げながら一行は保健室になんとか戻れた。

その頃外部チームのジャイアンに太郎、健治そして翡翠は店の近くでまだ残った弾丸や武器と食糧を確保した。

「こつちだ! 早く!」

「急いでください!」

しかし、店にゾンビが現れ、確保場所がゾンビたちにばれてしまった。

「くそつたれ! これでもくらつてろ!」

ジャイアンがショットガンでゾンビを吹き飛ばした。その帰り道ジャイアンたちはカゴやリュックにありつたけの弾丸などを詰め、学校に戻っていた。

「いっぱい取れたね！」

「けど、何日持つかだ…」

ニコニコ笑っている太郎の横で健治は不安な表情を浮かべていた。

「それにしても自衛隊はどうしたんだろうな？」

ジャイアンたちが歩きながら会話していた。

「確かに一向に助けに来ませんね〜」

翡翠が荷物を持ちながら呑気に言う。

「おそらく街に出た化け物の対処で手一杯なんだろうな。あんなのが他所に出たらやべえよ。」

健治が先頭を歩いていた。

「きゃあああああ!!」

すると目の前でゾンビに襲われる女性がおり、彼女は必死に走っていた。

「来るな！来るな！」

女性は立ち止まって石を投げていた。翡翠はその姿を見てハツツとした。

「あれは笹木 月夜さん!?!」

「知り合い？」

太郎が首を傾げながら見た。

「ええ！同じ職場の後輩！」

「ここは、俺が行くぜ！」

荷物を置いた健治はハンドガンを持ち、ゾンビの頭に一発命中させた。

「早く逃げろ！」

健治は銃の扱いにはナイフよりかは多少慣れていよう、ゾンビ一体を瞬殺した。

しかし、横からゾンビが攻撃を仕掛けようとしていた。

「危ない！」

翡翠がマシンガンで攻撃して、ゾンビを怯ませた。

「おまけだ！」

ジャイアンがショットガンでゾンビの首を飛ばした。ゾンビの遺体はゆっくりと倒れた。

「ふう、ありがとう。僕はささき笹木 かぐや月夜！」

「おれは剛田武です。」

「無事で何よりです！笹木さん。」

「先輩！無事だったんですね！良かった！」

笹木は安堵し、翡翠と抱擁を交わした。

「ええ!!これからは一緒に脱出する方達と協力しましょう!付いてきてください!」

「はい、先輩!」

ジャイアンたちは保健室に戻った。

その頃保健室では白峰たちが戻ってきてきて休んでいた。

「まったく他の奴は何をしとるんだ。役立たずめ。」

金田が部屋の片隅で独り言を言っているのとドアが開いた。

「誰だ!」

大橋が銃を構えた。すると少女が手をあげて入ってきた。

「あつとごめんなさい。私は桜井さくらい 咲夜さくやでこの人は…」

すると勢いよくドアが開いた。ドアを開けたのは青いGeniousと書かれたTシャツに短パンの青年だった。

「俺こそまだ見ぬ天才小説家を目指す空前絶後未来の天才

青木あおき 優作ゆうさく

だ!」

一行が青木の紹介に引いてしまい少し保健室の空気が無言になってしまった。

(声がでけえなあ…ゾンビとかきたらどうすんだよ…)

「私は源静香でその人は大橋祐太さん。奥にいるのが金田さんです。」

「あと他にもあと10人くらいいるから待っていてくれ。」

「なんだバラバラなのか。まあいいぜ。そんなに焦らなくてもな。俺も自己紹介の準備はしとくぜ。」

青木が近くの椅子に座りだした。

青木たちが保健室に入る時から少し遡って内部チームでは一通り防火シャッターのあるエリアを除いた南校舎一階を探索していた。

「さて、俺たちはどうすんだ？」

「取り敢えず俺らは1階を調べておこうぜ。」

「2階の鍵に関しては出木杉君たちがやっていますしね。」

そして、のび太たちは1階を調べたがどこも中から打ち付けられており、とくにめばしいものはなかった。

「困ったなあ…まるでいいとこがなくてあかんわ。」

すると防火シャッターが開いた。

「これは！」

「あいつらがやったんやな！」

赤田と久下が驚く中、のび太は携帯で出木杉に連絡した。

「ええ！さっき連絡しましたから間違いありません！」

3人はすぐに2階へと移動した。現在1階と2階が分断されているため、うまくいけば他の生存者とゾンビが襲ってくる前に合流することができるからである。

「さてと、じゃあまず俺らは目の前から探索するか？」

「ああ！目の前の部屋から調べとけば何かしら見つかるだろうな。」

赤田の案でのび太たちは部屋に入ると、その部屋は図書室だった。特に目立ったものもなくあとは奥の部屋に入るだけだったが、ドアに鍵がかけられていた。

「くそ、開かねえぞ！この扉……」

久下がドアノブを押し引きするも、びくともしなかった。

「僕が開けます！2人とも離れて！」

のび太の一発で鍵を壊してドアを開けた。

「空いたか。そうとうボロくなってたのかねえ？」

部屋に入ると何人かの死体が散乱していた。すると部屋の奥に鍵があった。

「どっかの鍵みたいやな。そして何かのメモもあるな。」

のび太がカードキーらしきものとメモを見つけた。

「こりゃ、何かの数字だな。取っておくといい。」

久下が数字を見て、のび太に渡した。

「よし、次に行きましよう！」

すると、のび太の携帯がなった。

「出木杉です。のび太君に健治さんに赤田さん、無事ですか？」

「うん無事だよ。」

「そうか。よかった。」

携帯越しで出木杉が安堵のため息をついたのを知ったのび太だった。

「実はさつき3名の生存者を保護したんだ」

「おいおい3名って随分増えたな。大丈夫か？」

久下が不安になる。

「まあまあ、多い方がいいじゃん。きっと脱出の効率上がるかもよ？」

「えつと…のび太くんたちには伝えてないけど脱出案の予定は裏山になったんだ。」

「裏山か…今ならあそこに避難すればきつと何日かは持つかもしれない。」

のび太が裏山の方向を向いた。

「ああ…これだけの戦力だ！籠城も可能だ！」

久下が相槌を打った。

「で、そのことなんだけどさつき白峰さんから聞いたんだけど、裏山のセキュリティは最

近。パスコード制になってるんだ。それはこの学校の何処かにあるはずなんだ。」

「マジか!？」

赤田が驚きながらも廊下の探索を行ったがやはりどこも中には入れなかったり目ぼしいものも見当たらなかった。

「それから、今武君たちが帰ってきたけど食糧などを確保する場所がばれてもうまともに外に出られなくなったんだ。だからもう3名を内部チームに加える上でもう一回メンバー決めをしたいから一旦戻ってくれ。」

「うんわかったよ。」

それから一行は保健室に戻り休憩した。増えていったメンバー達は脱出できるのだろうか?そして廊下では黒い影がそれを監視していたがやがて窓を開けて飛び去っていった。

4話 迫るタイムリミット

生存者たちは保健室に集まっていた。

「さて各自の報告だな。まず俺たち外部は食糧をだいたい2日分持ってきたし道中で生存者にあった。翡翠さんの同僚——笹木月夜さんだ。」

健治が笹木を見た。

「よろしく！僕も協力するよ！」

「でもって、この子が桜井 咲夜。そしてこの俺が未来の天才小説家 青木 優作だ！」

「は、はい…」

(このテンションには付いていけないな…)

「ふう…思った以上にやれるなんてさすがは俺だな。」

落ちていて紹介した笹木の後にかなりインパクトのある紹介をした青木だったからか周囲に呆れられてしまった。

「僕たち内部は晴夫を保護して、パスコードらしきもの3つと3階のシャッターキーを手に入れたよ。」

次にドラえもんが手を上げた。

「僕たちシャッター班は2階を開けて、白峰さんと合流して…」

そこから先はドラえもんの色が良くなかった。

「そうそう体育館でカメレオンのような化け物に遭遇したんだ。それも、デカイのにな…」

ドラえもんの言葉で全員がざわついた。

「道理でさつき犬とかじゃねえ咆哮が聞こえたわけだ。すっかり聞こえなくなってるがな。」

大橋が体育館の方向を向いた。

「もし本当にそのなのがいるともつとやばいな…どうすりゃいいんだ?」

健治が顎に手を当てた。

「そうだね。ぼくの秘密道具は君たちの武器よりも威力は劣るから、今この戦力で奴と正面からぶつかって勝つのは難しいかも…」

ドラえもんも自分の状況を伝えた。

「でも残りのフロアで起動キーを見つけたら避難できるじゃん。あいつとも戦う必要がなくなるんなら頑張ろうぜ…」

すると負傷した晴夫が目覚め、ベットから起き上がり皆を励ました。

「晴夫! そうだな…今はこの学校から避難することが第一優先だな。」

「さて探索についてだけど、2チームで内部探索にしよう。」

出木杉が立ち上がった。

「えっどうして？」

「その3人があいつらにばれてもう食糧が確保できなくなったんだ。」

青木が咲夜に状況を淡々と説明した。

「そういうことなのね。ごめんなさい」

「ああ…残念ながらな…」

健治が申し訳なさそうに目を背けながら言った。

「で話を戻すと私たちは2チームからさらにペアに分かれます。そして可能な限りこのペアで各エリアを分かれて調べようということです。時間が時間ですからね。」

出木杉がホワイトボードに要点をまとめていた。

「私はいかんぞー！」

またしても金田が部屋の隅で叫んだ。

「うっせー黙ってろ！お前は元々数に入ってねえよ。」

大橋が金田を黙らせると自ら挙手した。

「まず俺は行く。早く脱出するには1人でもおおく奴らと戦ったほうがいいかもしれな
いしな。」

大橋が金田を黙らせて立候補するとジャイアンと青木も立ち上がった

「じゃあ、俺も。俺の武器は他よりも少し強いのがあるしいざとなったら敵をかたづけしからやつつけてやるよ！」

「俺も行こう。早速この天才の力を見せてやるよ。任せときな！」

大橋は新しく日本刀とハンドガンの組み合わせに、ジャイアンはマグナムとハンドガンを装備した。そんな中で青木は現状ハンドガンのみだった。

「僕も行くよ！ほんとは怖くて戦いたくないけど…役に立つさ！」

スネ夫が立ち上がった。

「私もです。役に立って見せるわ。」

「いろいろ探索するなら私も行きますよ！」

「じゃあ僕も」

「俺もそつちだな。」

次にスネ夫、咲夜、翡翠、のび太、健治の計8名になった。

留守は金田、ドラえもん、出木杉、晴夫、久下、聖奈、笹木、太郎、静香、白峰、健治となった。

「途中で参加したり戻ったりしてでもいいからなんとしても探索しよう！あのカメレオンと戦うのだけは避けるんだ！」

出木杉が全員を見つめながら言った。

「あの、さつきから気になっていたんですがこの植物は？」

咲夜は出木杉の話が終わったのを見ると全員を呼び止めハーブを指差した。

「ああ！すっかり忘れてた！」

「おいおい！大橋く！つたく、これはだな…」

「これはハーブです。緑は傷の治療で赤は緑と合わせると治療する量が2倍になり、青は毒を中和するという効果をそれぞれ持っています。」

「よし移動にはこれからこれを使おう！」

ジャイアンがハーブを指差すと静香が挙手した。そんな中久下は自分のセリフを静香に奪われ消沈していた。

「園芸部もこれと同じのを植えてたわ。私に取りに行ってくるわ。保健室から近いし」

「よしそろそろ行くか！」

「ああ…今いくよ…」

消沈したままの久下がのび太たちと共に保健室を出て3階に向かった。

のび太たちは3階についた。2階同様3階はそれほどゾンビはうろついてはいなかった。むしろ多かったのは打ち付けられた教室のドアだけだった。

「さてと3階に来たがどうする？」

「ああそうだな早速、ペアを組んで探索するか？」

「じゃあ俺は赤田さんとだな。」

「背中は任せたぞスネ夫！」

「じゃあのび太、お前は天才の俺とだ。」

というところでメンバーは大橋と赤田、ジャイアンとスネ夫、咲夜と翡翠、のび太と青木になった。

赤田と大橋は階段から見て目の前の教室に入った。

「じゃあ、まずこの教室だな。」

大橋は赤田と目の前にある教室に入ったらそこには医者之死体があった。

「なんだこの薬は見るからにヤバいな。主に色が……」

するとドアを破って10体のゾンビが現れた。

「くそつ、こいつら入って来やがった！にしても10体はちよいと反則だろ。」

二人は銃を構えた。

「オラオラオラオラーツ!!」

大橋はハンドガンから日本刀に変えたため、ゾンビを一体ずつ斬撃で攻撃し、次々と攻撃していった。

「おお、さすが大橋。 んじゃ俺も！」

赤田もハンドガンを二丁にして大橋の攻撃を受けてもなお生き残ったゾンビにとどめを刺した。

「ふう、にしてもこれは一体？」

「分かん。 とりあえず、一本飲んでいてもいいかな？」

「いいぜ。 てゆうかこんな変な薬なんて飲めるわけねーよ」

赤田が背を向け、大橋は黄色の薬を飲んだ。

「なんか…ちよつと元気になったかも知れない。」

「そうか…まあ、この薬は治療用のやつなんだろうな。 さあ、次行け。 ここはもう用済みだ。」

同じ頃コンピューター室の翡翠、咲夜班はパソコンをじっと見ていた。

「咲夜さん、さつきから真ん中のパソコンが光ってるような…気がしない？」

「そうね翡翠さん、私もそう思っていました。」

そこには部屋のパソコンが起動したものとそうでないものが映った画像が表示されていた。そして横に“小さい順に”というメモが貼り出されていた。

「これは？」

「なにになに？小さい順に？」

「どういう意味かしら？こんな時こそ青木さんに聞いてみますか？」

「なんであの人を頼るんです？実際私を助けたのは彼だが、派手な自己紹介でゾンビに見つかりなんとか学校に逃げて来たということがあったくらいのトラブルメーカーですよ？」

しかもその時本人は呑気に自分がいればどうにかなるという根拠のない自信を持っており、咲夜としてもあまり信用はできない印象を持つことになってしまった。

「そうであっても頼れる人としては頼っておいたほうがいいですよ。」

翡翠が電話をかけた。

その青木はのび太と近くの教室で休息を取っていた。解散してからのび太たちは運悪く5体のゾンビと立て続けで戦っていたのだ。のび太の携帯にメールが届いた。

「青木さん、翡翠さんから写メが」

のび太が青木に携帯を渡した。

「んんくなになに？この数字を小さい順に4桁？」

5分間見ると青木は翡翠に電話をした。

「翡翠、暗号が何なのかわかったぞ！列ごとで起動されている数値をチェックするんだ。天才の俺が言う確かな情報だ。」

パソコン室では翡翠が電話を切って咲夜に合図を送った。

「咲夜さん！パソコン室の1列目から4列目の数は？」

「え…えつと3、6、9、2です。」

咲夜が慌てて起動しているパソコンの数を数えた。

「それじゃあ2369ね。」

壁の装置に数字を入力すると、小さい鍵が落ちてきた。

「これはどこの鍵かしら？」

「さあ？この鍵が何か確かめましょう。きつとこの鍵は後々重要になってくるはずですよ。」

2人は保健室に戻った。

のび太、青木チームは休憩を終え教室に入った。

「あのー、気のなつてたいたんですけど青木さんはどうして自分を天才って言うんですか？」

「ああ！それはだん…！」

青木が言い終わる前に窓を破ってカラスのゾンビが現れた。

「いっつらー！」

「のび太ここはハンドガンで戦うな！奴は素早い！だから……！」

「ここはショットガンを使うんですね！」

「おうともさ！中々いいカンしてるじゃないか」

のび太はジャイアンから事前に受け取ったショットガン（AK-7）を使った。

「喰らえ！」

「強い！しかも散弾のおかげでカラスを効率よく退治できている！」

のび太の射撃の正確さにより3羽のゾンビを一瞬で倒した。

「ふう……一旦保健室に戻るか？移動するたびに奴らとの戦い続きでちよいと俺は休みた
いぜ。この辺は一頻り探したし戻ってもいいだろ。弾だって無限にはないんだ。あと
は剛田たちが探索を終えるのをじっくり待とうぜ。」

2人は教室を出た。

「そうですか。分かりました。」

2人は階段を歩き出した。

「で、さっきの続きだが俺は人の役に立って目立とうって思ってた天才を目指しているつ
てのが理由だ。やっぱ、知識つてのは溜めるよりも他人のために使う方が使ってる感す
るしな。」

「すごいな……青木さんは。僕じゃ敵わないや……」

のび太はハハハと苦笑いを浮かべた。

「そうか？ お前みたいなやつならやるときはやるっていうタイプなんじゃないのか？ さっきの射撃だってそうだ。お前のそういうタイプが応えてるからあそこまで銃をうまく使えるんじゃないか？」

「そうですかね？」

「俺を誰だと思ってるんだ？ 俺は大天才だぜ！ 自信を持って！」

ジャイアン、スネ夫チームはゾンビたちを確実に倒して行き、そんな中で北舎で唯一鍵が空いている理科室前に着いた。

「他の連中の話だと、後はこの理科室だな。」

ジャイアンが拳を合わせるとスネ夫は隣の準備室の違和感に気づいた。

「うん？ ジャイアン、この準備室のドア開いてるよ。」

「なに?! じゃあそこから入るぞ！」

開けると緑のTシャツに短パンを履いている少年が倒れていた。

「君は安雄!？」

安雄はのび太たちと野球をしている友人の1人である。

「うう… ジャイアンにスネ夫か？ さっきその部屋で化け物に襲われてな… このザマだ。」

あれは地球上の生物じゃねえ…」

安雄は顔色が青く、傷口が開きかかっていた。

「喋るな！かなりの傷なのによ！」

「まずいよ…この顔は、毒が回ってるんだ！以前テレビでそういうのを見たことがあるんだ。このままじゃ安雄が…死ぬ！」

スネ夫が安雄の顔色を見て青ざめた表情を浮かべた。

「だったら、解毒にはブルーハーブを…」

ジャイアンがブルーハーブを出そうとしたがスネ夫に止められた。

「ダメだよ。たとえブルーハーブを使っても毒が強すぎる。何か血清とかそういった類のものが無いと…」

「よし俺は保健室に連絡する。なるべく安全そうなところに運ぶぞ！」

ジャイアンは保健室に連絡してこの状況を伝えた。

「マジかよ…」

一行は動揺が隠せなかった。

「あの化け物はそつちにいたのか！くそッ！もう体育館以外のとこで被害者が出てたのか！」

白峰が悔しそうに銃を握った。

「血清つて言つてもこの学校にそんなもんは無いぜ！ていうかあんのかよ!」

健治も悔しがりながらそう言つた。しかし、笹木は一人冷静そうな顔で薬品棚と翡翠たちが見つけた鍵を交互に見た。

「ていうかさあ…翡翠先輩が咲夜ちゃんと手に入れた鍵つてその鍵に使えるんじゃないんですかね?」

「えっ?どういう意味?」

太郎が首をかしげた。

「僕が見る限りその棚の鍵穴が小さいし、鍵の先っぽもなんか同じ感じでしょ?この場合その役に立たなそうな感じの鍵が役に立つんじゃない?」

「なるほど!」

笹木の推理に太郎は感心していた。

「じゃはよくれよ!今から開けっから!」

「は、はい。どうぞ」

静香が相槌を打つ中せっかちな赤田は鍵を取り、鍵を開けた。そこには血清があつた。

「あつたぞ!血清だ!注射器もある!」

赤田が中身を見せた。

「これで行けるけど…持つて行く人は誰にする？なるべく運動神経の良さそうな人をお願いしたい。一刻を争うからね…誰が行く？」

出木杉が真剣そうな顔で全員を見渡した。

「僕が行くよ。推理つばいのをしたし。」

笹木が手を挙げると聖奈に白峰も手を挙げた。

「じゃあ私も」

「俺も。怪我也治つたしな！それにあいつからは聞きたいことがあるんだ。」

メンバーは白峰、笹木、聖奈になった。するとジャイアンから連絡が入った。

「こちらジャイアン、やばい！今図書室に奴らが迫ってるんだ。なんとか図書館よりも前の方南北連絡通路で奴らを惹きつけようとしてるんだがこのままじゃあ持たねえ！誰か助けてくれ！」

「マジかよ…おい緑川！笹木さんを連れて図書室に！」

「はい！」

「くれぐれも無茶しないでよ！」

一方南北連絡通路では、ジャイアンとスネ夫が廊下に出て戦っていた。南北連絡通路は普段南舎と北舎を結ぶ通路ではあるものの今回の事件ではほとんど死体が転がって

いるためいつもより格段に不気味となっていた。

「くそ！誰か来たか？スネ夫！」

「大声で言わないでよ！びっくりするじゃないか！あつ、白峰さんだ！」

犬を蹴散らして白峰が2人の前に立った。

「よう。待たせたな！さてと…剛田それに骨川！チャチャつと片付けてやるか！」

白峰が振り返って、マシンガンを取り出した。

「ええー！」

イヌが白峰に襲いかかろうとした

「しつこいぜ雑魚共！」

白峰は飛びかかってきたイヌにマシンガンを打ちまくり、倒した。

「くそまだいんのか!？」

しかし、ゾンビを倒してもまだ背後に何体か残っていた。

「食らいやがれ！このど畜生が！」

ジャイアンは白峰が銃撃したイヌにバットで思い切り殴打させた。

「さすがジャイアン！」

「後はあの緑の奴か…」

ジャイアンたちの目の前には緑色の化け物が3体歩いていた。その時教室からゾン

ビが現れた。

「くそ！新手の……」

ゾンビは緑の化け物の一匹にぶつかったため逆上した化け物によって首を跳ね飛ばされた。血飛沫が辺りに飛び散った。

「なんて力だ！首を飛ばしたなんて……！」

近くで首が飛ばされるのを見たスネ夫は目を背け涙を流し始めた。

「もう……もうだめだ！ママ……！」

化け物がスネ夫に目をつけた。

「骨川！諦めんな！俺たちが死ぬと安雄だけじゃない！みんな死ぬぞ……！」

白峰はハンドガンで頭を狙ったが化け物には直撃してはいなかった。

「剛田！撃て……！」

「了解です……白峰さん……！」

ジャイアンは猟銃と一緒に仕入れたマグナムで1体の頭を一撃で貫いた。

「よし一体！剛田、そいつはバットで行け……！」

「オツケー……！」

ジャイアンはバットで緑の奴を白峰の方向へ攻撃し、緑色の化け物は吹き飛ばされる中で続けざまに白峰のハンドガンで脳天に命中された。

「ジャイアン危ない！」

スネ夫は持っていたスナイパーライフルでジャイアンの後ろにいた化け物を倒した。

「よしこれでやったな！にしてもこいつらは一体？」

「さあな？んじや、俺は2人を呼ぶぜ。」

その後安雄は血清を打たれ一行は無事保健室に運べた。ジャイアンたちはまた1人友の命を救ったのだ。

第5話 勇気を胸に

「安雄は血清を打って助かったがとりあえずどうする?」

健治が眠ったままの安雄に目を通した。

「変な緑の化け物にカメレオンですしね。それが襲ってきたというとなると現状は悪いままですわね…」

実際、安雄は顔色も良くなってきていた。しかし仮に探索を続けてもまたあのカメレオンに襲われるという保障が無くはないのだ。

「確かに現状は大して変わってないからとつと出たほうがいいと僕は思うよ。」

笹木は聖奈を見て首を縦に降った。

「でも、学校はどうするんです?」

「もう学校はやばいだろ!他に探すとこなんてあるか?」

久下が反論する通り、一行は学校のほとんどを調べ尽くしたと言って良いほど調べ尽くしていた。

「それでしたら、残りのフロアをいろいろ探せば良いのでは?候補も少ないはずですよ。」

翡翠が学校の地図を広げた。

「そうだな。確か4階と理科室だな」

赤田が部屋にサインペンで丸をつけた。

理科室は準備室のみしか調べていないので理科室も該当しているが当然カメレオンがいるかもしれない上迂闊に動けないのだ。

「じゃあ僕が理科室に行くよ」

「じゃあ私も。ある程度は理科知識はあるので」

「私はまたハーブを持ってきます。ここの医薬品じゃ限りがあります。」

「俺も行く。化け物がいるかもしれないねえ！」

「健治にいちちゃん！僕も行く！足手まといにならないから……」

「太郎……分かった！言われたことはきっちりやれよな。」

健治はやれやれと言いながら太郎の動向を許可した。

「うん！」

すると久下が保健室を出ようとした。

「どこへ？行くんですか久下さん？」

「俺はこの辺りの監視だ。ゾンビが学校に集まるのだけは阻止しないと。」

「僕も行きます！一応上から狙撃できる武器を出木杉からもらいましたし……」

「ああ、頼む。行くぞ」

2人は部屋を出て屋上へと向かった。屋上へは4階に階段がありそここの鍵はヘリの避難時の時に開けられていたのだ。

「わ、私はいk…」

「はいはい、黙ってな。あんたの出番は無いんだから大人しくしてな。」

金田のビビりにうんざりしたのか今度は青木がため息まじりに言った。

「僕は安雄くんの看病を続けるよ。晴夫の時とは比べ物にならないダメージだ。」

「僕もそうするよ。一応血清見つけたわけだしこの子が治るのを見届けなくっちゃね」

ドラえもんや笹木は安雄のベッドを見た。

「んじや俺は適当に探索するぜ。探索すると分かれば即行動だ。」

「おいおい一人は危険だぜ！」

勝手に出て行った白峰を大橋が追いかけた。

「僕も行きます！何か手がかりがあるなら…！」

「では、私たちは裏山に関する資料を探します。上の階には資料室があるので任せてください。」

よってメンバーは次のように決まった。

理科室 翡翠 出木杉

監視 スネ夫 久下

ハーブ 静香 健治 太郎

看病 ドラえもん 笹木

探索 大橋 白峰 のび太

資料 聖奈 赤田 咲夜

待機 青木 ジャイアン 晴夫 金田

(安雄はノーカウント)

探索班は4階に着いた。辺りはバリケードだらけで、探索できる場所はほとんどない。

「さてここは狭いからバラで動くか？」

「それがいいな。こんな狭いところだ。すぐに探索が終わるし集団でなくても平気だろ。」

そして3人が分かればしばらくすると教室の探索をしていたのび太の携帯に翡翠から連絡が来た。

「のび太くん、早く来てください！私を庇って出木杉君が！」

翡翠はかなり焦っている様子だった。

「なんだって！」

のび太は急遽3階の理科室に移動した。

一方資料班は四階の資料室に入った。資料はほとんどが乱雑にばらまかれており赤田たちはその整理を始めた。

「なんやこれ？ エリアE34？ こんなの学校に保存してんのかいな？ まあ、ええわ。」

赤田は手に取った資料を本棚に戻すとあいだの何かが挟まれているのを発見した。

「あつたぞ！ 間違いない！ 確かに裏山の資料だ！」

赤田が咲夜に資料を投げた。

「なにになに？」

「咲夜さん、ゾンビたちが迫ってます。読むのは別の部屋にしましょう」

咲夜が目を通そうとしたが聖奈に止められた。

そしてのび太は理科準備室に入って嘔然となった。

「出木杉君！」

「気…をつける…ん…だ奴…だ」

出木杉は頭から血を流し倒れていた。

「奴？ まさか！」

「はい。以前ドラえもんさんたちが遭遇したカメレオンです！」

「奴はこの部屋に…」

隣の部屋からとくに咆哮などは聞こえてはいなかった。しかし、その静まり返った雰囲気は帰って不安を煽った。

「私はこれから出木杉くんを運びます。くれぐれも無茶しないでください。誰か、他の人と一緒に戦ってください。きつと白峰君が今向かつてる筈ですから！」

のび太はこの状況を保健室に連絡した。ついでに安雄は少しづつ治ってきていることも知った。翡翠は出木杉を担ぎ、保健室に向かった。のび太はそれを見てドアを見た。

「翡翠さんの所にあいつを行かせないようにするには戦うしかない！」

理科室に入ろうと深呼吸すると資料班から連絡が来た。

「のび太、俺だ赤田だ！」

「赤田さんどうかしたんですか？」

「裏山の件の資料を見つけたんだがどうやら裏山の扉は電子コードでパスワードは警備員が持つてるんだ。それで他のみんなに連絡してるんだ」

外から銃声が響き、誰かが銃を撃ってるのがのび太にはわかった。

「それでお前はこれから理科s……」

「入ってきた！赤田さん一旦逃げます！」

どうやら教室のドアが開けられたようだ。

アルコールに惹かれて透明が薄れるとやはりのび太はカメレオンの動いた場所が分かった。

「今だ喰らえ！この化け物がああああ!!?!!?」

ハンドガンで2、3発カメレオンを撃つたが弾が切れた。

「そんな！こんな時に！」

逆上したカメレオンの舌が命中して弾込めをしようとしたが攻撃が命中しのび太は気を失った。

(みんな…)

のび太が最後に聞いたのはカメレオンが窓を突き破った音だった。

しばらくするとのび太は目を覚まし、ふらふらになりながらも保健室に戻ると赤田と咲夜、聖奈、大橋以外が既に集まっていた。

「のび太無事か!？」

健治が近くの椅子にのび太を座らせた。

「カメレオンと戦ったの？」

太郎も心配そうに見たがのび太は笑顔を浮かべた。しかし、白峰と翡翠は深刻そうにのび太を見ていた。

「うん。でもこれで安全に…」

すると、のび太の頬に鋭い痛みが走った。白峰が頬を殴ったのだ。これには金田以外の全員が大きく動揺した。

「何すんだ白峰さん！」

「おいおいマジでやったよこいつ。普通いきなり殴るか？」

ジャイアンと青木がのび太を起こした。白峰はすかさずのび太の胸ぐらを掴んだ。

「のび太！お前バカか？自分だけ気負って死んだらどうすんだ！死んだらどうにもならねえだろ！何が安全だ！一人で気負ってこの結果だ！」

白峰はのび太を突き放した。

「あのととき俺や翡翠さんが来なかったら死んでたぞ！二度とこんな無茶すんな！」

「…私も同意見です。あの時に戦ってくださいとあれだけ言ったのにどうして無茶をするんですか？二度とこんな無茶しないでください。勇気と無謀は違います。」

翡翠は冷静に呟き、冷ややかな目でのび太を見た。

「はい…」

「まあ…そんなことより今資料班の応援に向かった大橋さんから連絡があつてもうすぐ資料班が戻るようだ。あと、監視班からヤバイ系の連絡が来てないから大丈夫だ。」

「そうか…」

（僕は焦っていたのかももしれない…二度と同じ間違いは繰り返さない！）
のび太は拳を握った。

第6話 突然の襲撃

のび太が保健室に戻ってから一部のメンバーの期間を待つ間、突如として保健室のダクトの蓋が開けられた。するとダクトからダニ型の化け物が現れた。

「なんだこいつは一体？」

「シユルルル……」

「こいつはさつき鍵を開けた時逃げたやつだ！ どうやってここに？」

白峰がハンドガンを構えた。化け物——ブレインディモスは獲物を見定めていた。

「お前達なんとかしろ！」

「へーへー！ 言われなくてもなんだよ！」

健治は怯えながら叫ぶ金田を他所にナイフで応戦したがかわされ天井に逃げられた。

「素早い！ 気を付けろ！ こいつをやるのに弾を使うのはやばい。うっかり誰かに誤射されかねん！」

ダニは降りてゆつくりと金田に近づいてきた。そんな中のび太たちは誤射を恐れて攻められずにいた。

「まずい金田さんこれを！」

翡翠は金田に自分のハンドガンを渡した。

「ふざけるな！何故私が！」

「それはこっちのセリフです！みんな生きるために戦ってるのにあなただけ戦わないのは卑怯です！それにもう投げました！自分でなんとかしてください！」

ダニの化け物が向かってきた。

「ああもうヤケクソだ！このクソ虫が！」

金田さんがやけになつて撃つた一撃はブレインデイモスの脳天を打ち抜いた。これにはのび太たちが大いに面食らつた。今まで初めて銃を持って一撃で倒したことが無かつたのだ。

「えっ？もう終わり？ふん、なんだ！これでわかつたぞ！私は今までこいつらが強いと思つていたが今弱つちいことが証明された！今度から私は外にバンバン出る！奴らなど私だけで始末してやるぞ！フフフ…ヒヤハハハハハハ！！」

金田はダニの死体を蹴りながら笑つていた。

「すげーお調子者だな…」

「やれやれだよ…」

「おいおい」

白峰と笹木と健治は呆れて何も言えなかつた。

「おーいみんな戻ったぞー！」

すると扉が開き資料班の聖奈、赤田、咲夜、大橋とスネ夫が入ってきた。

「大橋さん！みんな！」

「どうしたん!?!」

赤田がブレインデモスの死体を見て身構えた。

「さつき化け物が来たんです。」

「え!?!大丈夫なんですか?」

咲夜が保健室に入って辺りを見回した。

「あーそれなんだが…金田さんが倒した。」

「マジかよ!?!」

（道理でご機嫌なわけだ。）

「ああそうだ！私はこれからバンバン出るぞ！私なら奴らなど赤子当然だ！精々大船に乗った気になることだ！」

金田はノリノリで言っていた。そして保健室で踊り始めた。

「頼もしいような…ウザいような…」

「全くです…」

安雄を除いた全員が金田に対してドン引きムードを漂わせたのはその時である。

「あんましその金ダンスは見たいもんじゃねえな…」

「同じく」

「正直誰も得しないよ、金ダンスなんて」

ジャイアンと晴夫、スネ夫がそっぽを向いた。

「ん…なんだあ?」

「うん? 安雄!」

あまりにうるさかったのか安雄が目を覚ました。

「大丈夫か!」

ジャイアンと晴夫が安雄に詰め寄った。

「ああもう大丈夫ですよ」

「本当に大丈夫ですか?」

翡翠が安雄の回復力に不信感を抱いていた。

「大丈夫ですよ。こいつはジャイアンのメンバーです! そう簡単にどうにかなりませんって」

「そうですか。そういえばスネ夫さん、監視は大丈夫?」

「ああ、久下さんが今やってるよ。今の所は目立った動きはないみたい。だから戻って

きたんだ。」

その時またしても保健室のドアが開いた。

「誰だ!」

とつさに大橋は銃を向けた。

「ちよつと!いきなり銃を向けないでくんない?人間ですけど!」

大橋は銃を下ろした。入ってきた少女を見て咲夜はハツとした。

「あなたは確か隣町の中学の富藤さん!」

「咲夜!こんなところにいたの?」

「知り合いなのか?」

赤田がゆつくりと指差した。

「ええ、富藤 雪香——小学校の時のクラスメイトなんです。」

「あつ、聖奈ちゃんに白峰に健治、出木杉たちも無事だったのね。」

富藤が軽く手を振った。

「ええつと…僕たちのこと知ってたんですね…」

出木杉が口をポカんと開き雪香を見た。

「当時の上級生の間じやあんたたちはちよいとした有名人なのよ?」

「なんだよそれ!」

ジャイアンがへへッと笑った。

「相変わらずだな」

白峰がニヤツとした。

「元気そうね。今まで何処にいたの？」

「数日前から調理室近くで待機してたけど、もう食料が尽きたの。で、とりあえず学校に戻って来たら保健室の方からデカイ笑い声が聞こえたから合流しようと思ったの。」

（金田さんかよ！）

全員金田から目をそらして笑うのを堪えた。

「どうりでコンビニの中が微妙に荒れてたわけだ。」

「それに銃を盗ってきたのもあなたですね？それはどこにあるんです？見た所丸腰ですが？」

「まあ、護身用のベレッタはあるわよ。で他の武器とかなんだけどとりあえず調理室にきて。今から荷物とか持つてくるから」

数分後、のび太たちが荷物を運びひとまず落ち着いたようだ。

「とりあえずこんなもんだな。」

「そーいや白峰に赤田さんに笹木さんは？」

健治が保健室を見回した。

「あいつらは今学校の残りの教室を探索してるよ。」

赤田が健治を見て言った。

「特に連絡はきてないようだが、どうする？そろそろみんなを呼び戻すか？」

ジャイアンが腕を組みながら尋ねた。

「そうしましょう！一刻も早く脱出した方が賢明です！いつまたあのカメレオンが現れるか……！」

「あいつらに戻るよう言っとくか」

大橋が現在探索に出ている二人に戻るよう連絡した。

「ちよつと僕トイレに〜」

「ごめん僕も……」

「同じく……」

のび太、出木杉、青木が申し訳なく手を挙げた。

「もう、この状況なのに……」

「つたく、のび太らしいな」

静香がため息をつく中スネ夫はハハハと笑っていた。

「出木杉は珍しいけどな！」

安雄と晴夫も苦笑いを浮かべていたが、青木は特に触れられなかった。

「全くだな」

（青木さんエ…）

笹木がスルーされた青木を気にかけていたが、青木は特にショックを受けてはいなかった。

それから5分後、咲夜の携帯に久下から連絡が届いた。

「あら？久下さんからだわ」

「みんな大変だ！」

「どうしたんですか？」

昨夜の携帯越しに緊迫した雰囲気は久下から感じられた。

「落ち着いて聞いてくれ。凄まじい数のゾンビが迫ってる！あと数分したら正門に到達する！」

「「なんだって！」」

全員が久下からの報で驚かずにはいられなかった。すると今度は安雄の携帯が鳴った。

「晴夫からもだ！」

「大変だ！今3階の教室から見たんだが、裏口にはあのカメレオンがいる！白峰さんと

見張ってるけどあいつ居座る気だ！」

金田以外はなおも動揺していた。この状況下で下手に打って出ても大量のゾンビの脅威とカメレオンが敵であり下手をしたら弾切れを起こして全滅の危険性があるからだ。

「お前たち、どうした？それでも私がビビってる間戦って来たのだろうか？だったら、この場を決死の覚悟で乗り切ろうじゃないか。」

金田がマシンガンを持った。

「オツさんの言う通りだ！ここまでできたら死ねねえよ俺たちは！」

「でもどうすれば……」

ジャイアンは椅子に座ったままで他の面々も考え込んでしまった。

「ひとまずここはメンバーを分けよう。僕はロックを開けにシャツターを起動したところに行くよ。」

「おっと俺もそろそろ活躍したいんでね。俺も行くぜ。護衛は任せな」

「頼むよ安雄！」

スネ夫が安雄を見ると2人はすぐに起動キーを持って保健室を出た。

「私は荷物を運びます。」

「先輩、僕も手伝います！」

翡翠たちが急いでいまある荷物をまとめそれらリュックに詰めた。そして最終的にメンバーはこうなった。

ロック 出木杉、安雄

荷物 静香、笹木 翡翠、大橋（護衛）、太郎、聖奈

表門 金田、スネ夫、久下、咲夜、ジャイアン、赤田、健治

裏山 のび太 ドラえもん 青木 晴夫 白峰

「カメレオンは出木杉とのび太が何回も戦ってるから大丈夫だろ！」

「死ぬなよのび太！ いじめる奴がいないと寂しいからな！」

スネ夫が銃を持って保健室を出た。

「そっちこそ！ いじめられる人がいないと寂しいから！」

「んじや行くか！ お前ら！ 死ぬなよ……」

表門と裏門メンバーによる一行の必死の撤退戦が始まる。

7話 進め勇者たち

表門に出た金田、赤田、咲夜、ジャイアン、スネ夫、久下、健治たちは敵を待ちわびていた。

「あいつらもあいつらで心配だが今はここを守るぞ！何が何でも守るんだ！」

すると表門からゾンビたちが次々と入って来た。

「散開して各個撃破だ！」

「ヒヤハハハハハ!!地獄に落ちるが良いわ！」

金田がマシンガンで先制攻撃を仕掛けた。そして前線では金田以外に咲夜とジャイアンに健治が攻撃を始めた。

「行くぜスネ夫！」

「うん！」

スネ夫のハンドガンでゾンビは頭部を撃たれ怯んだ。その隙にジャイアンが金属バットで頭部を攻撃しゾンビを吹き飛ばした。

「どんなもんだい！俺とスネ夫を舐めんじゃねえぞ！」

「そりやりやりや!!」

久下も持ち前の早撃ちテクニクでゾンビを寄せ付けずに確実に倒していた。

一方裏山ではのび太、ドラえもん、青木に晴夫の4人ががカメレオンを相手にしようとしていた。

「来い！もうお前なんかには負けられない！負けられないんだ！」

「悪い、のび太！俺は今から正門のそこに行く！どうも向こうもやばいみたいだ！」

白峰は表門に向かった。

「つてことは俺が来ても問題ないみたいだな。」

振り返ると安雄がそこに立っていた。

「俺もこいつには借りがある。のび太、晴夫！3人で行くぜ！」

「おう！」

「のび太くん！僕と青木さんは周りの奴らを片付ける!!」

「うんわかった！」

「このドラネコと天才が組めば問題ない！気兼ねなくやれ！」

「はい！」

（死んでたまるか！）

のび太たちはみな決意を胸に戦いを始めた。そして次第に雨が降り始めて来た。

それから十分後、表門のジャイアンたちの奮戦があつてか各個撃破には成功していた。しかし、体力の消耗から次第にかれらの優勢に陰りが見え始めていた。

「こいつら！倒しても倒してもキリがない！」

「くそっ！」

「オラオラオラ!!」

すると校舎から白峰と出木杉が現れた。

「よう、助けに来たぜ！」

「みんな遅れてごめん！今から一気に逆転するよ!!」

白峰と出木杉も突撃しながらゾンビを倒した。

「ああ!!行くぜ！」

「てやあああああ!!!」

咲夜が飛びかかって膝蹴りを顔面に食らわせるとゾンビは動かなくなった。その横では健治がハンドガンからナイフに持ち替えてゾンビを攻撃していた。

「今だ！決めろ！」

「ああ！」

白峰のショットガンでナイフ攻撃を受けたゾンビはまとめて一掃された。

(出木杉が来て空気が変わった！これならいける！)

そして裏山ではカメレオンとの死闘がなおも続いていた。ドラえもと青木もカメレオンに援護射撃をしながら犬やカラスの大群を相手にしていた

「行くぞ晴夫！」

「おう！コンビネーションアタック!!」

晴夫のショットガンと安雄のグレネードの威力でカメレオンが吹き飛ばされた。

「よし！これならいける!!」

のび太は突撃して一気に吹き飛ばされ、障害物に激突したバイオゲラスに追い打ちを仕掛けた。

「こいつも喰らえ！不意打ちさえなけりやてめえなんか怖かねえんだよ！」

安雄も連続でグレネード攻撃を仕掛けカメレオンをとうとう虫の息まで追い詰めた。

「よしトドメだ!!」

しかし、バイオゲラスは透明になってその場から移動した。あたりを見回す中一行はクスリと微笑んだ。

「ヘッ！雨のせいでどこにいるか筒抜けだぜ！」

晴夫がショットガンで移動中のバイオゲラスの腹部を攻撃した。

「よし、やつはもう透明にはなれない!!いけるかのび太!?!」

「ああ!!」

8話 陰謀の裏山

のび太たちは裏山に避難した。しかし、避難はスムーズにはいかなかった。連戦を重ねたのが原因で一部のメンバーの疲労も溜まっていた。

「待つてよ〜！疲れたよー！」

「僕も〜！」

「のび太と同じ…」

「すまん、私もだ〜！」

のび太、太郎、スネ夫に金田が息切れを起こし後方を歩いていた。

「すまないけど僕もだ…」

のび太たちよりも前の方を歩いていた出木杉も疲労が溜まっていた。ジャイアンがため息を吐いた。

「おいおい情けねえぞ！太郎にのび太はともかくなあ…！」

金田さん！白峰さんたちを見習ってください！あんた大人だろ!？」

（仕方ないだろ〜！）

金田が舌打ちしながらも歩いてきたが前にいた荷物班も歩みを止めた。

「ごめん僕や荷物班もちよつと疲れちゃった。一旦この辺りで休みたいんだけどいいかな？なにせ急いで登る上泥濘んでるもんだから体力がもたなくって……」

荷物班はありつただけの荷物運搬で疲労がたまっていた上一部のメンバーには元々体力があまりない者もいたので仕方ないことだった。

一行が休憩する中聖奈は辺りを見回していた。

（確かにその判断は正しい。とはいえ……ここでのんびりしていいのかしら？敵が追ってくる場合はともかくこの先の避難を円滑に済ませるためには誰かが行かないと！）

聖奈はここで休息を取ってもこの先に敵がいる可能性があると考えた。そしてゆっくり立ち上がった。

「皆さん、私にいい考えがあります。それは一部の人はこの先の様子を調べてくるということです。もうじき暗くなります。そうなったら移動が困難になってしまいます。当然言い出しつぺの私は行きますが、この先危険を考慮して出来る限り人数は多めでお願いします」

「俺は行くぜ。体力はまだまだあるしな！」

「俺もや、任しとき！」

「俺も！」

「んじや私も！幸い弾薬はあるわ」

「俺だつて行けるぜ！まだまだヤル気満々だぜ！」

青木、赤田、大橋、富藤、安雄が立候補した。

「僕はここで傷を治しているよ。だから心配しないでね。」

ドラえもんはリュックにしまった救急道具を取り出した。

待機

のび太、スネ夫、ジャイアン、静香、咲夜、翡翠、白峰、晴夫

笹木、ドラえもん、金田、太郎

前進

聖奈、青木、赤田、大橋、富藤、安雄、久下

前進班がある程度のび太たちよりも先に進むと分かれ道が目の前にあつた。

「分かれ道か……どっちから探索する？」

富藤が分かれ道を指差した。

「あまりみんなから離れるのはまずい。かといってこの人数じゃなあ……」

現状、のび太たちと別れて聖奈たち7人だけで行動しているためあまり遠くに行くわけにもいかないのだ。

「ここは3人、4人に分けよう。で、そのあとどうする?」

安雄が手を振って分ける動作をした。

「そういえばここには噂によると古い館があるようです。そこを探すというのは?そこならしばらく立て籠もれますし」

聖奈は以前友人から、裏山には子供以外にも白衣を着た人の出入りがあり彼らの住居があるらしいことを聞いていたのだ。

「ほな、そこと他の連中が休憩してるところ周辺を調べるかいな?」

そして、7人は3人と4人に分かれた。

A 聖奈、赤田、久下

B 青木、大橋、富藤、安雄

A班は辺りを歩いていたら、聖奈が学校に現れた緑の化け物の死体を発見した。聖奈自身は白峰からそれらしき存在がいることを聞かされ実際の画像も見ていたためだいたいの姿は理解していた。

「これは、あの緑の……」

赤田が銃の先で死体をつついていた。

「おかしいな、こいつは学校の奴よりも腐敗が進んでる。見た目からして死後何週間は経っているな。」

すると近くに犬が2体現れた。

「こんな時に……！」

聖奈と赤田が銃を構えたが、久下に止められた。

「久下!? どうしたん!?!」

「お前たちの銃の弾は温存しておいたほうがいい。ここは俺に任せな。先に行つてくれ。」

銃を構えるとよく狙つて発砲し、一呼吸ついて一撃で二体を同時に倒した。

「ふん、なめるなよ!」

久下が銃を収めると赤田が元来た道に引き返そうとした。

「どうしたんだ赤田? なぜ行かなかつた?」

「この先は進まんほうがええ! 森が茂つていて視界が悪い! 早よ急いで合流せえへんとい。」

すると、聖奈も赤田同様引き返し始めた。

「赤田さんの言う通り急ぎましよう! ここにも化け物が来たということは青木さん達が

心配です！」

青木たちB班はもう1つの道で、洋館の探索していたところ何者かの死体を発見した。その遺体は何者かにより頭部が齧られていた。

「おい来てみる。これはなんらかの日記だ！」

「日記?」

日記はカバンに入っていたためかそれほどシワになっていなかった。どうやら日記の名前は有島 楊というらしい。

「ふん、アンブレラめ! まったく、おめでたいもんだ! 3年前主任が完全適合者のモルモットの餓鬼を連れたせいで計画が狂ったのだ! しかもお前らの…」

「所々に血が付着していて読みにくいな。それに字も乱雑だ…」

青木の言う通り日記のページはほとんど殴り書きで書かれており、所々に血が付着していた。

「今回 黒 金」

「ここはちゃんと書いてるみたいね。」

「だが、まあいい。すぐにこれを政府やマスコミに広げてやる!」

「アンブレラとか言ってたが、あの製薬会社になんらかの秘密があるのか?」

アンブレラ——世界に名を馳せる一流製薬企業で、今尚世界中の薬品はおろか医療機器、サービスどれを取っても右に出るものはいなかった。彼らはまさしく清廉潔白という言葉が似合うほどだと言う。しかし、ここ数年でアンブレラにも黒い噂がチラホラ現れたようだ。なんでも、怪しげな実験がアンブレラが行い、政府はそれを黙認しているという身もふたもない事実だった。

「それに金つていうのは一体？」

一行が資料を読むと上からコウモリの形をした化け物が2体現れた。

「クシャアアアアアアアアアア!!!」

「このコウモリは一体?!」

「つたく、鬱陶しいな！」

赤田と大橋がハンドガンと日本刀を構えた。

「うおらあああああ!!!」

「そいつ！」

赤田の頭部への数発と大橋の日本刀の攻撃で飛びかかってきた化け物2体は斬撃と銃撃により倒された。

「どうやら問題ないみたいだな。よし行こう」

そしてB班はさらに真っ直ぐ歩いて行くと古びた館を発見した。

「聖奈の言っていた通りね」

館は聖奈の友人の噂通り、すっかり古びていた。

「まさか本当にあったとはねえ…」

安雄がハハ…と言いながら館を見た。

「とりあえず、みんなを呼んで、ここで待機するかい？」

赤田が辺りを見回していた。

「そうですね。それがいいかも…?」

その時学校にいた緑の化け物が1体ドアを開けて現れた。

「キシヤアアアアアアア!!」

「こいつジャイアンか？」

安雄がグレネードランチャーを構えた。

「んなわけないやろ!まさかこいつが白峰の言っていた奴か!」

赤田もハンドガンを構えた。

「まずいんじゃない?どうすんの?」

化け物が飛びかかってきた。赤田はひらりと躲し、反撃した。しかしハンドガンの攻撃を受けて、倒れる化け物では無かった。

「頭を撃てばいいんじゃないか？」

青木と富藤が銃を構える前にグレネードランチャーを弄っていた安雄が二人の前に立った。

「俺がやる！喰らえ！」

安雄が青いグレネードを化け物に撃つたが何も起こらなかった。

「ダメ！全然効いてないみっ……！」

その時緑の化け物が凍結した。

「!? 一体何が？」

「なんや、コッチコッチだぞー！」

赤田がコンコンと化け物を叩いた。

「へへー！このグレネードを炸裂弾から冷凍に切り替えたんだよ！このグレネードランチャーはな炸裂、冷凍、焼夷、硫酸の4種類に変えられるんだ！」

「グレネードは弾を戦況に応じて切り替えられるのか、実に興味深い。どれ、こいつは念のため壊しとくか」

青木は凍った緑の化け物をハンドガンで撃つて粉々にした。その後B班はAと待機班を連れて館に入った。学校の裏にある洋館には何が待っているのだろうか。

そして、赤田と大橋に倒された化け物の前に黒い影が現れ遺体を喰らい尽くした。

「奴ら……やるようだな。だが……ここからが真の地獄だ！」

黒い影は姿を消した。

9話 戦慄！館に潜むモノ

のび太たちは館の中に入ろうとしていた。

「まさか本当に館なんてあったとはねえ…」

てつきり噂かと思っただぜ。」

「それにしても古いですね…」

全員険しい道を歩いて来たため、少し入り口前で休息を取っていた。中にゾンビがいた場合に近くの部屋に逃げられるようにするためだ。

「以外と中におぼけでもいたりして〜」

富藤が茶化すように笑った。

「冗談はよしてくださいよ。」

スネ夫がガクガク震えていた。

「いや見た目がここまで古い以上、有り得るぜ。お化けの一体や二体がいてもおかしくないだろうぜ。」

ジャイアンがバットをギョツと握った。

「僕は怖くないよ！みんながいるし…！どんとこい！」

怯えるスネ夫の前に太郎が立った。

「はは、凄え根性だな。普通こう言うの所ていうのはびびんのにな」

大橋が感心したように笑った。

「まあ、僕らが信用されてるってことだね！」

笹木が銃をクルクル回しながら太郎を見た。のび太たち一行の一部は突入モードだったが一部はやはり有島のメモが気になっていた。

「にしてもこれって…」

「うちの会社もアンブレラと接近はしますが、まさか…」

「わからん、おおかた研究で投資でもしてたらどこぞの企業とトラブったんだろ。」

「まっ大丈夫しょ。俺らならさー！」

「…」

赤田が陽気でいる横で金田は黙ったままだった。

「それじゃ、開けますよ…」

館のドアを開けてのび太たちは開けてすぐの部屋に入った。幸いそこは広い部屋であつたため、すぐに一行は安堵した。

「にしてもここは広いな」

「学校の保健室くらいですね。まあ、ここは会議室のようですし当然ですかね。」

「それじゃ…」

「ジャイアンがこれからどうするかを聞こうとすると1人の男が入ってきた。

「!?」

「なんだあんたらは！さてはゾンビか？」

男がハンドガンを一人一人順に向けた。

「おいおいどう見ても人間だろ！」

大橋が怒鳴るがすぐに男は背を向けた。

「巫山戯るな！他の奴はそう言っただけで死んだ。お前らだつて…お前らだつて！」

男はパニックを目の当たりにし、どこか落ち着きのない雰囲気だった。

「？何か知ってr…」

男はバタンと音を立てて出て行った。

「出てつちまったな。どないする？」

「あの男が何者か気になるな。しかし、ここを大人数で動いて逸れたりでもしたら大変だぞ。早速作戦を立てよう。」

久下が立てかけてあったホワイトボードにペンを用意したが相手にされなかった。

(なんなんだよ…せつかく用意したのに…)

「学校みたいに体力に余裕のある何名かで追跡しましょう。奴らが攻めて来た時も安心

して対応できません。」

「私が行こう。まあ、私でも十分だがなあ〜」

金田がバカ笑いするのを無視しながら晴夫が手を挙げた。

「俺も行くぞ。みんなの足手まといはまっぴらだしな!ここで休んでなんかいらねえんだよ!」

メンバーは金田、晴夫、聖奈、白峰になり、目的は屋敷の探索と男の追跡が主である。残りのメンバーは化け物からの部屋の守備や休憩で待機している。

探索班は各自で散らばって探索していた。白峰曰くこんな状況だったら散らばって動いた方が効率的だしパニックで誰かをうっかり撃ちたくないとのことだそうだ。その後ある部屋にて聖奈が白峰を発見していた。白峰は何か日記を青ざめた表情で見ている。

「緑川か。みろこれ…めっちゃ吐き気がするぜ…」

白峰の顔が青ざめていた。そして日記を聖奈に渡した。

「一体何?」

日記はところどころ破れていた。

「17日 本部から皮をひんむいたゴリラみたいなやつを預かった。豚を放り込んだら

奴ら、足をもぎ取り内臓を引きずり出したりしてからようやく食いやがった。

18日 同僚にたたき起こされて宇宙服見たいのを着せられた。どうやら地下の研究所で事故があつたそうだ。研究員の連中ときたら寝ないで研究しているからだ。

19日 この宇宙服のせいで背中が痒い。イライラしたから犬の餌を抜いてやった。あまりにも痒いから医者に見せるともう宇宙服は着なくていいと医者が言つた。

20日

朝起きたら背中以外に足にも腫物ができていた。犬が3匹脱走したらしい。餌を抜いただけで逃げるとかお偉い方に見つかつたら大変だ。

21日 昨日ここを脱走して研究院が射さつされたつて話だ。夜、からだ中 あついかゆい。

胸のはれもの かきむしたら 肉が腐れ落ちやがた。背中がかゆい いたい おれ どうし」

「え？」

最初は普通に読んでいた聖奈だったが徐々にその文脈から予想もつかない狂気にいち早く気がついてしまつていた。みるみる聖奈から冷や汗が流れていた。

「22日 かゆい ひいたはら へた

今日 はら へた いぬのえさ くう

23日

だれ か きた かゆい うま かつた です
かゆい うま

あまりにも非現実的な内容を前に聖奈も日記から目を背けた。

「これってまさか…嘘よ!」

「どうやらこいつはゾンビになる過程みたいだな…つたく!ここは新しい地獄みたいだな!せつかくここまで来たつてのに!」

白峰が机を叩くと、後ろからゾンビが現れた。

「緑川、後ろだ!」

「くっ!」

聖奈はすぐに離れて近距離から頭に2、3発撃つたことでゾンビは倒された。

「白峰くん、まさかここつて…!あのメモの有島つて人の施設なんじゃ!」

「ああ…ありうるな。」

その後晴夫から連絡があつた。

「聖奈さん、大広間で奴を見た!鍵が開かないから手伝つてくれ!」

二人は広間に向かうと晴夫がいた。

「二人とも来たのか。つて、金田さんは?」

ゴリラが男を攻撃した。男のマシンガンは遠くに飛ばされてしまった。

「ひいつ!嫌だ!死にたくない死にたくない!」

男が必死に逃げようとしたがゴリラが逃げ道を囲み、1体ずつ手足、上半身、下半身を引きちぎった。

「きゃー!」

聖奈が悲鳴を挙げて目を逸らした。

「まずい!どうすれば…」

晴夫も突然のこととうろたえていた。

「晴夫!取り敢えず、誰か応援を呼べ!俺らだけじゃまず無理だ!」

すると後ろから金田が現れた。

「なんだこいつは?」

「金田さん気をつけろ!こいつは結構強い。」

(どうやってこいつを倒せばいいんだ!)

白峰が武器であるショットガンを構えながら攻めの一手を考えていた。そして攻撃するも全く効いていなかった。

「ええい!いつも通り喰らえ!」

金田のショットガンで頭部を撃たれたゴリラは怯んだ。

ジャイアンが見たこともない銃を駆使してゴリラを2体まとめて倒した。

「武くんその銃って一体?」

聖奈がジャイアンの新しい武器を指差した。

「ああこれはさっきの部屋にあった俺の新しい相棒のデザートイーグルだ!」

「新しい武器か!」

白峰たちが銃を納めた。

「のび太君たちも新しい武器を持っています。一旦ここは戻ってください。」

「ふむ、そうしよう。実は私もみんなに話があるんだ。」

全員部屋に戻ると金田がテーブルで大鷲と狼のメダルを取り出した。

「実はさっきこの館から地下に繋がる入り口を発見した。そこにはどうやら脱出用の列車があるそうだ。」

「!?」

金田の言葉に全員は息を飲んだ。

「そんなものがこんなところに…」

「つたく、どうなってんだよここは!」

大橋がやれやれと言いながら苦笑いを浮かべた。

「あ、どうりで今まで俺らと会わなかったわけだ。」

晴夫が相槌を打つと白峰がノートを置いた。

「だがよ、俺の見つけた日記だがこれを見んな一通り見て欲しいんだ。」

白峰は日記を一行一人一人に見せた。

「これがゾンビになる過程なんて……」

「信じられないよ……」

「こんなのって本当に起こったのかい？信じられないよ……」

「おいおいこれはやばいだろ。ホラー要素強いなあ……」

「やべえな」

全員かゆいうまと書かれた日記の内容に戦慄を覚えていた。ゾンビがどのように生まれるかを知り、全員気まずい雰囲気になった。

「で話を戻すとだ。どうする？ここに行くか？」

しかし、全員には気まずい空気が流れた。

「……僕は行きます。」

「正気か!？」

久下がのび太を止めようとしたがジャイアンは笑いながらスネ夫を見た。

「……スネ夫。」

「そうだね、ジャイアン。」

「今の意見に賛成の者は?別に残ってもいいんだぜ?だからここは危険を冒してでも脱出する確率が跳ね上がったほうに進んだほうがいいと思うぜ。この俺が言うんだしな」

ちやつかり青木ものび太たちの方に立っていた。

「僕は行く!のび太にいちちゃんたちを信じてる!」

「やれやれ…付き合ってやるか。」

「そうね。ここまで来たならのび太さんたちに付き合ったほうがいいわね。」

「それに私たちにできるのは生き延びることです。」

「それが死んでしまった人たちに報いるたった一つの方法…」

「そうそう!指加えて見てるわけじゃないじゃない!これがラストチャンスかもしれないしね。」

太郎、健治、静香、聖奈、咲夜、雪香が最初に賛成した。

「ハッ、危険は承知ってか!」

「ここまで来たらみんな運命共同体…」

「ここでサヨナラなんてしたって生き残れる保証はないんだ。僕と先輩も付いてくよ!」

「お前ら、いいのか!?危険なところなんだぞ!」

久下がなおも反対したが安雄と晴夫、赤田に肩をポンと叩かれた。

「まつ、ここまで賛成が多いとなると取り敢えず雰囲気合わせとこうぜ久下さん！」

「取り敢えず付いていけばいいんだよ！」

「まま、何とかなるやろ！こんだけ人数がいるんや。だから、そいつら頼りにしとけばええよ！」

赤田たちがのび太たちに付いて行つた。

「ああ！もう分かつたよ！行けばいいんだろ？行けば！帰ったら昇給だからなマジで！」

全員賛成したということで全員はリュックに荷物を入れると地下の入り口に金田から預かつたメダルを入れて地下に降りていった。

10話 地下坑道

長いエレベーターを降りたのび太たちは広い場所に出た。

「地下だあー!」

「言わなくてもわかる。結構広いから気をつけろよな」

健治が太郎の近くに立っていた。

「でも明かりがある。人でもいたのかしら?」

咲夜があたりの不審さに違和感を覚えると久下が暗いところに何かがいるのを見つけた。

「誰かいるな…」

「あたしがいくわ。すいませーん、ってこれ死んでいるじゃない!」

富藤が薄暗いところにライトをかざすと、足元には緑の軍服をきた兵隊が死んでいた。

「しかも5人…どうして?」

咲夜が不審そうに死体を弄っていた。そこには何者かに攻撃された跡があった。

「何かあるんだ!行こう!」

奥に行こうとした一行だが出木杉が異変に気付いた。

「待って、携帯がここでは使えない！」

「じゃあまた数人で行動させるか？ 何人かがこの辺を確保してりや、安全だろう。いざという時に合流できそうだしな」

「俺が行こう。それとこれを……」

「ああ、俺も行くぜ。まっ、軽く付き合っつてやるよ……」

安雄と久下が手を挙げた。久下は安雄からハンドガンを受け取った。安雄曰く、自分にはショットガンにグレネードがあつて当分ハンドガンを使わないとのことらしい。

「僕も行くよ。大丈夫もう動けるから」

先ほどと違いのび太は元気になっていた。

「私は疲れました」

学校を脱出してから聖奈はその場に座り込んだ。

「んじや、いよいよ私が行くとしますか！」

富藤がやたらハイテンションになっていた。

「決まりだね。」

「俺たちはここを見張ってるから任せときな。」

のび太、久下、安雄、雪香が先行した。

「いざとなったら戻れよ！死ぬんじゃねえぞ！」

白峰がサムズアップを送った。

「雪香、無理しないでね」

「あいよー！」

しばらく行くと四人は緑の化け物に遭遇したが、久下と富藤が近づく間を与えず連続攻撃を放ち、倒した。

「近づく前に倒せば問題ないね！」

富藤が頭部にハンドガンで攻撃した。

「やるな、ついでにこれもだ！」

久下も雪香と同時に攻撃し、化け物を一気に倒した。

「やったな。では先に進もうか」

一行の進む先にドアを発見した。

「なんだ？こんなところにドアだと？」

4人はドアを開けて角を曲がるとそこには先程の軍人によく似た格好をした倒れていた。

「誰だ！」

「こんなところに何故俺たち以外の人が武器を？それに見たことない格好だ」
「それにその格好何処かで見たとような……」

「警官にガキ？まあいい、この際誰でもいい。聞いてくれ！この事件は全てアンブレラが引き起こした物によるバイオハザードだ。犯人はアンブレラだ！わかるだろ？」

男が必死に喋る中何者かが男を発見した。

「ウツソ、まじ!?あの国際的な製薬企業のアンブレラ!？」

全員の顔色が一気に青ざめていった。

「どうりで有島の日記にアンブレラの名があるわけだ」

「アンブレラ……!あいつらのせい……」

「アンブレラア!あいつらが……ぜってー許さねえ!!」

安雄は特にアンブレラへの怒りを露わにしていた。

「俺たちUSSSはUBCSと協力して研究員及び民間人救出が目的だったのに奴は違つ
t……」

その時銃弾で男の胸が撃ち抜かれた。銃撃した男は素早く逃げ出した。

「おい!大丈夫か!?!おい!」

「だめ、もう死んでる。今思い出したけど入り口で死んでいた人たちってこの人の仲間
なんじゃ……」

「早くみんなにこのことを伝えよう。あの男は俺たちを消してくるかもしれん。人数が多ければ奴も手出しできないはずだ。」

のび太たちはドラえもんたちのいるところへ向かった。

のび太たちはメンバーの待機所でこのことを話した。

「マジかよ……」

「でもそれじゃ僕らの学校は……」

「アンブレラの息がかかってたつてことか。全く、新しい小説のネタを使われちまうとはな〜」

他のメンバーが慄く中、青木は能天気だった。

「なんや……あの有名企業がまさかこの事件の黒幕つて嘘やろ……?」

「やはりアンブレラでしたか。となると……笹木さん!」

すると笹木が死体を持って来た。

「さっきの話からするにこの人たちはアンブレラの傭兵つてことだよね」

笹木が死体を指差した。

のび太「恐らく」

ドラえもん「実はさつき緑の化け物が襲つてきたんだ。まあジャイアンと大橋さんた

ちがすぐに倒したけど。どうやって動こうか？その裏切り者が襲ってくるに違いないし」

「じゃあまた全員で動こう。その方が遠くに行った時にトラブルにならない」

金田の一言で全員は前方と後方を確認しながらゾンビや緑の化け物を確実に倒した。

「うおおおおお〜!!」

「クシャアアアアアアアア!!」

一行は奥地まで来たが岩で塞がれていた。

「一通り調べたけど…あとはここか」

「岩でふさがれてるがどうする？」

「うーん…俺たちの武器で壊せへんかな？」

「いや、これだけの物を壊すには爆弾がないと…早く探しに行きましょう。きつと近くにあるはずよ」

全員元きた道に引き返そうとした。その時、何かのスイッチを久下が押ししてしまい、あたりに作動したらしい音が聞こえた。

「うん?! まずい、武くん、赤田、青木さんにのび太君! すぐにそこから離れるんだ!」

岩がゆらゆらと動いていた。

「岩の様子が変です!」

岩が動き出した。

「すまん……」

「あんたバカじゃないの!?! 気をつけなさいよ! まったく!」

「マジかよ! 人間スクラップにでもされるんかいな!?!」

「うわー!」

「逃げろ!」

4人が必死に逃げる中、のび太のダツシユは4人の中で最速だった。

「のび太、速あッ!!」

健治が驚いていた。

「まあ逃げ足はね……」

ドラえもと静香が苦笑いを浮かべた。のび太はいつもジャイアンに追いかけて回さ
れているため自然と逃げ足が速くなっていったのだ。

「まあまず4人は大丈夫だよ」

岩が反対側の壁に激突した。

「面白かった?」

「いやいや、普通当たったら死んじゃうから」

よく状況が分かってない太郎は楽しかったのかどうかしか聞けなかった。しかし、状

況の分かつてる咲夜に突っ込まれた。

「なんとまあ、素早いこと」

「全くだ！」

「おめえのせいだろうが！」

雪香が久下をしばいた。

「おい、中から声がするぞ」

安雄が聞き耳を立てていた。

「じゃあ中に入ろうよ！」

「太郎……こつから先は大事な局面になるからいいって言うまで静かにしてろよ？」

「うん！」

まず健治と太郎に大橋、のび太、ジャイアン、金田、出木杉がドアを開けて中に入り込んだ。すると彼らに見えたのは入り口で死んでいた兵隊と同じ服を着ている男だった。

「ええ、例のアレは回収しました。指示通り生存者は私だけです。あとは街ごと吹っ飛ばせば……」

この隙に静香、聖奈、久下たちも続々と入って行った。男は特に気づきもせず通信

を続けていた。

「証拠？ 証拠なんて残りませんよ。政府にはあなたがたが事故と報告するはずですよ。ではこの辺りで……」

「行くぞー！」

会話を終えたタイミングで全員が武器を構え男を取り囲んだ。

「お前は！ そんな……！」

男は驚いたようだが、すぐに冷静になった。

「誰なんだあんた一体？」

「ただの生存者だよ。ハハハ……」

男は冷静そうに一般人を装った。

「嘘よ！ それに今の会話を聞いたけど普通じゃない！」

聖奈が男を指差して男は苦虫を噛み潰したような顔を浮かべた。

「この街の一警官として聞きたい。街ごと吹っ飛ばすとはどういうことだ！」

「まさか……てめーもアンブレラか？」

「アンブレラなら許さねえぞー！」

安雄と晴夫の剣幕を前に男はなおも冷静だった。

「そうだと……もし、いったら？」

「僕たちにアンブレラについて教えてください。どうさ……」

出木杉が皆まで言おうとすると男は銃を素早く構え、出木杉に発砲した。

「出木杉危ない！ぼけつと突っ立てないでくれよ！」

肩を撃たれたのは出来杉のすぐ近くにいた大橋だった。

「ぐわああああああ!!!」

「大橋！」

青木が駆け寄った。静香はほぼ大橋に近いところに立っていたが、大橋の出血でそこから離れた。

「きゃーーーーー!!!」

「てめー!!」

ジャイアンは武器をショットガンからマグナムに変えた。男を確実に殺す気満々であった。

「ジャイアン落ち着いて！」

「大丈夫だ……少し掠っただけだ……」

「本当だ。直撃してもおかしくない位置だったのにそれほどおおきな傷がない？どうして？」

「何故だ？何故傷が!?まさか貴様……!」

男は冷静な表情からパニックを起こしたように青ざめていた。

「何だ？」

大橋が肩を抑えながら男を睨みつけた。

「随分動揺してるみたいですがどうしたんでしょう？」

笹木と翡翠が大橋を助け起こした。

「ふん。だが、Tウイルスの完全適合者といえど餓鬼なら俺でも勝てるな……くっ！」

男が銃を構えたが、久下の一発で銃がはじかれた。

「Tウイルスに完全適合者？何言っているんだお前は！」

「あるなら話せよ……ううっ！」

無理をしながら立ち上がった大橋だったが、膝をついてしまった。

「大橋さん！動かないほうが……」

翡翠と笹木が支えたが大橋は大丈夫だと言ってまた立ち上がった。その時、大橋は傷の痛みでペンダントのような物を落した。

「大橋？お前もしかして？」

男はペンダントに映っていた女性が気になったようだ。

「お前もしかして、大橋 祐太か？」

男が取り乱したような表情を一瞬浮かべた。

「ああ、そうだよ！それが一体どうした!? 関係あんのか？今この状況と！」

「何!? それじゃ、お前が18年前に当時の主任が連れて行ったアンブレラの実験サンプルの餓鬼か！」

「ええ〜!!」

全員が大橋はアンブレラのサンプルだと知り啞然とした。そして緊迫した雰囲気になった。

「大橋さんが…サンプル!？」

「ねえねえ〜?あの人何言ってるの?」

明らかに太郎は場違いであるのか健治が太郎の肩に手をポンと置いた。

「悪い、ちよつと黙ってくれ。」

「どういう冗談?ハツタリのつもりかな?」

笹木は銃を構えたが赤田が待ったをかけた。

「いや、あのツラはマジで言ってる目やで。冷静そうな奴が取り乱すつてのは大抵事実だ。」

「ふむふむ、興味深い内容だ」

青木はメモ帳の様なものを出してそれを呑気にメモしていた。

「!!何い!?あいつが…!」

「俺が適合者ってのは一体？」

11話 明日へと

大橋が一步前に進むと男は銃を下ろした。「お前はもともと親が死んでいてな。アンブレラが引き取ったあるウイルスの適合実験者としてあの緑の化け物——ハンターを人工的に交尾させて産まれた細胞を注入した人間なんだよ。当時アンブレラは完全適合者を増やして自分たちの野望にとつて手駒を増やそうと画策していたんだ。」

「そうか……で、その主任って人は？そしてあなたの名前は何？なんで俺を知ってるんだ？」

「おれは樹咲きざき宗しゅうだ。主任は鳥柴としば亜紀あき。その人がその実験の最高責任者だ」

樹咲がペンダントを指差した。

「なんでそんな人が大橋さんを？」

「それはすべての実験を終えたのは良かったんだが、目標だった完全適合者としてのレベル水準が低かったから処分するようにアメリカ本部から命令されたいたんだ。けど、彼女はお前の両親とは同僚であることに加えて要観察の必要があり、処分するには惜しいということで本部と交渉しお前を連れて、孤児院おがたさどるの緒方おがたさどる 暁あきらに預けたんだ。それでその計画はその後主任が事故で死亡して破綻したんだ。」

「ああそれなら父さんから聞いたよ。俺は鳥柴さんに助けてもらって、その人は交通事

故で死んだって。このペンダントはその人のなのか？」

「でもなぜそんなこと知ってるんだ？」

「何故ならおれは彼女の交渉の手引きをしたからだ。俺もかつて研究員だったんだ。けど、いろいろあってアンブレラも変わったんだよ。とはいえお前らはアンブレラを知った以上生かしておくわけにはいかn…」

そう言うとき天井から、

「デヤアアアアオオオオオオ!!!」

と鳴き声を上げて黒い蜘蛛が現れた。

「まさか、ブラックタイガーか！おい気を付けろ！奴の糸は絡まると取るのに時間がかかるんだ！」

樹咲は銃を構えたが、ブラックタイガーの脚部で壁に叩きつけられ気絶してしまっ

た。
「樹咲さん！」

大橋たちが武器を構えた。

「なんか知らねえけどぶっ倒してやる！新しく手に入れたこの硫酸弾でな！」

安雄のグレネードが黄色に輝いた。

「ああ行くぜ！」

全員武器を構えた。

安雄は早速緑の炸裂弾から黄色の硫酸弾に切り替えた。しかし、準備には時間がかかっていた。

「上等だ、まずはこれを喰らえ！」

ジャイアンがマグナムでブラックタイガーを先制した。ブラックタイガーはスピードがそこそこあるだけでパワーはバイオゲラスよりも明らかに劣っていた。しかし、生命力は高かった。

「デカイけどたいしたことないね！」

そう言いながら、咲夜はハンドガンを構えた。

「あのカメレオンよりパワーが劣るな！これなら……！」

「えい！」

「喰らいなよっ！」

のび太たちは蜘蛛の背後や正面に回って至る所を銃撃した。

「聞いているみたいね！」

静香はハンドガンでよく狙って撃った。彼女は今回の戦いで一度も銃を使ったことがなかったのでゆっくり狙って撃つくらいしかできなかった。その時、ブラックタイ

ガーは紫の体液を飛ばした。ジャイアンは瞬時によけたが、立っていたところの石が溶解した。

「ちっ！毒付きかよ！」

体液をなおも放つブラックタイガーだったが、のび太たちが避けたところに続けざまに糸を吐いた。それにより何名かが引つかかかって動けなくなった。

「しまった！糸が！」

「私ものです！つこの！」

「すっごい嫌な糸ねえ〜！このべちよべちよとか！ああもう！」

「くそ、取れねえ！」

「くそ！早く切らねえと……おい太郎手伝ってくれ！」

ドラえもん、翡翠、富藤、大橋が糸に縛られてしまった。その様子を見た健治、太郎、笹木は攻撃から4人の糸を切る役に回ろうと向かった。

「うん！」

「僕もやるよ！」

当然ブラックタイガーは笹木と健治に標的を変えた。

「よし喰らえ硫酸弾！」

安雄はグレネードのスタンバイを終え、ブラックタイガーに不意打ちを喰らわせた。

「グウエエエエエエエ!!!」

「よしやった! 喰らえ!」

金田は手持ちのマシニングのホルダーに入っていた弾丸を全て撃ちまくった。

「やったか?」

「ついでに喰らえー!」

「オマケよ! 当たりなさい!」

スネ夫と咲夜がトドメにスナイパーライフルやハンドガンなどで同時にブラックタイガーを撃ち抜いた。しかし、ブラックタイガーは悪あがきと言わんばかりに糸が切れていない大橋目掛けて毒針を発射した。

「くそ、とつさに狙うだ?! くそ、取れねえし動けねえ!」

「ダメだ…間に合わない!」

ブラックタイガーの糸はドラえもんたちでさえ、切るのは難しいことだった。他の面々が攻撃しようとするも、ブラックタイガーは糸を飛ばして飛びかかろうとした。

「危ねえ!」

しかし、正気に戻った樹咲が大橋を庇ってブラックタイガーの毒針攻撃を喰らった。

「樹咲さん! どうして…?」

「へっ…お前…は…生きろ。鳥柴は…生きて欲しい…から…お前を預け…たんだ。それ

におれは…仲間を…殺し…た…死んで…当然だ…いいか…研究所から…脱出…しろ…
そして…やつに…」

そんな中、樹咲には走馬灯のようなものがよぎっていた。

18年前、大橋を引き取ると聞いた鳥柴の言葉に樹咲は驚きを隠さずにはいられなかった。

「何故ですか主任！」

「言っただけです。経過観察であると…」

「納得いきません！本部が黙ってないですよ！」

「大丈夫…本部には適当な理由をつけておきました。あの子のDNAは未熟。なので経過観察を図ると言ったらOKしてもらえました。」

「いいのかい？亜紀さん。そこに関しては君の事情があるんじゃないかい？」

すると白衣を着た軽薄そうな雰囲気を漂わせる男が現れた。

「くぼめいげつ 狗波 冥月…」

「確かにそうかもしれない。けど、子供の命です。命を弄び続けてきた我が社ですが、せめて一つだけでも…救いたい。そう思っちゃったんです…こんなこと思っちゃいけないのに…」

「やれやれ…物好きといふかなんといふか…君、仕事を間違えたんじゃない？妹さんのためとはいえねえ…研究より他の部門が向いてたんじゃない？」

鳥柴が幼い大橋を抱き寄せた。

「私に課せられた使命なのかもしれません。私は人の心を遅いかもかもしれませんが取り戻せたのかもしれない。そうなった私のいえ、私にしかできない贖罪なのかもしれないでしょう。」

「そうかい！じゃあ、悔いのないようにね…」

狗波が背を向けながら手を振り部屋を出た。

「生きろ…いい…な…」

そう言うのと樹咲は自分の持つていたもう一丁の銃を大橋に渡しして息を引き取った。

「うわあああああああ—————!!!」

シヨックしたのか逆鱗に触れたのか大橋は彼の持つていた銃を持った。

「くたばれえええ—————!!!このくそ蜘蛛野郎!!!」

マグナムを頭部に3発撃つと蜘蛛は断末魔あげた。

「オグエエエエエエエエエエアアアア—————!!!」

「はあはあ…」

大橋は泣いていたが倒れてしまった。

数時間後、ゆつくりと目を覚ました大橋はすぐに何かを決心した。

「大橋……」

「……俺きめた。今回の事故で生き残った人を目に見える範囲で守る。もう誰も犠牲にはさせねえ。この人のためにも……俺自身、何が起こっても……」

「大橋さん……」

大橋たちは樹咲の意思を胸に先に進んだ。その後一行は謎の入り口を発見した。

「……は？」

「変な入り口だね」

ジャイアンとスネ夫が扉に触れたがびくともしなかった。

「これだけ頑丈となると、何かありそうですね」

「?ッ、あれ見ろ!」

健治が指を指すとそこには赤と白のエンブレムが刻まれていた。

「アンブレラの!」

それはアンブレラのものでE23と書かれていた。

「どうやらここは奴らの実験所のような」

すると安雄が少し息を切らしていた。

「安雄君、大丈夫？」

「ちと、キツイですねえ〜！さっきの戦いで疲れたかもな…」

「安雄がこれじゃあ単独行動は危険だ。ここはいつも通り別れて行動するか？」

「そうしましょう。怪我してる人や疲れてる人を元気な人と組ませましょう。そして脱出の手段を探しましょう」

翡翠が首を縦に振った。そして一旦落ち着くべく、のび太たちは近くの守衛室に入った。

「これがここの地図だ。まずいくつかのメンバーはただの探索に加えて、広いB1エリアのエリアの探索とここに関する情報とか今回の事件の発端のために資料を探すこと、あとはこの近くで待機すること——以上だ。」

白峰が近くで拾った地図をテーブルに広げた。

「確かに危険な研究をしていたなら何らかの資料はあるかも知れへんな。」

赤田がうなづいた。

「うん、じゃあ、早速分けよう。急いで脱出しないといつ上のバリエードが破壊されるかわからない」

そう言つてのび太たちはメンバーに別れた。

のび太、大橋、金田、久下、白峰（探索）

青木、赤田、翡翠、笹木（資料）

静香、聖奈、安雄、晴夫、ドラえもん（治療）

スネ夫、ジャイアン、太郎、健治、富藤、出木杉（B1探索）

「決まったな。んじゃ、行くぞ！」

めずらしく仕切った久下とともに一行は研究施設の探索へと動いた。

12話 裏切りの真相

一行は別れて施設を探していた。施設自体は広くかれこれ数十分が経過していた。現時刻は午前0時——地上は深い闇夜に変わる中、研究施設は不気味な霧囲気を漂わせていた。

B1エリア探索班は二手に分かれて探索を始めた。この施設はB1エリアが最も広く人数も多めになっているのだ。

「見て、ジャイアン！すごい武器だ」

そこには武器が大量に並んでいた。

「これは俺のものだ！」

そう言うジャイアンは大きめの武器を取った。

「でもこれはぼくn……」

「うるせー！お前の物は俺の物！俺の物は俺の物だ！」

（うわ、出たよ……ジャイノミクスが。ほんとキリないな、こうなるとさあ〜）

スネ夫が苦笑いを浮かべた。2人は隣の部屋に入った。

「はいっつて？」

「知るか。なんかいいものはあんのかな？」

「証拠隠蔽のため10分後にロックされます」

突然、アナウンスが部屋に響いた。

「どうした？」

「なんか自動的にロックがかかるシステムが遠隔操作されたみたい。ここは僕に任せて！」

そう言つてスネ夫が壁のパズルに挑んで、5分後にようやく解錠した。

「ナイス！スネ夫！」

すると近くから隠し扉が現れた。

「この部屋は一体……」

「隠し扉からして重要なんだろう。入るぞ！」

2人が部屋に入った。スネ夫は壁に血が9824と付いていたのを見て、近くにあったダイヤル式の金庫を開けると日本語で表紙に機密資料と書かれたものがあつた。

「機密資料つてことは……」

「ここでの研究以外のことも事前に書かれてる！やった！後はここを調べ尽くして脱出するだけだ。」

2人は次の場所の探索を始めた。そこには黒い羽が落ちていたが知る由もなかった。

健治、太郎、富藤、出木杉は東側の探索を行っていた。

「なんかあるから入るよ〜」

太郎が先行して部屋に入った。

「おい！気をつけ…」
「つてうわー！」

太郎が映写機のある部屋に入るとそこには館で交戦した黒ゴリラがいた。

「こいつは聖奈の言っていたゴリラか！」

健治と富藤が不安そうにハンドガンを構えた。

「今ならいけるかも…！」

「無理だ！聞いた話だとハンドガンだけじゃ勝てない…！」

しかし、出木杉はフフツと笑った。

「わかってる。けど、僕には策があるんだ。」

「後輩ばかりカツコつけさせないわよ。お先に！」

富藤は健治と出木杉より先にまず2、3発腕に撃った。

そしてすかさず健治は自分のハンドガンで頭部を撃った。太郎は危ないため皆の後

方に下がって隠れている。

「今だ、絶好のチャンスだあああああああ………！」

出木杉は心臓と頭の部分をそれぞれ素早く撃った。

「今だ健治さん！ 奴は弱っているから一気に頭をナイフで刺すんだ！」

「オツケー！ 喰らってくだばれえええー！」

頭をナイフで刺され、それが脳に直撃しゴリラは倒した。

「青木さんみたいの名前をつけるとトライアタックかな？」

「いいんじゃないの？」

「あの人よりはいいな。あの子のセンスはよく分かんねえしな。」

「うん？ これは…ッ!？」

出木杉は何か見ると自分のリュックに映写機とビデオさらには写真を入れた。

「ちよつとのび太君たちを探してくる！ このままじゃ2人が…！」

出木杉はのび太たちを駆け足で探しに行つた。まるで、とんでもないものを見たかの

ように青ざめた。

「おい、出木杉！ 行つちまつた…どうしたんだ？」

のび太、大橋はひとまず金田、久下、白峰と分かれて探索を始めた。

「大橋さん！ こつちにエレベーター作動する部屋があります」

二人はある部屋に入ると、いたるところから機械音が響いていた。

「!? のび太、上だ！」

「えっ? つてうわー!」

のび太を襲おうとしたのはハエのような化け物だった。のび太はとっさに躲してなんとか避けられたが化け物は素早く大橋に襲いかかってきた。

「喰らえ！」

「キュウウイイシヤアア!!」

しかし、大橋のショットガンに2、3発撃たれてあっさり死んだ。

「やったか!? まあ、スピードが速いの防衛力は乏しいっていうしな。」

そして2人はB4への特別区エレベーターのロックを解除した。2人はB4のエレベーターに乗ろうとボタンを押した。

「おい二人とも！」

すると出木杉がのび太たちの元に走ってきた。

「出木杉か。どうした？」

「出木杉君！」

「実は気になる資料を見つけたんだ。行きながら話そう」

3人がエレベーターに乗りながらB4を目指す中、出木杉は説明した。

「わかったんだ。ここにあった資料から、今ここスキが原で起こってるのは事故なん

だ。」

「事故だど！これが事故ってどういうことだ！」

大橋は驚いて質問するが出木杉は冷静だった。

「どうやらここはアンブレラ社が独自に開発したウイルスの“Tウイルス”の研究及び運用をしていた所らしい。」

「樹咲つて人もTウイルスって言ってたけど…出木杉くん、それは一体なんなんだい？」

出木杉が首を縦に振った。そして資料の一部を取り出して指差した。

「どうやら資料によると、もしこれを使うと動けない足を動かすことができ、医療及び軍事用に使えるんだ。でも、これを投与すると別に抗体となるウイルスかワクチンを打たないと打った所から腐り始めて、やがてゾンビになるんだ。」

「じゃあ…あのゾンビとかは全部そのTウイルスの成れの果てってことか!？」

大橋は今まで倒してきたゾンビたちを思い出していた。彼らもまたウイルスの被害者であったのを再確認し、とんでもないものを知ったという後悔に似た表情を見せた。

「ええ、そうなります。そして彼らはある行動——つまり“食べる”ことをしているから代謝が満たされるそうです。」

「とんでもないウイルスだな。」

「ええ、のび太君たちは出かけていて無事だったけど、僕を入れた他の生存者たちが何故

無事なのかはわかりません。」

「今の話が本当なら……ママはもう死んで……いたんだ」

のび太が少し後ずさった後に倒れ、泣き崩れてしまった。

「のび太……」

「残念だけど……そうなってしまっうね」

3人は悲しい雰囲気にも包まれた。そしてエレベーターがB4特別区に到着した。

「で話を戻すけど……ここからが重要なんだ。このTウイルスが撒き散らされたのはある人物がある目的によるものだとわかったんだ。僕らはずっと騙されていた。そして踊らされていたんだ。」

そうですよね……

金田さん！」

なんと目の前にいつからそこにいたのか金田が待ちわびたような雰囲気ですここいた。

「ふん！」

金田がニヤリと笑みを浮かべた。

第13話 暴君登場！黒い野望を打ち砕け！！

T ウイルスをばらまいた黒幕は何と金田だった。あまりにも予想外な回答にのび太と大橋は目を丸くした。

「オツさんが？」

「そういう事だ。」

「どうして金田さんが!？」

出木杉が冷や汗をかきながら金田を睨みつけた。

「T ウイルスの兵器 B・O・W 開発班の資料から写真を発見したんだ。そこには当時の研究員の写真があった。そして、別の部屋で事前に見つけた社員のデータからあの有島つて人のメモの金の付いてる社員はこの人しかいない。」

それを聞いた大橋は武器である日本刀を構えた

「お前が多くの人を殺したんだな!?!なぜこんなことを?」

「私は研究の一環でコウモリの B・O・W を開発した。が、生産コストが低く本部によって処分されてしまったなかで唯一生き残った一匹が私に寄生したのだ。最初は痛みがあったがだんだんとそれが快楽に変わったんだあ…」

これは他の生命を吸収して、パワーアップするのだ。今まで私はこれで邪魔な人間を喰い殺していたのだ。しかし、警察に嗅ぎつけられてしまった!その為に今回、人間狩りのカモフラージュとしてバイオテロを起こし究極の生命体――神に近づこうとしたのだ。まあ何人か生き残ったが、ここまでくればもはや用済み……人残らず私のために殺すがなあ……まあ、きさまらは確実だ。」

「なんてことを……」

自らの悪行に悪びれもしない金田に3人は怒りを覚えていた。

「ふん、今更虫けらがどうなろうと進化した私には関係のないものだ。何故なら私はTウイルスで強化されて人を超越している。この肉体とコウモリのボスダルで私が取るに足らない虫けらを支配してやる永久にな!」

「本性を現したな!金田さん!いや悪魔!」

「あなただけは許さない!家族や友人を奪ったあなただけは!」

「誰のせいでこうなってるか分かってねえし、ぶちのめしてやるよ!てめえには懺悔の時も与えねえ!」

大橋が啖呵を切って攻撃しようとしたが、金田に避けられ蹴りを受けた。

「ふん、虫ケラが!屑に生きる資格はないのが分からんとはなあ……屑め!お前たち人間など足枷にしか過ぎん!ぞろぞろと増え続け潰し合う―――そのオンパレードだ。」

そいつらを滅らしより高みを目指し君臨する……私こそが神だあ！」

金田は嘲笑いながら3人を身振り手振りでバカにしていた。

「どこまでも腐っている！」

(さてと殺される前にこの後どうしてやろうかな。手始めに奴を使うか……)

金田は涼しい顔をしながら、奥に部屋を見てニヤリと微笑んだ。

「ついて来たまえ、冥土の土産にここでとっておきの切り札を放ち八つ裂きにしてくれる！」

金田が部屋に入ろうとすると3人に入るよう手招きした。

「どうします？…入るよう言ってますが？」

のび太が不安そうに部屋の扉を見た。

「出木杉、剛田たちと合流してお前はここを破壊する方法を探せ。こういうところは証拠隠蔽のために自爆装置があるはずだ。俺たちが15分経って元に戻らなかつたら、ここを爆破するんだ。奴は地上に出しちゃいけない！」

「分かりました。みんなにもこのことを伝えておきます。気をつけて！」

出木杉はエレベーターに乗り、上に向かった。

「行くぞ。」

「はい！」

2人は意を決し部屋に入った。

「んで?その例のやつってのは?」

「この先にある。名は暴君の意味を持つアンブレラのTウイルス研究の集大成
タイラントだ。」

のび太たちは部屋の真ん中のカプセルを見た。そこには恐ろしい悪魔のような生物
が眠っていた。

「!？」

2人は息を飲んだ。

「おいおいなんてやつだ!」

「こんなもののために僕らが…」

「俺らだけじゃねえ。こんなのがいたら世界中の全ての人が確実に死ぬぞ!」

金田はタイラントを起動させた。カプセルから液体が捨てられるのが確認された。

「おつと気をつけてくれ。これは暴走しやすいんだ。それではせいぜい滑稽に踊るんだ
な!!」

金田は走り出して、入り口のエレベーターを使ってその場から逃走した。

「待て!」

その時タイラントがカプセルを突き破った。「どおおおおおうううううう!!!」
「やるしかない……」

のび太は館で新しく手に入れたショットガンを構え、大橋は樹咲のマグナムを構えた。

「喰らえー!」

ショットガンで撃った弾は皮膚に命中したものの、爪で弾かれた。

「何?」

「弾いた?」

タイラントはのび太目掛けて突進してきた。

「強い上に凶暴だ。今までのやつとは違う!これでも喰らえ!」

大橋も牽制用としてショットガンに持ち替えて攻撃するがやはり弾かれてしまった。

「くそ!」

（何か弱点があるはずだ。まさか、あの心臓か!）

大橋はタイラントの心臓らしきものが気にかかっていた。

「のび太、どけ!決めてやる!」

大橋は持ち替えたマグナムでタイラントの心臓らしきものを打ち抜いた。

「だあああああ——!!」

タイラントは血を吹いて倒された。

「やった…のか?」

「…みたいだ。心臓部分が怪しいと思ったんだ。もしやと思って試してみたが、思った通りだ。」

大橋がタイラントの死体をチェックした。

「じゃあ金田を追いましょう」

「そうだな。あいつの好きにはさせねえ!」

二人は部屋を出た。金田はどこにむかったのか?そしてのび太たちは脱出できるのか?

14話 命がけの防衛戦

大橋とのび太はタイラントを倒してエレベーターに乗ると放送が鳴った。

「ただいま緊急自爆装置が作動しました。あと50分で自爆します。解除することは不可能です。各研究員はB2の非常用エレベーターで避難してください。」

「何だ今のは?」

大橋は自爆という言葉に動揺した。

「みんな!聞いてくれ!脱出するために自爆装置を作動したんだけど予想以上に早く爆発するんだ!みんなは緊急脱出エレベーターのあるB2に来てくれ!」

「B2か…チョット遠いけど行こうつと。」

「ああそうだな。」

その後のび太と大橋はエレベーター前に着いた。途中きちんと白峰と久下に合流した。

その後B2で金田を除いて全員集合した。

「無事やったか!」

「あれ?金田さんはどうしたんです?」

「実は……」

笹木は出木杉から話を聞いていたが、言いづらそうな雰囲気だったので聖奈が代わりに言った。

「金田さん……この事件の黒幕だったんです……」

「そうですね……」

翡翠は複雑な表情を浮かべた。

「ほら行くぞ……」

「早く早く……」

後ろからはゾンビが迫っていた。

「おいおい、待って……」

のび太たちは足止めをしていた。

「あーもう！急いで……」

雪香が苛立ちながらエレベーターを睨んだ。

「出木杉君……」

するとエレベーターがやってきた。

「準備完了です……みんな早く乗った乗った……」

「よし今だ……」

「早く行こうよ！」

のび太たちが全員入れるように足止めの銃撃を放った。

「くそ、動くのもちよつときついな！」

「無理はしないで！」

怪我がまだ完全に回復していない安雄を静香と晴夫が肩を貸しながら歩いた。

そして一行は何とか全員がエレベーターに乗ってB4に向かった。

「どうやら間に合いそうだね。」

そして、B4に到着して電車にのび太が乗ろうとしたら天井を突き破り金田が現れた。

爆破まで——あと45分

「ふん、そうはいかんで！」

「金田?!」

金田の後ろには50体の敵がいた。いずれもアンブレラの開発したB・O・Wで感染者とは見た目が違っていた。

「私の正体を教えてやろう。北崎は完全になるには多くの生物が必要になり全ての、生物を絶滅させる危険があると判断した。しかし、その危険性のおかげでこの事件でより多くのゾンビやB・O・Wはおろかほとんどの一般人を取り込んだのだ。」

金田の周りをコウモリが覆われると全身が黒い化け物になった。

「なんて数だ！くそ、まだ動かないのか！」

「落ち着け！弾薬はここにあった武器庫から押収してきて今これぐらいある。これでないとかするぞ！」

弾薬庫から回収した弾薬や手榴弾をのび太たちは急いで装備した。

「さてと、最後の祭りだ！派手に行くぜ！」

するとゾンビたちは列車の後方車両に迫っていた。

「奴ら、電車にも入ってくる！」

「じゃあ、中は任せて！」

「私も手伝うわ！」

ドラえもんもと静香は後方車両へ移動した。「上から行きます！笹木さん、アシストを！」

「ええ、先輩！」

翡翠と笹木は車両の反対の出口から屋根へと登った。

「んじや残った奴らで一気に行くか！」

「奴ら全員、ぶっ倒してやるで！」

「みんな、行くぞ！」

「ああ!! (ええ!!)」

「やれ! 反逆者の愚か者どもを消せ!」

50体のB・O・Wが飛び出して戦いが始まった。

のび太たちは分散して各個撃破に努めていた。青木・赤田はプラットホーム西部の守りについた。青木はゾンビを前に大橋の日本刀を構えた。

「天才の腕前を見せてやる。オラオラ!」

青木はゾンビを斬り、左手にハンドガンを持ち替えながら攻撃した。

「おっとゾンビども! こっちらもくらいな! おまけでどつかれていねや!」

赤田も後ろからマシンガンの乱射で討ち漏らしを倒していた。

「うえあああ〜!」

ゾンビたちも怒涛の攻撃に怯み出し次々と倒されていった。

「さあ、次にやられたいのから来い! なんてな!」

青木が武器を構え、笑みを浮かべた。

青木と赤田の横でジャイアン・スネ夫は電車の正面を防衛していた。

「でやああつー!」

ジャイアンはバットを腹部と頭部に直撃させた。

金田の後ろからハンターとキメラ15体が現れた。

「そりゃああああああ！」

久下はマグナムでゾンビやキメラをを一体一体倒していった。

「危ない！」

白峰がショットガンで久下の背後に立ったゾンビを攻撃した。

「助かった。しかし、ハンドガンほど早くは使えないな」

「そうですか。けどそういうボヤキは後にしてください！」

白峰がそう言いながらカラスたちを倒してた。

「くえええええ〜！」

一方、ドラえもんが静香に太郎は後方車両を切り離して先頭車に入らないように攻撃していた。

「ドラちゃん、ショットガンを！普通の武器はあんまり使えないけど慣れた道具なら：

！」

「うん！」

ドラえもんが静香にショットガンを渡し、手榴弾を太郎と共に投げた。

「わ〜！節分みたい！おにはーそと！〜ふくはーうち！」

節分の日の豆まきのような感覚で投げられた手榴弾数個で太郎はゾンビたち15

体を一気に倒した。

「ああ〜」

車両自体が炎上していた。

「何か凄い景色ね…」

静香は呆れながらもそれしか言えなかった。その後二度と入れないように車両を切り離しドラえもんたちは先頭車両に移動した。

数の上で有利だったB・O・Wは修羅場を乗り越えてきたのび太たちによりほとんどが撃破された。

「もう終わりだ！観念しろ金田！」

「もうお前を守る兵隊もおらへんで！」

青木と赤田が真っ先に金田の前に立って彼を指差したがなおも冷静だった。

「ハハハ!!やるな…だが！」

金田の合図で天井を突き破ってタイラントが現れた。

「あいつは！そんなバカな！」

「マジか？生きてんの？」

大橋とのび太が息を飲んだ。しかし、金田の命令でタイラントはその場に静止した。その間に金田は倒されたB・O・Wを取り込み始めた。のび太たちは警戒して一度人

どころに集まった。幸い金田はまだ取り込み中だったのでそういった余裕はあった。

「落ち着け！幸い敵の数は残り少ない。ここで一気にあのだけえのと金田を倒すチャンスだ！それにもう時間がない！奴らを倒したら、電車も動かせるようにしよう。それまでの間、でけえ方と金田どつちを殺る？」

のび太たちはすぐに自分がどうするか決断した。

タイラントにはのび太、ジャイアン、青木、ドラえもんの4人が、金田は晴夫、大橋、安雄にスネ夫そして大橋が迎え撃つことに、そして残ったメンバーのうち久下と笹木に赤田と太郎は電車の発射準備を、翡翠、健治、静香、白峰、咲夜は遠距離からの援護に回った。

「今更作戦会議を取っても遅い！」

一行の研究所の戦いは最終局面へ脱出できるのか！それとも…

爆破まで

残り20分

15話 決戦!!脱出の時

金田の命令でタイラントが一気に襲いかかってきた。

タイラントはのび太と大橋が戦った時と比べてその身体はわずかに白くなり、心臓は骨で覆われていた。

「さっきよりパワーアップしてる!」

のび太はハンドガンで戦っていた。ショットガンを他の人に渡してしまったのである。

「弾を爪で弾くとかチートだろ!」

青木もショットガンで攻撃したが、差ほどのダメージも与えられなかった。

「ならマグナムで!」

のび太はマグナムで応戦するが、それでもタイラントとの差が埋まらない。タイラントには命中するも大きなダメージにはなっていないからである。

「のび太くん!」

ドラえもんが空気砲を二丁にして連続射撃するが、タイラントには決定打を与えられなかった。

(いい方法はないのか? いや、あるはずだ。……そうか!)

「武! なんか派手なのは無いか?」

「あります!」

ジャイアンがロケットランチャーを見せた。

「俺にいい考えがある。そのデカイのをのび太に渡せ。あいつは見た所射撃スキルはなかなかだ。」

青木はのび太を指差した。

「分かりました。のび太! これを使え! それはここで手に入れたもんだ。」

ジャイアンはのび太にロケットランチャーを渡した。ドラえもんは動き回りながらタイラントの死角からショックガンやパワー手袋で背後を攻撃していた。

「無理だよ! 結構重いし……!」

「のび太! 男は度胸だぜ! 武! 俺たちも注意を惹きつけるぞ!」

「ええ!」

二人はなるべく注意を引きつけるうちにのび太は打つ準備をしていた。

(みんなが戦ってるんだ! 弱音なんか吐けないじゃないか!)

のび太は意を決した表情でロケットランチャーの標準合わせを行なった。さらに電車の天井に陣取った5人も各々の援護射撃でチャンスを作っていた。

青木も振り向くと大橋たちも電車に向かっていた。

「どうやら……向こうはまだみたいだな。急げよ」

のび太たちがタイラントと戦うのと同じ頃、大橋たちもまた命がけの戦いを行なっていた。

「虫ケラ共が、タイラントごとき雑魚のようなものだ。ただ図体がでかい雑魚め。」

金田はコウモリのように群れで移動した。

「このコウモリは一体？」

健治は電車の屋根に現れたコウモリを一掃するのにナイフからシヨットガンに持ち替えた。一匹一匹のコウモリは数押しなので、耐久性に優れてはいない。そのため拡散性のあるシヨットガンには弱かった。

「コウモリは大したことはねえな」

「晴夫、行くぜ！」

「ああ俺たちは狙撃して援護だ！」

晴夫と安雄2人は金田のコウモリを倒していくと金田の本体が見えた。

「金田、喰らえ！」

スネ夫はコウモリが離れた金田を銃撃した。

「ぐわあああああああ!!」

金田は銃撃され倒されたかに見えたが、すぐにコウモリが死体に集まり復活した。

「生きてる?嘘でしょ!?!確かに金田にトドメを…」

「様をつけんカー!虫ケラが!」

金田のダブルマシンガンで無防備なスネ夫は肩を擦った。そして素早く近づき苦しんでいるスネ夫を容赦なく蹴り飛ばした。そして金田は本体のまま近接攻撃で大橋たちを一気に倒してしまった。

「つよ、強すぎる…」

「こんなののために…俺たちは!」

安雄が拳を地面に叩きつけたが金田はそれを鼻で笑った。

「ふん、くだらん。安っぽい命の為に戦うなど実にくくだらん!くだらん良心に邪魔されて神になる夢を目の前にして自分から逃げ出すのだからなあ!ああいう腰抜けがバ力を見るのだ。小さい命は所詮大きい命に躡り、淘汰されるのが必然だということになあ
く」

金田は欠伸をかいいて挑発した。

「現に貴様らも同じだ。さてと、冥土の土産に教えてやろう…何故、鳥柴 亜紀が死んだと思う?」

金田が全員に突然それを訪ねた。

「何?」

「何故、彼女は殺されたか!?何故…彼女のプロジェクトが破綻したか…」

金田が冷たく笑いながら大橋たちを見た。

「そのことから導かれる結論は1つ…鳥柴亜紀の死因は事故死ではない!他殺なのだ!

そう、北崎を殺したのはこの私だ!」

「なんだって!」

その場のいた全員が衝撃を受けた。

「私は当時貴様を廃棄することには最後まで賛成だった。しかし彼女はそれを拒否して貴様を救った。もともと彼女は人体実験を嫌う奴だが、研究者としては優れていた。そこが気に入らなかつたんだ!黙って悪魔にでもなればいいものを!」

金田は歩き回りながら話していた。

「大橋裕太ア…おまえは誰かを助けるなどとはざいたが結局はあの女同様…この、私の手で踊らされた」木偶人形「なんだよ!フハハハハハ!!アーツハハハハハハ!!イヒッ!イヒッ!イヒヒヒヒヒヒヒ!!!」

「フザケンナ…」

金田の嘲笑に大橋は立ち上がり、背を向けた金田の背中を剣で突き刺した。

リ?)

「そうだ!」

「今更策を立てても無駄だ!今の貴様らに何ができる?なあにもなあーい!私の勝ちだ!」

「そうかな?喰らえ!」

大橋はショットガンで金田に連続射撃を放ったがコウモリが盾となって全くダメーシにはならなかった。

「無駄だ。効かない!効かない!無駄骨!無駄骨!お前たちの限界だ!」

「スネ夫、大丈夫か?」

「う、うん……」

晴夫はこの隙に金田の近くで倒れていたスネ夫を列車に避難させた。

「いい加減目障りだ。今度こそ消えてしまえ!鳥柴の忘れ形見め!」

金田がコウモリに分裂した。

「今だ!かかったな、アホがあ!」

大橋は閃光手榴弾を投げると2体のポスタルとコウモリが消えた。

「ぎゃあー!」

「おお、奴の弱点は光か!」

「本体もコウモリの弱点を諸に継いだみたいだな、おまけに喰らえ！」

晴夫は安雄のグレネードを借りて閃光弾を発射した。

「喰らえ！」

「ぎにやあぁー!!やめろ!神に余計なスポットライトはいらないんだ!やめろ!」

二発もグレネード閃光弾の追加攻撃を受けて、金田はポスタルのまま苦しんでいる。

ポスタルは一度光を浴びると組織が破壊されてしまうからである。金田本体もある程度の光は耐えられるが閃光手榴弾の強い光には耐えられずコウモリたちも再生機能を失ってしまうのだ。

「ッ、ッ、ッ……と……で！」

金田は這いつくばりながら逃げたが目の前を電車の屋根から咲夜が銃撃し、金田は手を撃ち抜かれた。

「ひいっ！」

「健治！」

「ああ!頼むぜ！」

健治は電車にあつたマシンガンを投げた。

「お前のようなゲスはこれから死ぬがこれでは俺自身や死んでいった人たち、生存者たちの気がすまねえ。それに閻魔様に任せられんことがある。お前の処分だ!歪んだ野

望を持った紛い物の神には死んでもらうぜ！今ここでな！」

金田にマシンガンを一〇〇発、ありとあらゆるところに穴ぼこを作り最後はゆっくり近づいて頬を思い切り殴り、安雄死力を尽くして発射した焼夷弾でフラフラ揺らめいていた肉体ごと焼き尽くした。

「てめーはこれで死んだ…」

「おめーの敗因はたった一つだ。」

健治が金田の遺体を見て背を向けた

「てめーは俺たちを怒らせた」

神になろうとした男は神でないものたちに敗れ去った。

その後全員出発できる状態になった。

「よし！出るぞー！」

「しつこいゾンビにはこれをあげます！」

「僕からも！」

翡翠と太郎は出発と同時にホームに来たゾンビを手榴弾で吹っ飛ばした。

「終わった…」

のび太たちは戦いが終わり脱力していた。

「ああ、1日がやべえな」

「小説顔負けなすごいことの連続だったな」

青木は椅子で寝そべっていた。

「でも…」

静香が不安そうな顔を浮かべた。

「僕らは帰る場所を失った」

「事の真相を話して信じてもらえるか…」

出木杉と聖奈が元来た道の方を振り返った。操縦席の久下も顔を曇らせた。

「そんなん大丈夫や！」

「赤田さんの言う通りだ！俺たちはまだ明日があるんだ！」

「へっ、そうだな」

「うんうん！」

「せっかく生き残ったんだし喜びましょう！」

「まっ、あたしたち全員生き残れたこの幸運はすごいモンだと思うわ！」

健治に太郎、咲夜に富藤も安心したような顔を浮かべたがのび太と大橋だけは難しい顔を浮かべていた。

「のび太くんは大橋くん？どうしました？」

「僕と大橋さんは決めた。」

「何を決めたののび太くん？」

ドラえもんが首をかしげると2人は全員の前に立った。

「もうやることなんて、決まってるんだろ？」

「まさか！」

「アンブレラをぶつ潰すのさ！」

「なんだって!!」

「こんなことされて黙ってられねえんだ！あいつらは野放しにはできない！」

「放っておいたら多くの人達が傷つく！」

その後のび太と大橋の決意に驚いた一行は駆らしい所に着いた。

「僕と大橋さんは行くよ。みんなは？」

全員悩んだ顔を浮かべたがドラえもんが一步進んだ。

「僕の知らない未来を元に戻すために僕も行くよ。」

「ああ！俺もだ。のび太にいいカツコさせるかっての！」

「僕も行くよ」

「やることをするわ。私だって戦う！」

「連中には落とす前つけねえとな」

「僕はみんなにただ着いて行くよ！寂しいのは嫌なんだ！」

ジャイアンたちも前に進んだ。

「アンブレラは絶対ったい！許さねえ！」

安雄と晴夫が見事にハモった。

「ダチの仇を取らねえとな」

「私も行く！」

「友達を見捨てないわ！」

「私だって！」

「お、俺もだ……」

白峰たちが次々と名乗りをあげる中、実際、久下の本心は未だに迷っていた。

（正直俺のようなただの一警官が気張つてもしょうがないがな。かと言って嫌だとか言えないし……ああもう！クソツ、終わったら給料増やしてもらおうぞ！）

「小説のいいネタになるしな。付き合うぜ！」

「俺たちでアンブレラだってぶっ倒したるで！」

「任せてください！」

「僕たち大人もいるから、君たち子供だけには背負わせない！」

「アンブレラ……必ず追い詰めてみせる！」

全員戦う覚悟を固めた。

「俺たちの戦いはこれからだ！」

「行くぜ（行きます！）」

全員は駅から出て打倒アンブレラを掲げた。彼らはチームバイオ（命名は青木）。夜明けの空の下一步を踏み出した。

第1章完

第2章 the lost city

16話 新たなる戦いへ

のび太たちはその後ススキが原から離れた埼玉のある家に住むようになった。

「ここが私たちの住むところになって数日経ちましたけど、大きいですね。」

今回彼らの家は骨川財閥の手回しがあつてこそだった。総帥曰く、アンブレラに家族を殺されたスネ夫のせめてもの力になりたいとのことだった。そして部屋には青木製の彼らチームバイオの旗が飾つてあつた。

「ただいま……」

「久下さん、どうでした?」

久下は事件の後生き残つた警官として警視庁に赴いたが、アンブレラの手回しにより動きようにも動けないことになり彼には別の所轄に移らせた上で地位を上げることで処分を免れさせ、大人しくさせようという意向に乗つた。ちなみに他のススキが原署出身もの警官も至る所に散らばつてしまつたらしい。とはいえ昇給してもらつてちよつぱり嬉しかったりする久下である。

「情報操作か! やられた!」

出木杉が唇を噛み締めた。

「アンブレラは巨大会社だから政府にもアンブレラの犬がいるんやろな。動きたくても動けないんやな。そう言うのが一番辛いわな」

すると静香とドラえもんが別の部屋から入って来た。

「ドラえもんさん！安雄君にスネ夫君はどうですか？」

聖奈がドラえもんの顔を見た。2人によると、安雄は肩の傷と金田の攻撃で、スネ夫は金田の蹴りにより体の何箇所かが骨折していた。

「今の所病院に入院させて治してるけど……全治6ヶ月かも」

「そんな……」

「あいつらは当分リタイアだな」

白峰が手をこまねいていた。

「だが、それがいい」

ジャイアンが立ち上がった。

「そうね、ここはおとなしく怪我直すこと優先ね」

雪香が水を飲み終えコップをテーブルに置いた。

「あの二人なら大丈夫だよ。強そうだし！」

太郎が静香を見つめた。

(…そうかしら?)

「いまいち2人が強いかどうか静香はピンと来ていなかった。

」にしても、その資料どうする?」

現在のび太たちはアンブレラの機密資料や映像などをいくつか手に入れている。それによれば現在、アンブレラは研究員でも戦闘訓練を行い自分たちでB・O・Wの対処を可能にすることがB・O・W開発主任の意向で研究員でもコンパクトに扱える銃パーツの開発が進んでいることが示されていた。

「念のためこいつをコピーして記者やマスコミに出そう!」

大橋が資料をテーブルに叩きつけた。

「やめたほうがいい! 圧力がかかっているに違いありません。」

「ああ、それで連中に知られる訳には…」

久下も用心深そうに資料を見つめた。

「それにしてもこれがあのB・O・Wのその映像…」

のび太が恐る恐る映像の入ったUSBを見つめた。

「じゃあ、流してくれ」

ドラえもんがUSBをパソコンに繋ぎ、スライドに移した。すると、映像から緑のTシャツと白衣に短パンを着た男が現れた。

「やあ社員諸君。私は現B・O・W開発部主任の狗波 冥月だ。まあ、君たちにはこの部によるこそとても言っておこうかな。」

「この人が、俺たちの敵か？ なんかそんなに悪人つて雰囲気かねえな」

大橋たちが陽気な狗波に不信感を抱いていた。

「早速この量産B・O・Wたちについて説明するよ。」

すると狗波は横からB・O・Wの映像を呼び出した。

「まずこの犬はケルベロスさ。小柄な体を生かして素早い、ハンドガンやショットガン系統には弱いんだな。まあ、今R市で強化型のティンダロスを開発してハンドガン系統には強くなったけど、散弾系統には少し弱くなってしまっている。」

狗波が画面を切り替えるとカメラとハンターが出て来た。

「で、次はカメラだが、ハエは仕入れるのは苦勞するからちよいと量産は難しい。とはいえ音を立てずに動くのが得意だし二本の鎌があるから、改良すれば強力になるから。ただ、ハエというより私はモデルはカマキリだと思っただけだね。次はハンターだ。これは私のお気に入りですね！」

狗波がさつきよりもテンションが高めになっていた。

「私の趣味もとい本部の意向でαタイプの他にβタイプも現在優先的製造している。これはグレネードとかマグナムといった強力な武器には弱いけどいずれパワーアップ

させてみるから。いや、させるから！このハンターはバリエーションがほかのB・O・Wよりも高いんだよね〜」

ヒートアツプしすぎたのか狗波は一呼吸ついでから話を続けた。

「で、最後は根つからのパワータイプのフローズヴィニルトだが、これはススキが原で製造したのだがあまりにも力が強すぎるんだ。まあ、パワーを下げて量産すればいいんだけどね。あともし処分したかったら頭部を狙えばいいよ。ではこれにて終了、開発頑張ってくれよ〜！明日の革命者たち！」

映像が切れた。

「なんかふざけた奴だな」

「でも、ティンダロスにβタイプってのはこれから気をつけなあかな。」

「にしてもハンターを趣味で作るのは相当マッドな奴もいたもんだな」

「同感です。こんな人がいるなんて」

静香と青木は人を傷つける兵器を面白半分て生み出そうとする狗波を恐ろしく思っていた。

「二本目はここまで。もう一本あるから二本目行くよ。」

そう言つてドラえもんはもう一本再生した。

「やあ諸君私だ、狗波だ。諸君もまあ仕事に慣れたから、ちよつとここで兵器型B・O・Wを紹介しよう。こいつらは強力なんだけど、ちゃんと扱わないと危険なため量産はほぼ無理なんだ。まあ、できないとは言つてないけどね」

そして狗波は画像を表示させた。

「まずこれはバイオゲラスでアルコールが好物だ。脳などの器官から擬態能力のある電波を発するけど連続して使えないんだね。一回使ったら次使うまでに30秒はかかるからそれよりも擬態が維持できなかった倒されたら、改良の余地ありだから。」

そして……これが現時点最強のB・O・Wタイラントだが、強すぎてねえ、まあ制御できればいいけど……とまあ、アンブレラは今これだけの種類があるんだ。君たちはこの種類をもっと増やすあるいは高性能にするため、一生懸命働いてね……それじゃグツバイク……」

「こつちは期待外れね。」

富藤ががっかりしたような動作を取った。

「で、これからどうします?」

咲夜が拳手した。

「R市にアンブレラの研究施設があるからそこに行くのは?」

「それでいいでしょう。ひとまず近場の研究所の様子だけでも探るのは賢明です。」

「とは言え、二人を守ったりもしなきゃいけないし、大勢の行動は危険だ。誰が行く？」
するとあたりが静まり返った。敵の研究施設に潜り込むとなると慎重にならなければならぬのか中々手をあげるものが出なかった。

「じゃあ、僕が行きます！」

「のび太さん！」

ジャイアンがポカンとした表情を浮かべたがへへッと笑い出した。

「静香ちゃん、俺がいるから問題ない。のび太だけにいいカツコさせねえよ!!」

ジャイアンが心配そうにのび太を見つめる静香を励ました。

「じゃあ俺も行こう。知り合いがいるんでな。」

「じゃあ、私も！」

大橋と聖奈も名乗り出た。

「ならば天才の俺も行こう！俺が入ればこいつらは生還できるさ！約束しよう！」

「じゃあそういうことでもいい？」

全員が賛成し、のび太たちは情報収集と体力トレーニングを始めた。

それから1カ月後のび太、ジャイアン、大橋、聖奈、青木の5人がR市に向かった。世間は寒くなって来ていた。

「ていうか誰か家事できんの？」

いのこりぐみのうち笹木、富藤、赤田は全然できないらしく、太郎、健治、咲夜、静香、ドラえもんは手伝いくらいは出来るらしいようで翡翠、白峰、出木杉、久下は出来るらしい。

「んじやまあええわ。テレビつけよ！」

赤田がテレビをつけた。

「全く呑気なものですね。」

翡翠がため息をつきながらスネ夫と安雄の部屋に向かった。部屋では富藤と太郎に健治が2人の看病をしていた。出木杉と久下、笹木は買物に出かけていた。

「俺たちが怪我なんかしなけりや……」

「それは違うわ。あんたたちに死んでほしくないってみんな思ってたのよ。貴重な友達だしね！」

「富藤さん……」

「そう言うことだ、さつさと寝ろ」

「なんか意外だな……スネ夫」

「確かにね。」

安雄とスネ夫が健治に対して苦笑いを浮かべた。

「なんだよ、看病とかをするなりじゃねえなとか思ってたのか？」

「思う！健治にいちちゃんはそういう…！」

「たーろー！ー！ー！うううう！！！！」

健治が鬼の形相を浮かべた。太郎は部屋を出た。

「つたく、まあそう思うのも無理ねえな。」

「え？」

「お前らも知りてえんだろ？どうして俺が金髪になったか…」

「え、ちよっ…」

健治がスネ夫と安雄を無視して語り始めた。健治の生まれた翁蛾家は由緒正しい規律を重んじる家だった。そんな光景を健治は周りしか見ないで自分たちは後回しという父と母のやり方に反発し、自ら金髪に染めたのだ。しかし、ススキが原の事件で父と母は火事で死亡し今や残ったのは健治だけだった。

「つーことだ。まあ、お前らにはあんましわかるもんじゃねえな」

「ていうか、健治。2人とも寝てるわよ」

「つたく、人の話ぐらい聞けつての！」

「ただいま〜！」

出木杉たちが帰って来ていた。

「おかえり〜！」

赤田がテレビを面白そうに見ていた。

「今日はセールだからいっぱい買って来たぞ！」

「ご馳走ですね！」

のび太たちに何が起こってるかも知らないドラえもんたちは食事をしていた。

その頃アンブレラでは、一人の男に数名の男女が殺風景な廃墟にて報告をしていた。

「で、ヤノフなんだ？」

「はい隊長。実は…本部に連絡が来ました。極秘に保管されていた研究資料が盗まれたそうです。」

あたりが緊迫した空気になった。

「!？」

「だからなんだい。そんなこと本部がどうにかするでしょ。」

「そうですよね、ハハハ…」

男はそんな話はどうでもいいのかどうかかわからないが紅茶を飲んでいる。

「しっかし、俺たちチームも大分様になったんじゃないか？」

ハチマキをした青年が声をかけて来た。

「優秀な若手チームだからね。USSのやつにも負けないんじゃない？」

「まあ、この世界では生き残れないやつだっている。俺たちは生き残ってしまったからこそしぶとく生きてねえといけねえんだ。」

「つたく、紅茶飲みながらよくそんな呑気なこと言えるね〜！」

彼らこそアンブレラの特殊部隊UBCS

いずれのび太たちと戦う日は来るのだろうか？

第2章 the lost city 設定

第2章 the lost city 設定

チームバイオ

のび太

大橋と共に合流して事件に巻き込まれる。

大橋

無理ないの聖奈ポジションになるため大幅パワーアップ

ジャイアン

のび太たちと最初行動していたが逸れたため別行動を取っている。

聖奈

ただ一人逸れながらも武器一つでなんとか逃げ延びてのび太と大橋に合流

青木

逸れるが、天才だ天才だ言いながらなんやかんや生き残るチームバイオの命名者

無理ないバイオ登場キャラ

大鷹(31)

イメージCV藤原啓治

自衛隊リーダーで実は鉄オタ

榛名陸佐 (29)

イメージCV磯部弘

大鷹たちの中で一番偉い。のび太たちといち早く合流し脱出を目指す。責任感が強くリーダーシップが強い

浪波 (29)

イメージCV千葉一伸

機械担当で若干チャライ

塩田 晴海 (16)

イメージCV三森すずこ

シーブルー

大橋と同じ孤児院出身——優しい性格なので友人が多いが今回の事件でそのうちのほとんどを失い、パニックを起こして逃げているところで窮地だった大橋たちと合流するある意味今作最大のキャラ変更

増山敏朗 (60)

イメージCV藤本たかひろ

テレビ局の警備員で定年間近、ジャイアンを一目見て見ていい名前だと言って浮かべる。笑顔は癒し系

酒田ⅡF フィーン（20）

イメージCV根本幸多

生存者しかし銃器の扱いがなぜかうまい長髪の軍人

今章の特徴

— ススキが原の4ヶ月後が舞台

— 今回のび太を入れた5名以外は安雄とスネ夫の看病およびアンブレラの監視に当たるため待機

— 新システムの開発に成功（後述）

— のび太たちは各自、武器にハンドガンとナイフを所持しているがジャイアンはその二つに加えてショットガンも所持

— 参考作品は無理ないⅡと無理ないⅤ ジャイアンテレビ局というように完全に無理のないバイオシナリオになる。そのため一章よりも他の改造版作品との混合は少なめになっている。

新システム

ブレイクトリガー

アンブレラの研究所にあった改造パーツを使って強化した。その威力はハンドガンを一時的にその威力を向上させるが1発撃つたら10分は使えない。多彩な能力を持つが考案者の狗波曰く、様々な能力の中にはB・O・W処理の条件をすぐに満たすことができ、余計な人件費もかからなくなるため研究に費用を集中させられるかららしい。

しかし、それだけでも非弱な研究員でも軍人を射殺することは十分に可能である。銃の横の部分に専用の音声認識プログラムが含まれているがこれは弾込めができない時、トリガーと言うだけですぐに攻撃に移すためである。

第17話 悪夢再来

ススキが原のバイオハザードから4ヶ月後、のび太、大橋、聖奈、青木、ジャイアンはアンブレラを追ってR市に向かった。他のチームバイオのメンバーは全治6か月の安雄とスネ夫の看病をしている。そして、到着して2日後にあの忌まわしい悪夢が再来した。突如としてR市の人々が暴徒化し次々と人々を襲い始めたのだ。

「ちいっ!」

「大橋さん、こっちです!」

のび太たちはゾンビたちから逃げていた。

「サンキュー!」

のび太たちはある程度ゾンビから逃げてきて近くにあつた廃工場に着いた。廃工場には多数の人が避難していた。10分後、廃工場はすでにパニックを起こした人や怪我で痛みを訴える人で溢れていた。今の現状はと警官が言おうとしたら、中年が怒鳴りつけた。

「ふざけたこと言うな!もうわかっているはずだ!最悪以外何者でもない!それくらいわかるだろ!」

大橋はジツとしていたがこの最悪の状況になったため、もはや動くしかなないと察した。

「のび太、行くぞ！」

「はい！」

やる気満々の二人を警官が止めた。

「待て君達！外は危険だ！」

「大丈夫です。こういつたことを一度経験してるので……」

「……これを持って行きなさい。なるべく使うなよ」

警官はハンドガンと弾のホルダーを3つ渡した。

「いいか、絶対に無茶するなよ！危なくなったらすぐ戻れ！」

「はい！」

二人は廃工場から出た。

街一体が火の海に覆われている中、至る所から響く悲鳴の中、2人は近くの通りをしばらく歩くと遠くで聖奈が逃げているのが分かった。

「くっ！はあ！はあ！来ないで！」

「聖奈さん！」

「追われてるみたいだ！」

のび太はゾンビの頭目掛けて発砲し、ゾンビは弾丸が頭に命中しその場に倒れた。

「のび太君、大橋さん！」

「無事だったな。にしてもこれは…」

「あの悪夢の続きですね。」

3人は顔を曇らせた。数日前から街に入った5人はアンブレラの研究所に忍び込む策を取っていたが、突然としてススキが原よりも規模の大きいバイオテロが始まってしまったのだ。危機を察していち早く脱出あるいは早くから警察による誘導に従い、生き残った人間やわずかに残された人々のゾンビに対する恐怖は尋常ではなかった。しかもR市はススキが原よりも広く、被害も大きくなるという想像は容易だった。

「さて、どうします?」

「そうだ!この先にある警察署に弾丸があるからおそらくそれでどうにかなるかも。あの時と同じかどうかはわからないけど、もし無線があつて外部に連絡できれば廃工場の人たちも脱出できるはずですよ。あとこれをどうぞ。」

のび太が通りの先を指差した。

「なるほど、では私も一緒に行きましょう。それと、拾い物ですが2人にはこれを。」

聖奈は二人に道中にあつたハーブを渡し、炎上する街とゾンビを掻い潜りながら3人は警察署に着いた。

「つきましたね。ここなら人も…」

「ぐおおおおおおお!!!」

するとクリーム色をした犬型のB・O・Wが雄叫びを挙げ3人の後ろに現れた。

「!?あれは一体?」

「見たことないってことは…新手的B・O・Wか!」

B・O・Wは聖奈を攻撃しようと走り出した。

「この—」

ハンドガンを構えた聖奈は素早く2、3発撃った。聖奈はこの日のためにエアガンの射撃の練習をしたのだ。しかし謎のB・O・Wはひらりとかわし聖奈に噛みつこうとした。

「嘘!?かわした?」

聖奈はとつきにかわしながら言った。

「弾丸なのにな?信じられない!」

のび太たちは今まで弾丸をひらりと躲す敵と全く遭遇したことがなかったので動揺を露わにした。

「喰らえ!」

のび太の攻撃もB・O・Wにかわされた。

「そんな！全く通じないなんて！」

そんな中大橋は冷や汗をかいた。

「だとしたら、間違いない！狗波 冥月のレポートに乗っていた、ティンダロスだ！もう完成していたのか！どうすれば!？」

アンブレラB・O・W開発主任である狗波 冥月はティンダロスを完成させたというレポートを知ってはいしたが、今の犬橋たちにはショットガン所持しているジャイアンがいないため絶対絶命である。

「こんな時ジャイアンがいたら！」

今現在、ジャイアンと青木、2人との連絡が取れない状況下にあるび太たちは戦力面に置いて二分されてしまっている。それでも必死にのび太たちは攻撃を続けるがティンダロスに全くダメージを与えられないまま、のび太に迫った。

「のび太（さん）!!」

「しまっー！」

すると後ろからショットガンで何者かが攻撃し、ティンダロスがそれに驚き撤退した。

犬橋たちが振り返ると、そこにはセーターを着た青髪の少女がショットガンを構えていた。

「大丈夫？ 怪我はない？」

「大丈夫です。ありがとうございます」

のび太が立ち上がってお礼を言った。

「よかった。これ以上自分の周りで人は死んでほしくなかったの。」

「あなたは？」

「私は塩田 晴海、よろしく。」

「晴海？ 俺だ！ 大橋だ！」

「え、大橋！？ こんなところに来てどうしたの？」

のび太達は何が何だかよくわかってなかった。ひとまず現地で知り合った塩田たち

とともに3人は警察署に入った。

第18話 襲撃ティンダロス

ティンダロスを退けた大橋たちはその後警察署内に入った。

「久しぶりだな、晴海。」

「あれ？お父さんは？」

「ああ、どうやら東京とは離れたとこにいるらしい。施設もそこに移ったそうだ。」

「大橋さんの言ってた知り合いって？」

「ああ、こいつだ。」

大橋はあの事件でアンブレラは街一つ破壊するのを厭わないことを実感し、R市に向かった理由は幼馴染みの晴海を助けに行つて父親に避難させるのも含めての個人的な目的だったのだ。

「ていうかなんで来たの？それにその子たちは一体？施設の新しい子たち？」

大橋は4ヶ月前と現在の事情を説明した。

「つてわけだ。」

晴海は顔を真っ青にした。

「こうなったのも全部アンブレラの仕業ってこと？」

「そうですね。」

晴海はそんな……と言いながら落ち込んでいた。

「なんでショットガンを持つてるんです？」

「ああ、ここにいた警官が発狂して人を手当たり次第皆殺ししてる時にゾンビに殺されちゃったの。その時逃げようとして咄嗟に持ってきた……ほんとにひどい人だったわ。そのついでにさつき廃工場に行ったんだけど……みんな死んでたわよ」

「なっ……！」

のび太と大橋がハッと息を飲んだ。晴海によると廃工場の人はほとんどゾンビ化し警官に射殺され、生き残った人はパニックで自殺したそうだ。

「そうですか……」

「また、助けられなかったのか……！」

大橋もそうかと呟き唇を噛み締めていた。すると外から、さつきの化け物の雄叫びが聞こえた。

「どああああああああ!!」

「また来たのか! 迎え撃つぜ! 中に入られちゃ他の生存者が危険だ!」

大橋たちは表に出てティンダロスを輪のように囲んだ。

「喰らえ!」

大橋とのび太はティンダロスの視界に入らないところから撃つたが、それすら避けられた。

「くっ、この！」

晴海がショットガンを構えた大橋は何か気付いた。

「よせ！」

銃からカチカチツという音がなった。

「弾切れ？」

ティンダロスが弾切れで右往左往していた晴海に飛びかかってきた。

「晴海！危ない！」

晴海を押しのけた大橋の肩がティンダロスに噛みつかれた。

「がああああああッー！！！！」

「大橋さん！喰らいなさい！」

聖奈のハンドガンの銃撃は大橋に食らいついたまま離さないティンダロスの腹部に直撃した。

「逃げたか……」

「大丈夫？私の所為で……」

大橋を助け起こし、晴海は彼の肩を貸した。

「大丈夫だ。問題ない」

警察署に入り、近くの部屋に入ろうとするとドアが開いた。

「誰だ!」

大橋は怪我をしている身でありながら、銃を構えた。しかし、痛みで銃を落としてしまった。その男は深緑の軍服を着ていた。

「落ち着け、私は榛名陸曹だ!君達を助けに来た。」

「自衛隊の方ですか?」

今回の大規模な事件に伴い、自衛隊も大部分が出動したものの未曾有の事件を前に次々と殉職するものも出ていた。

「なんでここに?」

「今私たちは保護した人と電車で脱出しようとしているから、君達も来てくれ!ここはもう危険だ!付いてくるんだ!」

「はい!!」

榛名の誘導でのび太たちは彼に付いて行くことにした。榛名によると駅からなら脱出できると知り、彼が近くの建物に避難している生存者を探索していたようだ。駅に着くと目の前にハンターが3体現れた。

「あれは、ハンター!こんな所にまで!」

のび太たちが武器を構えたがハンターを攻撃するのを榛名が制止した。

「私がやろう。君たちばかり戦わせるわけにはいかん！大人としてな。」

榛名はマシンガンでハンターを撃った後に、前方にジャンプしハンターに頭上めがけて素早く手榴弾を投げて倒した。ハンターは手榴弾で爆死した。

「よし行くうー！」

その後5人は車内に入った。

「おお、お前らか！無事だったみたいだな」

青木が電車の椅子から立ち上がった。

「青木さん、知り合いか？」

自衛隊の隊員が作業を中断した。

「青木さん！」

「青木さんってまさかあの天才小説家の青木優作!？」

「そうだ。まさか俺のファンか？照れるな」

「まあ、んな話は後にしようぜ。行くぜ！」

大鷹の操作で電車が走り出した。のび太たちは榛名陸曹の言っていた電車により無事脱出したかに思えた。しかし、動き出した電車にも影は迫っていた。

「俺は大鷹でそっちは浪波だ。よろしく頼む。」

と大鷹は結構呑気して自己紹介していた。

「こいつは！おのれええええええ!!」

その時、後部車両ではティンダロスが近くにいた榛名と交戦していた音が先頭車両に聞こえた。

「また、あいつか！榛名陸佐を助けに行かねえと！ぐっ……」

大橋は負傷したまま榛名陸佐の援護に向かった。すると青木が大橋に肩を貸した。

「お前は傷がヤバイだろ。俺も行くぜ。死に急いじやいかんぜ、つてな。手負いのお前は俺がサポートする！」

「外からもゾンビが！ 僕がゾンビを倒しに行きます！」

「気をつけて！」

3人が後部車両に入った。

「お来たか。では行くぞ。」

「オラア！」

「久しぶりの戦闘だし遠慮なく生かしてもらおうかね。聞けば弾丸をかわすらしいのだが、」

青木はハンドガンを二丁構え、ティンダロスに撃つといつも通り避けられたがすぐにリロードし、避けたティンダロスの動くを見逃さずそのまま懐にもう一発撃った。

「思った通りだ。お前は弾丸を避けるようだが、必ずどこかで静止する。そのタイミングがだいたいわかれば撃ち抜くのは容易いぜ！」

ティンダロスは静止したと同時に銃弾で体勢を崩した。

「そうか、奴は連続して避けられないのか！これな r…」

しかし、大橋は一発撃つと傷が痛み出した。

「うううう!!うわあああああ!!」

「だから無理すんなって言ったのに！」

「まずい！早く助けに行かないと！」

のび太はそう言ってるもののゾンビが多く、助けに行けない状態だった。ティンダロスが大橋に飛びかかってきた。

「危ない！」

榛名は大橋を庇い首筋を噛まれた。

「つぐつ！この距離なら避けられないな！」

榛名は痛みを堪えながら、とにかくマシンガンを撃ちまくった。ティンダロスは動けない上に大量の弾丸を浴びたため、その場から離れグルグルと睨みながら様子を見ていた。

「大橋、ここは逃げるぞ！」

すると榛名はのび太、大橋、青木の3人を前の車両に投げ出した。

「おい！榛名陸佐、あんた逃げなくていいのか？」

「君たちは行け。私はすでにゾンビに噛まれた人の末路を知っている。それに若い命は散ってはいけない。君たちが生き残るんだ。」

「…分かった。」

「青木さん！」

聖奈が青木に詰め寄ったが、青木は拳を握りながら悔しそうな顔を浮かべていた。

「青木さん…」

「じゃあな、死ぬなよ」

榛名は近くにあったガソリンを体にかけた。

「おいおい、待ってくれよ！」

「ちくしょう。さつき終わったらうまい店紹介するって言ったのに…」

浪波と大鷹が狼狽えた。

（死亡フラグだろそれ…）

榛名は切り離しボタンを押して、自らの乗った車両を脱線させた。その後脱線した車輻がが転倒し炎上したのを一行は見届けた。

「榛名さん…！俺は、また…クソ!!」

大橋は床を叩いた。すると電車が揺れた。

「うわー!」

「どうした?」

ゾンビの死体が電車の線路の周りに散らばっているため、脱線寸前だった。

「嘘!まさか、脱線~~~~!!」

その後電車は脱線し転倒したため軽い爆発が起こった。榛名の健闘虚しくのび太たちの脱出は失敗してしまった。

第19話 大橋を救え!新たなる力

電車が脱線したが爆発寸前でのび太たちはいち早く脱出した。一行はやがて時計塔に避難した。

時計塔——R市では正午と夕方6時の鐘が鳴るのみで近くには図書館などと言った公共施設も多い場所だった。しかし、今となってはそこはほとんどゾンビやB・O・Wであふれていた。

「みんな大丈夫ですか?」

「ああ…大丈夫だ」

大橋がなんとか立ち上がった。

「危ねえ〜!つたく、死ぬかと思つたぜ〜!

ていうかお嬢ちゃん、悪いけど俺の上に乗ってんだけど…」

青木が晴海のクッションになっていた。青木自体は特に辛そうでもなかったが動けなかった。

「あつ、すいません!」

晴海はすぐに青木を助け起こした。

「そうだ！聖奈ちゃんは!？」

「大丈夫です。」

「くっ、最悪だ！キメラがいる!？」

目の前にB・O・Wのキメラが現れた。

「奴らが寄つてきてるんだ！早く行かねえと!？」

青木がハンドガンを構えたが大鷹が制止した。

「ここは俺が…大橋を連れて中に行け！すぐにこいつは片付ける!？」

大鷹はそう言うのとショットガンでキメラを攻撃し、飛びかかるのを見ると咄嗟に左側に移動し、横から胴体部を撃った。

「大人をなめんなよ！このハエが！こっちは仲間が死んでムシャクシャしてるんだ

!？」

「大鷹さん…」

「おーい!？」

一行は浪波と合流した。

「大橋、大丈夫?？」

晴海が苦しそうな表情を浮かべている大橋に声をかけた。

「ああ…なんか、身体中痒いんだ…」

そういうと急に大橋が倒れてしまった。

「大丈夫ですか?大橋さん!」

浪波が大橋の額に手を当てた。

「すごい熱だ! さつきまでピンピンしてたのにどうして…?」

浪波にだけ目つきの変わった大橋が一瞬だけ見えた。

(?今一瞬、ゾンビに見えたような… まさかな…)

のび太、聖奈、青木は大橋の言葉に対してどこか引つかかっていた。

(痒い? それってどこかで…)

(まさか!)

大橋以外の3人は唐突に倒れた大橋を見て一抹の不安を抱いた。

(それに熱っておいおいそれってあの!このままじゃ大橋の奴がゾンビ化するのか!)

3人は動揺していた。

「3人とも、何をそんなに動揺してるの?」

ただ1人知らない晴海には3人が突然焦り出したようにも見えていた。

「実は…」

3人はススキが原事件の時に見つけたある資料と大橋について話した。

「ゾンビ化!」

「といってもその被害者は確か何日もかかっているし大橋さんはウイルスに適合してるはず…そんな急には…」

「狼狽えた晴海を必死に聖奈がフォローした。」

「あれだよ、あれ！」

青木は何か言いたいようなそぶりを見せた。

「あいつはアンブレラの完全適合者だったのは事実だ。けど、さっきの犬に噛まれた時に奴のTウイルスが大橋の体内に入って体に入れる許容量を超えてるんだろう。いくら適合しようが、肉体の許容量をオーバーすれば簡単に感染するんだろうな。」

「じゃあ、どうすれば…」

「落ち込む晴海を青木が慰めた。」

「大丈夫だ。時間的にまだそうならんから、このあたりを探してみよう。大鷹さん、このあたりを見回ってくる！こいつらは俺がなんとかしとくから。」

「ああ、そうか。気をつけてな。」

「全員は一室を出た。」

「ここは二手に分かれるか」

「じゃあ、聖奈ちゃんと私は行きます。」

「よろしく願います、晴海さん」

青木・のび太班は時計台の建物の探索を行っていた。

「しつこいなあ〜!」

そう言いながらゾンビの頭部を撃っている

「全くだ。」

「青木さん、それは?」

青木は見たことのないパーツで強化されたハンドガンを持っていた。

「へへッ、お試しにはちょうどいいか。さっきの戦いは急いでたから別のだが満を辞してのご登場だ!」

のび太と聖奈の分は改造する前にR市に向かっていたので改造していなかったのだ。

「実はススキが原の研究所にあった改造パーツを使ったハンドガンさ。又の名をブレイクトリガー。アンブレラの狗波のやつが研究所に支給してたのを剛田と骨川が回収してたんだ。さてと、未来の技術を持ったドラえもんは今を生きる天才とその仲間たちが作った改造ハンドガンの性能を…」

と言いながらハンターを攻撃した。

「見せてあげようじゃないか！トリガー！」

〈ブレイク！クリティカルショット〉

青木のトリガーの音声でブレイクトリガーが起動した。そして強化ハンドガンの引き金を引き、一撃でハンターを倒した。

「すごい威力だ！」

「まあ、ちよつと改造はめんどろだつたんだがな。」

青木が説明しながら歩き出した。

「ちなみにこのトリガーはブレイクトリガーという名前なんだがだが、1発撃つたら10分は使えないんだ。ちなみ命名したのはこの俺だ。いいだろう？」

「先、進みましょう？」

「おう……」

（なんだよ、冷たいな。）

のび太は青木をスルーしてしばらく歩くと大広間に出た。そこには浪波がいた。

「おう、坊主見ろ！」

そこには、Tウイルスについてのワクチン生成方法が書かれた本が置いてあった。しかしそこにはアンブレラという記載があった。

「俺は一旦大鷹の所に戻るぜ。このことだけは伝えとかねえと！」

「えっ、ちよつと!」

のび太の話を聞かずに浪波は去った。

「話を聞いてんのか聞いてないのか…やれやれ」

資料にはTウイルスのワクチン生成の仕方が書かれていた。しかし、青木やのび太たちでは病院を探すのに時間がかかるので、のび太はこのことを近くを探索中の聖奈・晴海班に伝えた。

一方、聖奈・晴海班は周辺の病院に潜り込もうと行動していた。二人は病院外の探索を続けていたが、ほとんどゾンビが徘徊していたためダクトから入り込んで侵入した。

そして休憩中に入った部屋で青木の連絡を受け、病院の探索を始めた。

「奇跡的に着けましたね。」

「まさか、病院にあるとはね。ゾンビに見つからなくて良かったわ」

病院は正面入り口が封鎖されており、二人はナイフなどで開いていた窓を開け、外や病院の中のダクトを行き来しながら、のび太の言っていたワクチン生成所がある地下へと向かった。

「ありがとうございましたね。」

「でも、少し時間がかかるみたい。」

晴海はワクチン生成の棚からワクチン生成に必要な材料を瓶の中に入れて待つていた。その時、ハンターがドアを破って現れた。しかし、目は少し潰れカエルのような姿をしていた。

「ハンター!?!」

「あなたはこれから目を離さないで、ここは私が!」

晴海は大橋のハンドガンを使い2挺で戦った。

「かかってらしゃい!」

晴海は正確に頭部めがけて打ち抜き、後方に下がった。しかし、ハンターもいつまでも攻撃を受けずに次第に攻撃をかわし始めた。

「かかった!、そこね!」

避けた所でハンターが静止すると晴海はすかさず打ち抜いた。するとハンターの動きが鈍くなった。もともと大したスピードでもないハンターがさらに遅くなったのだからもはや勝負は見えた。

「青木さんの戦法結構使えるわ! トドメ受けなさい!」

晴海の一撃でハンターはその場に倒れた。そして音がなつて機械からワクチンが出てきた。

「出来ました! 急ぎましょう!」

二人はハンターを掻い潜り、部屋に鍵を掛けた。その後ダクトを經由し病院から脱出し、急いで時計塔に向かった。

時計塔に大鷹がいた。大橋の息はかなり荒くなっていた。

「それがワクチンか!」

「よし、打つぜ!おい暴れるな!」

浪波が大橋にワクチンを打った瞬間、苦しみながら大橋は暴れ始めた。

「大橋耐えろ!」

青木は軽く頬を殴られた。

「いってえ…」

「大橋!」

「大橋さん!」

「しっかりしてください!あの時の決意を果たすんでしよう!?!だったらこんなところで終わらないで!」

三人が必死に押さえつけた。そして、数分後落ち着いた大橋は目を覚ました。その目の色は青く、わずかに痩せた体型になった。

「大橋…?」

「俺は今まで、何かに恐怖していたけどもう怖くない。」

その時ドアを破って再びティンダロスが現れた。

「だああああああ!!!」

「こんな時に!」

「ちようどいい、てめーをぶちのめしたかったんだ。」

大橋は治ったばかりなのでナイフを構え、応戦した。

「無茶すんな、大橋。んでもって強化ハンドガンをなめんなよ!」

青木がハンドガンを構えた。すると大橋はいきなり走り出し、超スピードでティンダロスの前に現れた。

「速い!」

そしてティンダロスの肉体にナイフで大きな傷をつけた。ティンダロスは避けられずにそのまま攻撃を受けた。

「しかも、パワーアップしている!」

ティンダロスは形勢が不利と察すると撤退した。

「これが、俺の力…これならみんなを守れる。みんなありがとう!」

「お安いご用です!」

「大事な仲間なんだよ。お前は!」

のび太と青木が大橋と握手を交わした。今の大橋の顔は新たな力に対する不安より

喜びの色が濃かった。外はとつくに夜空になっていたが、今は雲ひとつなく月がはつきりに見えるくらい明るくなっていた。

20話 テレビ局のラビリンス

ジャイアンのはび太達と分かれて青木と共にR市においてアンブレラを追っていた。しかし、突如発生したバイオテロを前に青木とはぐれ、単身ゾンビと戦いながら逃亡を続けていた。

（しかし、またあいつらに会うとは…）

「闘ったってキリがねえ！ こうなったら、ここに逃げよう。」

ジャイアンは近くのテレビ局に避難した。

しばらく1、2階を探索していたがどこもかしこもゾンビもしくは死体だらけで、3階で何者かにジャイアンはいきなり声をかけられた。

「おい坊主！」

「誰だ！」

ジャイアンが声の主を指差した。

「私は増山 敏朗でこの警備員だ。ここでうろつくのは危険だ。私のところに来い。」

ジャイアンは増山に連れられ5階の監視室に入った。そこには青木と同じくらいの年齢の軽武装した男が警戒して武器を構えた。

「生存者だ。うろついてたので保護した。」

「やあ、私は酒田ⅡFフイーンだ。酒田でいい。」

酒田は武器を下ろしてジャイアンと握手を交わした。

「俺は剛田武！みんなから、ジャイアンって言われる。」

「ほうほう、名前に恥じないくらいの体格だ。」

増山は感心したかのようにジャイアンを見つめた。

「ああ、まったくその通りだ。素晴らしい肉体だ。名前負けしていないな。」

増山がはははと笑い出した。

「んで、どうする。ここにいつまでも籠るわけにも行かねえだろう？」

「モニターから見えたんだが、ここには多くの軍人の死体が転がってるんだが、そこには武器とかいろいろある。だからワシらはこれをいただいてどうにか持ちこたえてる。」

「私はこのマシンガンとマグナムがあるから受け取ってくれ。」

ジャイアンは今ショットガン、マグナムと持っていていかにも攻撃的な装備をしている。

「もうじき避難のためのヘリが来るはずなんだが…？ツ！」

モニターを調べていた増山が青ざめていた。

「おいまずいぞー！エントランスに20くらいゾンビが迫ってる！ドアを突き破って

入って来た！五分も持たない内にここに到達する！」

「私と武君がやろう。あなたはここから私達を見ていてくれ。いざという時に連絡して指示を出せる人は必要だ。」

「ああ、行くぜ。」

「お前たち死ぬなよ！」

2人は部屋から出て3階で迎え撃った。敵はさつきジャイアンを追跡していたゾンビだった。

「さつきのか…俺が相手だ！」

ジャイアンのハンドガンやショットガンはススキが原のアンブレラの施設で拾った改造パーツで射程距離及び威力が数倍に跳ね上がっており、もはや20体のゾンビなど相手として不足で、ブレイクトリガーを使うまでもなかった。一方の酒田も軍人とあつてかゾンビを楽々と撃破していった。

（あの人…一体何もんなんだ!?!）

ジャイアンは酒田の戦い方に疑問を持ちつつも、ゾンビを全て倒した。

「やるな！いくらか弾の節約になった！すまない！」

2人は増山の元に戻った。

「おお早いな！」

「まあ、前にも経験してな。」

「…詳しく聞かせてくれ…」

ジャイアンはその時ススキが原と自分になら起こったことを話した。もちろんアンブレラのことだ。

「何?! アンブレラがそんなことを?」

「なんで知ってたんだ? あんたまさか…?」

「アンブレラの軍人ということか!」

「そうだ。しかしまさか君だったのか。今アンブレラでは数ヶ月前に研究所を爆破させた一派の指名手配を行なっていたんだ。しかし顔が分からないので本格的には調査ができなかったんだ。とはいえ、よもやアンブレラがそんなことをしたとは思わなんだ。アンブレラは私たちに市民救出を目的で私たちを雇ったのだ。なのに…!」

酒田は元々アンブレラの実態を知らない上に生活援助を受けていて、ジャイアンの話にショックを受けた。

「あんたはいい奴だな。あの樹咲って人だつてアンブレラに魂を売ったやつならなら指名手配されてる俺たちに協力しないしすぐに殺そうとするはずだ。なのに生かしといてくれるなんてな。」

酒田はジャイアンの言葉を受け笑顔を浮かべた。

「そうか……」

酒田は目をつぶって深呼吸した。

「では私は今からアンブレラに反旗を翻してやる。私はアンブレラは正義だと思ったのだ。しかし今回の事件を起こし、多くの一般人や仲間を奪ったとあつてはもはや許せん。これでは操り人形のようなものだしな。きつと奴らは私も捨て石としかみなしてないだろうな。生活援助も不満を抱かせず足元で監視するための体裁に過ぎないだろうな。」

「じゃあこれが終わって脱出したら俺たちの所に来てください。」

「ああ！そうしよう！」

ジャイアンと酒田の様子を見た増山はふふふと笑った。

「終わったらか…… 私は終わったら家族に会うぞ。それに好物のピザも食べるぞ。喉が渴いたろう？じゃあ、ちよつと水を飲んでくるついでに飲み物を買ってくる。」

「ああ、気をつけて。」

「ああ」

増山は部屋を満面の笑みを浮かべ立ち去った。しかしこの後起こることをジャイアンはまだ知る由もなかった。

21話 悲しみから…

増山が去ってから10分が経とうとしていた。ジャイアンと酒田は戻らない増山に對して不安を抱いていた。

「少し遅いな…武くん、見てくるか？」

「ああ、もしかしたらつてこともありません。いくら水飲むって言うてんのにこんな時間がかからねえと思います。」

2人は部屋を出ると銃声が響いた。

「いまのは!？」

「間違いない!増山さんだ!急ぐぞ！」

2人は急いで増山を探した。そして、水飲み場に来ると数体のゾンビが増山と戦っていたように見えたが増山は涙目になっていた。

「やめろ…くるな。くるなああああああああああああ
!!!!!!」

増山がゾンビを撃ち殺すと死体を前に泣き崩れた。

「なぜだ、なぜこんな…下畑…」

「増山さん!?これは一体?」

増山は目の前でゾンビになったとはいえ面識があった同僚を撃つことに絶望していた。ジャイアンたちが遠くからその様子を見ていた。すると増山の近くの窓を突き破って、一体のハンターが現れた。

「は、はは……もう……私は死にたい……」

恐怖で腰が震えてしまった増山は腰を抜かしてしまった。

「何言ってるんだ！生きるんだよ！」

「そうだ！逃げろ！」

ジャイアンたちが走り出すも、それより早くハンターは走り出していた。

「君たちか……すまない……」

増山はそう言うのとジャイアンたちに薄つすらと笑みを浮かべたらハンターに問答無用で首を跳ね飛ばされた。その時増山の近くにいたハンターが消し飛び、増山の体も木っ砕け散った。

「増山……さん？なんでだよ？」

「予め自分が死ぬときにゾンビにならないよう増山は手榴弾を腹に巻いていたようだ。遺体も残らず木っ端微塵だ。」

酒田も拳を握って唇を噛み締めた。しかし、さらにハンターやゾンビたちが音を聞きつけて2人の前に立ちはだかった。

「貴様らあ！ここで生かしては返さんぞ！」

「うわあああああ!!!」

ジャイアンがショットガンでハンターやゾンビを撃ち抜いた。ジャイアンに酒田も怒りのままにハンドガンでハンターを攻撃した。ジャイアンも冷静さを欠いたままだったが武器の性能で敵を難なく撃破した。

「もう終わりか!?!増山さんを奪った責任を取りやがれ!あの人には孫がいるんだよ!そいつを泣かせやがって!許さねえ!」

すると近くにあつた鉄パイプでハンターの死体が醜く潰れるほど殴った。

「はあ、はあ、くそ!くそ!くそ!くそ!こいつ!こいつ!こいつ!くそ!くそ!くそ!」

ジャイアンは息を切らしていた。

「武くん…」

心配そうに話しかけようとした酒田だったが、その時ジャイアンの後ろからティンダロスが現れた。

「危ない!」

「しまつ…」

ティンダロスの攻撃は酒田によって防がれたが、首の皮膚を抉り取られ、壁に激突した。

「ぐはっ……!!」

「酒田さん! チクシヨ!! 俺は誰も守れねえのか! てめーはぶっ殺してやる! 今ここで!」

ジャイアンは怒りに任せてショットガンである程度攻撃した。しかし、ティンダロスには完全に命中するわけでもなくかわされた。さらに噛み付いてきたティンダロスの口をジャイアンは鉄パイプで押さえつけ、足元に叩きつけ、折れた鉄パイプで何度も殴打し野球のバットの要領でティンダロスに追い打ちを仕掛けた。するとティンダロスはにげ出して、ジャイアンは酒田に近寄ったがすでに酒田は絶命していた。酒田は頸動脈をやられていたのだ。

「チクシヨー!!!」

ジャイアンは誰かを守れなかった己への怒りで床を叩いた。

「行こう…俺は生き残るんだ。悲しみで泣いてる場合じゃあないんだ。あの2人のためにもあいつらのためにも……」

その後ジャイアンは大粒の涙を流しながら屋上に着いた。しかし後ろからハンターの大群が現れた。

「ハンター……ここまで来て……だが死なねえ! 今死んだらあの人たちに顔向けできねえ! 来い!」

ジャイアンは敵を前にここで拾った2挺マグナムで応戦した。

「これは、いける！2挺にしただけでショットガンとは比べ物にならないくらいだ！ここで一気に行くぜ！」

ジャイアンはわずか3分でハンターを全滅させた。

「よし、これで脱出できる！おーい待つてくれー！かあちゃんの所に行くのは早過ぎるんだよー！」

たまたま近くを通っていたヘリに向かって手を振るとヘリからのび太が顔を出してきた。

「ジャイアン！」

「心の友よー！」

ジャイアンは涙を流してヘリに乗った。

（こうして俺は無事R市を脱出した。しかし、俺はアンブレラと戦う。あの二人のために…）

ジャイアンはR市を振り向きながら涙を流したがすぐに泣くのをやめた。ジャイアンは一つの決意を新たに固め脱出した。それこそが失った尊い二名の魂の安らぎとなるのだから…

22話 最悪作戦

「にしても随分と身体感覚が変わったみたいだな〜」

無事完治した大橋の前にのび太たちは安堵の表情を浮かべた。

「ああ、高速で動いてるみたいだったぜ。」

「でも見た目は変わらないじゃん！大して変わらなくて良かったわ！」

「んじや、ここであればらになるうか。ここは広いから分かれて探せば効率的だ。」

のび太 ・ 晴海の2人は屋敷の2階を担当していた。

「それにしても、ゾンビたちの数もだいぶ減ってきたわね。そのおかげでスムーズに探索できるわ。」

「とはいえ、まだ気は抜けませんよ。」

のび太はゾンビに遭遇した。

「もうお前たちじゃ役不足なんだよ！」

そう言うとのび太はハンドガンでゾンビの頭を正確に打ち抜いた。

「だから言ったろ。役不足だって」

「あなたの戦闘銃の使い方ってすごいわね。私なんてなんてまだ慣れてないわ。まあ、

慣れないのが普通か……」

今度はケルベロスが三体現れた。

「またかこいつか！」

「のび太くん！一気に行くわよ！」

「はい！」

晴海がショットガンでケルベロスの足を撃ち、のび太がハンドガンでもう一発の二段銃撃でケルベロスをあつさり倒した。

「やったわね！」

ふたりはハイタッチをした。

聖奈・大橋は3階の探索を行っていた。ある部屋に入ってから聖奈の様子が変わった。

「？聖奈さん、どうしたんだ？」

「いえ、さつきからあの煙突がきになってたんです。なんか人が入れそうな大きさっていうか……なんというか」

「おいおいサンタじゃないだぜ〜！」

と云いつつ、聖奈が先に入り、壁を崩した。中に入った聖奈の様子を見て合図を送ったので大橋が中に入った。

「これは、何かの基地っぽいな。」

「これは、一体？」

目の前にハンターが現れた。

「ハンター！ 聖奈さん避ける！」

大橋の蹴りでハンターが怯んで壁にめり込んだ。

「何かわからないけど取り敢えず……」

気絶しているハンターにトドメを刺した。

2人が部屋を調べていると聖奈が大橋に資料を見せた。

「これって？」

大橋と聖奈は中身を読み始めた。

「R市はもうダメだ。本部はもはやR市を見捨てた。このR市は夜明けと共に核で吹っ飛ばすことが本社の意向で決定した。残ったメンバーは至急脱出せよ。」

「そんな！ これを早く伝えないと！」

2人が煙突から出るとゾンビが3体現れた。

「ちっゾンビか……しっこいんだよ！」

「ここは私が……トリガー！」

<ブレイク！ スワローショット！>

「聖奈も戦闘技術に運動神経がプラスされているからゾンビなど最早瞬殺できるレベルになった。それにブレイクトリガーが加わったため聖奈も戦力の1人に数えられている。発射された弾丸が3発軌道を描き、ゾンビの頭を撃ち抜いた。」

「よし、行くぞー!」

2人は急ぎ他のものたちとの合流を目指した。

「のび太君!」

「聖奈さん!どうしたんですか?」

「これを見てください!」

聖奈は2人にさっきの資料を見せた。それを見た2人は血の気が引くほど動揺した。

「これって!?!」

「こんなの正気じゃない!こんなことを本気でやるんですか?」

「アンブレラのしたことをもう忘れたのか? そういうもんだろアンブレラは!」

「じゃあ、行きましょう!何時までもここにいては!さっき下水道に行く道を見つけたのでそこから移動しましょう!」

「大丈夫かしら?もしかしたら中にいるネズミまでゾンビに…」

「とにかく今はそれしかありません!急ぎましょう!」

4人は下水道に着いた。

「ここか、随分広いな」

下水道には辛うじて電気が通っていた。そして近くの部屋に4人が入ると部屋にメモが貼られていた。研究所にはカードキーに記されたパスコードが必要になり、それらは交代しているらしい。

「どうやら研究所の鍵はパスコード式になってるみたいね」

「でしたら、各自別行動して鍵を探しましょう！」

4人は各自でカードキーを探し始めた。

のび太は部屋の北側のエリアを探索し始めた。

「それにしても暗いなあ〜」

辺りは懐中電灯で照らしていると、目の前に学校にいたブレインディモスが現れた。

のび太「そういえばお前とは学校以来だったな」

のび太は実質学校でしかブレインディモスと戦闘したことがなかったのだ。

「でもお前なんて足止めにもならないよ。トリガー！」

〈ブレイク！キラージュット！〉

ハンドガンを構えながらそう言った。ブレインディモスは一旦距離を取ったが空中でのび太の一撃うい受け、そのまま倒れた。

「ふう……」

するとブレインデイモスの体液に紛れてカードキーがあった。

「これってパスワードが書かれたカードキーじゃないか。どうしてこんなところに……まさか飲み込んだ？」

のび太は嫌々カードキーを取り出してパスワードを入力する場所に向かった。

聖奈も辺りを見回しながら先を急いでいた。

「あー気持ち悪い。私虫とかちよつと苦手なのよねえ……特にハエとかゴキブリが……」
聖奈にはキメラが現れた。

「クシャアアアアアアアアアア!!!」

「なんでこんな時にハエが出てくるのよ!」

聖奈はハンドガンを構え発砲した。しかしキメラは素早くかわして天上に逃げた。

「暗い上に姿すら捉えられないなんて……一体何処?」

キメラは聖奈後ろから現れた。しかし、聖奈は振り返るとニヤリと笑った。

「かかったわね! 私ほ事前に閃光弾を投げるのを待っていたのよ!」

聖奈が咄嗟に離脱する中、閃光弾が床に落ちて光を発した。聖奈は最初の攻撃の時に閃光弾のピンに指をかけていたのだ。そしてキメラが逃げたと同時にピンを抜き待ち

構えていたのだ。キメラは片目を潰されまるで命乞いでもしているような慌てた仕草をしている。

「さてと、やりまますか」

その顔は殺気で溢れていた。その後キメラは聖奈のナイフで全身がバラバラにされた。

「ふう…片付いたみたいね。」

聖奈はその後別のエリアに入った。

「またゾンビ？うん？あいつの首にあるのは、パスコード書かれたカードキー！」
聖奈はあっさりハンドガンの攻撃でゾンビを倒すとキーを奪った。

晴海は目に映った部屋を風潰しに探索して行ったが目ぼしいものはなかった。

「それにしてもキーはどこにあるのかしらねえ〜！これだけ広かったら別にあってもおかしくn…」

「キヤアアアアアア!!!」

すると近くのドアを破って、青いハンターが現れた。

「色違いのハンター!? でも今まで通りの戦法なら！」

今まで通りハンドガンで攻撃をするもハンターには通じなかった。ハンターの攻撃

を際どくかわした晴海は一度距離を取った。

「じゃあこれはどう?」

晴海はハンドガンからショットガンに持ち替えた。ハンターが飛びかかって来たがそれを素早くかわして晴海は構えた。

「甘いわ!」

ハンターが振り返ると同時にショットガンで晴海は攻撃した。

「ありゃ?もう終わりか…」

ハンターが倒れたことにきづき呆気ないと晴海は思った。

「さてと…あそこは鍵がかかってたけど何かあるかしら?」

晴海はハンターが出てきた部屋に入るとパスコード3のキーを手に入れた。

1人歩く大橋は突然歩くのをやめた。

「やれやれまたお前か」

背後からティンダロスが現れた。

「DUSAAUA!」

「無駄なんだよ!お前が俺に勝てるわけがないんだよ!」

大橋は普通にショットガンで正確にティンダロスに命中させた。さらに、噛み付き攻撃も近くのパイプを盾にして動けなくなったところをその辺りに落ちていた鉄パイプ

で殴打した。

「どんなもんだい！」

ティンダロスはまたもその場から逃亡した。

「つて、やれやれまた逃げたのか。現れては逃げ逃げては現れキリがねえなあ。ストーカーかつての！まあ鍵も手に入れたし開けますか。」

鍵を開けた。

「まあこれで全部のカードキー開けられたか。」

大橋は部屋を出た。R市爆破の時間は刻一刻と近づいている。時間がない！果たしてどうやってこの先脱出するのだろうか？

23話 迫り来るカウントダウン

一行は研究所に着いたら青木たちが後ろから来た。

「のび太たちか！」

「青木さん！」

青木と大鷹が手を振った。

「大鷹さんも無事だったんですね！」

「そういえば浪波さんは？」

晴海の一言で大鷹は閉口してしまった。

「…」

「あの人は…ゾンビ化していたんだ。俺たちはそいつから逃げてたんだ。」

青木も顔を曇らせながら言った。大鷹も涙をこらえていた。

「大鷹さん…」

「それよりも、青木さんに大鷹さん！ これを見てください。」

これを見た青木と大鷹は動揺した。

「!?!」

「マジか!？」

「あのアンブレラが、榛名に浪波を!許さん!許さんぞ!」

大鷹はアンブレラに対して、彼が入隊した当時の頼れる先輩と気の合う同僚だった榛名と浪波を含めた一般人の命を安易に奪った行為に怒りを抱いていた。

「そんな事より研究所に入りましょう。もう時間がない!」

「ああ!あいつらのために死んでたまるか!」

皆と別れたのび太・聖奈とはある培養室に入った。

「ここはススキが原と違ってここは研究メインではなくB・O・Wのテストがメインだそうです」

「あそこで作ったのがここで性能をテストするのか…」

「これは、またディスク?」

すると天井からブレインデイモスが3体現れた

「学校にいた奴だ!」

「くっ!」

ブレインデイモスは聖奈の懐に飛び込んだがナイフで切りつけられただけで死んだ。

「弱い?」

「バカな!学校にいた奴は強い筈なのになぜ?」

戸惑うのび太たちだが偶然カプセルが割れ中からハンターが現れた。

「また、ハンターか!」

しかし、ハンドガン1発を頭部に命中すると死んだ。

「でもやつぱり弱い!何がどうなってるんだ?」

大橋・青木・晴海も10体のB・O・Wに囲まれた。しかし、耐久性が乏しくハンドガンや剣撃だけで倒されていった。

「どうしてこうなった?」

「え?こんなに弱い物なの?おかしいわね。あまりにも耐久性がなさすぎよ。」

道中にもB・O・Wがいたが全て能力が著しく低下したもののばかりだった。そして大橋は近くの部屋からこんな資料を見つけた。

「こいつらはどうやら処分する予定の失敗個体らしい。ここはテスト施設と同時に失敗作の処分するための施設らしい。」

大橋が資料を回収し、見せた。

「弱すぎで?」

「これじゃあ、ススキが原の奴らの方がずっと強いな…」

青木がため息をついた。

（一応テストする施設なんだけどな。」

「また、来たのか。」

大橋たちももはや呆れていた。

「んじゃこれで！」

投げられた手榴弾でB・O・Wはあっさり全滅した。

「早っ！」

二人は少し進むと兵士の死体があつた。

「これは！」

青木は何らかの資料を見つけた。

「やった！　これなら脱出できる！」

「なになに？　R市はもう夜明けと同時に吹き飛ばすことが決定した。残った者は至急脱出せよ。今まさに政府のヘリが周囲を巡回しているのでそれにより脱出せよあと5分で到達するはずだ。それと新型のデータを何者かに取られないように回収せよ。最悪燃やしても構わん。」

青木が資料を読み始めた。

「ご丁寧に資料に関することを言ってるよ。」

大橋が資料を指差した。青木がクスクス笑い出した。

「アンブレラってさ、なんかこう言うのに関してザルいんじやあねえか?」
「全くその通りね」

フローズヴェニルトが4体現れた。しかし、肉体が不安定だったため動きが鈍かった。

「また来たのか」

「なんかこいつらがかわいそうになるな」

「けど、同情はできません!来ますよ!」

焼夷手榴弾を晴海が投げて5秒でフローズヴェニルトが大きく怯んだ。

「トリガー!」

青木と大橋がトリガーと唱えた。

〈ブレイク!クリティカルショット!〉

フローズヴェニルトが頭を撃ち抜かれ、倒れた。

「いやいや、やつぱり弱いよ」

失敗作に翻弄されながらだが、のび太たちはさらに奥へ進んで言った。

「おい!最終便のヘリとして人を運んでるがどこかしこもひでえな!」

のび太たちは最終便のヘリが今ようやく街中に入ろうとしていることには気づいて居なかった。

「いつまでもこんなところにいる訳にはいかない！一応街を一回りするぞ！」
「ああ!!」

へりが飛び立ち、街の消滅が刻一刻と迫って居た。

24話 壊滅

「みんな！」

のび太と聖奈は廊下で大橋たちと合流した。

「のび太か！」

「後はここだな。」

「わたしと聖奈ちゃんはそのうちの部屋を確認するね！」

「ああ！じゃ俺たちはこっちだ！」

のび太、大橋、青木はB・O・Wの焼却処分場に向かった。屋上へ向かうための通路に鍵を開けるのにしらみ潰しで探していた中、焼却処分場の死体が持っている可能性がある地考えられたからである。

「ここはどうやらあの弱つちい奴らの処分場らしいな。」

部屋は死臭が酷く漂っていた。

「かなりの量の死体だ……」

「そんだけ失敗作が多かったってことだろうn……」

そうこう言う内に青木はうっかりB・O・Wの死体をべちやりと踏んでしまった。

「今思ったんだかさあ！ アンブレラってほんと失敗作をなんでこんなところに置いておくかなあ〜！靴が汚れちゃったよ！」

「まあ仕方がないですよ」

するとティンダロスが屋根を突き破って現れた。

「たかう、しぶといな。こいつは…」

「こいつはゴキブリかよ、そう言いたいんだろ？」

「確かに…しつこいですよね。」

3人は無駄話をしながら戦い始めた。

「オラオラ！」

大橋がハンドガンだけでティンダロスを追い詰めたがやはり避けられた。

「甘いんだよ！」

青木も連続攻撃で仕掛けたが何度も見ているためかティンダロスにかわされてしまった。

「ほう、やはりお前を学習していると言う訳か。まあ何度も喰らっちゃあれだしな…」

「いい戦法だな。感動的だ。」

すると3人はマシンガンを構えた。

「だが無意味だ」

3人は無差別にマシンガンを撃った。そう、打ち続ければどれだけ避けようと関係ないのだ。

「どうだ!? 威力は低いが当たり確率は跳ね上がるわけさ!」

ティンダロスは避けても避けてもマシンガンの性質上何発かは攻撃が当たるのでそのうちかなりの弾丸が当たって倒れた。

「今度こそやったか?」

「みたいだな。そのことより早く行こう。」

「もう夜明けまで時間がありません。」

3人は焼却処分場を出た。ほぼ時を同じくして聖奈と晴海は屋上に出るためのキーを開けていた。

「聖奈さんどうだった!?!」

「のび太くん、こっちはキーを見つけました。大鷹さんとは合流してすぐにこの先に行きました!」

「早く行こう!」

晴海がドアを開けて走り出した。のび太たちもそれに続いた。今回の事件に際し、のび太たちは各自でトレーニングを積み体力はつけていた。しかし、こんな災害下では体力が意味をなすかは微妙なものだが…

屋上についたのび太たちだったが背後からまたも敵が迫っていた。

「まだかしら？」

辺りを見回していると聖奈が飛行してる物体を遠くで発見した。

「遠くにヘリが！」

大橋とのび太はドア付近の防衛を引き受けている中、敵がきたときに際して何かを探していた。

「これは？」

大橋は近くに落ちていた大きい銃を拾った。

「あつ、それ僕持っておきます。大橋さん、まだ怪我もしんどそうだし」

「ああ、任せた。こんな大きいのが使いたかねえよ。」

のび太は先ほどの銃——ライフルを手に入れ、大橋自身は残り数発しかないマグナムを手に入れた。すると下の階からティンダロスと何百体ものゾンビが現れた。

「もういい加減にしてくれよ！」

ティンダロスは先ほどよりも大幅に弱り切っていたが鋭い眼光までは衰えていなかった。

「もういいよ、顔すら見飽きたよ。」

「おい、ヘリが来るまであと数十分だ！一旦戻って迎え打つぞ！」

「はい！のび太、この犬は俺たちが倒す！」

大橋とのび太がティンダロスを睨みながら武器を構えた。

「僕は、バカだからあんまり生物兵器についてはよくわからない。」

「でもなあ、テメエみたいなのが野郎は生きていちゃいけないそんな気がするんだよ！
てめーは生き物だから愛護団体だとかなんとかで人間の法律じゃあ裁けねえ。だから、

俺たちがてめーを裁く！」

大橋とのび太はティンダロスと、残りのメンバーは大量のゾンビとの戦いの火蓋が切って落とされた。大橋とのび太は距離を取りつつほぼ重傷のティンダロスを迎撃していた。ティンダロスの回避能力は衰えていたが再生能力がわずかに働きゾンビといても過言ではない執念を見せていた。

「のび太！こいつはもう跡形もなく吹っ飛ばしてしまった方がいい！さっきのデカイ銃
を使え！俺が注意を惹きつける！」

「分かりました！」

「くそ！雑魚どものクセになんて数だ！」

「倒しても倒してもきりがない！」

「喰らいなさい！」

聖奈が閃光手榴弾と焼夷手榴弾を投げると、ゾンビは次々と焼身したり、強い光で体が砕けていった。

「弱いから体の組織まで弱いみたいね。けどあつちは!?」

「今の俺でこいつらなら! テメエらには関係ないがここで死んでもらうぜ!」

大橋はのび太に照準を合わさせてる間にティンダロスの攻撃を避けながらハンドガンで反撃していた。

「そのライフルの攻撃力は半端じゃねー! よく狙って撃て!」

「はい!」

(もう少しで!)

飛びかかってきたティンダロスを避けてすかさず大橋が顔面に一撃を放ったため、一瞬ティンダロスはふらついた。

「今だ!」

「はい!」

のび太が撃鉄を引くと、ライフルから発射された1発がティンダロスの腹部に命中した。

「ADAAA!」

「まともに食ったな! こいつも喰らいやがれえええ!」

このドグサレ

があー………！」

大橋の脳裏には死んでいった者たちの最後が浮かんで行った。

(こいつに殺された人達の敵は…取ったぜ！)

ティンダロスは懐から取り出した大橋のマグナムから放たれた1発より今度こそ動かなくなった。

「こいつの死体は下に置いておくか」

と、大橋は言いながらティンダロスも死体を屋上から蹴り落とした。

(ひどい…でもまあいいか…)

そして全員は残りのゾンビを難なく撃破してドアを封鎖し、無事街から脱出した。

「おい…いいか、夜明けとともに吹っ飛ぶ時…目を瞑れ…」

「大鷹さん何故です？」

大橋が暗い表情のままその場から離れた。

「榛名さんや浪波さんが一瞬で消えちまうからですよね…」

「ああ…」

「?あれって!」

その時聖奈が近くのテレビ局の屋上からジャイアンの姿を発見した。

「おい助けてくれー！また母ちゃんの所には行けないんだよ！」

「あれは武君？」

「へりを止めてください。あのテレビ局に生存者が！」

テレビ局が途上にあつたため運良くジャイアンは保護された。

「うおおおおおおお!!!心の友よおおおおお!!!」

「ふふふ、よかつたじゃない」

「…誰だ？」

ジャイアンがポカンとした表情で訪ねた。

「大鷹だ…」

「塩田晴海よ。」

大橋はジャイアンにのび太たちにするようことを言った。そして数分後に街から一つの光が出ると町は跡形もなく消え去った。のび太たちには悲しみこそ残ったが、無事帰還できたのである。

数日後…：瞬く間にR市の悲劇は伝えられた。

「続いてのニュースです。悲しいニュースをお送りしなければなりません。先日R市にて原子力発電所による事故により多数の死者が出たようです。現在日本政府の調査を行っておりますが政府高官の報告によると極めて凄惨な事故であるチエルノブイリを

上回る予想されるとのこと。この事故によりR市は完全に壊滅したとされ被害は4万人とのこと。なお生存者たちには日本政府により仮設住宅ができておりそこに避難しているとのこと。

：次のニュースです」

大きな事件は気づかれないうちに終わりを迎えた。しかしこれが後々大きな出来事を巻き起こすということを知る由もなかった。

第2章完

25話 戦いの準備

アンブレラではすぐにR市の事件が通じられることになった。

「大変だぜリーダー！」

「エスター、血相変えてどうした？俺のお茶が不味くなっちまう…」

リシングスキ어가ティーカップを置いた。

「はい、日本で最大の規模を誇っていたR市の支部が本部により…壊滅された！」

「なんだって！何故そんなことを!？」

金髪の女性隊員が顔色を変えた。

「リシューア、そこまでは俺も知らされてないんだすまない。それと隊長、本部から連絡なんだがR市を脱出した生存者の中にスキが原の資料を持ちだしたあのガキ共がいたそうです。」

エスターは隊長に焦りながら報告していた。

「はっ、そんなもの放って置け。大体本部が余計な研究ばかりかしてるから事故が起こって餓鬼どもにつけ込まれて先手を打たれるんだ。」

「果たしてそうでしょうか？」

すると、帽子を被った隊員が紅茶を飲んでいるリシングスキーを見つめた。

「このままじゃまずいのでは？あのガキどもとらえるために大忙しの我々がいいように利用されるんじゃない？」

「たぶん、それはないわよ。」

リシューツアが腕を組みながら椅子に座って首を横に振った。

「リシューツアの言う通りだ。本部は当分情報隠蔽などの手段をとるしかないだろうなあ
：

おそらく3年ぐらいか。かなりの規模だった町の隠蔽にはかなりの手間がかかる。まあ知ったこつちやないがな。」

リシングスキーは紅茶を飲んだ。

出木杉たちは大橋に起こったこととR市に起こったことをきいた。

「そんなことが…」

「くそ！」

「俺たちが行ければ！」

スネ夫と安雄は握りこぶしを握った。

「仕方ないよ。怪我とかは治しとかないと。死んだらおしまいなんだ。」

ドラえもんが2人をなだめた。

「ニュース見ましたけど……全員無事で何よりよかったです。」

翡翠もお茶を出して椅子に座った。しかし、のび太とジャイアンの顔は優れないままだった。

「結局どうにもならなかった。前みたいになが……」

「俺は……」

静香が落ち込むのび太とジャイアンを見つめていた。

「武君……」

「おいおい、情けねえぞ！特にのび太さんと武さんは諦めないのがいいところだろ!?辛気臭くなるからやめてくれよ、せっかく帰って来たつてのに……」

健治の励ましは2人はゆっくりと笑みを浮かべるようになった。

「ああ、そうだな！」

「僕らには明日がある！だよ、武にいちやん！」

太郎がジャイアンの手を握った。そういうとジャイアンは太郎の頭を撫でた。

「んでどうすんだ？俺らにはやることなんてないで。」

赤田が椅子に座りながら声をかけた。

「じゃあ、これ見ましようか」

咲夜は大橋たちが持ち帰った資料を再生した。

「やあ、諸君私だ。残念なことにせっかく開発したB・O・Wの資料を奪われたようだ。全く恥ずかしいねえ〜！」

「誰なの？」

晴海が首を傾げていた。

「B・O・W開発主任の狗波 冥月って言うそうです。ハンターを趣味で量産する人です。」

咲夜が晴海に狗波のことを話した。

「で今回は嬉しいことにティンダロスが量産されましたー！R市に個体は獰猛すぎるからねえ〜 処分依頼を頼んだから大丈夫だよ！」

あと、ハンターのβタイプはパワーを強めにしといたから。ああそうそう、資料にあるだろう赤い個体はシャア専用ザクを意識して作ったから。これも私の趣味だ良いだろう？」

と満面の笑みを浮かべた。その資料に関しては残念ながら手に入らなかった。

「そうか？全くおもしろないわ。」

「意味わかんないわ。こんな馬鹿げたことしてなんになんのよ。」

「（こ）うい）うのはちよ）つと…。」

赤田はきつぱりと否定し、富藤と翡翠はドン引きした。

「で後いうとしたら、そうそう！ ススキが原でできたイレギュラーB・O・Wについてだが、このネーミングセンスも趣味だいいだろう？」

「この人趣味多いな？」

晴夫が呆れながら突っ込んでいた。

「まずは、第一号のブレインデimosだ。これはダニがB・O・Wの血を吸ったものだが、わたしはダニが嫌いだ。なぜなら……」

話すこと5分——どうでもいいことを聞かされたのび太たちはうんざりし始めていた。

「さてと、話を戻すところいつはバランスがいいけど、耐久性に乏しいみたいだから改良が必要だ。とまあ、今の所はこんなもんなかな。」

R市のレポート楽しみにしてるよ〜」

「これだけか」

「しょうがないね。敵にいくら取られちゃったし……」

実際R市からも敵の兵士が逃亡に成功したらしくいくつか資料が持ち逃げされたような痕跡ものび太たちによって見つかった。

「とはいえまあ、生きてるだけよくね？ あの事件は悲惨すぎた。だから下手したら死ん

「でたかも知れねえんだ。」

安雄がのび太たちの肩に手をポンと置いて励ました。

「ああ！そうだな。」

するとドラえもんが手を挙げた。

「ちよつといいかい？今、伝えたいことがあるんだ。のび太くんの家にきつと事件を切り抜ける切り札があるんだ。」

「それってまさか……！」

のび太の推測を前にドラえもんは首を縦に振った。

「タイムマシンだよ」

「!？」

「タイムマシン？そないなものか？」

「その手があったか！これなら！」

「ああ！事件をなかつたことになつてできる！」

スネ夫と安雄、晴夫が喜ぶ中、タイムマシンを知らないものたちは半信半疑だった。

「でも問題があります。今現在、ススキが原は100人体制で警備に当たってます。すぐに実行はできません！」

翡翠がのび太たちに対して反論してきた。

「翡翠にも一理ある。警備してるのはどうやら自衛隊みたいだ。お前から以前大鷹つてやつと接触したけど今現在はどうなんだ？」

久下も翡翠同様タイムマシンが信じられずにいた。

「大鷹さんとは今は連絡できないみてえなんだ。あれから連絡がつかなくてな。」

「じゃあ、どうすんだ!?!このまま指くわえてろつてか?」

ジャイアンが久下に反論した。

「ああそうだ、ここは待とう。」

「でもそれって……!」

聖奈も大橋に対して反論しようとしたが大橋はチツチと言って指を左右に振った。

「勘違いすんな。戦い自体はやめないさ。今は少し耐えるんだ。どの道今はまだ警備は厚い。久下さん、その警備に関する情報は他にないのかい?」

「俺の情報だと警備が8割くらい減るのは精々5年だと警視庁総監は言っていた。」

「そういうことだな。それじゃあ、みんなに聞く。5年間待つ奴が嫌で今からでも抜きたい奴ははいるか?嫌ならここで抜けてもいいぜ。」

青木はいつものお気楽そうな雰囲気だったが真剣になって聞いていた。この先からは時は経過するためべつに無理して戦う必要はないのだ。

「僕は行きます!」

「僕は歴史を正しいものにする役目があるんだ。抜けません。」

「スネ夫」

「わかっているって、ジャイアン。」

「て言うかさ、青木さんさ、分かっているよ。抜ける人はまず誰もいないよ。だって、みんな何かの為に戦っているんだよ。」

（いや、正直俺は逃げたいんだがな。）

こんな状況になってもまだ戦いたくないと久下は願っていた。

「それにここにいる人は全員運命共同体です。誰かに任せてさよならってわけにはいきません」

咲夜が皆を一人一人見つめてうなづいた。

「そうだな。当然のことを聞いてすまない。俺としたことがな」

「それじゃあ、5年後にスキが戻ってことで決定したってことになるけどそれまでどうする？」

「翡翠さんや笹木さん、久下さん、赤田さん、青木さんたちはともかく僕らは学生です。

どうすれば？」

そうなのである。大人を除けばチームバイオは表向きはただの学生なのである。敵の目を欺くにはまず普通の学生である必要があるのだ。

「安心しろ。生存した学生には国の奨励金で高校まで保証されるそうだ。まあ、俺は警官だしな。なんとかはするさ。」

「まあ、俺は小説家だしな！給料は任せておけ！というかそう言う翡翠や笹木に赤田は大丈夫か？」

翡翠や笹木はともかく赤田は無職である。

「じゃあ、私と笹木さんと赤田さんはバイトして稼ぎましょう。生活はそれでそこそこのなんとかなるでしょう。」

「なぜに俺もやるん？」

「まあ、いいじゃん」

こうしてのび太たちは5年の間一旦休戦した。そして、5年後全ての戦い自体に決着がつくことになる。のび太たちにあるのは果たして生か死か。

「みんな行くぞ！5年後の決戦へ！」

「おう！！」

第3章 five years after

設定 (第3章)

1、2章メンバー 全21名

のび太、スネ夫、ジャイアン、出木杉、静香、安雄、晴夫は16歳

聖奈、咲夜、富藤、健治、白峰は18歳

大橋、晴海は21歳

久下は27歳、青木は25歳、赤田は26歳、翡翠は30歳、笹木は28歳になった。

太郎はちなみに12歳になった

武器は全員強化したハンドガンが共通装備

ジャイアン、青木、大橋、咲夜はショットガン

スネ夫、晴夫、晴海はマシンガン

白峰、久下、ジャイアン、

赤田はマグナム

のび太はライフル

スネ夫はスナイパーライフル

安雄のみグレネードランチャー

ドラえもんは攻撃用の秘密道具

というように個人で武装が若干異なる。

追加キャラ全8名

リシングスキー(35) イメージC.V. 置鮎 龍太郎

紅茶が大好きな軍人。成り行きでリーダーを任された時に活躍し以降は優秀な司令官としての役割を果たす。ただ酒や紅茶がないと拗ねて八つ当たりしてくる。

イメージカラーはライムグリーン

リシューア(35) イメージC.V. 沢城 みゆき

よくアネサンと言われているが本人はそう呼ばれるのが好きではない。エスターにしよっちゆうアネサンと言われ少しイラっとしている。

そしてしばく!

イメージカラーはスカーレット

エスター(32) イメージC.V. 中村 悠一

リシングスキーの相棒で中々な技術を持つが、結構不運な目に合う。なぜかバナダナを付けてる

イメージカラーはブラウン

ヤノフ(24) イメージCV・石田 彰

大型兵器の狙撃が得意でほぼ新米兵士。しょっちゅう酔ったりシニングスキーに絡まれる。実は故郷に幼馴染の子がいるためリア充呼ばわりされたりされなかったり。

イメージカラーはターコイズ

セイカー(27) イメージCV・神奈 延年

無口であることが多い寡黙な男。しかし、状況を把握するのは得意だが本質は臆病。帽子がトレードマーク。イメージカラーはグレー

サーシャ(30) イメージCV日笠陽子

罍を作るにがうまく、空き巣などこれで何人も涙目にさせたほど。ただ不注意な面が目立つためそれが周囲にとって大きなミスになることもしばしば。現在スランプを拗らせてる。イメージカラーはライトピンク

鳥柴 雪乃(26) イメージCV早見沙織

鳥柴亜紀の歳が離れた妹でUBCSと共にのび太たちと戦うが…割と天然だが面倒見がいい

イメージカラーはバイオレット

ブレイクトリガー

5年間の間に密かに骨川財閥の研究グループが開発・強化しのび太たちに支給された。それらは銃に様々な能力を付与するのに加え銃弾の軌道を微調整したりする。

元々様々な能力を付与したのはアンブレラB・O・W開発主任である狗波 冥月が施設代を研究費に回す本部の意向を進める上で、自分たちでB・O・Wを処理することを目的に開発し、提言したのが始まりです。すでに敵の特殊部隊にも導入済み。ロケットランチャーを除くどの銃にも取り付けられるが、1発使うと次に使えるのは10分ととにかく1発頼みの切り札。

開発者曰く、今時B・O・Wをいかに安全に管理するか考えたら安易に研究員を切り捨て、部隊を消耗させるより自分らでどうこうさせてリスクを減らしたほうが経済的に合理的だとのこと。実際この開発費は兵隊の人員費削減などに役立ち、研究員の殉職率もダウンしたアンブレラの発明として名高いものとなった。

基本音声は〈ブレイク！技名〉

以下、のび太たちの能力一覧

のび太：キラークイック（貫通攻撃）

ジャイアン：ブレイズショット（高熱攻撃）

静香：フラッシュショット（閃光攻撃）

スネ夫：ターンショット（銃弾の軌道を一度だけ捻じ曲げる）

ドラえもん：なし

出木杉：バウンドショット（相手に命中すると弾丸が僅かに跳ねる）

聖奈：スプラッシュショット（一直線に弾丸が進む）

安雄：グレネードドリーム

（グレネード専用　炸裂、焼夷、硫酸、冷凍、閃光の順でグレネードの連続攻撃が

放たれる）

晴夫：ファットショット

（ショットガン専用　短距離である分、威力をマグナム並みに自動で引き上げる）

咲夜：ノックアウトショット

（弾丸が必ず相手の頭部を狙うよう微調整される）

健治：カマイタチ（弾丸に空気の刃をつける）

太郎：ワイルドショット（100メートル追尾）

大橋：クリティカルショット（相手の急所を自動で攻撃）

青木：ソニックショット（銃弾のスピードを上げる）

赤田：ウエーブショット（弾丸がわずかに上下に揺れながら移動）

笹木：ミラージュショット（弾丸の蜃気楼で相手を翻弄）

翡翠：シャドーショット（弾丸とその影の同時攻撃）

第26話 帰還

「ここは、アンブレラの私有部隊のUBCSの基地である。二人の男女が急ぎ足で本部のとある一室に入った。」

「どうしたエスター、リシートツア？」

エスターというバンダナを身に付けている若者は息を切らしている。

「最悪なのと、どうでもいいのがある」

「紅茶がまずくなるからどうでもいいのから頼む」

青髪の傭兵はダージリンティーを飲みながらそう言っている。

「シンガポール支部にあった化粧品サンプルが盗まれたそうだ。」

「それはどうでもいいですね。そんなの僕らに関係ありませんね。」

青髪の青年は武器を磨きながらぼやいていた。

「ヤノフの言う通りだ。んで、最悪なのつてのは一体？」

紅茶をすすりながら隊長らしき人物が話を聞いていた。

「それはあたしに話させな。」

「ああ分かった。」

「日本で例の餓鬼どもを引つ捕らえるのと現地のU S Sの奴から新型のサンプルの回収の任務であたしたちに出撃命令が出てるんだ」

リシングスキーはそのことを聞くとカップを落とした。

「早く言えよ！」

「やれやれだ……」

寡黙な青年が立ち上がるとサイダーを飲んでいた青年も一気飲みをして立ち上がった。

「こっちは香港とアフリカで裏切り者のU B C SとB. O. Wの処分に行つてたのな！」

青年は軽くキレている。

「こども裏切りとかが出るアンブレラもそろそろ末期だな……まあいい行くぞ。俺たちの出番だ。セイカー、リシューア、ヤノフ、エスター……行くぞ！」

そう呟き、一行は空港に向かった。

5年前、ススキが原を襲つた伝染病事故で人が暴徒化し人々はパニック状態に陥り完全に街そのものが封鎖された。

しかし、これは全て当時の製薬会社アンブレラの研究員であつた金田の陰謀だったの

だ。彼は街を実験台にし人々を苦しめたがのび太たちの戦いによってその野望は頓挫した。

そして数ヶ月後にアンブレラ社はまたしても事故でTウイルスが漏れた結果、日本で最大の戦略地であったR市でまたもバイオハザードを起こしてしまった。その結果数千人がゾンビと化し、地獄となってしまった。事態を重く見たアンブレラは政府と取引を済ませ、街を滅菌し全ての証拠を隠滅した。

アンブレラはススキが原の調査とさらなるB・O・Wの強化及び量産を進ませ、より強力となっていた。しかし、アンブレラの本性を知り、次々と離反もしくは反逆の意思を示すものまで現れた。

アンブレラに追われたのび太たちも彼らから本格的に狙われそうになるも骨川財閥の後ろ盾でなんとか身を偽って生活していた。

「いよいよだね。」

出木杉たちが武器に整備をしていた。

「ええ、今日はススキが原にいる自衛隊の3分の2が撤退する頃だったね。」

「R市は完全に更地になってしまった…」

R市はアンブレラにより更地になってしまったが、政府により伝染病の危険性が無いかの調査を数年で終え今は復興の最中であった。しかし、ススキが原は伝染病の始まり

であるため、今も厳しい監視が行われていた。

「だが、ススキが原は無事だ。」

「ススキが原は研究所が吹っ飛んだだけで住宅はまだ無事なはず」

「私はススキが原は知らないけど一応付いて行くから。大事な友達を見捨てて暮らすつてのも気が引けるわ」

晴海も大橋たちの孤児院の義父の元へ向かうのを拒否し、のび太たちと戦うことを決めた。

「太郎は今回さすがに危険だから残すとして誰が残る？」

太郎はまだ小学生ということもあってさすがに今回の戦いは不参加だった。

「私にするわ」

静香が手を挙げた。

「静香ちゃん……」

「まあ、俺たちに任せてくれ。」

「うまくいくよう祈つといてくれよ！」

「はい！任せてください。」

静香が微笑む中、赤田が腕を組んで悩んでいた。

「でも、ほんとにタイムマシンなんてものがあるのか？おとぎ話とちゃうん？」

赤田はタイムマシンがあるとは思ってはいなかった。

「あるんですよ赤田さん！」

そしてもう一人——この状況で久下は悩んでいた。

（もしも俺たちが全滅してもドラえもんさえたどり着ければ…）

久下はただの警官であり、べつに気張る必要はない。しかしその考えは周囲の雰囲気で一瞬で改まった。

「いや、生き残つてやる。ここで逃げたら死んでいった同僚に申し訳ないしな。」

「でもそれで未来を変えたら一体どうなるの？」

咲夜の言葉に全員が言葉を飲んだ。しかし、スネ夫が口を開いた。

「おそらくここで起こったこと全てがパラレルワールドのことになるでしょう。」

「それでも平和な時代に戻れるなら俺は喜んでやるぜ。」

「そうね。例えどんなに辛くたって自分たちは幸せになりたいわ。」

静香と太郎以外は家の前で家を見上げながら家を背に立った。

「行くぞー！」

ここはススキが原より数キロ離れていて、バリケードが張られている。あれから5年が過ぎ監視要員の自衛隊の数は3分の2まで削減されていた。

「大鷹さーん、俺暇つすよ〜」

「そういうな」

「どうせ誰もきませんよ〜」

ススキが原の警備は今3分の2に減っており、完全に封鎖されている。するとそこに静香と太郎が現れた。二人は事前に大鷹以外の自衛隊員をその場から離れさせて、その隙にのび太たちを入れるという役になるよう事前に話されていた。

「すみませーん」

「僕たち迷っちゃって…」

「元来た道に戻るんだ！ここは危ねえんだぞ！」

「…柏木、その子たちを連れたら休憩所で休んでろ。俺の命令だから誰もケチは言わねえだろ。」

「んじゃあ、遠慮なく。ほら着いて来るんだ」

柏木は二人を連れて行った。

「もういいぞ…」

すると近くの茂みからのび太たちが現れた。

「大鷹さんひさしぶりです。榛名さんと浪波さんの時以来ですね。あの二人のおかげです。ありがとうございます。」

大橋が頭を下げると大鷹は空を見上げた。

「ああ…懐かしいな。行つてこい…！死ぬなよ。あいつらの二の舞になるな。さっきの子たちのためにな…」

「行つてきます」

そしてのび太たちを送り届けた大鷹は悩んでいた。

「どうするかな？人を入れるのを手引きしたら多分首だ。転職でもするか？」
と独り言を言っていた。

大鷹により、一行はバリケードの中に入った。

「よし入ったな」

一行が進むとそこにはハンターαタイプの死体があった。

これは、ハンター!？」

「なんでこんな所に？」

そう言いつつ一行は死体をあつさりスルーしてススキが原に戻ってきた。そこは風の音しか聞こえない無人地帯となっていた。

「戻ってきた…」

「ほんと、静かだ…」

「やつと帰ってこれたか、俺たちの街に…」

のび太に続き安雄とジャイアンは目を瞑っていた。しかし変わり果てた街を前に言葉を飲んでいた。

「……が諸悪の根源……」

晴海も風の音しか聞こえない街を静かに見つめていた。

「行こう…のび太君の家に…」

一行は白骨を目に言葉を失いながら歩き出した。彼らの進む先にはカラスが集っていた。

「カラスが集ってる…」

カラスはその辺りの骸骨を啄ばんでいた。

「ゾンビ化してるかもな。取り敢えず無視して行こう」

全員、カラスを刺激せずに静かに通り過ぎた。そして通りにもカラスがいた。しかし、ジャイアンだけは拳を握り締めていた。

「俺たちは帰って来た…けど…巫山戯んな！ それはてめーらの餌じゃあねえんだよ！」

カラスはジャイアンの怒声で逃げて行った。ジャイアンの顔は怒りで満ち溢れていた。

「ジャイアン……」

「……ここは広いからなるべく少人数で行こう。この人数じゃあ、多すぎる。各自散らばって調査でもしよう。せっかくのススキが原だ。何か変化があるはずだ。」

「全員は何人かのチームに分かれてススキが原の探索に当たった。」

のび太、聖奈、大橋、ドラえもんはたまたま通り過ぎた通りに大きな建物を発見した。

「……だ……」

「……ここが大橋さんの育った孤児院……」

孤児院に入るとそこには死体が転がっていたが骸骨の大ききからして、大橋の孤児院の児童ではなく迷いこんで死んだ生存者の死体と分かった。

「大橋さん……さっき書斎からこんなものが！」

大橋は箱を開けた。箱の中には、手紙とボウガンと矢26本が束になったものが入っていた。

「これを読んでいるということは私は死んでいることになりました。死ぬ前の我が儘ですが、もしこれを拾ったらこれを使って私の救ったあの子を守ってください。」

もし私が助けた子だったら一言すまないと言わせてください。私の所為で多くの人を奪ってしまいました。ですが、私は内心あなたには普通の暮らしをして幸せを感じて

欲しいです。私はあなたの幸せを願ってます。一生許されなくても覚悟はできています。一生怨まれても覚悟はできてます。凶々しいですが最後に私の妹の雪乃を頼みます。あの子を守ってあげてください。そして今迄一人にしてゴメンと伝えてください。」

そこには娘の住所が書かれた紙があつた。そこには鳥柴亜紀ともう一人の女性が仲良く笑っている写真が挟まれていた。それを見た大橋は涙を流した。

（俺がその子です… わかりました…俺がその雪乃さんを守ります。いえ守ってみせる！）

大橋は涙を拭いた。

「行こう！全てを終わらせるんだ。」

「はい！」

大橋に続いてのび太と聖奈も歩き出した。

「ツ、カラス共！失せやがれええ!!!」

ジャイアンは怒りを露わにしてカラスを追い払おうとした。

「ダメだよジャイアン！」

スネ夫の制止でジャイアンは不機嫌ではあるものの、攻撃をやめた。

「ツ！ああ、分かった…」

スネ夫が止めた。

「あれなんかやばくない？」

カラスがゾンビ化して襲ってきた。

「ぎげんじゃねえ！」

ジャイアンはすかさずショットガンを撃った。カラスたちはショットガンに倒れた。

（やれやれって感じだわ…全く…）

富藤はジャイアンに溜息をついた。

「さっさと、行くわよ。」

安雄、晴夫、赤田は青木、咲夜、翡翠たちと共に行動していた。安雄たちは青木たちと行動しているのは、出木杉がなるべく強い武器を持つていたらそう言うチームで複数に固まって動くよう言われていたからである。

「これはカプセル？」

カプセルの周りに20匹のケルベロスが現れた。

「でやがったな！ケルベロス！」

「ひさしぶりにやるで〜！おりゃあああああ!!」

そう言うとマシンガンを周囲に撃ちまくった。

「わっわ、わ!!」

弾丸は翡翠の足元を反射した。翡翠は足元に当たらないよう避けていた。

「気をつけてください!」

翡翠の怒り顔に赤田は怯んでしまった。

「すみません…」

「おらっ!」

晴夫はハンドガンで応戦した。

「ひさしぶりでも大丈夫だな!」

5年という歳月をかけて訓練を積んだ赤田たちにケルベロスは次々と撃破されていった。

「これで終わりだよなあ?」

するとケルベロスの死体が倒れたため近くの装置のスイッチが押されてしまい、中からハンターが出てきた。

「αタイプ!けど、もう怖くはない!」

咲夜は多少驚いたが、αタイプでは最早相手として不足だった。

「こんな奴はこれで!」

<ブレイク!ノックアウトショット!>

5年経ったので強化ハンドガンはブレイクトリガーのパワーアップに銃そのものの威力と連射性がパワーアップされているためハンターの頭を打ち抜いた。

「ふう…」

青木と安雄と晴夫はβタイプと対峙していた。

「こいつは青木さんの言っていた!」

「こいつか…」

「こいつを倒す方法はあるんですか?」

「あああるぜ。」

「ならいくぜ!」

「待て!」

赤田は青木の話も聞かずにマシンガンを撃ちまくった。しかし殆ど当たらない上数発避けられるわで殆ど意味がなかった。

「避けられた!?!」

「そいつらは身体能力が上がってるから弾丸を避けることができるんだ!」

「マジかよ!」

「じゃあどうやって倒すんですか?」

「こうするんだよ！」

青木はR市の戦法を使った。

「そうか！発撃って避けられても、すぐにもう1発連続で撃ち込めばいいのか！ハンドガンを二丁にすれば……！」

全員青木のい言われた通りに攻撃した。

「ざっとこんなもんか……けど誰がこんなモンをセットしたんだよ？」

青木たちは周囲の搜索を行うが特に人影はなかった。

笹木、久下、健治、出木杉、白峰そして晴海は裏通りからのび太の家の探索に当たっていた。

「そっちはどう？」

「ダメだ建物と言う建物が焼けてる。標識も掠れて誰の家かもわからない。」

「まあいろんなところで火事があったからなあ」

健治がタバコをふかした。

「大丈夫だと思うよ。のび太くんの家が無事ならそれでいいさ。」

出木杉が皆を笑顔で励ました。

「んじゃあ、早いところ行こうぜ。」

白峰の言葉で全員歩き出した。すると目の前にティンダロスが立ちはだかった。

「こいつまさかR市にいたあの……!」

油断して武器を落とした健治はティンダロスにひっつかかれてしまった。

「ぐわっ……!」

出木杉が攻撃を放ち、ティンダロスは素早く離脱した。

「大丈夫ですか?」

「早く健治を!……は僕が!」

笹木もまた強化ハンドガンと咲夜から借りている強化ショットガンを所持していたため1人でも十分相手にはできていた。

「あのナルシストさんから聞いたけど1発撃ったら避けたところにも1発って言ったね。」

ハンドガンをくるくる回しながら呟いていた。ハンドガンの連続攻撃をもつてしてもティンダロスはかわしながら攻撃を仕掛けた。笹木も運動神経は抜群なため、素早く攻撃に対応していた。

（いわゆる連続攻撃でダメージを与えようって試みたけど強化されただけのことはあるね!）

ハンドガンでは避けられるということを悟った笹木はすぐさまショットガンに変え

た。

「喰らえ〜！」

すると後ろからティンダロスにたいして蹴りが飛んできた。

「大丈夫ですか？ 笹木さん？ まさかこいつと戦ってるなんて…」

蹴りの主は大橋たちだった。

「僕は大丈夫だけど健治が…！僕は大丈夫だから早く彼の治療を！」

「わかりました。」

のび太たちは健治のところへ向かうがティンダロスが追いかけてきた。

「こつちから先にはこの僕が行かせないよ！ トリガー！」

〈ブレイク！ ミラージュショット！〉

弾丸が発射されるとティンダロスには一直線状に動くのがわかっていたのか攻撃さ

かわした。

「フツ、かかったね！」

弾丸が姿を消すと弾丸が目の前に現れた。

（ミラージュショットの効果は蜃気楼！ 発だけでなら弾丸を一直線に撃つたと錯覚さ

せて目の前にこさせるテクニクさ！）

笹木は飛びかかったところを狙撃したらあっさり倒した。

「強かったけあの主任がパワーダウンするとか言ってたからやれたけどどうしてここに……まあ、いいか！きてと、とっと戻ろつと。」

笹木が辺りを見回しながら、鼻歌とともに歩き去って行った。

27話 追跡者を振り切れ

一行はその後広場だった場所に集まった。そこには大きなB・O・Wのカプセルがあった。

「これは一体?」

「どう見ても、何か入っていたらしいね。」

すると背後から黒コートの巨漢みたいなB・O・Wが立っていた。

「DOAAA!」

その咆哮に驚いたのび太たちは振り返った。

「なんだこいつは!?!」

「まさか新手のB・O・W?」

巨漢みたいな敵は真っ直ぐ突撃してきた。のび太たちはそれを交わして逃げようとした。

「早く健治を遠くに移動させろ!」

健治が負傷しているため一行は撤退するのが素早く行えずにいた。

「囹役は私たちが引き受けます!早く健治くんを!」

「はいー」

のび太、大橋、ジャイアン、翡翠、安雄、青木は弾薬に余裕があったので囿を引き受け、謎の敵と交戦した。

「こいつはパワーが強いつて言うのがすぐにわかる！厄介なやつだ！」

「とにかく、今は勝ち目がありません。ここは健治君を遠くに移動させてから退きましよう！」

追跡者はとにかく腕力で周りのものを壊しながら迫って来た。要は力押しである。

「このー！」

全員ハンドガンのブレイクトリガーで発砲した。しかし、そのボディにはダメージが見られなかった。

「嘘だろー！傷一つついてねえー！強化型なのにー！」

「くそ、これならどうだー！」

安雄は冷凍弾を連続で撃った。一瞬だが敵は凍ったため動きが止まった。

「これも喰らえー！」

ジャイアンは口ケランを撃ち、爆音が響いた。

「今だー！逃げるぞー！」

「それにしてもなんだったんだ？」

「知るか！ボヤボヤすんな！」

「ジャイアンのがび太が敵に関して不思議がつてるところを走りながら怒鳴っていた。喧嘩してる場合ですか！」

「念のため、ここで畏張つとくぜ！」

「安雄は近くの柱に手榴弾を引つ掛けて畏を作った。とはいえクオリティは低いが……」

「ありがとうさん！これなら遠くに移動できるな！早く行こう！」

「大丈夫ですか？」

「聖奈が健治に肩を貸し歩いてた。戦闘と後方を見まわしながら様子を伺いながらのため全体としての機動力は低かった。」

「なんとか……」

「その時、目の前にブレインデimosが現れた。」

「チツ、こんな時に！俺が相手だ！」

「待て！数が多いから、ショットガンやマシンガンで行こう！一気に片付けたるで！立ち止まつてるわけにはいかん！ここでお片付けや！」

「おりゃあー！！」

「前線に出た赤田と晴夫がマシンガンを前方に撃ちまくり、わずかに敵がひるんだ。」

「シヨットガンは使いにくいんだよ！ まあ、しょうがないか…」

愚痴を言いつつ白峰はシヨットガンを構えた。

「俺たちも行くぞ、喰らえ！」

「今のうちに行くよ！」

「はい！」

笹木と聖奈は健治を連れて廃倉庫に避難した。

少しすると敵を倒すなり振り切るなりした仲間たちが弾薬を消費しながらも全員集まってきた。その間にドラえもんが応急処置を済ませていた。

「健治君はかすり傷ですんだよ。けどこれ以上激しく動くのはちよつときついね。」

「無理すると太郎に会えないわよ」

雪香がバンと健治の背中を押した。

「ツ！わーってる！」

「まあ、ボディーガードは任せて！」

その頃久下と青木は外を見張っていた。

「にしてもさっきのは一体何だったんだ？」

「明らかに見た感じ、今までにない奴とは違う感があった」

「ああ、個人的にいうと奴はR市のやつよりもやばかった。油断はできないぜ。」

「その分、R市のティンダロスは弱く設定されたけどね。僕でも倒せたわけだし。」
「あの狗波って人が言っていた通りですね…あいつと戦ってたら時間が勿体無いですね。」

「でも、のび太の家に行けば大丈夫だろ！そしたらあんな奴となんか戦わなくて済む！行こうぜ！」

「ああ、ここもいつかぎまわられるかわからない。行くぞみんな。回り道をして奴から離れるんだ！」

青木の指示の元、皆は予定してたルートを通らずに学校だったところを経由してのび太の家に向かうことになった。

のび太たちは通っていた小学校を見つけ、ほんの少しだけ寄り道してもらった。

「ここは…」

校舎には骸骨など明らかに腐敗したものが見られ、それらは散乱していた。校舎も当時と違ってすっかり朽ちていた。

「懐かしいね…」

のび太、ドラえもん、ジャイアン、スネ夫、安雄、晴夫が校舎を見つめていた。

「よく俺たちがここに着てのび太が遅刻する日々！」

「で、先生に立ってろって言われてたっけ」

「今じゃ懐かしいな…」

「だが、もう戻らないのか…」

晴夫の一言でのび太たちは俯き、唇を噛み締め涙を流しそうになっていた。

「早くタイムマシンで今回の出来事を終わらせよう！もう誰も欠けることのない日々へ戻ろう！」

「ああ!!」

「どうやら向こうはもういいみたいだな」

白峰と雪香がのび太たちを見守りそつと微笑んだ。

「んじゃ、来たら行きますか。何時迄ものんびりしてるとあいつが来るしね。」

「大丈夫?」

咲夜は健治の容体を聞いている。健治自体、見かけはピンピンしてるが、あまり激しくは動けなくなっている。

「まあ、なんとかな…」

「私たちがなんとかしますから、なるべく戦闘は避けてください。」

のび太たちが倉庫を出ると遠くから、さっきの追跡者が一行にロケットランチャーを直撃させるべく、狙いを定めていた。

「では行きましょう」

大橋は家の窓ガラスのから、追跡者を発見した。大橋以外は気づいていない。

(バカな！あいつは！それにロケットランチャーだど！このままじゃ、前方の翡翠さんと久下さんがやばい！)

大橋は冷や汗をかきながら2人に詰め寄った。

「翡翠さん！久下さん！危ない！」

ロケットランチャーが発射され、大橋は二人に命中しないように後方に引つ張った。

「何!？」

大橋も逃げようとしたが間に合わず、付近が爆破された。

「うわああああああ!!」

「一体何が起こったんだ!?!どこから攻撃されたんだ俺たちは!?!」

「何よ?大橋、何が…あったの?ねえ、冗談はやめてよ。ねえつてば!」

晴海の顔が青ざめていた。そして脈を恐る恐る採った。

「うそ…死んでいる…」

すると近くから追跡者が降りてきた。

「(こいつが!」

のび太がすかさず追跡者を怒りのままに攻撃した。

「絶対許さない！おまえは悪魔だ！金田と同じ！人から大切なものをお前は奪った！」

「絶対許せないわ!」

晴海ものび太の横に立って、追跡者に追い討ちを仕掛けた。

赤田「やったか?」

しかし追跡者にはその屈強な肉体があつてかまるで効いていなかった。その間に他のメンバーが大橋の安否を確かめていた。

「大橋君!…嘘ですよね!?あつけなさすぎます…」

翡翠は泣き崩れていた。晴海が確認した通り、大橋に脈が無かった。

「嘘だろ…おい起きてくれよ!しっかりしろよ!」

「やるしかない!」

「俺たちは今猛烈に怒ってるぜ!」

「ああ、お前を許さねえ!」

安雄とジャイアンと青木も連続攻撃を仕掛けた。しかし敵の肉体を前に、中々決定打を与えられない。しかし大柄である分攻撃をするタイミングは読めるため避けるのは困難ではなかった。

「くそ、どうすりやいいんだ!このままじゃ弾丸が持たねえ!」

「うん!?!」

ドラえもんは攻撃の最中、追跡者の肩にヒビがあつたのを見つけた。

（一体なんなんだ？あの傷なら！）

「みんな奴の両肩を狙うんだ！何かヒビのようなのがあったのを見つけたんだ！もしかしたらっ！」

「いよっしやー!!んじやあ喰らえ!!」

赤田はマシンガンで肩を集中砲火した。ヒビにダメージが加わったため敵は体勢を崩した。

「俺たちも行くぞ！」

「はい!!」

翡翠や久下も一旦大橋をその場に残し、健治に任せて攻撃に加わった。そして一通り撃ち尽くした。

「やったか？」

一行は固唾を飲んだ。しかし、肩から今度は紫のツタのようなものが現れた。

「そんなバカな！」

「どうやらパワーアップしてみたみたいだが、全体的に縮んだみたいだな。」

すると追跡者がツタを振り回し走り出して近くの電柱に傷をつけた。

「おいおい、なんてパワーだ！スピードも段違いで早くなってやがる！」

久下はすぐにハンドガンで応戦するも、敵にまるで効いておらず、追跡者がツタを振

り回すとのび太たちは吹き飛ばされ、壁などに激突した。

「ママぁー!」

「何か策はないのか!?このままじゃ……くそッ、弾切れだ!」

追跡者が振り返って歩き出した。

「ここで、終わりなのかよ!」

その時、追跡者めがけて、1本の矢が突き刺さった。

のび太たちは息を飲んだ。

「おいおい、大丈夫か?」

「大橋さん!」

大橋は重症だったが立ち上がって息を切らしながらだが生きていた。

「生きてた?」

「あの時確かに脈は止まってたのにどうやって復活したんですか!?大橋くん!!」

「俺自身あの時逃げようとしたから直撃はなんとか避けられたんです。けど、それで気

絶しちまって体が強いショックを受けたから仮死状態ってやつになったんですよ。」

「良かった……てつきり危ないんじゃないかと思った……」

「つていうか、こいつどうすんだ?」

追跡者は矢を抜いて立ち上がった。

「ああ！忘れてた！しかし！」

大橋はもう一発心臓めがけて撃った。

「D A A U A A A！」

2発目の矢で追跡者は致命傷を与えられ、ふらつき出した。

「やったか？」

「まだだ！早くあいつにトドメを刺すんだ！いまがチャンスだ！」

「んじゃ、こころは……」

「俺たちが決めるぜ！」

〈ブレイク！グレネードドリム！〉

〈ブレイク！ファットショット！〉

弾丸が一直線上に放たれ追跡者の四肢に炸裂弾、焼夷弾、閃光弾、冷凍弾そして硫酸弾が発射され、晴夫のファットショットで撃ち抜かれ、倒された。

「D E A A …… A A ……」

「やったか!?!」

「もうそれいっのやめとけ……フラグだから……」

晴夫は安雄のフラグを立たせるような発言にウンザリしたのか肩に手をポンと置いた。

「リベンジは果たしたぜ！」

「それじゃあ、家に行こう。もう午後になってる。日が暮れる前に早くしないと。」

追跡者を倒したのび太たちは休む間も無くすぐにのび太の家へと向かった。

そして一行はのび太の家に着いたが、その様子を見て息を飲んだ。

「これは…家が、焼けてる…」

のび太の家は最早家と呼べるかどうかかわからないくらいに二階がほぼ全焼していた。

「そういえば、あの時の様子は確か至る所に火の手が回っていた…」

「くそ！……まで来て…」

「そ、んな…」

のび太はショックのあまり気絶した。

「のび太君!？」

「のび太君!？」

のび太はそのまま眠りについた。

28話 狙撃手を追え

のび太が気絶してからしばらくしてのび太はゆっくり目を覚ました。

「……は？」

「目が覚めたみたいだね。ここは君の家だよ」

近くには出木杉と白峰と赤田が座っていた。

「よう…目が…覚めたみたいだな」

3人の表情からはまるで光が消えたような感じになっていた。

「そうだ！僕の部屋は？」

のび太が起き上がったが出木杉が唇を噛み締めながら言った。

「今安雄くんとドラえもんくんと翡翠さんが見に行ってるけど…2階は完全に焼けていたよ…」

「そんな…」

一方庭ではジャイアンが失意の感情のまま壁を叩いていた。

「クソツ！クソツ！何でこうなんだよ!?!」

「ジャイアン！もうやめなよ！君の手が血まみれだよ」

ジャイアンはずっとコンクリート製の扉を叩いていたためすでに右手には血が大量に出ていた。スネ夫は殴られたくないので、後ろから声をかけることしかできなかった。

「そうよ！もうやめて、あなたが一人気負って背負わなくたっていいのよ？」

晴海もジャイアンの横に立って止めた。

「俺は！俺はっ！」

ジャイアンはススキが原でアンブレラに母と父それに妹を喪った。さらにR市でせつかく脱出を約束した仲間も喪い彼の心は不安定なものになっていた。

「ジャイアン……」

「今は、そっとしておこうぜ」

ジャイアンは再び壁を殴り始めた。

一方、台所では青木は原稿用紙を使って小説の原稿を書いていた。

「全く……青木さんはこんな時によく小説なんてかけますね」

翡翠は軽く呆れており、笹木は少々苛ついている。そんな中でもマイペースな青木はペンを置いた。

「まあ、最近増えてきたしな俺のファンが……それにこういう時こそ自分の楽しいことをやって辛いことを忘れるってもんだ」

青木はそう言いながら、お茶を飲んでゐる。

「そういうものかな！僕にはよくわからないよ！大体今のあなたは緊張感が足りないよ！空気を読んだらどうなんだい!？」

笹木がバンとテーブルを叩いて立ち上がった。青木を非難した。

「笹木さん！青木さんも彼なりに悩んでゐるんです。」

「ツ！すいません…！」

廊下から富藤が現れた。

「でもこれから私たちがどうするのかしらね？もう切り札もないしアンブレラとの戦いに終わりは来るのかしら？」

「そんなこと後でいいだろ。みんな今悔しがってるんだ。これからのことなんて考えられるわけねーだろ。そのうちまた何か策が見つかるさ」

青木は原稿用紙にもすごいスピードで書きながらそう言っていた。

そして、一階の和室では、のび太達は消沈していた。

「僕たちは一体何のために…！」

「のび太君、あのね…b」

その時一発の銃声が聞こえた。

「危ねえ！」

白峰がのび太をその場からずらすと床が抉られていた。

「なんなんだよ……」

「どうした！なんかゴツツデカイ音が聞こえたで！大丈夫か!？」

赤田たちが騒ぎを聞きつけるとさらに銃声は響いた。のび太たちは素早くその場から退避した。

「先ほど銃声が聞こえたかが……まさか!」

赤田が外を見渡した。しかし、家らしき場所ばかりで怪しいところは見られなかった。

「んな馬鹿な！こんなところに人なんているわけねーじゃん!」

ジャイアンたちも家の中に入って隠れた。

「ちくしょう!何者だ!」

「さて!ここから逃げよう!下手したら全滅する!」

安雄の言葉を聞いた出木杉が手を突き出して首を横に振った。

「……いや、逃げる必要はないよ。敵は正面から撃つてきている。もし奴がアンブレラの刺客だとしたら奴らの情報を聞き出すいいチャンスだ。」

「出木杉の言う通りだ!アンブレラは正面からゼッターぶちのめす!ゼッター許さねえ!!!」

ジャイアンは怒りながら表に出た。その豹変ぶりに晴夫と安雄は眉を潜めていた。

「なあ……ジャイアンだけど何時ものジャイアンじゃないな。」

「そうだな晴夫、けど今はそつとしておこう。ジャイアンが今こんな感じになつてるのはさきつとアンブレラへの恨みと目的失敗にイラついているからだよ。心配されるのも無理はないよ」

「どこから撃つてきてるんだ！」

久下たちも様子を伺うが相手の位置を把握できずにいた。

「狙撃手はきつとこの家の一直線上にいるはずだ！この居間が見えてかつ遠いところから見ると敵は高いところから狙つてると見て間違いない！射撃の腕はイマイチそうだがな。」

一方、のび太の家から950mの海幸荘にて一人の女兵士が狙撃していた。

「すべてかわすとか信じらんない。新型B・O・Wのテストに來たと思つたらまさか我が社で指名手配中の奴らに出くわすとか最悪。ああ！それにしても、日本はジメジメしてほんとやだ！早くシャワーでも浴びたい……」

のび太たちはその後のび太の家の近くにある高いところすなわち海幸荘から狙撃されてるとあたりをつけて目的地まであと300メートル地点まで向かった。

「どうする？迂闊に近づくのは難しいよ。」

「ここは、なるべく少人数で動こう。大人数だと誰か1人がやられてそこから全滅する場合もある。」

大橋の提案をしながら一行は車の車体や壁に隠れて狙われないように会話をしていた。

「健治くんを考慮するとそれがいいと思う。敵も負傷したやつから狙われるとなると真っ先に健治くんかもしれない。」

「ではまず、私と笹木さんと久下さんで行きます。私たち3人は素早いので大丈夫です。」

「おいおい！なんでおれまだ…」

「いいから行きなさいよ！ジツとしてでもいいことないんだから！」

富藤に久下は背中を強く押された。

「いででで！押すなよ！」

翡翠たちは近くの車の陰に隠れながら入り口に着いた。

「来たか！まずは3人！」

サーシャが射撃しようとするすると3人は近くの障害物に隠れながらやり過ごしていた。

「くそッ！」

サーシャが連射したが3人は障害物を利用してサーシャを攪乱した。

（どうやら、敵もそれほど腕じゃないようだ。さっきは不意打ちつてのもあつたけど、敵に対してだと一気に弱体化するタイプのようだね。これならもらつた！）

笹木が一気に他の2人を抜き去つて一人で海幸荘に到着した。

「まさかここまで来るとはねえ……こうなつたら仕方がない。切り札を使いますか」

サーシャはこれ以上の追撃は無理と判断したため一旦部屋を出た。その間にものび太たちはゆつくりと海幸荘に集結した。

一行は銃声が聞こえなくなつたのを聞いて素早くロビーに着いた。あたりはもう日がほとんど西に傾きかけ、このままでは暗くなつて一気にのび太たちが追い込まれることになるのだ。

「んで、どうする？ 敵は近くにいるかもしれないから逃げられないように幾つかのメンバーに分けよう。」

白峰が辺りを見回しB・O・Wがないことを確認した。

「んじや俺は裏口に行くで！ 何人か頼むわ！ 俺一人じゃ、しんどいわ。」

「俺が行くぜ！ 奴らだけはこの俺の手でゼツテーぎつたんぎつたんにしてやる！」

「僕も行くよ……」

「俺も行こう」

（ジャイアンのことだから危ないことをしそうだしね。）

スネ夫と晴夫は他のメンバーに首を縦に振った。

「それじゃあ僕はここで健治くんを守りながら待機してるよ」

ドラえもんが健治をソファアームに座らせた。

「俺もだ。ドラえもんばかりには任せられないさ。」

「俺はチョツチ疲れたから休むぜ」

「右に同じ、だいたいこんなところに関しては大人数で動くこと自体効率的じゃない。こういう狭いところでできるのは探索か負傷したやつを護衛くらいだろうぜ。この俺の勘だ！」

ひとまず、裏口待機班はジャイアン、赤田、スネ夫、晴夫に決まって裏口に回った。

そして探索班はのび太、大橋、出木杉、聖奈となった。

探査班が行動しようとしたらハンターが現れた。

「くっこんな時に！」

ハンターが部屋に近づくとカチツという音がして部屋が爆破された。全員身を守るなり、耳を塞ぐなりにして爆音を目の当たりにした。

「耳が痛いわ……」

「おいおい、罨かよ……」

「しかもバラバラになつてゐる……一体誰が？」

笹木がハンターの死体を指差した。

「この状況なら当てはまるやつなんて決まつてますよ！ 笹木さん！」

富藤が固唾を飲んで近くのドアを開けた。しかし中には人がいなかった。

「アンブレラの人間の仕業か！ でもどうやって通つてけばいいんだ？」

「何かいい方法は……」

すると翡翠は紐を発見した。

「これを使って開けてください。そうすれば大丈夫だと思います。大丈夫！ 映画ではこの方法でどうにかしてました！」

「んじゃ、やってみるか」

青木は早速近くのドアのトラップを紐で解除した。

「これで先に……」

「まだだ。階段のがある。あれはおそらくワイヤーに触れると爆発するんだろうな。まあ、以前こういう小説を書いていて大体わかる」

今や売れっ子小説家の青木優作の勘は当たっていた。よく目を凝らしてみるとワイヤーらしきものが張られているのが分かった。

「ならこれで！」

大橋はワイヤーを根本から剣で切断した。Tウィルスの完全適合者なら触れずに根元を壊すのは造作のないことだった。そして4人は数々の罠を解除して3階に着いた。

「着きましたね…」

「だが気を引き締めたほうがいい。あれだけの罠だ。きつと向こうはかなりの腕前の軍人に違いない。」

「ええ、そうですn…」

ドアがぱたんと開くとサーシャが現れた。

「…あの〜」

のび太が確認で声をかけるとサーシャが狼狽えた。

「g s w t j y j u ?」

のび太は何を言われているかさっぱりわからないが一応英語で話している。そしてサーシャはすぐさま裏口へと逃げ出した。

「待つてくださいい！」

「大橋、裏口に連絡しろ！挟み撃ちにしてやるんだ！」

裏口ではジャイアンたちがスタンバイしていた。

「ジャイアン！例の奴がもうじき来るらしい！準備しといてくれ！」

「ああ！」

するとサーシャが現れた。そして狼狽えたようにあたりを見回した。

「てめーか！銃を捨てないと撃つぜ！」

「ストッププリーズ！ドンドンムーブ！プリーズ！」

ジャイアンがサーシャを睨みつける中、スネ夫は完全に手が震えていた。

（先回りされた？）

「動くな！」

「畜生！よくも俺たちの街を！みんなを！！殺してやる！」

「おいジャイアン！」

青木たちが追いつくとジャイアンが射殺しそうになっているのが見えた。

「落ち着け！そいつには聞くことがある！」

「ジャイアン…青木さんの言う通りだ。悔しいけどこいつをやったら僕等もこいつの同

類になる…」

「…わかった」

不機嫌そうに武器を下ろした。

「コウサンシマス…ウタナイデ…」

その後サーシャは一階に連れて行かれた。

（どんだけ間抜けなのよ…私…）

29話下水道

一行はサーシヤの尋問をしていた。サーシヤはすでにのび太達のことと今回の任務を全て自白した。のび太たちは現状アンブレラに追われていることを知った。

「アンブレラにあんたたちのことは知られている。もう逃げられはしない…精々足掻いてみるのね…フフ、クハハハハ!!!」

サーシヤは笑っていた。

「うるせえ!」

一発サーシヤの顔にジャイアンの鉄拳が飛んできた。

「ゴブヘ!」

のび太たちは一階に降りてこのことを伝えた。

「本当だと思ったら逃げましょう!」

「翡翠先輩の言う通りだよ。何時までもここにいるわけにはいかない!」

「逃げるといつても…どこへだ!」

「そうだ! 久下の言う通りだ! こいつの言ってることが本当なら…」

「俺たちはアンブレラを完全に敵に回したんやで! 逃げ場なんて…あらへん…」

サーシャの言葉によりのび太たちの団結に亀裂が生じ始めた。

「とにかく僕たちの隠れ家に戻りましょう。静香ちゃんや太郎君を置いてきた以上もしかしたらアンブレラは2人を人質にとるかもしれない。」

「ああ。そのほうがいい!!」

「家に残してきた子たちも心配だしね。ここにいるのは危険よ……こいつの仲間が来るかもしれない早く離れたほうがいいわ!」

白峰と晴海も首を縦に振った。

「でも途中で彼女の仲間と遭遇したらどうするの? それにもうすぐ日が暮れて夜になった。迂闊に動いたらほぼお終いよ?」

咲夜が外を指差した。街中も現状、敵が徘徊しており大変危険な状況になっていた。

「だが、一晩過ごすのだってきついかもされない。恐らく奴らは、すぐにでも駆けつけに来そうだ。何かいい逃げ道はないのか?」

健治が立ち上がった。

「ひとつだけあるが乗るか?」

そして一行は健治の賭けに乗って下水道から脱出しようとした。

「暗い……懐中電灯を持っていて正解だったよ。」

その時ハンターの鳴き声が聞こえた。

「なるべく固まって動こう。バラバラに動くのはこの状況じゃあ危険だ。」

そして一行は隣町に避難を開始した。

「出たか！」

安雄のグレネードで遠くのハンターを一撃で倒した。

「どんなもんだい！」

のび太達の武器はドラえもんにより、銃で撃った時音が鳴らないように改造した。

「うん？」

その時久下が寝ている敵を見つけた。

（奴らか……ここは一応……）

久下はそう言うとは発か銃撃した。

「どうした？」

「敵がいたが、俺が倒した。」

そして一行は出口あたりに着いた。

それから歩くこと数時間、のび太たちはついに出口に到達した。

「明るくなってきた……」

「うん？なんだ？」

「なんか変な影が見えるな…」

晴夫と赤田が前の方に先行すると2人はワニのようなB・O・Wを発見した。

「う、う、う、うわああああああ!!!」

「新手の！まさかこんなところにまで！」

ワニがのび太たちに襲いかかった。

「一旦退こう！」

「何言ってるんだ！この状況下で逃げろってか!?!」

笹木の意見にジャイアンは唯一反対だった。

「逃げるといっても逃げながらガンガン打つんだよ！奴の移動速度は遅い！だから後退しつつ一斉に攻めるんだ!!」

一行は後退したがハンドガンやマシンガンから銃弾を発砲した。

「どうやらこいつの皮膚は固いようかも知れへんがこれだけの人数で押されたんや！敵じゃありまへん、トリガー!!」

<ブレイク！ウエーブショット!!>

赤田のウエーブショットでワニは顔面を攻撃され怯み出した。

「止め喰らえ！」

大橋は数力所にボウガンの矢を放った。全て急所だったのかワニのようなB・O・

Wは倒れた。

「やったの!?!」

ワニはピクリとも動かなかった。

「どうやらここいつもここを彷徨ってるうちに衰弱してたそうだな。」

健治が後方で構えながらふうとため息をついた。

「つてか、すぐそこ出口だったんだな…」

下水の手口は街の外とはいかなかったがだいぶ外側につながっていたため、のび太たちはなんとかススキが原を出すことに成功した。しかし、彼らは同時に逃げることもできない現実を噛み締めその場を後にした。

同じ頃、アンブレラの傭兵集団でもある、UBCS

(Umbrella Biohazard Countermeasure Service)の一行が日本に到着しようとしていた。目的はのび太たちの確保などである。

機内ではリシングスキーが不機嫌そうに隊員たちをにらんでいた。

「機嫌直してくださいよ隊長。」

「ふん…んで、何なんだよ?」

「はっ、はい!!」

エスターはリシングススキーの眼力に恐れをなし地図を開いて、女の写真を見せた。

「日本のスキが原で消息を絶ってしまったUSSサーシャ隊員の搜索任務です。チームで調査に当たったんですがその一人から期限過ぎても残っていたのを本部が聞いたそうです。どうやら定期的に連絡していたようですが…」

「途絶えて心配になったと…」

エスターがリシューツアに言葉を遮られたものの、説明を続けた。

「それに国内の戦闘員がおらず最寄りの国とかの実働部隊が…」

「アタシ達のことかい？」

「そして到着したらエージェントが案内するようです。名前はトルルーバ？何て読むんだこいつら？」

「鳥柴だ…」

セイカーが報告書を盗み見て答えた。

「お前日本語できんの？」

「よし。通訳担当、お前な」

「あんた何カ国話せるんだい？」

「そういうの終わってからでいいですよね」

「…何でもいいからさっさと終わらせてから来てくれ。俺のピルツが飲まれたらどうす

るんだよ」

「日本にも美味しい酒はいっぱいありますよ日本酒って行ってをしてもなんでも温めて美味しく飲めるとか、それに飯も美味しいですよ。」

「銃無くても治安がいいいいそうよ終わったら遊んで帰ろうや！」

飛行機は着陸した。

30話 夜戦

「まったく、ジメジメして蒸し暑いな。」

「そうですね隊長。日本だけなんか気候が違う感じがします。」

空港に着いた4人は日本の気候にうんざりしていた。

「ちやうど雨季らしい。全く、雨ばっかで嫌になるな。」

「すまない遅れた。」

セイカーが遅れてやってきた。

「遅いぞ。税関にでも捕まったか？」

「帽子と財布しかないのになんで捕まるんだ？それにお前は何故こんなところに来てまで帽子を被ってるんだ。」

「ごだわりでしょうね。バンダナ常につけてるようにね」

「やかましい。このバンダナフェチめ。」

結構ワイワイしているUBCSにこんな声が聞こえた。

「ススキが原調査団の方々いらっしやいませんか？」

「おーい俺たちだ！」

小柄そうな青紫色の髪の女性が迫って来た。

「確かセイカーさん、リシューツアさん、エスターさん、ヤノフさんと…ラジツスキーさん？つて、違う違う！リシングスキーさんだ！これは失礼を…」

「もうやだ…日本なんて…」

リシングスキーは滅多に名前を間違えられなかったうえピルツも飲まれたのだろうというシヨックで軽く不貞腐している。

「大丈夫ですか？」

「隊長なら多分大丈夫です。というわけで、早速例のアレを」

「ここだと目立つので移動しながらということ…」

リシングスキーたちは鳥柴のの車でススキが原周辺に向かっていった。

「今、ススキが原にいる自衛隊の3分の2は撤退しましたが警備は依然危険です。あなた方は警備の緩いところから侵入してください。本部曰く、たとえサーシャさんが死んでも資料さえあればいいそうです。」

「そうか、終わったら美味しい酒の店を頼む」

「はい、お任せください！」

UBCSはススキが原に侵入し、寝ているB・O・Wを通り過ぎて海幸荘に入った。

「どこか？」

ドアを開けるとそこにはサーシャが縛られていた。

「こいつが…おい起きな！」

サーシャが目を覚ました。

「ああああ!!私は死んだのね…さようなら…世界」

リシングスキーは呆れてため息をついて少ししてからサーシャの頬を殴った。

「んいでっ！」

「大丈夫ですか? ってそんなことより例の書類とかは?」

「盗まれた…例の奴らから…」

サーシャは頬をさすりながら仏頂面を浮かべた。早速UBCSはこの事を鳥柴に連絡した。

「なんですかくそれは? そんなの知れたらあなたたちや私たちが危ないですよ。じゃあ、一旦戻って来てください。あとサーシャも連れて来てください。」

「だ…そうだ。」

一行はしばらく黙るとリシートアは突然銃を構えた。

「こいつ…殺してやる」

「おいおい、よせ。そんなことよりもリシートアとセイカーは前方の安全をエスターと

ヤノフはこいつを俺とでエスコートするぞ。それと、後で覚えとけ…

(助けて…)

リシングスキーに睨まれサーシャは萎縮した。

UBCSたちはススキが原を正面から脱出を図った。幸い敵は皆寝静まっており、ほとんど襲つては来なかった。

「ハンターだ…眠つてるみたいだ。邪魔ね。」

UBCSの銃は無音に改造され、うまく隠れながら動いているため、ハンターは何処にいるかするか分からないのでほとんどが瞬殺された。

「もう時期出れるな。」

「DAAA!」

すると背後からのび太が倒したはずの追跡者が現れた。

「死に損ないが!くたばれ!」

シヨットガンとマグナムを連発したが撃ったが撃った傷がすぐに治ってしまった。

「おい、てめえも働け」

「は!!!」

サーシャも脳天にライフルを撃ったがそこは紫の触手の残りでガードされたがすぐ

に壊れた。

「ヤノフ、アレを使え！ 奴は弱っているからあれで木っ端微塵に消しとばしてやれ！」

「はい！」

ヤノフのRPGロケットランチャーにより木っ端微塵に消しとばされた。

「にしても何故生きてたんだ。奴は報告によると死んだはずだが……まあいい」

リシングススキーたちは前方にいたメンバーと合流し街を脱出した。その様子を黒ずくめのローブを着た何者かを見ていた。

「テストはまあ成功か。ネメシスの復活能力には改良の余地ありだが。さて、彼らはどのように動くかな？ 面白くなってきたじゃないかフツ、ハッハッハッハ！」

夜の街には笑い声が響いた。

31話 捕縛

ホテルのとある一室ではUBCSと雨沼に鳥柴が会議のようなものをしていた。

「まずは非常に嬉しくない報告をします。実はUSSのサーシャ隊員の書類ですが、コピーされてマスコミに匿名で送りつけられました。しかしこちら側の人物によりその証拠は揉み消されました。」

「マジですか？危なかったですね」

鳥柴が緊迫した表情を浮かべた。

「さっき聞いたところによると本社から例の一团をなんとかしないと強硬策も取るようです。実際、今北海道で開発された新型ウイルスがどこかに運ばれ、それで日本各地の怪しい都市や街に手当たり次第、ウイルスをばら撒くそうです。」

「なんだって!?!まさか、そいつらのためだけに無関係の人々を大量虐殺するってのか?」「まあ、奴らは日本なんてどうでもいいって考えてんだね。まあ、奴らのビジネスは日本じゃ苦戦しているって前に来たけどね」

「反吐が出る。」

セイカーは感情は表に出していないが、他のメンバーには怒っていることは分かっている。

た。

「…主題に入りましょう。先日工員が調査したところ連中のアジトらしきもの発見したそうですが正確な位置をつかめていません。ホントはもつとゆつくりと探したいものですがモタモタしてしていると連中に感づかれて逃げられる可能性があります。少し下衆なやり方ですが、今回はそのうちの4名を捕獲しようと思います。連中を拷問なり薬で白白させるんです」

そう言うのと静香、聖奈、赤田、久下の写真を見せた。実は地元の人々から彼らの目撃情報が多数あるからだと言ったと鳥柴が説明した。

「全くもって最低の作戦だな。まあこうでもしないと短時間で終わらないって言うのが現状だからな。」

「でその詳細は？」

「まず4名を追いかけます。誘拐し残ったメンバーはある特定のポイントで捕まええます。作戦は私のほかにサーシャさんお願いします。あなたには責任があります」

「了解」

サーシャは少し不機嫌そうに返事をした。

そんなこともつゆ知らずな聖奈たちは近くのスーパーから食料を買っていた。

「すっかり遅くなっちゃった」

「…」

「どうしたんですか久下さん？」

久下が暗い表情のまま歩いてきたのを聖奈が気にかけてた。

「…いつたい、いつまで…この生活を続けるんだ？唯一希望だったタイムマシンもなかったしアンブレラを完全に敵に回した。果たして逃げ場なんてあるんだろうか？」

久下から気力が失われていた。一行に沈黙が訪れた。

「それでも私たちは生きていくしかないと思います。戦ってばかりであつたとしても。」
静香も作戦失敗を聞いて気力が失われてはいるものの、まだまだ希望を捨ててはいなかった。

「そうだな、そう思っても仕方がないか…」

「まっ、アンブレラぶっ倒すまでは頑張りましょうや。せやけど、こないだ出木杉が送った資料はだめだったんかな？」

「言われてみればそうですね。ニュースでも挙げられていませんし」

すると4人は目の前に車を発見した。

「道路の真ん中に、迷惑な車だ。他の車のことを考えているのか。つたく、俺は交通課じゃないんだぞ。よし、通報しとくか」

「いや、通報するんですかい？」

車の中から男が1人現れた。

「うん？」

するとあたりには軍人らしき男と女がいた。

「まさかこの人たち…!？」

その時静香がヤノフによりつかまってしまった。

「静香ちゃん!!ここは俺が食い止める!早よみんなのところに戻ってこのことを報告するんや!源は俺が助ける!」

「きちんと戻って来いよ!」

「1は確保。2、4は例のコースに3はあたしらで捕まえる!」

男女が久下と聖奈を追いかけたが赤田が立ちはだかった。

「こんな時に一体何のようや!悪いけどここから先は通しまへん!」

リシングスキーと格闘を繰り返して広げほほほ互角だったが、赤田は人数の少なさに違和感を感じていた。

(なんで人数が少ないんや!?!もしおおければ今この場で俺や久下たちを楽にまとめて捕らえられるのに…まさか!そうとしか言いようがあらへん!敵も二手に分かれている!まずい!このことを2人に伝えへんと!)

油断したところにセイカーのスタンガンで赤田は捕らえられた。

「エスターとセイカーは追え！」

「うまいところまで誘き寄せてくださいよ」

久下、聖奈は裏路地から逃走していたが敵がいたるところに配置されていた。

「別れよう！別れたほうが確実に捕まる可能性を下げる事ができる!!あとで合流を忘れるなよ！」

「では後で!!気をつけて！」

聖奈は走った。すると近くの車からエスターが現れた。

「見つけたぞ！おとなしくしろ！」

「いやっ、離して！」

聖奈はエスターが捕まえようと触ってくるのでとうとう堪忍袋の尾が切れた。

「触らないでこの変態!!」

聖奈が勢いよくエスターの股間を蹴った。

「うっ、うっ、うっ、うわあああああ!?!」

突然のダメージにエスターは狼狽えて無防備になった。

(このアマ……俺の???を……を!!!
???を!!!)

「エステルは悶絶しているがそんなことは御構い無しな聖奈は足を振り上げた。

「もう一発……！」

「やっやめろそれだけは！」

慌ててたのでエステル自体、言語が伝わってるのかどうかを完全に忘れていた。

「何言ってるのか全然分かんないわよ……このど変態……！」

必死の懇願虚しくエステルは股間を思いきり蹴られ、あえなくエステルは悶絶しながら気絶した。

「ふん……！」

「いたぞ捕まえろ……！」

「まずい……！」

その後聖奈が逃げるとそこには一人の女性がいた。

「おや？誰ですか？こんな所に子供が来るなんて変ですなぁ？」

女性は鳥柴であった。彼女がアンブレラの回し者だと知らない聖奈は助けを求めた。

「助けてください！あの人たちが！」

追いかけていた連中が聖奈を追ってきた。

「なんですかあなたたち！こんな小ちゃい子を追い回すなんて！！これ以上騒ぐんなら人

を呼びますから！」

連中は立ち去っていった。

「ありがとうございます。そうだ！早くこの事をみんなに！」

「おやく？お困りのようですね。さっきの人たちもいるでしょうし、私が送って行きましようか？あなたを送るのに住所を教えてください。」

「本当は教えるのはあれだけど、みんなが危ないので教えます。」

聖奈は住所を教えた。

「そうですね……では……」

鳥柴が聖奈を送ろうとしたその時、後ろからサーシャがスタンガンで聖奈を感電させた。

「え……何が？」

聖奈が気絶してしまった。

「確保です。アジトを……特定しました。」

「ああ、そうか。こっちももう一人を捕まえた。どうやら刑事のようだ。まあ、関係ないな。」

鳥柴は気絶した聖奈を見て暗い表情を浮かべた。

「どうした？」

「子供に手をかけるのって……いつ私は人の道を外れたのでしょうか？」

「私もあなたもこういう仕事に入った以上はもう人でなし。諦めな。」

サーシャが聖奈を担ごうとする中忠告した。

「そんなことは今、考えないようにしろ。」

「それより隊長、早く離脱しましょう!!騒ぎで駆けつける奴らもいるはずです!」

リシングススキーたちは静香、赤田に久下そして聖奈を捕らえて尋問を行わずして、のび太たちのアジトを突き止めた。

(やれやれ、こんなんじゃないやあ実家に帰ったときに胸を張って報告できませんよ……姉さん……)

捕縛から約数時間後のアパートでは戻らない4人に対して皆不安を覚えていた。

「4人とも遅い!」

「ああ、のび太の言う通りだ!何かあったんじゃないやねえのか!」

「……あと5分して4人が戻って来なかったら探しに行こう。」

「でも何かあつてからじゃ遅いんじゃないやあないか、出木杉?」

その時ピンポンと鳴った。

「すみません宅急便です。森山さんのお宅ですね?」

鳥柴は宅急便の配達人を装い待ち伏せしていた。当然近くにはUBCSたちも突入準備をしている。

「違います。森山さんは別の所です」

「おかしいなあ森山さんの住所はここなんですけどね。住所が変わって届けられなかったってことではんことかちよつと持ってきてくれませんかね？」

のび太が外に出た。

「はいどうぞ……つてうわあああ！」

「!?何があつた!?!」

閃光手榴弾が投げられ、のび太たちはあつという間にとらわれてしまった。

32 話まさかの共闘作戦

ホテルの一室では、UBCSたちが任務成功により軽い飲み会をしていた。

「このガキが！よくも私をあんな目に…」

サーシャはジャイアンに殴られた上ススキが原に放置された恨みで頬を引つ叩いていた。

「そのへんにしましょう。大人気ないですよ。」

「鳥柴、美味しい店はあるか？明日ぐらいにも食べに行きたいんだか…」

UBCS達は勝利の余韻に浸っていた。別室には大橋、出木杉、太郎、青木と他の女子メンバーがまとめて牢獄らしきところに幽閉されていた。

「クソツツ！捕らえられちまった…」

大橋だけTウイルス適合者のため嚴重に鎖で縛り付けてあり、必死に千切らせようと試みるもなかなか切断できずにいた。

「いいか、お前たちはこれから本部に付き出すと言われてるがお前は特別だ。完全適合者だからなあ。じゃあ、鳥柴さん俺は酒でも飲んでるぜ。後であんたも来な」

「はい、エスターさん。それでは」

「もしかしてこれで僕たちの人生は終わったんじゃ…」

「諦めないでください、笹木さん。」

ため息をつく笹木を翡翠が励ました。

「そーそ、そのうち新しい展開が来るだろう。この状況じゃよくあるパターンさ。安心しな、俺の勘はよく当たる。」

青木だけは特にパニックを起こしていないどころか涼しげだった。

「そうあつて欲しいわ。」

大橋は嚴重に捕縛されているのを見て鳥柴が、

「まあ、おとなしくしている方があなたにちつては最善ですよ。」

とパソコンを開きながら言った。

「クソツッ！俺は雪乃さんを守ってくれって言われてんだ！あの人のためにおまえらには従わねえ！何があつてもだ！」

大橋は鳥柴に遠吠えに近いように叫んでいた。

「そうですか、雪乃さんですか。って、どうして私の名前を!？」

「はあ?! あんたが雪乃さん?」

二人は互いに質問で返したのでしばらく沈黙状態になっていた。

「何? さつきつから沈黙状態になつて?」

「二人同時に喋るからそうなるのよ」

咲夜は呆れながらそう言った。

「まず、大橋君から話したらどうですか?」

「ええ、そうですね。それじゃあ……」

大橋はこれまで起こったことを全て話した。

大橋は北崎が自らに起こったことと雪乃自身をまもってほしいと言うこともしつかりと伝えた。鳥柴は鳥柴、亜紀と彼女は歳の離れた姉妹で、家があり裕福でなく鳥柴が5歳の時に亜紀がとある日を境に家族と連絡が途切れ、その後彼女の死を知ったことも話した。

「姉さんがそんなことを……私をまもってほしいって……亡くなる前から良心的で私の憧れた人のままだった……やっぱり変わってなかった。」

鳥柴は目に涙を浮かべていた。

「そうです。ですから、俺はここを出たらあんたをまもってみせます。たとえば、俺自身にこれから何があっても……」

「大橋君……」

「どうかあたしたちが捕らえられてる以上無理なんじゃない?」

「そうでした……!!」

富藤のツツコミに大橋はハツとしてどうか脱出しようとした。その時ドアをヤノフが開けた。

「鳥柴さん、その人たちを連れて早く地下に！大変なことになりました。」

「一体何が？」

「それは後で話します。」

ヤノフによるとのび太たちやUBCS達のいる街にて北海道で開発された新型ウイルスの実験を行うので待避せよと言う内容であった。本来、アンブレラは事前に周辺にいる社員には実験内容を伝えている。しかし、彼らは自らの私兵であるUBCSを消耗品のように扱って利益を得るのが目的だということでのび太たちやUBCSたちのいる街だけには伝えていなかったそうだ。するとセイカーが何かを鳥柴に伝えた。

「何を話してたのだろうか？」

「さあな、ろくでもねえことじゃねえの？」

のび太たちは自分たちを捕らえて散々暴行を働き、アンブレラの手先でもあったUBCSたちを睨んでいた。すると鳥柴が一行の前に立ち話し始めた。

「えーつと、私たちはアンブレラに見捨てられようです。そのリシングスキーさんはアンブレラは連中を捨て駒のようにして俺たちを抹殺しようとしたらしいそうです。それで彼はアンブレラと戦うって言っています。あと、サーシャさんも連中に加わるそ

うです。」

「んで、奴らは俺たちと手を組んでアンブレラを倒すそうだ。そう言ってたんだろ？」

青木は小説家なのでリシングスキースキー達の言っていることは表情からして容易にわかっていた。

「俺は嫌だ！アンブレラなんかと組めるか！大橋さんの約束が関係してるがアンブレラは俺たちの街を壊したんだ！」

ジャイアンはUBCSたちを睨みつけたが、UBCSたちは任務に従ってないため知らん顔を浮かべていた。すると、出木杉が立ち上がった。

「僕は組むよ。ここぞじつとしてるよりはずっと良い手段だからね。」

「正気か出木杉!？」

ジャイアンが動揺すると、出木杉に乗せられるかのように白峰たちもUBCSたちの方へ向かった。

「ここにこもるのもあれだしな。」

次々と動く仲間たちを見て安雄も頑なだった表情を崩して走り出した。

「なんなんだよ！この…行かない奴は馬鹿みたいな雰囲気は！ついてつてやるよ、この野郎!!」

「大丈夫なの、安雄君？安雄くん、無理してるんじゃない？なんかソワソワしてるってい

うか…」

「晴海が心配そうに安雄を見つめたが晴夫がため息をつきながら大丈夫だろうと言った。

これで、ジャイアン以外のメンバーは皆UBCSと協力することが決まった。しかし、ジャイアンだけは頑なだった。

「おまえら正気か!? 気でも狂ったのか!? こいつらはアンブレラなんだぜ! お前ら揃いも揃って腰抜けになったのかよ!」

「ジャイアン! もうやめようよ! アンブレラだからって言って復讐しようって考えるのは! ここにいる人たちだって危害を加える気は無いって信じようよ!」

のび太がジャイアンを説得しようとしたがジャイアンはそっぽを向いた。

「お前らはまだ良いきさ。俺はそいつらを信じられない! そいつらのせいで、ススキが原にR市は…!」

「良い加減にしてよ!! ジャイアンみたいな強いガキ大将がいないと僕は一生腰抜けだ。なのに今の君は僕よりももっと腰抜けだよ! こんな僕だって組むって決心したのに…!」

のび太はジャイアンを見つめている。

「なんだって?」

「だってそうでしょ!!それにジャイアンはひとつ間違いを言ってるよ!この人たちは僕らの町やR市を滅ぼしてなんかいない!!確かに捕まっちゃったけど。だけど、信じないのは違う!!ジャイアンも守るものがあるなら意地を張るのはやめようよ!!」

「そうだよ、ジャイアン!!ジャイアンがいなきや僕たちジャイアンズはどうなるのさ!!スネちゃんず?ヤツスーズ?そんなのどれもしっくりこないよ!!」

スネ夫ものび太同様に声を荒げた。

「そうだ!!僕たちはみんなで生き残るんだ。君がいなくなっただって君の両親はきつと怒るよ!!何やってるんだって!」

ドラえもんもジャイアンを見つめた。それから皆一人一人ジャイアンの名前を言いながらゆつくりと頷いた。

「もしかして剛田、おまえは忘れてるんじゃないのか?一番大切なことを。」

大橋がゆつくりとジャイアンの方に歩き出してポンと手を置いた。

「…俺は…」

(俺はなんのために戦ったんだ?)

そんな中ジャイアンは戦いを思い出していた。そして過去を思い出す中で最後に浮かんだのは仲間の笑顔だった。

「そうだったのか。まさか、のび太に諭されちまうとはな。いいぜ。その前に……」

ジャイアンは笑いながら立ち上がって、サーシャに近づいた。サーシャもムツと言いながらジャイアンと向かい合った。

「さつきは悪かった。すいません……」

ジャイアンが頭を下げた。

「気にしちやいかんよ。それにあたしもやりすぎたよ。いくらだけで酔ってたからつてやりすぎた。」

サーシャはジャイアンが謝ってるのは分かっていた。

「いやいや俺の方が」

「いやいやあたしだ」

2人はひたすら自分が悪いと言い合っていた。その光景に全員から笑みがこぼれた。

「もういいだろ。とはいえ、そこの嬢ちゃんすまなかった。任務とはいえひどいことしたな。」

エスターは聖奈を散々触ったお詫びをした。

「いいですよ。変態さん。」

聖奈はものすごく怖いオーラーのようなものを浮かべながら笑った。エスターは内心まだ根に持つてるんだなと軽く後悔した。

(はあ、俺ってついてねえなあ…)

「その前にこれを…」

ドラえもんは全員に翻訳コンニャクを取り出した。

「なんでそんなものを持つてるのドラちゃん？ポケットはもう壊れてたんじゃ…」

「実はススキが原でポケットの残骸があつたんだ。その時道具は取り出せないか試したんだけど運悪く出たのがこれだったんだ。結局その後ポケットから道具は出せずじまいだったんだ。」

「コンニャクですか…じゃあ、UBCSの皆さん。そちらのロボさんがお近づきの証に食料を上げるそうですよ!!」

そういうとUBCSは渋々コンニャクを取って食べた。

「悪くない味だ。もつと食いたいくらいのうまさだな。」

リシングスキーが満足そうにうなづいていたがリシューアとヤノフは少し不満そうな表情を浮かべていた。

「そうかい？私はちよつと苦手かな。この水っぱい感じはどうにもねえ…」

「はい、自分も同じく。」

「そんなことより俺は酒が飲みたい気分になるんだ」「ぼくらの言ってること分かりますか？」

のび太がエスターの言葉を遮った。

「おおー、分かる分かる!!」

ヤノフが首を縦に振った。

「凄いもんだ。本部じゃ狸呼ばわりだがこんな高性能な道具を持っていてロボットなんてな。まるで夢でも見ているようだ。それじゃあ、約束しよう。俺たちはこれからお前らに協力しよう。」

リシングスキーが一言言おうとすると青木は手をそつと差し出した。

「なんのつもりだ？」

「これは協力の握手だ。俺たちは共通の敵を持っている。共に戦おうぜ!!これはその証だ。」

「フツ、いいだろう。それじゃあこれからよろしく頼む。」

二人は全員のまえて握手を交わした。ここにのび太たちチームバイオとUBCSの共同戦線が貼られた。

33話 3度目の脱出

のび太たちは地下のシエルターから脱出し前方を弾丸に余裕のあるのび太、安雄、UBCSサーシャ、ジャイアン、スネ夫、雨沼、青木の前方班に、残りのメンバーはそれについていくことで決定した。それに当たって、前方班は町の地図を渡された。

「とりあえず、移動には車が必要です。車なら町の外に素早く出られますので、最低でも2台か3台はお願いします。」

鳥柴が町の地図を皆に見せて特に人口が偏ってるであろう数力所に目印をつけた。

「なあ、俺らの乗った車はどうしたんだ？」

「2台ともとも任務終了でアンブレラに返したんです。支部長には任務終了の後には必ず返すよう言われたので：もう少しズラしてればどうにか奴らから借りパクできたかもしれませんね。」

リシングスキーマの質問に対して冷静に答えた鳥柴は歯がゆい表情を浮かべた。

「そうとわかったら、まずペアで行動しよう。固まって動く時間がかかる。あと、なるべく町の中心だけに限定すればきつとあるはずだ。」

青木の提案の元各自でペアは以下のように決まった。

リシングスキー、ジャイアン、サーシャは町の東側を、安雄とリシューツアは南側、のび太とエスターは北側に散ってそれぞれ車やバイクなどの類を探していた。残った青木とヤノフにスネ夫、セイカーの4人後方の護衛に回ることになった。

リシングスキーたち3人は町の東側にあるシヨップセンターに来ていた。しかし車のほとんどは無くなっており鍵が見当たらないので収穫があまりないままであった。

「ダメね。車が見あたんないわよ。って、ここにいるのはゾンビどもか…」

サーシャが駐車場を歩いていると前方には死体を食っているゾンビを4体発見したので他の二人は武器を構えた。

「んじや行くか!」

「それは俺のセリフだ!」

リシングスキーはマシンガンで、ジャイアンはマグナムで迎撃した。サーシャはハンドガンでゾンビの動きを避けてゾンビ2体の頭部を狙った。リシングスキーもマシンガンで集中砲火を放ち、ジャイアンのマグナムでの追撃で残ったゾンビをあっという間に倒した。「あんた、さすがだな。やつぱプロってだけはあるのかな?」

「スネ夫ってあの子のこと? まあこっちはプロだし。あんたも凄いよ。とても学生とは言えないわね。」

「なんだか、俺たち気が合いそうだな！サーシャさん！」

「サーシャでいい。」

「つたく、お前らなあ、仲良しこよしは控えろよ。いつ死ぬか分からねえんだ。」

リシングススキーが銃を構えながらあたりを慎重に見回していた。

「あつ！隊長、あれ使えそうじゃないですか？」

サーシャがドアの空いたままな車を発見し、指差した。

「本当だ！」

3人は黒いくるまを確保した。

「よし、鍵が刺さりっぱなしのようだな。悪いが借りるぞ。」

ジャイアンが近くの死体にそっと手を当て車の座席に座った。

「よし！ここは俺たちの勝ちだな！ありがとう、2人とも！」

「ああ!!」

ジャイアンはサーシャと友情の握手を交わした。リシングススキーが運転を始め他の後方移動組の元へと向かった。

「よし、行くぞー！」

安雄とリシートアは町の北部を探索していたが2人の関係は微妙なものだった。

「待つてくださいよ！リシーの姉さん！」

「ヤノフみたいに言うな！」

二人は言い合いながら緑の車を1台発見したが近くの通りからケルベロスとキメラがあらわれた。

「んじや行くわよ。こんなところで油売ってたら他の奴らに置いてかれるよ。」

「へいへい！」

安雄のグレネードランチャーとリシーツアのハンドガンの連携を仕掛ける前に車めがけて走り出した。

「車に乗ったらやつらを炸裂弾で遠慮なく吹っ飛ばしな！」

「オツケー姉さん！」

リシーツアが車に乗り込み安雄は助手席から5発の炸裂弾でキメラたちを吹っ飛ばした。ついでに建物をいくつか壊したのは内緒である。

「つたく、もうちよい真剣に狙いな。」

「んなこと言うなよ、とりあえず他に連中に連絡をとるぜ。」

安雄が無線機で連絡を取った。

「こちら安雄、状況は？」

「はい！のび太くんとエスターさんがなんとか車でとりあえず使えそうなのを2台確保

しました。けど何人かとは突然に建物の爆発で逸れてしまいました。」

「くそッ、さっきの爆発はそれか！」

「とりあえずあたしらで残りは探す！だからあんたらはどこにいるかを教えてくれ！」

「リシューアは通りを曲がって残りのメンバーの捜索に当たった。」

「急がないとね！」

大橋と鳥柴は他のメンバーと分断されゾンビに囲まれてしまった。二人とも応戦したが一体のゾンビが大橋に近づいた。

「危ない！くっ！」

大橋を庇い鳥柴は肩に傷を負った。鳥柴がゾンビを撃破したが倒れてしまった。大橋はなんとかゾンビたちから鳥柴を連れて逃げられた。

「大丈夫ですか？くそ！そこを退け！」

ゾンビたちをけん制した大橋は鳥柴を背負いながら近くの路地裏へと移動した。幸い敵もおらず鳥柴を一度そこに休ませた。

「急がねえと！けどこれじゃあ……」

鳥柴は傷が少々深く、軽く止血した。そして息も荒くなって行った。

「ハアッ、ハアッ、もう私をここに置いていってください。」

「いきなり何をー！」

「嘯まれたんですよ？もうゾンビ化は確実です。…余ってたら一発お願いします。姉さんのところに早くいけたほうがいいと思うんです。だから…！」

鳥柴はアンブレラにいたのでTウイルスの脅威は知っていたのだ。しかし大橋は逆に鳥柴を担いで行つた。

「何を?!もう私は助かりませんー！」

鳥柴が払いのけようとしたが大橋はその手をぎゅつと握つて離さなかつた。

「雪乃さん、俺は言つた筈ですよ。守るつて。それに一つ俺たちに対して疑問点があるんですよ、分かりますか？」

「バカは風邪を引かない…でしたっけ？」

「そういうことですよ。あなたは俺らをすぐに殺さないどころか逆に生かしたじゃないですか。本部の命令があつたつてのにね。」

つまりあなたも立派なバカですよ。だから、一緒に生きましょうよ。」

「大橋君…ありがとうございます」

その後二人は無事合流した。鳥柴はその後ドラえもんや静香の処置で止血され風邪薬を飲んで眠つた。

「とりあえずここから離れるぞー！」

そして一行は車を見つけ、無事に町を脱出した。5年後の希望を失ったのび太たちと
UBCSはアンブレラを倒せるのだろうか？

34話 猛獣島

一行はその後東京の骨川財閥のアパートに泊まっていた。ここがこれからの拠点となるのだ。のび太たちはUBCSたちと手を組んだが、アンブレラに対する策が浮かばずにいた。青木とリシングススキーの話し合いが決まった。

「よし、みんな集まってくれ」

「俺たちチームネオバイオはアンブレラに対して今は対抗策は一つしかない。向こうに先手を打たれるなら、こっちから攻めるってことだ。」

「それでこれからどうするんです？」

「それについてはどうやらリシングスたちにいい考えがあるそうだ。翡翠、頼む。」

翡翠は自分のパソコンにUSBメモリを差し込み映写機に移した。するそこにはとある島の施設のような物の詳細が出てきた。

「次はここから奴らの新型ウイルスのサンプルを盗む。」

「え？ どういうことですか？」

「それは今から私が説明します。」

鳥柴が部屋に入って来た。

「雪乃さん。怪我は大丈夫ですか？」

大橋が数日前から安静中にしていた鳥柴に駆け寄った。

「ええ、そのどら猫さんのおかげで傷口が痛くも痒くも無いです。」

「いや〜！それほどでも〜」

大橋はホツとした。その後鳥柴がその画面に映つてる島について説明した。

その島はアンブレラの機密情報や生物兵器研究がされており表向きはただの社員のリゾート地になっているそうだ。

「でだ。作戦だが、どうやら鳥柴さんは一回そこに行つたことがあるそうだ。そこはど
うやら東側と、西側そして施設の背後が比較的警備が緩いそうだ。だから話し合いの結
果、チームを4つに分けることにした。」

「その残った1チームは何をするんですか？」

スネ夫が挙手して尋ねた。

「簡単に言うとう留守番です。近くの海に停泊して連絡があるまで待機しているのが役割
です。あまり停泊してるとまずいですし」

「でも、船はどうするんだい？確保する当てが無いんじや動けないんじや無い？」

笹木の些細な疑問に対して一行に沈黙が続いた。

「……」

一行にはあてがなかった。盗むのはさすがに停泊した時に警察の世話になり、アンブレラにも勘づかれるためのび太たちにとつても不利になつてしまふからだ。

「…僕にいい考えがある。骨川財閥の力で船を2隻確保するように親族に交渉してみよ。骨川財閥自体も結構アンブレラの影が伸びつつあるし、何よりパパとママを殺害したことからきつと味方にはなるはずだよ。」

「でかしたスネ夫！」

その後各メンバーはリシングスキュー、青木、エスター、鳥柴がリーダーで決められた。

リシングスキューチーム（侵入班）

赤田、安雄、リシューツァ、久下、富藤、出木杉

青木チーム（施設爆破班）

大橋、咲夜、笹木、白峰、ヤノフ

エスターチーム（工作班）

のび太、ジャイアン、晴夫、晴海、セイカー、サーシャ

鳥柴チーム（後方支援班）

雨沼、太郎、静香、翡翠、スネ夫、健治、ドラえもん

数日後一行は船に乗りうまく上陸できた。

「あの島だな。幸い海への監視は届かない。今のうちに別れるぞ！幸運を祈る！」

リシングスキーたちは各地に散らばって作戦を立てた。そして鳥柴たちは近くの小島に停泊し通信を取り始めた。

「皆さん聞こえますか？」

「ああ!! エスター、チーム全員集結。これから移動する。」

「同じく青木小隊、こつちもスタンバイオーケーだ！」

「リシングスキー小隊、現在移動中だ！まずは俺たちが侵入する！」

リシングスキーたちは背後から攻撃を仕掛けるべく岩肌がゴツゴツした地帯からゆっくりと進行していた。

「いいか、なるべく固まって動くんだ。不用意に離れて敵に近づくのは危険なことだ。」

一行は山を登りながら施設に侵入しようとしている。しかし、安雄や久下や出木杉は早くも息を切らしていた。

「疲れた〜！」

「はあ…はあ…しんどいな。」

「疲れたなんて言っていないで歩きな！あたしらが上手く奇襲出来なきや作戦失敗の恐れがあるんだよ！」

安雄はハイハイと呟いて歩き始めた。富藤や赤田はそれなりに大丈夫だった。

「今のところ監視はおらん。このままなら普通に行ける。ってことでおっ先にく!!」
「おい！抜け駆けはやめとけ！」

赤田が真つ先に飛び出して行った。

「なっ……！」

赤田の目の前にはなんらかの機械を被ったティンダロスとハンターが待ち受けていたが赤田を素早く久下がリシングスキーのところまで引つ張つて戻したため気づかれ
てはいなかった。

「まったくリーダーの俺を出し抜くのは結構だが、死んでも知らんぞ。」

リシングスキーがぼやきながらこつそり敵の背後に近づいた。

「どうすんだい？リシンググ？」

「そうだな、どう思う出木杉？」

「敵は5体くらいです。あの犬以外は問題ありませんから1対1に持ち込みましょう」

出木杉の作戦にリシングスキーは笑みを浮かべて首を縦に振った。

「いい作戦だ。よし、それじゃあ行け！散らばって各個撃破だ！」

リシングスキーは近くにいたハンターに手榴弾で攻撃を仕掛けた。それに続き富藤、
久下、赤田も攻撃を仕掛けた。安雄はティンダロスのところに向かっていた。

「よし、やってやる！」

安雄は炸裂弾に変えた。すでにリシューアもティンダロスと戦っていたがそれに構わず安雄は横からグレネードランチャーを構えた。

「食らいやがれ！」

ティンダロスは安雄のグレネードをかわして後退り、グルルと様子を見ていた。

「あんたバカか？正面の弾丸を躲しやすいつてのがティンダロスの特技だって知らなかったのかい？」

「……忘れてました。」

「あのバカは何やってん？」

赤田は呆れながらハンターをマグナムで瞬殺した。

「まあそう言うな。ミスは誰にだってある。と言うか、さっき突っ走ってたお前が言えたことでもないだろう。」

攻撃をしながら久下はそう言っていた。出木杉もハンターを倒したので富藤の援護に向かった。

「富藤さん、だいぶ苦戦してるみたいだ。援護しないと！」

富藤と戦うハンターの色は青く、防御力が高いため苦戦しているからだ。

「固つたい！私、クジ運良くないほいわねえ!!この野郎ううう!!!」

銃撃を仕掛けても大したダメージも与えられず富藤も紙一重で攻撃をかわすがつま

づいてしまった。

「嘘でしょ!？」

「それならこれでどうだ!」

出木杉の奇襲でハンターも油断していたため攻撃を受けてよろめいた。

二人同時にホルダーに入ったすべての弾を頭に集中させた。青いハンターは倒れた。

「どうやら頭だけは弱いみたいだね。助かったわ、出木杉。」

「片付いたか。久下、リシューツアと安雄のそこに行くぞ!俺に続け!」

「おう!」

「トリガー!」

<ブレイク!グレネードドリーム!>

安雄の必殺技であるグレネードドリームがティンダロスを狙うが焼夷、炸裂はかわされたが硫酸と冷凍そして閃光は命中した。

「よしいまだ!リシューツア、久下俺に続け!同時攻撃だ!」

「ああ!!」

ティンダロスは油断したところを久下にリシューツアそしてリシングスキーの同時攻撃に倒れた。

「よし!あとは侵入だけだ!こっからが本番だ!!」

青木チームは西側の海辺から素早く移動して敷地内に侵入していた。しかし青木が突然何かを察知した。

「待て！・そこで止まれ！」

一行が止まると目の前が照らされていた。その先を見ると展望台のようなものが分かった。

「サーチライトか…これじゃ近寄れないよ。ここまでスムーズにきたのに…」

笹木は悔しそうに唇を噛んだ。

「別の道の方が良さそうだな。青木さん、別の道を探しましょう！」

一行は入り口に近づくのには回り道をしていった。

「にしても他のところを探すととなると遠回りにはなる。けどその代わり、それほどの監視が施されていないところがあるはずだ。そう簡単に見つかるだろうか？」

「なあに、最悪見つかったとしても俺たちが困になれば本部も俺たちを倒そうとするはずだ。あいつらの探索が楽になるはずだ。行くぜ、ヤノフさん。」

ヤノフが頭を抱えていたが白峰が肩に手をポンと置いて歩き出した。しばらく歩出すと岩場のようなところに出た。すると一行の目の前にB・O・Wが現れた。

「あいつはポスタル!? 確かあの時俺や安雄たちに倒されたはずじゃあなかったのか!？」

「あの主任がこいつを楽しみにしてるだとか言ってたよ。その証拠に体が白くなってる上、光にも強くなってるよ。だからあいつと同個体じゃない!」

ポスタルはよだれを垂らしながら見構えていた。

「どうします?」

「ああ、ここで戦うのはいいかもしれん。かといって大人数では奴らに勤づかれる可能性がある。しかし少数では…」

青木もどうすべきか手をこまねいていた。一行はポスタルとは戦ったことがあるがパワーアップされているかもしれないと思えば手が出せずにいた。

「…俺がカタをつけます。」

大橋が静かに進言した。

「大橋!いくら何でもそれは…」

笹木が反論したが大橋は鼻を擦って立ち上がった。

「こいつは強化型でも俺の因縁の敵であることには変わりがない。大丈夫です。倒したら合流するんで。それにこの中じや生命力は高いつて自負してます。死にはしませんよー!」

「…分かった!死ぬなよ!いざという時は連絡しろ!すぐに戻ってくるからな!」

青木は大橋を残し、他のメンバーと共に先に進んだ。

「さてと…：狗波のやつ余計なことしやがって。人にとって胸糞悪い奴をよくも…

いいぜ、かかってこい！もう一度この俺がぶっ倒してやる。お前にはこれで十分だ！」

大橋は銃をしまい、日本刀を構えるとポスタルも爪を剣状に変化させた。

「爪が剣になるとはな。だがな、俺はお前の知る大橋じゃあないんだよ！自分だけが強くなつたつて思わねえことだ！」

大橋はポスタルと剣術戦になり、Tウイルスによる異常なスピードがあつてかお互いに高いスピードを伴った激しい剣術戦になった。ポスタルは牽制用としてコウモリを弾丸のように発射したが大橋は臆せず1羽ずつ斬つていき大橋が先回りして背後を取った。

「輪切りになつちまえ！」

一瞬でポスタルがガードのために構えた爪を破壊し十文字に体を切断してしまった。

「やつぱり量産したのは基本弱いな。よし先に進もう。しかし、疲れた。まだウイルスの力を制御できねえな…」

大橋の因縁の敵だったポスタルは最早Tウイルスの力を得た大橋には相手として不足だった。大橋は改めて過去を超えたのだ。

エスターチームは東側の洞窟からじつくりと合流する場所に向かっていた。人が加えられていない地形を移動しているためか、道中敵はほとんどいなかった。一行がある程度進んだら大きな岩が道を塞いでいた。

「これじゃあ進めないじゃないか！どうすんだ？！」

晴夫がコンコン岩を叩いたり押ししたりしたがビクともしなかった。

「セイカー、あれを。」

セイカーは小型爆弾を取り出した。

「おい小僧この信管を回せ。大丈夫、俺が手順を教えてやるから。」

「ええ〜！」

のび太は信管なんて廻したところか触ったことすらない。エスターの無茶振りに当然のび太は驚いた。

「こういうのは経験だよ。何事に関してもだけど実践あるのみさ。」

「はい…！」

セイカーが囁いた。のび太はエスターに言われた通りに信管を回した。

「早く離れろ！」

指示通りに避難して隠れるとすぐに爆弾をセットした場所が大きな音を立てながら爆発した。

「鼓膜がどうにかなりそう……」

そして一行は洞窟を出た。幸い近くに格納庫があったため難なく忍び込んだのび太たちは合図を待った。同じ頃、リシングスキーチームがいち早く施設への侵入口を発見した。

「……か、よし久下！連絡を頼む！」

「ああ!!」

先に着いたりシングスキーチームは施設に地上階からエレベーターで侵入し、他のチームにもエレベーターの場所を教えた。十分後、青木チームもリシングスキーチームの後に侵入した。すると施設にアナウンスがなった。

「侵入者発見。侵入者発見。研究員は直ちに避難せよ。戦闘可能な部隊は出撃し侵入者を迎撃せよ。」

「派手にやっつてみたいだな。じゃあ俺たちはリシングたちのチームに合流するぞ。」

エスターチームも最後に侵入し、反撃戦が始まった。

35話 戦場の基地

地下基地はアンブレラ部隊やB・O・Wでいっぱいだった。ただ、施設内のB・O・Wは敵部隊と連携しているわけではなく、敵部隊はB・O・Wと戦いながらのび太たちチームバイオと戦っていた。

まずはリシングスキータちのチームが他のチームよりもいち早く侵入し、地下4階に爆弾を仕掛けたが仕掛ける時に監視に見つかりばれてしまった。

「さてと、ここの施設は広いな。確かさつき見た地図によると最重要研究室があるはずだ。

出来れば無駄な戦闘は避ける。いいな」

「んじゃあ、そうと決まったら即行動や！」

またもや赤田は飛び出そうとしたが、リシューツアにチョップされ部屋に戻された。

「あんたバカア？場所も知らないで突っ走ってどうすんだい！」

それに今は施設がざわついているから、下手に動いてごらん、このままじゃあんた真っ先に死ぬわよ！」

赤田はしよぼんとしてしまった。

「そないに青筋立てんでもええやないか…」

「ならモニター室を探しましょう。そこなら施設について把握できる。」

モニター室を目指してリシングスキーチームは走り出した。

エスターチームもリシングスキーチーム同様、メンバー同士の話し合いの結果モニター室を探していた。

「リシングならまずモニター室を探して制圧する気だ。最初に施設の大部分を探れそうなどころを制圧できればほぼほぼ勝ちが決まったようなものだしな。」

エスターと晴夫そして晴海、セイカーを連れて別の場所に向かった。

「やっぱり敵に人間もいるな…」

一行に兵士が現れ、武器を構えた。

「見つけたぞ！」

「くっ…」

のび太は武器を使うことを躊躇していた。ゾンビはともかく人を撃つなんてことはできないからだ。

「ほざつとしない！」

サーシャは兵士に2、3発発砲した。兵士は倒れて動かなくなった。

「のび太…気持ちにはわかる。けど仕方ないんだ。」

「それにここの連中は過去犯罪を犯したり、テロ活動を行いアンブレラにスカウトされた連中よ。次来たたら、倒しなさい。それに、生きるために…でしよ？まあでも手足を撃って動けなくするくらいはしときな。」

のび太も首を縦に振った。

「…いつ！」

兵士が立ち上がったがのび太がすぐに手首と足に1発ずつ放ちその場から走り去った。

「ふう、まずは一安心だな。」

ジャイアンが辺りを振り返った。

するともう一つの方を探索していた晴海から連絡が入った。

「こちら晴海！現在、敵と交戦してる。なるべく早く助けに来て！場所はセントラルブロックの通路！」

「お仲間からっていうなら、早く行くわよ！」

「おう！」

通信を終えた晴海とエスターとセイカーに

晴夫は隠れながら戦った。

「どうすんだ？ 奴ら機銃なんか持つてるから迂闊に攻撃できねえぞ。」

「さつさとでてこいネズミが！」

「おい、お前ら。俺にいい考えがある。俺の装備には閃光弾がある。こいつであいつらの注意を引く。それから一気にかたをつけるんだ！」

「はい！」

「行くぜ!!」

閃光弾を投げあたりが光ったあとすぐさま晴海たちが向かって攻撃しようとしたが兵士が別のところからやってきて取り押さえってしまった。

「くそっ！ まだ隠れてたのか！」

「おっと動くな！ でないとこの2人を殺しちゃうぜ！！ 大人しく……！ ぐはっ！」

しかし背後からのび太とジャイアンの攻撃で兵士は倒された。

「間に合った……」

「遅かったじゃないか。けど随分息切れしてるな。」

「まあね、走るの是不慣れだから……」

「悪いな、サーシャさん勝手に突っ走って。」

「別にいいわ、これで合流できたんだし。何はともあれというやつね。」

一行が合流して安心した途端、上から隔壁が降りてサーシャ側とのび太側で分断されてしまった。

「なんだ？分断されたのか！」

のび太が壁を叩こうとしたがセイカーに止められた。

「のび太君落ち着け！向こう側にいるエスターとサーシャはモニター室を探すはずだ。だったら、私たちはコントロールルームを探してこの隔壁を解除するんだ。それからでも遅くはない!!」

「そうしてちょうだい！そっちは人数多いから適当なところを探してちょうだい。」
「…わかりました」

同じ頃、青木チームは事前にもリシングスキークから研究資料を見つけたら施設を爆破させるように言われ、爆弾を設置する場所を探していた。

「爆破しろと言われても、どこから爆破させるべきかね〜」

「じゃあ青木臨時隊長、メンバーを分けましょう。早めに研究資料を手に入れるメンバーと爆破する場所を探すメンバーにです。」

「そうだな…笹木と大橋は俺とで、残りのメンバーはヤノフを筆頭に健治、咲夜、白峰で爆破ポイントをそれぞれ探してくれ。爆破設定時間だがリシングは15分にしろと

言っていた。そういうわけで解散！」

そして現在、青木たちは地下4階の広場において、ヤノフは爆破ポイントを発見した。

「さてと、あとはここだ。」

「にしても広いね。いつものパターンだとゾンビあたりが…」

すると床が開き床から巨大な人型のB・O・Wが現れた。

「フラグじゃあねーか！」

「こいつは新型か!？」

新型はコートのような物を羽織り、手にメリケンサックを装備していた。

「喰らえー！」

大橋はボウガンから矢を発射した。

コートの男は避けて真っ直ぐ大橋に殴りかかった。大橋がなんとか受け止めたが後

退りされた。

「のー！」

青木は改造ショットガンで男に足止めをするもそれでもコートの男は止まらない。

「これじゃキリないよ。どうする?」

「これを使うか！」

青木は2挺マグナムを構えありつただけの弾丸を発射した。マグナムでコートの男は

傷を負ったが今度は追跡者同様紫の鞭を生やしてきた。

「このあいだのあいつまりたいなのか! だった、トリガー!」

<ブレイク! ソニックショット!>

青木たちもブレイクトリガーで粘るが敵の耐久力に追い詰められていた。

「ならこれはどうだ!?! トリガー!」

<ブレイク! ミラーージュショット!>

目の錯覚で銃弾がどこから来るのかという感覚を鈍らせるミラーージュショットだったがそれでもコートの男は倒れなかった。

「……まだか!?!」

すると後方からロケット弾がコートの男を木っ端微塵に吹っ飛ばした。

「大丈夫ですか? 派手にでかいのがいましたけど……」

現れたのはヤノフたちだった。

「大丈夫だ。っていうかナイスタイミングだ。ところでもう爆弾をセットしたのか?」

「ええ大丈夫です。タイマーも設定しておきました。幸いなんとか近いところだったの
で……」

「そうか。じゃあ急いで資料室に向かうぞ!!」

その後青木チームは研究資料を探しに行った。同じ頃に、リシングスキーチームはモニター室を、エスターチームはコントロール室を制圧しエスターとサーシャは道中でリシングスキーチームと合流し、向かっていった兵士のほとんどが倒されていった。

そして島から離れたところで謎の人物がそれをどこから見ている。

「強化ポスタルや完成型タイラントも倒すとはねえ、さて……どうなることやら。ここから始まるのだ。我らの歴史が！アンブレラもこれで終焉だな。」

人物はパソコンでその様子を眺めていた。施設に侵入したメンバーは着々と施設の制圧が進んでいた。研究員はほとんど脱出し、兵士はほとんどがメンバーの返り討ちにあったり、B・O・Wにより殺害された。

リシングスキーチームは研究者を発見した。

「待て！」

「助けてくれ！頼む」

「そいつを渡しな！さもないと……！」

リシューアは近くにいた兵士を撃ち殺した。

「わわわ、分かった！ほらこれでいいだろう？頼む助けてくれ！」

研究員はサンプルを渡した。しかし、リシングスキーは武器を構えたままだ。

「お前はそう言ってどれだけの命を奪った？このクズが！地獄で研究してろ!!」

リシングスキーは発砲し、その場で研究員を殺害した。
「よし、他のチームと合流して脱出だ！」

一方セイカーはジャイアン、のび太、晴海と行動していた。

「これは…」

のび太は新しい資料を発見した。

「やったな！」

「じゃあ後はエスターさんやサーシャさんと合流しましょう。さつき連絡したらこの部屋に向かってるって言うってたわ。さつきk…」

するとセイカーはいきなり3人に武器を構えた。

「…君達はなんなんだ？君達は我ら軍人とともに行動できる上、とても一般人とは思えない。正直私は恐怖を感じてる。今は味方でもこの先敵対することになったら…」

「よせ！俺たちはそんなことしねえよ！」

ジャイアンの声でセイカーはマシンガンをゆっくり下ろした。

「気を悪くした、すまないね。気が弱いんだ。君たちの力は予想以上なんだが…」

セイカーが申し訳なさそうにハハハと笑っていた。

「大丈夫、私たちを信じて下さい。私たちもあなたたち同様生き残りたいので。」

その時、ドアが開くとリシングススキーたちがエスターとサーシャと共に現れたが、ヤノフが足を怪我して運ばれてきた。

「おい大丈夫か？しつかりしろよヤノフ！」

「クツソ、あたしのせいだ！」

「アネさんは悪くないぜ！」

話によるとヤノフたち青木チームはリシングススキーチームと合流してリシングスキー、安雄、リシューツア、ヤノフ、エスター、青木以外は脱出路の確保のため撤退することが決まり残ったのび太たちを捜索していた。しかしタイラントが現れなんとかタイラントから逃亡したがその際にヤノフが攻撃を受けて負傷してしまったのだ。

「もう、キツイです。うう…！」

「何言ってるんだい！こんなところで死ぬんじゃないよ！」

リシューツアは涙を浮かべながらヤノフの頬を引っ叩いた。しかしそれほどの力はいらなかった。

「どうする？もうヤノフはダメだ。止血しないともう…！」

「それはわかっている。けどもうこれじゃ助からない。最悪…！」

エスターとリシングススキーの会話を聞いていたのび太が立ち上がった。

「待ってください！ドラえもんならお医者さんかばんでなら応急処置くらいなら…！」

「ああ、ここももうじき爆破されるから、その案で行こう。リシング、ここまで来たらみんなで戻ろうぜ！」

青木の提案でリシングスキーはフツツと笑ってヤノフの方を見つめた。

「…セイカー、島を出てから近いところにある病院を探すようにお留守番たちに言っつけ。」

セイカーが病院を探すように言いながら一行はゆつくりと脱出をはかった。

36話 アンブレラ壊滅！

一行が施設へ脱出し港へ戻ろうとしている中、施設は爆発が始まった。それに構わずのび太たちが走り出して森に入ったところで一時待機していると通信が入った。今船が辺りに向かっていているため来たらずぐに帰れるように今のうちに体力を回復させようという考えだった。

「隊長、通信によると病院を発見できました！ここから脱出して？一時？間くらいです。」

「よし。脱出してドラえもんっていう狸もどきのかばんってヤツで時間を稼げそうだな。さてと、ヤノフ。今からお前の状態に關係なく命令する。”病院に着くまで死ぬな”いいか？」

「無茶ぶりですか？つたく、まあ頑張ってみますよ。」

ヤノフもやれやれと言いながら首を縦に振った。

「いい返事だ。よし行くぞ!!」

「リシング、私と安雄とサーシャは先に行ってくる。敵が潜んでるだろうからあたしらで始末してくるよ。」

「ああ、気をつけてな。」

3人は先行するが途中でハンターとの戦いによりリシューツアと安雄の行方が分からなくなった。その後サーシャだけと合流したりシングスキータちは予定よりもズレて島の入り口に待機していた。

「あいつらならきつと来てくれる。もう少し待って欲しいんだが大丈夫か?」

「ドラえもん、ヤノフさんの容体はどう?」

「うん、思いのほか致命傷だ。しかもウイルスのせいか徐々に足の一部腐敗らしきものが進んでる。安雄くんたちが早く来てくれるのを祈るしかないけど…」

展望台にいた久下が前方から何かを見つけた。

「大変だ!!施設から敵が溢れてる!このままじゃここにいずれ到達するぞ!」

「ちきしょう、やつぱり来やがったか!」

「こうなったら総力戦だ。武器を持つてる奴は前線に出ろ。それ以外は出発準備とヤノフの看病だ。俺たちで安雄たちの帰りを待つ!あいつらが無事戻れるようにな!」

青木の指示で表で見張りをしているジャイアンとスネ夫が攻撃を仕掛け、戦いは始まった。さらに増援も次々と駆けつけなだれ込んで来たハンターや亀のB・O・Wを牽制していった。

「こいつら！きつとまだこれだけの数じゃないはずだ！」

「この島から外には出すわけにはいかないね、ジャイアン！」

「剛田、骨川！話すよりも確実に奴らを倒すんだ！」

「はい！」

その横でリシングスキーとのび太はタイラントと向かい合っていた。

「なあ、あいつつてどこに行つてもいるよな。一家に一台タイラントつてヤツだな。」

「そうですね。でも、それよりもまずしつこいですよ。それにあんなの欲しがる人はまず無いですよ。だから終わらせましょう！」

「ああ!!片付けの時間だ！」

二人は武器を構えた。しかしタイラントは2体も現れ、1体はなんとか2人で倒せたが、この時点でほぼ弾切れになっていた。

「くそ、弾切れか！一旦戻るしか……！」

のび太が一度後退しようとするやと敵が追撃を始めた。

「よせ！そんなことしたら船内に敵が入る！下手な行動はよせ！」

いつのまにかほとんどの敵だらけとなったため、あたりはパニックになっていた。

「くそ、俺らがいければ！」

大橋たちも敵を撃破するが敵の数に押され始めて来ていた。その時、ハンターが海か

ら現れ、のび太を狙って来た。

「海から来やがった!クソツ!」

すると後方から、グレネードとライフル弾の攻撃により、敵のB・O・Wの軍団は倒れた。

「今のはまさか!」

「大丈夫かい?」

「アネさんさすがです!」

「うっさい!ヤノフじゃああるまいし。」

「無事だったんだな!」

リシングスキーがパアツと明るい表情を浮かべた。

「ああ!はぐれはしたが、合流するのに全体のほとんどが落石とかで倒れてくれたからサクツと合流できたんだよ!」

「よし行くぞ!」

のび太達は勢いを取り戻して、敵に向かっていった。

船内では、乗っている者が狙撃することしかできずに少々力不足になっていた。その状況をもどかしく思ったのかヤノフが尋ねてきた。

「なあドクタードラえもん、俺はあと何発撃てますか?」

「よかった…」

ヤノフの一撃で軍団はほとんどが倒され残った個体も全てのび太たちが撃破し森の方に廃棄した。

「今だ、逃げるぞ！もうじき爆破の規模が最大になる！」

のび太達は船に乗り込み、脱出した。そして島から爆音が響いた。施設の爆破がさらなる爆破を引き起こすように青木が考慮した結果だった。

船内では戦いが終わり皆安堵のため息をついていた。

「終わった…」

「ああ、俺たち勝ったんだな野比。」

「けどリシングスキーさん。これからどうすんです？俺らみたいにマスコミにこいつを出しても圧力かけられておじやんですよ。」「それは正規のやり方だからだ。」

リシングスキーも喉が乾いたのかジュースを飲んで喉を潤していた。流石に酒までは揃えられなかったようだ。

「そーそ、マスコミなんかよりネットの掲示板で口コミや適当な機関に一齐メールとかでもどうにかできるわ。」

「まあ要は非合法で行くしかない。それでしかあいつらに一泡吹かせられんしな。」

「それで何か出来んならやろうぜ！やらないよりはましだ。」

「ジャイアン、いいこと言う。」

ジャイアンの一言に対してサーシャはグツジョブとサムズアップした。

「でもどうやって?」

「私と翡翠さんに任せてください。こう見えても私結構パソコン関係は詳しいですから!」

「じゃあ俺も手伝おうか?」

「いえ、エスターさんは休んでいいですよ。こっからは私たち後方支援班の出番ですから!」

船で休息しているのび太達の近くの島に一機のヘリが停泊し、中に黒いローブを身にまとったが一部始終を見ていた。

「まさか、彼らがアンブレラの兵隊と組むとはねえ…まさか彼女の妹も寝返るとは予想外だった。さてと彼らのお陰でアンブレラはほぼほぼ衰退してきたし、いいだろ。」

男はローブを脱いだ。男の正体はアンブレラのB・O・W開発主任の狗波冥月だった。

「あの香港とアフリカの騒動は我らが煽ったし、アンブレラの弱体化は決まったも同然。あとは全世界にたいして無差別に機密情報を拡散するだけだ。まあ、今回のおかげで“ブラーガ侵略”の良い前哨戦になった。」

狗波はノートパソコンを閉じて、パイロットに出発させた。狗波は獅子をかたどった指輪をはめのび太たちの船を見てほくそ笑んでいた。

「では帰ろう。我らの―――」

「教団に」

のび太達は到着後急ぎヤノフを病院に搬送した。

「あの、ヤノフさんの容体は？」

医師が出てくると鳥柴は間髪入れずに尋ねた。

「はい、無事です。ただ、足は腐ってしまったので切断するしかなかつたです。リハビリは数ヶ月かかりますね。それにしても、彼は運がいい。適切な応急処置がされてい
て、私でも驚きました。それではこれで」

「ふふ、ぜひともその人に感謝しないとですね。最も人だけかは微妙ですが……」

ヤノフは今部屋でぐっすりと眠っている。

「そうか、ヤノフは無事だったんだな！」

「これで一安心ね。あとは例のブツを……」

「みんな!!大変だ!今テレビのニュースで!」

青木が部屋に入ってきて来た。

「なんだってんだよ……」

リシングスキーたちUBCSのメンバーがリビングのテレビを見てハッと息を飲ん

だ。

「ここで臨時ニュースをお送り致します。かの製薬会社アンブレラの非合法研究がヨーロッパ政府の調査によつて発表されました。それから各国政府に対して匿名でアンブレラに非合法研究の数々がさらに暴露されました。」

「なんだつて?」

「この影響でアンブレラは国連総会により、各国の支部に営業停止命令が発せられました。」

「これで終わったのか?」

「しかしなぜ……?」

その後各国政府よりアンブレラは業務停止命令を発せられ壊滅したがアンブレラの残党は反旗を翻し、各地でバイオテロを引き起こそうと企んだが、国際バイオテロ防止組織であるBSAAにより鎮圧され、アンブレラは滅んだ。しかし、数ヶ月後に新たな脅威が迫ることはまだのび太達は知る由がなかった。

一方アメリカではある男がアンブレラ崩壊のニュースを見ていた。

「ようやく、奴らも終わったか……これで傷も少しは癒えるだろう。」

男も浮かない表情で青空を見上げていると黒服の男が男を呼んだ。

「レオン・S・ケネディさん。お呼びです。」

「ああ…」

「レオン、君の任務だが、君も知つての通り娘をさらった組織が日本で発見された。君は直ちに日本に飛んでくれ。念のため今現在もアンブレラ関係の出来事もあつてBSA Aにも協力を要請した。メンバーとは現地で落ち合つてくれ。」

「分かりました。それでは」

レオンは大統領の部屋を出た。

「やれやれ日本か…」

第3章完

設定（第4章）

第3章から2ヶ月後が舞台のびハザード版をベースにさせて本家バイオハザードからのキャラクターを参戦させ諸悪の根源の撃破が目的

バイオハザードキャラ（4）

レオンSケネディ（30）

イメージCV山野井仁

ライトイエロー

あのラクーンシティ事件の生き残り大統領の命令でUBCSのスカウトとアシユリーの救出を依頼される。

アシユリーグラハム（20）

イメージCV伊藤静

メチルオレンジ

ロスイルミナドス教団に攫われ彼らの陰謀の駒になりかけ今回のび太たちが救出する

クリス・レッドフィールド (32)

イメージCV東地宏樹

ワインレッド

レオンとは妹を介して知り合った。体格がゴツイ分パワーとスタミナに優れる

ジル・バレンタイン (32)

イメージCV平野綾

バイオレット

クリスの良き相棒でスピードとテクニックに優れている

ロスイルミナドス教団 (3)

スペインに本部を構える謎の教団。しかし、その影響力は裏社会で知られている。アンブレラに何名かスパイを送っていたことからアンブレラが創設したあたりから組織としての形がある模様

??

イメージCV銀河万丈

すべての黒幕

オズウェル・Eスペンサー (?)

イメージC V チョー

争いの世界をプラーガで変えようとしている教団のリーダー。性格は冷酷で役に立たない人物に関しては人間不信だが長年の忠臣に対しては信頼をある程度はよせている。狗波に教団員の管理を長らく手放させていたがプラーガの力で支配に近い形で今まで組織を維持し続けて来ていた。

狗波 冥月（43）

イメージC V 神谷浩史

元アンブレラのB・O・W開発主任であったが、本当は入社前から教団の野望のためにアンブレラの情報を横流しにし結果壊滅させたスパイ。彼の狂気はあくまで教団の野望の実現のためとサドラーへの忠誠というように分けて考えている。部下に関しては福利厚生を管理してサドラーを信じるように説得したり相談に乗ったりと尊敬を集めている。

第3章までの時系列

無人島出発日：2004年7月23日

― のび太たち無人島に出発する（同日朝）

― 赤田、青木が街に入る（昼）

― 街中でゾンビが目撃され、翡翠と笹木が町に入る（出発初日夕方）

バイオテロ1日目（7月24日）

― ゾンビが増え始め、街中で被害が出る（同日早朝）

― 住民の避難を開始したもののやはり避難できない事情を抱えた人々の保護を警察が行う（同日昼）

― 出木杉、金田、太郎に聖奈、健治、赤田が学校に避難（同日午後）

― ついには人以外の生物もゾンビ化（同日夕方）

― 人口の約4割が退去成功と判明（同日夜）

無人島2日目（1話〜12話：7月25日）

― 警察も生存者たちを集めるもすでにゾンビ化した人々により署が壊滅する（同日早朝）

― 学校の一階と二階以降が分裂、翡翠と笹木も脱出を試みるが逸れてしまう（同日朝）

― のび太たち帰宅&大橋、街に入る

― 青木が咲夜と合流（同日昼）

― のび太たち学校に避難（同日午後）

― のび太たち、探索を一通り終え、生存者たちと合流しゾンビ軍団からの逃走に成

功（同日夕方）

- ― 裏山の館に入って探索続行（同日夜）
- ― 金田の進言で地下研究所の探索を開始（同日深夜）
- バイオテロ3日目（第13話〜第15話：7月26日）
 - ― 洋館が謎の爆発をしたと同時にのび太たちの避難完了（早朝）
 - ― ほとんどの住民がゾンビ化し街が完全に封鎖される（同日昼）
 - ― 政府、アンブレラとの裏取引の元で今回の事件を伝染病として真実を隠蔽（同日夕方）

バイオテロ1ヶ月後（第16話）

- ― のび太たち、新しい住居と学校を提供される。
 - ― 久下、アンブレラの証拠を警視庁に提出するも根回しにより失敗し2階級特進
 - ― 青木、ドラえもん強化パーツの研究にかかる。
 - ― アンブレラ、今回の事件を受けてB・O・Wの管理に着目し再確認する
- R市バイオテロ1日目（第17話：2004年12月4日）
- ― ゾンビがすでにくつか発見され避難勧告が発令（同日朝）
 - ― のび太、大橋、聖奈、青木、ジャイアンの5人が街に到着してすぐに情報収集開

始（同日午後）

- ゾンビたちが増え始め多数の使者が出現しのび太たち、散らばって行動（同日夜）
- 大橋とのび太倉庫にて待機、残りの3人は戦いの最中、散りじりに（同日深夜）

R市バイオテロ2日目（17、18話：12月5日）

- 自衛隊が介入、晴海は友人たちと避難を試みるも何人が死亡（同日朝）
- 自衛隊が活躍するなかアンブレラも特殊部隊を出动させ鎮圧を図る（同日正午）
- ジャイアン、ホテルで身を隠すもバレて逃亡、同じ頃に青木は大鷹たちと合流（同日夕方）

- 倉庫に次々と負傷者が運び込まれ、のび太と大橋が動き、聖奈と合流
- ジャイアン、敵から逃げつつ調査を続行

— 晴海、警官に保護されるが発狂されあわや殺されかける（同日夜）

- 大橋たち、晴海と大鷹たち4人と合流しティンダロスと交戦するが榛名が殉職し脱出失敗（同日深夜）

R市バイオテロ3日目（19、24話：12月6日）

- 大橋のゾンビ化を阻止するべく動き出す（同日早朝）
- アンブレラ、R市を翌日の夜明けとともに爆破しようと動き出す

- ジャイアン、逃げ回るもとうとう弾薬が尽きる（同日朝）
 - のび太たちは地下施設の探索に入り、ジャイアンはテレビ局に避難（同日昼）
 - ジャイアン、増山と酒田と脱出にかけるが2人とも戦死
 - のび太たち、施設から資料を強奪し最後の救助ヘリでの脱出を図る（同日夕方）
 - のび太、ジャイアンそれぞれの最終決戦が始まり、勝利を収め脱出するもR市は夜明けと共に消滅（同日夜）
- 2章から3章の5年（25話）
- アンブレラに造反者が増え始める
 - ススキが原復興が少しづつ始まるのに備え現地を自衛隊が封鎖
 - のび太たちは支援金を受けて進学するなりバイトするなりをして生活しつつアンブレラと戦う準備を進める（2章から1年後）
 - リシングスキー、およびUSSの部隊がシンガポール沖で発生したB・O・W発生事故の鎮圧に成功（2章から2年数ヶ月後）
 - アンブレラ、商品販売においてアフリカおよび日本地区で苦戦
 - のび太たち、骨川財閥の後ろ盾を得てアンブレラの情報を掴む（2章から3年後）
 - ネットでアンブレラの良からぬ噂が流れ始めるも事前に訴訟を起こして防いだため真相を闇の中に送った（2章から4年後）

— 香港などでアンブレラの一部が反乱を起こすも部隊によって鎮圧される

— のび太たち、大鷹と連絡を取る

— サーシャ、部隊とともに新型ハンターの実験を行うも一人だけ残る

— ススキが原の自衛隊の半数が撤退し、のび太たちが動き、UBCSたちも日本へと向かう（3章開始時）

— ススキが原帰還（26〜30話：2009年4月24日）

— のび太たち、アジトから出発（早朝）

— 静香と太郎、囹役を引き受け後のメンバーは侵入（同日朝）

— のび太たちが侵入者と交戦しこれを撃破するものび太家が焼失したと判明（同日正午）

— のび太たちがサーシャに襲われるも逆に捉えて尋問を試みる（同日夜）

— のび太たちが下水道を移動する中、UBCSたちがススキが原に到着してサーシャと合流（同日深夜）

— チームバイオ再編そしてアンブレラ壊滅（31〜36話）

— UBCSたちが聖奈、赤田、久下そして静香を拉致しのび太たちのアジトを特定しその夜に強行突破される（2009年4月25日）

— のび太たちチームバイオやUBCSたちの街にTウイルスがばらまかれ多数の

死傷者が発生し共同戦線を組む（25日深夜）

― チームバイオ、しばらく身を潜めながら骨川財閥の協力でアンブレラの研究施設への報復作戦を試みる（2009年5月6日）

― 研究施設に侵入して何とか資料を奪い取るのに成功（5月7日）

― 何者かによりアンブレラ社の機密が漏洩して本格的に滅亡（5月14日）

― B S A Aがアンブレラの残党の征伐に当たる

そして最終章へ：

37話 新たなる脅威

アンブレラ壊滅から数ヶ月後のび太たちは警視庁に呼ばれた。その場には当然リシングスキーたちUBCSも含まれていた。

「一体警察が何の用だろうか？」

「なんでも、総監自ら俺たちに対して大事な話があるそうだ。」

「もしかしたら、僕たちのスキが原の復興についてかな？」

一行は会議室らしきところに入った。すると総監が笑顔で迎え入れた。

「やあよく来たな。本日来てもらったのは他でもない。入ってくれ」

別のドアが開き、金髪の外国人が現れた。

「誰だろうな？外国の人だろうけどなんか雰囲気凄そうな人だな。」

「うん、ハリウッドスターみたい。」

ジャイアンとスネ夫は小声で会話していた。「彼はレオン・S・ケネディでアメリカ合衆国から来たエージェントだ。」

一行が驚いたような表情を述べた。

「アメリカ合衆国から来たエージェントですか!？」

「これまたすごい人が来たものね〜」

「…やあ」

そう言うとき少しレオンは黙ってしまった。

「?もしかして日本は初めてですか?」

咲夜がどこかそわそわしたような身振りを見せるレオンに対して首を傾げた。

「ああ。すまない。初対面だって言うのにいきなりこういう態度で」

「まあ、いいっていいって!!」

青木がフレンドリーに握手を交わすがリシングスキーターたちUBCSメンバーは慎重そうな表情でレオンを見つめた。

「とういかなんでお前が来たんだ?」

「あんたはアンブレラでも有名人だったんだよ。あのラクーンシティからの生存者だって…」

「ツ!!すまない、あの時のことは思い出したく無いんだ。」

レオンは深刻そうな表情を浮かべた。

「おっと失礼。」

「実は今回君たちに協力を要請を頼んだのは今日本に留学中の大統領の娘のアシユリー・グラハムが謎のテロリスト軍団に拉致されたからなんだ。」

「大統領の娘を拉致!? おいおい、新しい小説のネタにしようと思ったんだがそんなことより、まずいんじゃないか!」

「小説はどうかってよりも青木の言う通りよ。」

「ああ。そんなこと起こったら、アメリカ政府が大変なことになるぞ!」

「今合衆国は大統領を追放しようとしている連中がいるから、首謀者の候補としてはおそらくそいつらだ。しかも奴らの活動を調べ上げたら奴ら、昔アンブレラと取引をしていたらしく、生物兵器を大量に所持してるようだ。しかも最近ではまた別の組織と結託しているようだ。」

「まあだアンブレラのB・O・Wが残ってたのか…やれやれ」

エスターが頭を掻きながらため息をついた。

「それで俺たちに協力を要請しに来たど?」

「ああ。そういうことだ。で、場所だが、場所は日本のM町というところだ。そこでは最近怪しい連中が出入りしてるそうだ。怪しまれないように表向きは観光という訳でそこを訪れようと思う。」

「分かりました!! 僕たちだつて生物兵器で家族を失つてる!」

「ああそうだな!! みんなやろうぜ!」

「おおお!!!」

ジャイアンの発言で全員レオンと共に作戦を遂行することになった。

そして数日後、人数が多いので各自別れて町に入るようになった。

最初のチームにはレオン、のび太、大橋、健治、聖奈、富藤、咲夜、太郎、サーシャ、鳥柴に決まった。他のメンバーは町周辺の警備や連絡でのび太たちとは？ 1時？ 間おきで遅れて侵入するようになった。

「こちらレオン。町に侵入した。」

「青木だ。今のところはどうか？」

「ああ、今のところは問題ない」

「俺たちは後5分後にリシング、安雄に静香、ジャイアン、出木杉、スネ夫そして白峰を連れてそつちに行く。」

「分かった。」

今回は太郎も前回と違って留守番せずに自分の意思で出撃するようにあおきに頼んでいたのだ。

「ていうか、なんでそのガキがいるんだい？ 最後の方に来ればいいんじゃない？」

サーシャがさりげなく太郎を見つめると太郎は小さくうなづいた。

「確かに僕はダメなやつでお荷物だ。でも、僕だって戦う！ いつまでも指を啜えて見て

るのはもうやめたんだ。僕はもう……泣かない！」

健治が勇敢そうな太郎を見て頭にてポンと置いた。

「太郎、お前を見直したよ。」

「そういうことなら頑張りな。決意は結果で表すに越したことはないわ」

「じゃ、行きましようか」

一行は辺りを見回しながら通りを歩いていった。それを何者かが見守っていたかも知らずに……

M町、人口は減少し数千規模の小さな町。そこに最近、謎の集団に加えて行方不明者が増加し指名手配中の犯罪者の目撃情報が流れている町である。レオン達は聞き込みなどをして謎の集団の情報を探したが一行に見つからなかった。この隙に青木チムにエスター、ヤノフ、久下、晴海、笹木、赤田、翡翠、ドラえもん、セイカー、リシューアも侵入した。一行は通りで見つけた男に話しかけた。

「すまない、ちよいといいかい？この人を知らないか？」

青木はアシユリーの写真を見せた。

「うるせえ、消えろ！つたく、イライラするんだよオ……」

「！：幾ら何でもそれは……」

白峰が男の言動に我慢ならず突っかかるうとした。

「白峰さん！悪かったな。みんな行こうぜ。」

青木達が背を向けると男がナイフを振り回して襲ってきた。

「なんの真似だ!?!動くな!」

忠告を聞かずになおも男は動く。男は静香を狙おうとしていた。

「動かないで!お願い!」

男の目には殺気が宿っていた。

「くそ、悪く思うな!」

リシングスキーマの一発で男は死んだ。人の死を目にして静香がショックを受けてしまった。

「もう…いや!戦いは終わったんでしよう?だったらどうしてまた戦うの?」

静香はアンブレラとの戦いが終わったのにまた人が死ぬことに耐えられなかった。

「静香ちゃん…」

「俺だって、心が痛むさ…だが耐えないとな。俺が言えたことじゃないが…」

「こちら青木。やむを得ずに一般人に発砲した。」

青木がレオンに連絡を入れる中出木杉は男の持ち物を調べていた。

「待ってください、この人は最近薬物販売で指名手配されていた犯罪者ですn一般人

じゃありません。どこかで見覚えがあると思えば……」

「だそうだ。そうか分かった。気をつけろよ。」

青木が通信を切った。

「早く見つけたい。そうすれば、全て終わる。」

静香は呆然としながら、そう決意した。

一方のレオンたちは暴徒に囲まれていた。

「何の用だ！」

レオンたちにまわりに凶悪そうな集団が囲んでいた。

「殺れ！」

「引き摺り下ろして細切れにしてやる！」

「地祭りに上げてやる！」

「ぶっ殺してやる！」

「やれやれ、とんだ歓迎ね!!」

敵が一斉に襲いかかろうと待ち構える中のび太たちも武器を構えた。

「そうですね。でもやるしかありませんね。」

戦闘が開始された。しかし、10人の前には30人の人間は相手にとって不足だっ

た。

レオンはともかく、他のメンバーは何度も死地を越えてきたのだ。

「そりや、そりや、そりやあー！」

富藤はナイフで交戦していた。

「ちよつと興奮してるんですか富藤さん？」

「違うわ。弾丸が勿体無いだけよ。」

そう言う間に太郎がマシンガンと格闘技で15人相手に難なく立ち回っていた。

「兄ちゃん達が頑張ってたんだ！僕だってやるんだよ！」

「太郎がいつの間にか強くなってる!？」

のび太たちは太郎の活躍に唖然としていた。

「全くだ。こりや俺たちの中で一番強くなるんじゃないのか？」

そう言つて、敵を全滅させた。

「ほとんど太郎君がやりましたね。」

「あたしらの戦い方を見ただけとはいえ、これだけやれるとは思わなかったわ。ガキ発

言は取り消すわ。」

「特殊部隊にスカウトしてみたいものだ。だがまあ拒否されると思うがな。」

一方、エスター達のチームはレオンと青木のチームとは別で町の外周を一周しながら探索していた。すると一行は謎の二人組に遭遇した。

「何もんだ？あんなたちは」

「クリス・レッドフィールドだ。こっちはジル・バレンタイン、俺の相棒だ。」

「ていうか、軍人そうな集団に子供が混じっているって一体なんなの？」

「一行は自己紹介をしていたら、今度はゾンビのような集団に囲まれた。」

「さっきのか…」

翡翠がため息をついた。

「自己紹介してるところなるって、どういうことですか？」

「さあな、空気読めへん性格ちゆうのはわかるわな。」

「やはりここには何かあるのか？」

クリスとジルが武器を構えた。

「行くわよ、クリス」

クリスは頭部に軽く発砲するとそこにパンチしそこにジルの飛び蹴りで倒された。

その生き残りに晴海がトドメを刺した。

「念のためですよ。」

「うっかりしてたな。お嬢ちゃん流石だ。」

「こつちも順調に片付いてます。」

「これは着ぐるみか？」

「この人は未来から来たロボットでして、一応ネコ型です。」

「可愛いわね。タヌキと言われるのが不思議ね。」

ドラえもんは、パワー手袋を左手に装備し右手に強化空気砲を装備して交戦していた。

「いや〜それほども〜！」

戦いを終えてエスターたちは向かい合った。

「どうか、あなたたちは一体!？」

「なんとか、いてこましたれたな。」

「安雄、あんたもやるわね」

「いや〜嬉しいね。アネサン。」

「アネサンじゃないっての。」

「もし君たちの仲間が居るなら早くそちらと合流したいんだがいいか？」

「ああ、いいぜ。」

エスターがその後通信を入れて一行は街の広場のようところで合流することを連絡した。

38話 新たなる敵

一行は屋敷のようところで合流した。

「クリスカ！」

「レオン！クレアが世話になったな！」

「へえ、クリスの妹と知り合いねえ。初めまして、ジル・バレンティンよ。」

クリスとジルにレオンは1人ずつ握手を交わした。その後のび太たちも一人一人自己紹介した。そして自分たちが何故銃を使えるようになったのかという経緯を話した。

「そうか、お前らも……」

「私たちと同じアンブレラの被害者だったのね。」

クリスとジルが顔を曇らせた。

「ああ、そのようだな。」

「何があつたかは今は聞きませんね。聞く気になれません。」

「そうですね。なんか辛そうです。」

「ていうかあんたらはなんで来たんだい？あんたら2人はBSAAの中でも指折りの隊員って聞くよ？」

「お前の言う通り俺たちは今バイオテロ防止を掲げる組織であるB S A Aに入っている。今回はエージェント護衛の任務だ。」

「敵は生物兵器を所持しているの。だから私たちの出番ってこと。」
「なるほど、そういうことだったのか」

エスターがうなづいた。

「というか、どうする？ 今回の敵はB・O・Wじゃなく人間だぞ？」

「確かに、相手の正体がわかってないってのが脅威ね」

「じゃあまずは全員を2チームに分けるとして、安全な場所に避難しよう。1チームにはその探索だ。んでもって、発砲は正体分かるまでなるべく避けるか!!」
「そうね。闇雲に攻撃をするよりはマシね」

その後、探索にはのび太、レオン、クリス、ジル、咲夜の少数に決まった。

「それで、どうするの？」

「町は広いから、なるべく、人が立ち寄らなそうな所を探そう」

「ああ、奴らといちいち相手してられんしな」

のび太たちは街中を歩くも敵を避けながらのため人が立ち寄らなそうな建物としてまず学校のような建物を発見した。

「僕らの学校に似ている…」

「…とりあえず、入るぞ」

学校内は閑散としており、ほとんどが荒れていた。

「ここはとつくに廃校になった跡地みたいなものか？」

「ええ、でも…」

上からアンブレラのB・O・Wのカメラが現れた。

「…いつは…」

「嘘でしょ!? B・O・Wは全部倒されたはずじゃ…」

全員キメラに発砲するがカメラはスピードに耐久性により富んでいた。

「もしかしたら、アシユリーをさらった奴らが所持してる個体だろうな！」

「このツ！」

クリスは足を引っ掛けて転倒したカメラに右フックを命中させ気絶した所にジルの銃撃を受けて倒された。

その後のび太たちは資料室のような部屋に入った。そこには、「0469」という数字が書かれたメモと金庫があった。

「4桁の数字に金庫…これはあれだな」

レオンはすぐに4桁の数字を入力した。すると金庫には何やらメモのような物があつた。

「これは…」

すると後ろから大きな音が響き、チェンソーを持った男が現れた。

「うんぎやややー」

「チェンソー!? あんなの当たつたら」

男は5人に斬りかかってきた。

「でも、ああいう武器は隙があるはず。そのタイミングで攻撃しましょう」

クリスとジルは隙を作るのにハンドガンで頭部を狙い、男は二人に斬りかかってきたが金庫を切つてしまい、チェンソーが抜けなくなったところを頭部にマグナムをくらい倒された。

「終わった…」

のび太たちは一階の安全を確保して留守番メンバーを体育館に避難させた。

体育館で一行は作戦会議をしようとしたりくつろぐなりして休憩していた。

「やっぱり僕らの学校と似てるね」

「ああ、そうだな」

「ジル、さっきなんて言おうと思ったんだ？」

「ここは4階建てになってるらしいけど2、3階は電気がついてるように見えたわ。」

「となると、ここにアシユリーをさらった奴らがいる訳か……」

「確かにそうですね。それならジルの言うことに説明がつきますね」

「それなら、早いとこ動とこう。もうじき日が暮れる」

「ええ、ですが食糧を確保したほうがいいのでは？」

「確かに鳥柴さんの言うとおりですね。このままじゃ私たちはほぼ確実に飢えちゃいますよ」

「そうだな。ひとまずは食料確保と2階、3階の探索だ」

そして以下のようにメンバーが決まった。

食糧：レオン、大橋、のび太、聖奈、咲夜

二階探索班：クリス、エスター、ジル、太郎、翡翠

三階探索班：青木、健治、富藤、赤田、笹木

「決まったところで悪いが、俺たちが見つけたメモを読み忘れていたから、今読ませてく

れ。悪いな」

「こんなところに金庫に保管されてたというところであつてはよほど重要なんだろうな」

「ああ、今から読むぞ」

メモには以下のが記されていた。タイトルはプラーガのメモとされていた。

「ヨーロッパ寒村に生息する寄生生物プラーガには宿主に寄生して支配する機能を持つ生物だ。これなら、我らの計画にぴったりだ。しかし、プラーガには一度経口投与つまり口に押し込むわけだが、幼体の時に投与すると孵化まで絶望的なタイムラグがある。これでは、孵化するまでに取り除かれてしまう。そこで既に孵化した物（ここではタイプ2）を投与したところ5秒台で寄生した。これならプラーガによる支配も容易い。」

さて、最後にテストデータのみだが、場所は日本のM町の警官隊とする。なお対象のガゾートは5名にして彼らには十分な量のタイプ2を渡すこと。なお、期間は2日間とする」

プラーガのメモはここで終わった。それを聞いたのび太たちは驚いた。

「宿主に寄生する生物!?!」

「そんなのが本当に!?!」

「ああ、にわかに信じられませんが今の所これが今回の事件に関与してるとしか言えん」

「そんな…ひどいわ」

「今回もウイルスかと思っただら今度は寄生生物かよ…」

「ったく、もううんざりだぜ！」

「敵の正体が分かったということはこの学校はおそらくこれを書いたイカれた連中と繋がってたってことだな」

「確かに。金庫で嚴重にしまってたあつたしね」

レオン「ああ、いつ奴らが俺たちを襲ってくるか分からん。さあ、さつさと動こう」
新たなる敵プラーガの脅威とはなんなのだろうか？

39話 プラーガの脅威

のび太たちはM町で今起こっていることを理解し、3つの班に分かれた。ひとつは食糧確保で残りふたつは2、3階の探索である。のび太たちはプラーガの脅威から生き延びられるのか？

2階チームは3階チームが3階に向かったのを見届けた。

「さて、着いたな」

「でも、一階とは違って電気がついてるよ」

「確かに。ここは当たりかもね」

「んじやあ行こうぜ」

するとドアが開いて中からゾンビが現れた。

「クソっ！ ガナードだろうがなんだろうが知らないがこれ以上のさばらせるか！」

クリスが顔をハンドガンで攻撃するとさらにストレートパンチを放って壁に激突して倒された。

「すごいですね…」

「カッコいい!!」

「よし！俺たちは二階だ！」

二階を駆けていくがその様子を何者かが監視していた。

「まさかアリがかかってくれるとはね。例のやつはどうなっている？」

声の主が部下らしきものに確認を取ると端末を見せた。

「はい！いつでも行けそうです!!」

「プラーガを知った以上、生かしては返さないよ。」

声の主は穏やかそうな声色のまま街の監視を行っていた。

「もう時期君も解放させてあげるよ。私たちのためにね。」

近くには縛られた少女が声の主をにらんでいた。

二階を探索している頃、三階のチームは二階よりも鍵がかかった部屋やドアが老朽化していたため開けられない部屋が続出しており校舎を行ったり来たりしていた。その中で何やらメモのようなものを発見した。

「いきなり見つけたな。」

するとメンバーたちの後ろから蜂の姿をしたB・O・Wが現れた。

「こいつら！細かいのが出てきやがったか！」

健治がナイフで一匹一匹を攻撃したがほとんどからぶっていた。そんな中で敵がみ

るみる尻尾で攻撃してきた。

「気をつけろ！こいつらすばしっこいだけじゃなくて攻撃を痛えぞー！」

「慎重に撃つんだ！」

「分かってるって！」

全員派手に攻撃できないため、ハンドガンでよく狙いながら確実に倒して言った。

「こいつら、数で押すタイプみたいだな!!」

「ならこいつでどうだ!!健治いったん離れて!!」

「わかったー！」

富藤が焼夷手榴弾を投げ一気に蜂の群れは焼失した。わずかに残った蜂も形成不利と見たのか撤退した。

「逃げたか……」

「ひとまず、探索を続けるぞ。」

「ああ……ちきしよう何発か敵の攻撃を受けちゃった。」

「大丈夫なの？」

健治が消耗しきっていたが本人は問題ないといってフラフラだが探索を続けていた。

この時、学校にいたものたちは気づいていなかった。敵がすでに潜んでいることを……

一方街中でもものび太たちは敵に囲まれていた。

「食料持ってたのに厳しいな!!」

「けど乗り越えましょう!ここで倒すんです!」

「うおおおおお!!」

「フアツ!!」

全員敵の攻撃をかわしてハンドガンや剣で攻撃していった。

「だったら!これでどうだ!?!」

のび太がショットガンで正面に攻撃すると敵がまとめて怯んだ。

「さらにこいつだ!!」

大橋がさらに手榴弾で敵を吹き飛ばした。

「よし走れ!走りながらも攻撃だ!」

「うおおおおお!!」

のび太たちも走りながら攻撃したが敵はそれでも追いかけてきた。

「こいつ!!」

聖奈がハンドガンで敵の頭部を吹き飛ばしたが頭部から何かが露出してなおも襲っ

てきた。

「嘘!?!」

「こいつがプラーガだ！間違いない！」

敵が聖奈を攻撃してきた。胸部を切りつけられ聖奈は出血し、倒れた。

「きゃあああああ!!!」

「聖奈ちゃん!!」

咲夜が駆けつけて敵を背中から飛び蹴りを放った。

「喰らいなさい!!」

咲夜が硫酸手榴弾を放ったが敵を何人か倒せたものの聖奈を攻撃したガゾートにはまるで通じなかった。

「ならこれだ!!トリガー!」

<ブレイク!クリティカルショット!>

大橋のブレイクトリガーのクリティカルショットはプラーガに命中し、敵は少し動き回ったがやがて静止した。

「まずい!聖奈ちゃんの止血をしないと!!」

「幸いコンビニが近い!急ぐぞ!」

コンビニに入ったレオンたちはすぐさま近くにあった絆創膏や包帯らしきものを見つけたのか聖奈を止血させた。

「すみません、皆さんに迷惑をおかけしました。」

「気にするな。プラーガに関しては俺たちはまだ出会ったばかり…生きているだけでも設けものだ。」

「はい…」

「ひとまず、食料を確保しておきましょう。この状況じゃ1日くらいがベストだ。」

大橋が飲料や食料を詰め始めた。

「そうだな。」

その後全員負傷した聖奈を考慮して裏口から脱出を図り学校に避難した。

「よう、お疲れ様。つて、緑川大丈夫か？」

見張りの白峰とセイカーが肩を借りた。

「どうやら止血は住んでるようだがこれ以上の移動は危険だ。少し休むといい。」

「はい、分かりました。」

「とりあえず食糧は確保できたか。酒が飲みてえなちきしよう。」

リシングスキーが外の監視を望遠鏡で行っていた。すでに街中でもガナードに襲われる人々がいたが迂闊に助けにいけないことに関して唇を噛み締めていた。

「とはいえ探索チームが何かを見つけしてくれるはず。それを信じるしか…！」

それから探索班が出てきたが健治が敵の攻撃で軽傷を負ってしまったため、一度全員

で話し合うことになった。

「ふう……さすがアンブレラを壊滅させただけのことはあるね。」

「お言葉ですが、一気に奴らを物量で叩くのはいかがでしょうか？ 狗波 冥月様」

「そうだね、普通は君のように一気に最初から物量を当てれば良いと言うだろう。しかしだ、彼らはアンブレラ時代にかんりの脅威とされて見られていたほどの実力者だ。タイマンなら弱いチームを組めば一気に我らが全滅する。テストのためにこの町に来たんだ。余計な犠牲は最小限にして作戦を遂行するんだ。サドラー様のためにね。」

狗波が穏やかそうな眼差しで部下を見つめていた。しかし声色は相手を威圧したようなものであった。

「は、はい!! 申し訳ありません! 引き続き例の娘の監視を続けます!!」

部下は部屋を出ていった。

「とはいえ、あまり時間をかけられないのもまた事実。アレを使ってもいい頃だな。」
狗波は静かに笑みを浮かべて別の部下に連絡を入れた。

第40話 魔蜂の蹂躪

食糧を確保したのび太たちは作戦会議を開いた。

「食料は手に入ったが状況は悪くなる一方だ。」

久下がパンをかじりながらつぶやいた。

「ああ、早速敵にこちらの戦力である2名が負傷してしまった。その上敵組織らしい奴とも遭遇してない。」

久下の隣にいたセイカーもうなづいて答えた。

「となると、決まったな。今日中にアシユリーを救う!!もう日が傾きかけている!なるべく日が出てるうちに助け…」

すると突然体育館が大きく揺れ始めた。

「こんな時に地震か!?!」

「みんな!外が!!」

静香が外を指差すと女王蜂のB・O・Wがのび太たちを見つめていた。

「チツ、新手か!みんな行くぞ!」

「おう!!」

女王蜂のB・O・Wは空を飛びながらのび太たちを毒針で攻撃して来た。

「一丁前に飛び道具を使いやがって！」

「食らったらひとたまりもない!!みんな気をつけて！」

健治と聖奈はエスターとサーシャそして咲夜に任せて他のメンバーは全員校庭に出た。すると正門から次々とガナードが溢れ出て来ていた。

「奴ら!!タイミング悪い時に……！」

「なら俺たちに任せろ！付いて来てくれ、ドラえもん！スネ夫！リシングスキーさん！アネサン！」

「アネサンじゃあないっての!!」

安雄がリーダーで5人がガナードの足止めを行なった。

「空飛ぶやつにはこいつだ！俺のマシニングンを喰らえ！」

「おおつと!!俺からもサービスや！クーリングオフは堪忍な!!」

晴夫と赤田がマシニングンで女王蜂の腹部を攻撃したがそれでも決定打に欠けるマシニングンのためかダメージをあまり受けていなかった。すると、白い球体が空から落ちて来た。

「なんだありや!!」

すると卵からみるみる幼虫が出て来た。

「何よこのきもいのはー!」

「どうやら奴の刺客みたいだな!こいつを倒しながらどうにか奴をやるしかない!!」

「こいつめ!!ぞろぞろと増やしやがって!」

ジャイアンのマグナムの一撃は運良く羽に命中して女王蜂は低空飛行になった。

「今がチャンス!!」

それを見たクリスがすかさず女王蜂に飛びかかった。女王蜂も抵抗を試みたがクリスの方が踏み込みが早かった。

「おおおらああああああ!!!」

ナイフで次々と羽根を攻撃してついには現れた穴に叩き落とすことに成功した。

「すごい……」

クリスの戦闘力を前にジルとレオン以外は呆然としていた。

「みんな!!火を放て!こいつを焼ききるんだ!!」

「だったら街中で見つけたこいつで!!」

のび太は火炎放射器で穴に向かって火を放った。

「待たせたな!敵は片付けてきた!!」

安雄たちが戻ってきた。しかし、敵はそれでも這い上がるようにしていた。

「今から一斉攻撃だ!!絶対にかいつを出すな!!」

クリスの指示でみな一斉に女王蜂を攻撃した。穴から悲鳴が聞こえやがて敵は動かなくなった。

「やったな…」

「あとはこの穴だけか…」

レオンが穴を覗いた。

「あれだけのやつはきつと前もって準備が必要だったんだろうな。さてだれがいく?」

「じゃあ俺が行こう!笹木さん、久下さんお願いします!」

大橋が笹木と久下を連れて穴の中に降りていった。

「暗いね。ライトを持ってて正解だったよ。」

「つたく、随分とでかい穴だったんだな。あん?」

久下が辺りを見回していると小部屋のようなものを見つけた。そこにはモニターらしきものが置かれ町や建物の様子を映していた。

「これは…おい来てくれ!!これ、モニターみたいなのがある!俺たちずっと監視されてたんだ!!」

「そんな…!じゃあ俺たちの行動はすでに!」

「見て！あそこに女の子がいる！」

笹木が指差した場所には少女が縛り付けられていた。

「どうやら場所はわかったみたいだな。なら行くぞ！このままじゃ奴らに勘づかれる！」

久下たちは急いで部屋を出て、地上に戻った。

「ふう、ようやく来るようだね。」

しかし、のび太たちの動きはすでに狗波に把握されていた。

「さあ諸君、歓迎の準備と行こうか！」

「ハッ!!」

狗波は部下とともに何処かへと向かった。

第41話 解放

「アシユリーのいるところがわかったんだな!」

「ああ、間違いない。4階の部屋らしき場所を監視カメラが捉えていたことから間違いない。」

「久下がレオンにアシユリーの拉致されていたであろう場所を告げるとレオンは全員にそのことを伝えた。」

「聞いてくれ、アシユリーの拉致されている場所の特定に成功した。」

「なんだって!?!」

「ほなら、早よ急いだ方がええと思いまへんかな?」

「いや、ここまであつさりわかつたのは逆に警戒すべきだ。何を考えてるかわからない連中の罠にみすみす乗るわけにはいかない。」

「クリスの言う通りだ。敵の罠を考慮して少数で4階に向かい、各階に何名かを待機させて敵を追い込ませよう。敵が何を考えているのかを尋問させるんだ。」

「じゃあ、まずレオンは確定として誰が行くかだ。まず体力に自信のある奴らと行動して素早くアシユリーを解放してその上で手当てができるやつが条件だな。」

リシングスキーが辺りを見た。

「そうだな…エスター、行ってくれるか？」

「ああ!!任せろ！」

「じゃあ私と大橋くんも行きましょう。」

鳥柴と大橋も立候補してアシユリー救出にはこの4名に決まった。

「それと、ここに残るやつにはここに電話してくれ。そしてアメリカ政府に娘の救出に成功したと言ってくれ。」

「分かりました。では私が引き受けましょう。」

連絡には翡翠と静香、そして負傷した聖奈と健治を守る久下とサーシャが担当になった。

「よし!それで残った俺たちは各階でスタンバイしてさらった奴らをギツタギタにするんだな!」

「ああ、頼むぞ。作戦は完了したら連絡する！」

レオンたちは4階上がった。先ほどまでは4回の入り口は相手はいなかったがベノマーベの地震により封鎖されていたバリケードが破壊されていた。そのあとを通って一行は侵入に成功した。

「どうやらほとんど封鎖できた感じみたいだな。こちらレオン、4階に侵入した。これから救出に向かう。」

「3階のリシングスキー、了解。」

「2階の青木、了解だ。二階には特に怪しい人影もない。」

「1階および校庭確保のジャイアン、特に怪しいやつや敵襲もない。」

「こちら通信班の久下、翡翠さんが現在連絡中だ。」

「わかった、急いでアシユリーを助け出す！みんな、それまで持ちこたえてくれ。」

レオンたちは急ぎ4階のドアを風潰しに探索した。しかしどれも物置だったりドアが開けにくかったりと探索範囲は他の階よりも狭くなっていた。

「全体的に狭い部屋だ。しかしこれだけあかない部屋が多いと逆にチャンスだ！」

「大橋君の言う通り、空いてる部屋をくまなく探せばきつと……！」

「フツ、いい観察力だな。その通りだ。空いてる部屋はこれで大体の検討はついたな。行くぞ!!」

レオンたちは鍵の空いた部屋をさらにくまなく調べ、一つだけ開かないドアがあったことを突き止めた。

「どうやここみたいだな。鍵がない以上……」

「てええええいいいい!!」

鳥柴がタツクルをするとドアが飛ばされた。

「え？」

「一か八かタツクルするのはわかってました。幸いあまりドアが壊れてたみたいですね。ふう……」

鳥柴も服の汚れを払って目の前を見通すと何か人影のようなものがあつた。

「うん？」

「イヤ！こつち来ないで！酷いことするんでしよう!？」

レオンたちが見たのは金髪の少女だつた。それを見て全員ハツとした。

「あれって!？」

「アシュリー！助けに来たぞ!？」

警戒心をあらわにしていたアシュリーだが、レオンの言葉でレオンたちの方に歩み寄ってきた。

「え、パパが助けに来てくれたの?？」

「ああそうだ。俺たちは君のパパの協力を受けて助けに来たんだ。大丈夫かい?？」

エスターが手を差し伸べた。

「うん、もうすぐ私に何かするって言ってたけど良かった！もう誰も助けにこないのかと……!？」

「こちらレオン！救出に成功した!!」

「よし！こちら、久下！アメリカ政府が最寄りの米軍基地からヘリを飛ばして今から応援に来るそうだ!!」

「よし！こちらジャイア…「大変だジャイアン！」どうしたスネ夫!?!うわああああ!!!!」

「どうした!?!おい!!」

ジャイアンたち校庭のメンバーに何が起こったのか？

第42話 鳥かご

レオンたちが校庭に出ると校庭と一階を守っていたジャイアンとスネ夫、のび太、静香、出木杉、晴夫、安雄、白峰が黒いローブを纏った者たちに捕らえられていた。

「ジャイアン！」

大橋たちが武器を構えた。

「動かない方がいいよ、出ないと攻撃させちゃうよ〜」

「お前たちか!?アシユリーを攫ったのは!?」

「そうとも、彼女の目的は我々の手でプラーガを植え付けた暁に合衆国と取引を行い、そこから世界を混乱させて掌握させるきっかけを作ることだったんだよ。」

ローブの男たちが一斉に道を開けると狗波が笑みを浮かべてやって来た。

「バカな!?!なぜお前がこんなところに?」

「狗波 冥月…アンブレラの重鎮がなぜなの?復讐のつもり!?」

ジルの発言に狗波はふはははと笑い出した。

「復讐ねえ、少し違うな。私にとってアンブレラはただの隠れ蓑…」

「隠れ蓑だ!!てめえはアンブレラの犬じゃねえってか!?!」

「ふふ、一体いつから私がアンブレラの研究主任から幹部にのし上がった男だと思った？ リシングススキーくん。」

「で、お前たちはこんな街で世界征服の準備か？」

クリスとレオンは動じずに一歩前に出た。

「そうだな、クリス。プラーガ？ 世界を侵略？ まるで宇宙人の侵略だな。」

「お前たちのしていることはただのテロだ!!」

啖呵を切ったクリスとレオンに対しても狗波はやれやれと呆れたそぶりを見せた。

「全く…流行り言葉で括れて安心したのかい？ 今の君たちにこの邪教徒を相手にできるのかい？」

「ふっ、そうだな。だがお前らは俺たちを知らなすぎるんだよ!!」

その時、背後の茂みから久下が飛び出して来た。

「喰らいやがれてんだよ!! このクソ野郎が!!」

久下が振り返りそびれた邪教徒の頭部をハンドガンで連続攻撃を仕掛け怯ませた。

「吹っ飛びな!!」

続いてサーシャが焼夷手榴弾を投げ辺りを炎上させた。

「今だ!! のび太たちを助けるんだ!」

「!!」

武器を捨てていた全員、うろたえた敵に追撃を仕掛けながらのび太たちを救出した。

「なるほど…いいチームワークのようだねえ…」

「悪いがここまでだ。」

その時上空からヘリが2機接近して来た。

「逃してはいけないよ！特に大統領の娘にはね！」

邪教徒がアシユリーをさらおうと向かって来たがのび太たちはなおも抵抗し、その隙にアシユリーと共にヘリに何人かが搭乗した。

「くっ！これ以上の追跡は厳しいか…第二段階に移る！ここは退くんだ!!」

狗波がこの状況が不利とつかめるとあつさりと部下を連れて撤退した。

「よし！これでいけるな！」

レオンやクリスが最後にヘリに乗って全員、なんとか街の脱出に成功した。

「終わったな…けど厄介な奴らも出て来た以上、これからが大変だ。」

久下がレオンを見てうなづいた。

「アシユリーをなんとか奴らの駒に堕ちる前に助けられていたから良かったがあいつらがそう簡単に引き下がるとは思えない。」

アシユリーは疲れのためか少しウトウトしていた。

「今からでも戻って奴らの情報を集めよう。奴らはアンブレラと同様に世界にとって危険な思想を持った連中だ。」

「そうね、今度はこっちから奴らを追い詰めるわ!!」

クリスとジルが本部に連絡を入れ今回の一件を報告していると徐々に全員が眠気をあらわにしていた。

「!?これ…は?」

二機のヘリのうち二つとも突然、パイロット以外が眠り出した。ドラえもん以外が眠ったことに違和感を抱いていた。

「なっ…!みんなどうし…!!」

その時ドラえもんの尻尾をパイロットらしき男が引いた。

「尻尾を引いたら止まったな。どうやら上の言った通りだ。さすがによくできたロボットだよ。こいつは。」

パイロットがもう一機のヘリのパイロットに連絡を取った。

「そうか、んじや本物のヘリと鉢合わせする前にスペインの教団本部に運んじまおうぜ。」

「おう、そうだな。にしても狗波様の策略はおつそろしいなあ…こうなることすら想定内だぜ?だからわざわざパイに作戦を実行させるつてのを連絡して教団の回し者の

俺らを助けに向かわすと見せかけて攫うなんて演技派もいとこだぜ。」

「あの人は掴み所はないが教団のためだったらできることをなんだってする方だしな。全くすげえ方だな。ハハハハハ!!」

狗波の策略にはまり、鳥かごに入れられてしまったのび太たちチームバイオ。この先どうやって教団を倒すのだろうか!?

第43話 逆襲のチームバイオ!

ロスイルミナドス教団——それはヨーロッパのスペイン地方を始めとする世界的に勢力を張っている組織である。アンブレラにも前から資金援助を申し出るなりして勢力を伸ばしていた組織の一つである。

しかし、その主であるオズムンド・サドラーはあらかじめスパイを送り込んでアンブレラの情報を横領し壊滅にまで追い込んだことでT-ウイルスの研究データや彼らが長らく研究していた寄生生物であるプラীগの量産に成功したのである。そして今、彼らは新たな段階に進んでいた。世界にプラীগを撒き、掌握する計画を…

「くそッ、まんまとしてやられたな。」

「ああ…しかもこんな狭い部屋にぶち込まれるなんて思いもしなかった。」

のび太たちはその後合衆国のへりに扮した教団の誘拐作戦を受け、武器も取り上げられ牢獄に6日も閉じ込められていた。

「もう6日…じつとなんかしてられないってのに!!」

「何とかここを出よう。今この1階のフロアでわかるのはこの俺——久下と晴夫くんに別エリアには白峰と赤田さんだな…」

「はい、そうだと思います。」

「そうと分かれば行動あるのみだ。幸いこの辺には監視カメラといった類は見当たらない。今のうちにどう脱出するかを考えとかないとな。」

「チキシヨウ! ジャイアンならきつと!! このやろおおおお!!!」

晴夫が拳を握りしめ怒りの念のまま扉に体当たりを仕掛けると入ってきた教団員ごと鉄格子を吹き飛ばしてしまった。

「は?」

あまりの出来事に2人は息を飲んでしまった。

「まさか、体当たりでどうにかなるなんてなあ、はは…」

「ははじゃないだろう!?! いいから早く出るぞ!! こいつが運良く気絶したからいいものの、急がないと!!」

「はい、そうですね!!」

久下と晴夫は急いで部屋を出て他のメンバーと合流すべく武器を回収した。もちろん監視カメラに気づかれなないように運良く見つかった教団員を背後から襲ってローブを奪い取った。

「これでいけそうですね…けど…」

しかし、晴夫だけ体格が明らかに違うため、正体がほぼバレバレだった。

「体型は気にするな。まずはあの2人を助けてから派手に暴れればいい。それまで耐えるんだ。」

「そうですね…」

一方、久下たち4人が閉じ込められた第1フロアの一つ下の第2フロアでも脱出を試みる者がいた。

「あいよつとーふう…よーやく出れたわ。オラッ!!」

リシーツアの蹴りで牢獄の鉄格子は吹き飛ばされた。

「ずいぶん荒くねえか?」

牢から健治が出てきた。

「そんなのはいいわよ。早いところ武器をいただいでこつからおさらばするよ。」

リシーツアと共に武器庫に入った2人だったが教団員がいた。

「貴様ア…!」

教団員も武器を構える前にリシーツアの蹴りで武器を弾かれ、ラッシュ攻撃を受けて吹き飛ばされてしまった。

「今の内だよ!!」

「ああ!!」

2人は教団員を気絶させてロッカーに放り込んで、脱出した。

「さてと健治、今からあたしたちは晴海つて奴と聖奈を救出するけど武器はどこにあると思う?」

「まあ大方こいつらから奪い取るんだろ?こいつのナイフとかな。ほらよ!」

健治が教団員の持つていたボウガンをしーツアに投げて自らはナイフを取った。

「んじや行くよ。」

「ああ!!」

そして再び久下と晴夫が別の牢獄エリアに現れた。

「門番の交代です。」

晴夫がそう言うと教団員は首を傾げた。

「休んだほうがいい。少しな。」

久下が銃を構え敵が抵抗する前に攻撃を仕掛けた。

「悪いな。」

久下たちがロープを脱いで教団員の死体から鍵を奪った。

「待たせたな。」

「久下さん!馬場!」

久下が牢獄の鍵を開けた。

「よーやく出られるんやな？」

赤田と白峰が伸びをしながら牢屋から出てきた。

「ああ、しかしまだ下の階に奴らがいる。」

「上等や！いてこましたろうと思つたんや!!」

「武器に関してはこれがある。使つてくれ！」

「ああ…これは俺のハンドガンだな。よし！行きましよう!!」

「こつちに階段がある。気づかれずに動くぞ!!」

その時、施設に警報が響いた。

「なんだ!？」

「警告！警告！ただ今地下一階および二階にて脱獄者が出た模様、直ちに確保せよ！最

悪射殺も許可する!!」

「どうやらここからが踏ん張りどきだな。いくぜ!!」

「ああ!!」

第44話 戦慄のプラーガ強化体!!

地下一階と地下二階の脱獄の報を聞いて地下三階でも安雄、セイカー、ジル、翡翠そしてジャイアンにスネ夫が一気に脱獄した。

どうやら富藤が教団員に抵抗して鍵をこっそり奪っていたらしく、ずっとチャンスがうかがっていたそうだ。その上で彼女は警報が鳴ったと知るや否や、他のメンバーの牢獄から脱獄させ今はあたりの探索に当たっていた。

予想外の活躍に教団は狼狽えていた。馬場 晴夫という小さな存在により早くも最大の危機を迎えていた。

「くっ、いかがなさりますか!？」

「慌てないで、一先ず戦力を分けるんだ。三階は貴重な被験体候補だから逃してはいけない! まずは彼らからとらえるんだ!!」

狗波が冷静な表情で指揮を取っていたが声には焦りが滲んでいた。今現在教団は計画実行すなわち全世界へのプラーガ拡散を控えており、人員をあまり割けずにいた。

「狗波さま、四階の牢獄エリアからも脱走者が! 至る所から奴らが脱獄して行きます!!」
「なんて」とだ…」

机に拳をばんと叩くと通信が入ってきた。

「お困りのようだね。」

するとモニターが変化してオールバックのサングラスをかけた男が現れた。

「…アルバート・ウエスカーか。君が一体なんのようなんだい？」

狗波はウエスカーに対して敵意を剥き出しにしたような表情を浮かべた。

「なに、サドラー様のためにお前に援軍を送ったんだよ。せいぜい状況をひっくり返すのに使ってくれ。」

モニターが切れた。

「あの男…一体何をするつもりなんだ？」

(サドラー様はなぜ私たちを蔑ろにしてあの男も鼻肩するのだ？確かに我らと最近接触してきた時に新たなウイルスを発見できた。しかし、あの男の目に潜む何かが引つかかる…)

一方、四階にまとめて幽閉されていた残り14名も混乱に乗じて脱獄した。

「全てクリスさんの蹴りでどうにかなったんだけどね…」

のび太たちが覚えているのはサイレンがなってからクリスが鉄格子を蹴り飛ばし、教団員を銃で反撃したかと思えばいきなりストレートパンチを放ったり、ストレートキッ

クなど多彩な格闘技で次々と敵を撃破して行ったことであった。

「みんな急ぐぞ！他の奴らを助けにいくな。」

クリスが先頭に立つてのび太たちは上の階に続くエレベーター前に立った。しかし、突如として隔壁が降りてきた。

「なんだ!?!」

「くそッ、俺たちを分断するつもりだ。」

リシングスキーが隔壁を攻撃していると二つの隔壁の近くの壁から白い鎧のようなものに包まれたハンターが現れた。

「今更こんなんで!!」

ドラえもんが空気砲で、ヤノフがマシンガンで攻撃したがなんと攻撃を鎧が弾いてしまった。

「なんだって!?!ティンダロス以外でも弾丸を!?!」

前方には改造されたハンターが一気に3体も立ちはだかり、クリス、大橋、青木、出木杉、ドラえもん、咲夜、レオンが迎え撃ち、後方にも赤い目をしたキメラが3体現れた。

「こいつ！まだ、邪魔をするのか!!」

のび太、富藤、太郎、聖奈、エスター、リシングスキーがキメラを相手にすることに

なり、武器を構えた。

「どうやらキメラといつてもパワーアップしたやつのようなね。あたし達で行くよ!!」

「ああ、今更こんな奴らに負けるか！パワーアップなんざ知るかよ！」

エスターと富藤がショットガンとハンドガンで連続攻撃を浴びせるとキメラはたまらず宙に逃げようとした。

「逃がさない!!」

太郎が逃げる寸前のキメラに飛びついて目にナイフを突き刺した。キメラは太郎を振り払って大きく狼狽しながら、あたりを構わず攻撃した。その影響で残り2体と同士討ちを始めた。

「よし!!トリガー!!」

<ブレイク!キラーショット!!>

3体が重なったタイミングを逃がさなかったのび太の一撃でキメラはまとめて撃ち抜かれた。

その向かい側では銃弾の攻撃を完全に防いでしまうハンターを前にクリスは冷静だった。

「おい避ける!危ないぞ!!」

青木が忠告を入れるとクリスは素早くハンターの攻撃をかわして、背後にハンドガン

を連続で撃ち込んだ。するとハンターはダメージを受け地面に倒れた。

「そうか！背中を狙えば…」

「それならこいつだって!!」

大橋は炸裂手榴弾を投げてハンターにダメージを負わせてジャンプして背後から刃で切り裂いた。

「よし！あとはこいつだけだな!!」

青木と咲夜が二方向に分かれドラえもんの空気砲で正面に歩き出したハンターを背後から2人の蹴りで吹き飛ばすと無防備の状態で出木杉のショットガンを受けてハンターは難なく倒された。

ハンターが倒されたため、隔壁が降りた。

「どうやら、奴らもまだこんな小細工を持ってたようだ。」

するとエレベーターが開きそこから仲間達が戻ってきた。

「みんな!!」

「待たせたなのび太！さあ、サドラーをぶっ飛ばそうぜ!!」

ジャイアンの声で全員はサドラーのいる地下5階へと向かった。

一方、サドラーの部屋に狗波が向かっていた。

「サドラー様、失礼いたします。もうじき奴らが突入してきます？」
狗波は異変に気付いた。サドラーの玉座に血がついていたのだ。

「なんだ、この血は？」

その先を歩くと狗波が何かを見つけた。

「これは……そんなバカな!!」

狗波は青ざめ、1人引き返した。

第45話 謀略の結果

果てしなく続く廊下を抜けたのび太たちだったが、道中に死体らしきものを発見した。

「どう言うことだ？」

道中に転がっていた死体はどれも教団員やB・O・Wのものばかりであった。

「こつちもあつたぞ!!」

「一体どうして？」

一行はサドラーがいると思われる部屋を探すなりしていたがどこかしこに見られたのは死体だけだった。

「おい、何か聞こえるぞ？」

近くの部屋でジャイアンが聞き耳を立てた。その部屋からは銃声と悲鳴が聞こえていた。

「遠慮するな、入ってこい。」

「この声はまさか……!」

「部屋に入るんならこの中にサドラーがいるはずだ! 何人かは別の入り口から入って奴

を包囲するぞ!!」

声が聞こえたので、のび太たちは部屋の入り口から突入した。もちろん何人かは別の入り口から中を確認すべく移動した。

中に入るとそこは大広間のようなところで青いローブの男たちが血を吐いて倒れていた。その姿を見てクリスとジルさらにはレオンもそこにいた後ろ姿を見て動揺した。

「バカな!!なぜお前が…?」

「久しぶりだな、クリス。ジルもいたか。そろそろとお仲間を揃えたつもりだろうか、んのようにだ?」

「アルバート・ウエスカー!!」

「知り合いですか?」

のび太が尋ねるとクリスが銃を構えたままうなづいた。

「かつてのアンブレラの幹部でもあり、俺たちの上司でもあった男だ。」

「けどお前はロックフォート島で…!」

ジルが睨みつける中ウエスカーは死体を蹴り飛ばしてのび太たちを見つめていた。

「あの時はさほどのことにもならず済んだんだよ。俺はあれからお前たちのロシアの

アンブレラ支部の攻撃を知ってデータを奪い、アンブレラ出奔前から提携していたサドラーたちを利用してTウィルスだけでなくプラーガも手に入った。

これで俺の時代が訪れる。アンブレラなどにとどまらない俺が新世界を創造するのだ!!」

「させるか! お前の野望は僕たちが食い止める!!」

上の階にはリシングスキータちUBCSとスネ夫、晴夫、富藤がウエスカーを狙っていた。

「ふん、少し遊んでやるかな? 数を揃えたくらいで勝てるなどと思いがらないうことだ。」

のび太が発砲して弾丸はウエスカーの正面に迫った。しかしウエスカーはそれをあっさり回避した。

「何!?!」

「狼狽えるな! 一斉火力だ!!」

上からマシンガンやライフル、ブレイクトリガーの一斉攻撃を以ってしてもウエスカーにダメージは与えられなかった。

「どうなってるんだ!?! どうやったたらあんなスピードが出せるんだよ!?!」

全員リロードをしようとした瞬間にウエスカーがのび太の目に現れた。

「なっ……!!」

「その程度か。ではこっちから行くぞ!!」

ウエスカーはまず正面ののび太、出木杉、健治、太郎の4人を高速移動の一撃でなぎ払った。

「のび太!!てめええええ!!」

「落ちてけジャイアン!!」

次に武器を構えたジャイアンと大橋、レオン、サーシヤ、鳥柴、ドラえもん、青木、赤田、笹木、翡翠を一人一人背後から攻撃を加えて吹き飛ばした。

「クソ、追いつけねえ!!」

リシングスキーがスナイパーライフルで狙いを定めようとしたが速すぎて追いつけずにいた。

「いい加減小細工はよすんだな。」

リシングスキーたちの前にウエスカーが移動していた。

スネ夫の一撃でウエスカーは一撃を受けた。

「ふうん!!」

「うわああああああ!!」

「きゃあああああ!!!」

発勁でスネ夫は吹き飛ばされUBCSのメンバーや晴夫、富藤に激突しながらまともに壁に叩きつけられた。

「こいつに勝ち目なんかあるのかよ!？」

残った仲間たちも立ち上がるもウエスカアの気迫に圧倒され、ほぼ棒立ち状態でも攻撃を受けてしまった。

「ウエスカアアアア!!!」

クリスが正面からパンチを放つもウエスカアに避けられてしまった。しかし背後から現れたところをジルがスピキックで怯ませると即座にリバーズナックルでクリスはウエスカアを大きく吹き飛ばした。

「やったか?」

クリスが息を切らしながら前を向いたがウエスカアはそれでも健在だった。

「バカな!？」

ウエスカアはため息をついた。そしてクリスとジルも背後から回り込んで投げ飛ばして気絶させてしまった。

「この程度でどうにかなると思っただけとは笑わせてくれるな。さて、今度は一人ずつ…殺してやろう!」

ウエスカーが近くで倒れていた静香を狙い、首を掴みながら全員に見せつけた。

「くっ…あああああ!!!」

「やめろおおおおお!!!」

のび太がマグナムでウエスカーの足を狙った。

「貴様…そんなに殺してほしいか…!」

ウエスカーが静香を投げ捨ててのび太に迫った。

「逃げろのび太ああああ!!!」

ジャイアンが銃を構えて一撃を放った。

「慌てるな。お前は次に殺してやる。」

しかし、ジャイアンの銃撃はかわされて、ウエスカーはのび太を片手に持ったまま

ジャイアンを踏みつけた。

「さあ眠れ!!」

その時背後からウエスカーが撃たれ血を吹き出した。

「バカな…?」

さらに銃声は響き渡り、強かったウエスカーが呆気なく倒された。

「お前は…!」

一行がウエスカアの背後の扉から出てきた影を見てハッとした。

「狗波冥月？」

冥月はさらに攻撃を加えると安堵のため息をついた。

「さあ、早く行きたまえ。もう教団は君たちを狙わない。サドラー様はもういないだ。」

「なんだって!？」

全員ゆっくりと起き上がった。

「なぜお前が今更？」

「レオンくん、君たちは私たちがこの男が何をされたか話してあげよう。彼はまだ私が若い頃、教団に現れ様々な情報提供さらにはアンブレラへの潜入を提供してきたんだ。」

最初我らは反発こそしたが争いなき平和を実行するために協力を選んだ。しかし彼はプラーガのデータを得た途端にB・O・Wを軒並み暴走させ始めたんだ。教団員の多くが戦死して行く中、私はサドラー様の死体が映ったモニターを発見したんだ。」

「サドラー…裏切られたのか。」

「ウエスカアはそう言う男よ。いつも裏切つてばかりでどうしようもないやつよ。」

クリスとジルは憎らしそうな表情でウエスカアを見つめた。

「さあ行け！君たちは開放する!!」

狗波冥月は入り口を指差した。

「急にどうしたんだよ?」

大橋が戸惑いながら尋ねた。

「私の夢は争いなき世界…それをあんな奴に踏みにじられた以上責任を取らねば…サドラー様の世界を守るのは私だ。プラーガのデータは既に抹消した。サドラー様の意思と違う危険な思想を持った者にプラーガは託せない。最期はこの施設を自爆させて共にさせてもらう。さあ行け!!」

「狗波冥月…」

鳥柴が悲しそうに狗波の背を見ていると異変が起こり一行は表情が一転した。それに気づいた狗波は腹部を突き刺されて倒れた。

「バカな…」

「嘘だろ!?!」

なんと大量の銃撃を受けたウエスカーはなおも立ち上がったのだ。

「はあ…はあ…貴様ら、ついてこい!最後のゲームを貴様らに選んだ。計画はズレたが貴様らは改めて消すことにした!」

ウエスカーは息を切らしてはいたものの、その場から走り去っていった。

「ふざけた野郎だ!!何がゲームだ!!」

「狗波さんは？」

聖奈が気にかけてたが鳥柴が脈を測ったところ帰ってきたのは首を横に降る動作だけだった。

「あんたのした事こそゆるされない。けど、平和を思う気持ちはあった。だから見れてくれ…俺たちの作る新しい世界を…」

大橋は狗波の死体を後にしてウエスカーを追った。

「ウエスカーめ…何を考えてるんだ？」

「急ぎましょう！」

のび太たちはウエスカーを追跡した。すると突如地震のようなものが起こり、のび太たちはそれに耐えようと近くのものにしがみついた。

「なんだ!？」

少しすると地震は治ったが施設ではそれに巻き込まれて多くの教団員ならびにB・O・Wが瓦礫の下敷きとなって死亡した。

「チツクシヨウ…あの野郎の仕業か？」

一行は出口を見つけると目の前の光景に愕然とした。なんと地を破って巨大な塔がそびえ立っていた。

「フハハハ!!」

その時遙か上の階では、ウエスカーが高笑いを浮かべていた。

「改めて自己紹介といこう。俺はアルバート・ウエスカー…生物兵器で新たな人類の歴史を築く男だ。」

のび太たちはウエスカーを睨みつけた。

「さて、今回の戦いに当たって貴様らは俺の前に立ちはだかつたということは貴様らが俺にとつて最大の障壁に他ならない。だが貴様らなど俺が本気を出すよりもっと効果的に潰すことにした。」

「あの野郎…ふざけやがって!!」

ジャイアンが握り拳で苛立ちを露わにしたがウエスカーはそれを見てほくそ笑んだ。

「これから始めるのは俺とお前たちの全勢力の生き残りを賭けた最後のゲームだ! ルールはこの俺のいる11階までたどり着くことだ!」

「上等だ! てめえの野望は俺たちが終わらせてやる!!」

大橋がウエスカーを指差すと皆、入り口に入ろうとした。

「ぐえええええ…」

「サドラー様ア…」

振り返ると100体あまりのゾンビや教団員が迫っていた。

「雑魚の寄せ集めか…」

「こんな時に…!」

のび太が武器を構えたとリシングスキーが制止した。

「ここは俺たちUBCSの5人に任せろ。先に行け、お前らの背中には任せろ!」

セイカーとリシューツァがマシンガンを構えた。

「本当の戦いはこの先から始まるんだ!!」

「あんなたちを信じてるからしくじんじゃないよ!!」

「僕たちに構わずどうか先に!!」

「俺たちの未来を任せたぞ!!」

ヤノフとエスターも銃を構えて敵に向かっていった。

「…行こうのび太くん!あの5人の意思を無駄にしないために!!」

「うん!!みんな行くよ!!」

のび太たちは塔に入っていた。人類の未来をかけた最後の戦いが始まる…

第46話 最後のゲーム！

のび太たちは最後のウエスカーのゲームに挑んだ。入り口付近の大量ゾンビをUBCSの5人に託してウエスカーの1階へと向かっていった。

1階に入るとそこには大銃を構え、ガスマスクを装備した異形の怪物が立っていた。「どうやら、総力をあげてきたようだな。」

のび太たちが武器を構える中、富藤と健治、晴夫の3人が制止した。

「健治？」

「お前らは先に行け。ここは俺らに任せな。」

「後でちゃんと追いつくから大丈夫よ!!」

富藤がサムズアップを浮かべ敵に攻撃を仕掛けた。

「でも……!」

「いいから早く!!俺たちの未来を守るために頼んだぜ、マスターオブゼロ!!」

晴夫もショットガンで敵を横から攻撃して大振りの一撃をなんとかかわしながら攻撃した。

「晴夫……わかったよ、必ず勝ってね!!」

「ああ!!」

のび太たちは2階へ向かおうとしたが敵はそれを妨害しようとした。

「そおら!!」

背後から晴夫のブレイクトリガーのファットショットがミスクリエーションの背中に大ダメージを与えた。

「ガスやろう!俺たちを舐めんな!!」

ミスクリエーションのノコギリを回避して足元を健治がナイフで攻撃を仕掛けた。

「皮膚が硬いな!けど!!」

晴夫がショットガンでミスクリエーションの腕を狙った。

「行くわよ!!」

1階

富藤&晴夫&健治 VS ミスクリエーション

2階に上がると部屋は下の階と比べてほぼ暗闇に閉ざされ、妖しい唸り声が響いていた。その時、腕が伸び、笹木がそれに捕まった。

「しまっ…!!」

捕まった腕を晴海がボウガンで破壊した。晴海はここに来る際にたまたま拾った火

薬付きボウガンを拾っていたのだ。

「へハツ、ハツ、ハツ…」

「腕を吹っ飛ばされた上で平気とはな。面白い！お前の相手は俺と塩田だ!!」

青木もハンドガンで敵の顔面を攻撃して敵を怯ませた。

「僕も忘れないでよ!! っつてわけでのび太君たちは早く上へ!」

「分かりました!!」

のび太たちは上へと向かった。

「君みたいな化け物はもう見飽きたんだ。僕ら3人で片付けてあげる!!」

「人を襲う生物兵器なんて許さない!!」

「俺たちが引導を渡してやるよ!」

3人は散らばって一気にマシンガンでリヘナラドールは頭部を吹き飛ばした。

「やったか!」

「へはあはあああああ!!」

しかし、リヘナラドールは頭部を失ってもなお立ち上がって襲いかかってきた。

「んいっ!」

晴海がボウガンでリヘナラドールを狙い距離を詰めるが再びリヘナラドールは欠損した頭部が再生した。

「どうやら、簡単には行かないみたいだな。」

「上等さー!行けるとこまで行くよ!」

2階

青木&笹木&晴海 VS リヘナラドール

続いて3階に入ったのび太たちに立ちはだかったのはスーパータイラントだった。しかし、安雄がグレネード閃光弾でのび太たちを先に行かせて、ジャイアンとスネ夫も立ちはだかった。

「今更タイラントなんてな!」

「俺たちを甘く見過ぎだ!行くぜ、スネ夫、安雄!!」

「のび太死ぬなよ!」

「終わったらみんなで野球でもしようぜ!!」

「ああ、3人とも気をつけて!!」

のび太たちは4階へと向かった。

「俺たちの力さえあれば敵はいねえ!行くぜ!!」

「ジャイアンの最後の大事な事だ!!」

走ってきたスーパータイラントの攻撃をかわしながらジャイアンはマグナム、スネ夫

はライフフルでダメージを確実に与えていた。

「喰らいやがれ!!」

さらに正面から炸裂弾を全て発射した安雄はすかさず手榴弾でも攻撃を続けた。

「休むことなく攻撃を続けるんだ、安雄。行くぞスネ夫付いて来い!!」

「うん!」

3階

ジャイアン&スネ夫&安雄 VS スーパータイラント

4階ではタイラントのパワーを人工知能で制御したかつてクリスとジルが倒したテイロスに翡翠と咲夜が戦うことになった。

「私たちの未来は私たちの手で掴み取ります!!」

テイロスのミサイル攻撃をかわしながら咲夜はショットガンで、翡翠はマシンガンを使って怯んだテイロスに追い打ちを加えた。

「大きい武器に任せて隙だらけです!!」

2人は重火器に任せずに確実に間合いを取って攻撃を続けていた。

4階

翡翠&咲夜 VS テイロス

5階では突然変異したB・O・W サスペンデッドに聖奈と白峰が挑むことになった。

「私たちには仲間がいるからどんなに苦境に立たされたって負けるわけにはいかない！」

「ああ、お前とは気が合わんが行くぞ!!」

白峰と聖奈は宙にぶら下がったままのサスペンデッドを見てまずは武器で引き摺り下ろそうと考え、一気に攻めに転じようとしていた。しかしサスペンデッドは天井を素早く移動しながら隙を作っていた。

「奴を引き摺り出さんことには始まらないな。」

6階ではキメラをさらに強化したキメラⅡが現れこれに赤田と太郎が、7階には大男のようなB・O・Wのジャバウォックが立ちふさがりドラえもと出木杉そして静香が相手をするようになった。そして一行は8階へとたどり着いた。

敵が現れた中、今までずっと後ろの方にいた久下が1人啖呵を切ってハンドガンの連続射撃で応戦した。

「みんな必ず行きて帰ってこい!! 一気にこのまま上まで行くんだ、早く!!」

「久下さん……! 頼みます!」

のび太たちが走り去る中久下は震えていた。

「ただの警官の俺が生き残れるなんてな。だから最後まで笑って終わろうぜ！そのためには俺がこの虫を倒してやる！」

目の前にいたのはカミキリムシを思わせるリーパーというB・O・Wであった。

「うじゃうじゃしやがって！俺が害虫駆除してやるよ！」

「1人でカッコつけない。2人で行くわよ。」

サーシャもナイフを構えた。

8階

久下&サーシャ VS リーパー

「のび太、ウエスカーの元にはお前と大橋が行け。」

9階への道中でクリスがそう告げた。

「え？急にどうしたんですか、クリスさん。」

「私たちはあなたたちを信じてるわ。ウエスカーは強い。けど、あなたたちの誰かを信じる心はあいつには負けはしない。だから行って！」

「はい！！」

残ったのび太、大橋、レオン、アシユリーは10階へと向かった。

「さて、お片づけだな。行けるか相棒？」

「当然よ!!」

2人の目の前にはサメの姿をしたB・O・Wが立っていた。

「うおおおおおおおおお!!!」

9階

クリス&ジル VS スカルミリオーネ

「嘘でしょ?」

残ったレオン、のび太、アシュリーそして大橋は10階に立っていたもう1人のレオンに驚愕していた。

「クローン技術で俺のクローンを呼び出すか…泣けるぜ。俺はこの世に1人だけだ!」

「のび太くん、大橋さん行って!私とレオンで食い止める!」

「分かりました!」

レオンはクローンレオンと睨み合っていた。アシュリーは物影から2人の戦いを見守っていた。

「はあっ!」

2人の蹴りがぶつかり合うなか、アシュリーのハンドガンでクローンに隙を作ること

に成功した。

「アシユリー、隠れてるんじゃないのか？」

「ふふ、まさか。そんな事しないわよ。レオンやみんなが戦ってるんですもの。来るわよ！」

10階

レオン&アシユリー VS クローンレオン

ついに2人は最上階に到達した。あたりにはコンテナのようなものが積んであった。

「追い詰めたぞウエスカー！」

「年貢の納め時、覚悟しやがれウエスカー！」

ウエスカーが振り返った。

「愚かな……」

第47話 救済の時

「貴様ら、どうやらお仲間を下において来たようだが勝てると思っていたのか？」

「いいや、俺たちはここで終わらない！お前を倒してみせる!!」

大橋が剣を構えた。ウエスカーはその発言に呆れて2人にサンングラスを投げた。

「?ぐはっ!!」

キヤッチした大橋が真つ先にウエスカーの攻撃を受け、のび太も目の前に現れたウエスカーに対処できずになすすべも無く攻撃を受けた。

「貴様は俺が支配する。それがこの血に課せられた呪縛を解き放つ方法だ。」

「呪縛?何を言ってるんだ!？」

「いいだろう…死ぬ前に俺のルーツを貴様やお友達に話してやろう。」

ウエスカーが操作したことで他の階にウエスカーの声が響いた。

「俺、アルバート・ウエスカーはアンブレラの創始者であるオズウエル・E・スペンサーの計画のコマだったのだ。」

「なんだと!？」

戦いながらものび太たちはそれを聞いていた。

「奴はアフリカの某所にてT—ウイルスの原種を発見してそれを始祖ウイルスと名付けあることを企てた。それが全ての始まりだ。奴の計画は世界中の優秀な子供に英才教育を施し、ある程度したら始祖ウイルスを用いて新人類を創造しようとする事だった。これをウエスカー計画という。」

「ウエスカー計画…」

「しかし結果は俺を含んだわずかが生き残り、ある事件が起こったことで計画は頓挫した。」

その中で俺はアンブレラの都合のいい手駒としてアメリカラクーンシティの洋館事件で一度死んだと見せかけ他所の企業に付き、スペンサーの野望を知ったのだ。その上で奴を殺害して今度はある男に遭遇した。

そいつは未来から来たとか言う荒唐無稽な話をしていた奴だったが話を聞くと未来での改造生物はアンブレラ所縁のものだったと判明した。

俺はその過程の研究でT—ウイルスによって誕生した生物兵器にはさらなる進化の可能性を知った。」

「誰なんだそいつは!?!」

「それは、未来の闇商人…Mr. キャッシュだ。」

その発言を聞いたのび太、スネ夫、ジャイアン、静香、ドラえもんは愕然とした。

「Mr. キャッシュユ!?」

「知ってるのか!？」

大橋が尋ねるとのび太がうなづいた。

「はい、奴は僕らが18世紀のカリブ海を海賊たちと冒険をしていたときに出会った時間犯罪者です。奴はトモス島と呼ばれる小島で未来のタイムパトロールに隠れながら生物を改造して兵器として売り飛ばしてた奴なんです!!」

「けど、あの時に奴はタイムパトロールでお縄についたんじゃないかなかったのか!？」

「その男はどうやら秘密兵器で脱獄に成功し逃亡生活の最中、私の存在に気付きその上で接近して来た。」

しかし、私からすれば彼は己の未来をベラベラ喋る奴だったよ。その後、私は実験も兼ねて奴にTーベロニカウィルスを打ち込んで忠実な兵器に変えてやったのだ。今1階にいるのが奴だ。」

「ヘッ、裏切つてばっかりだな。てめえは!」

「俺は新世界を築く…人類を次のステージに導くのはこの俺だ。貴様らはここで終わる。それが決められたレールを歩くしかない俺に出来ることだ。」

「誰がこんなとこで終わるかよ!お前の野望だ、終わるのは!!」

「いくら自分に絶望したからって誰かの大事なものを奪っていいわけがないんだ！」

大橋とのび太はウエスカーを倒すべく障害物で身を隠しながら狙撃しようとした。

(闇雲にやってもどうにもならない！なら、ここにあるやつを最大限に活かす！こいつを倒すにはそれしかない!!)

「無駄なあがきだ！」

なんとウエスカーは近くに積んであったミサイルを容赦なくなげつけてきた。

「うわああああああ!!！」

2人は吹き飛ばされてしまい、ウエスカーに見つかってしまった。

「悪あがきはよすんだな。お前ら2人で俺に勝てると思っていたのか？だとしたら大間違いだ。」

ウエスカーはなおも攻撃を仕掛けようとするのび太の拳銃を掴むと片手で握りつぶしてしまった。

「そんな……！」

「……!!！」

大橋が背後から日本刀で攻撃しようとしたがウエスカーに白刃取りをされてあっさりへし折られてしまった。

「お前たちの戦意を削ぐにはこれで十分だ。そして見ているんだ。仲間たちももう終わりだ。下にいるB・O・Wは俺の長年の実験成果に及ぶ改造を施しているのだ。安易に勝てるなどと想像するのは大間違いだ。」

入り口付近では大量のゾンビやガードがUBCSたちを襲い次第に追い込まれてきた。

「くそッ！倒しても倒してもキリがない!!ヤノフ！アレでどうにかならないのか!」

各自UBCSも敵の武装を奪いながら戦っていたが体力的に限界を迎えていた。それでも敵は容赦なく追い討ちを仕掛けていた。

「無茶ですよ隊長！さっきからやってますけどそれでもこいつらぞろぞろと湧いちゃいますって!!」

「これはちよいと怪しい雲行きだな。」

「ボサボサしてんじゃないよ!!」

「そうだ、私たちは倒れられない！たとえ命尽きようとのび太くんたちに託した以上簡単に死ねないんだ!!」

「ふん、敵はまだまだいるというのにくだらんな。」

その後も下の階で必死に戦う仲間たちの姿を見ていた2人だが、敵の容赦ない攻めに

苦戦を強いられていた。

「無駄だ。Mr. キャツシユの同僚であるDr. クロンの改造生物技術を奪い取って更なる改造を施したB. O. Wに通常のやり方では勝てん。ジリ貧になって追い詰められるだけだ。」

1階のミスクリエーションも攻撃を受けてより強靱な肉体の第2形態に変化し、毒ガスを吹いた。

「なんだこの毒ガスは…!?武器が溶けていく?」

「そんな!!このままじゃ…!」

仲間たちが敵の手であつという間に追い込まれていたのを見ているのび太と大橋はなおもウエスカーの攻撃を受けていた。

「もうだめだ…俺たちは戦えないのか?」

大橋が見ていたのは苦しそうな表情で戦い続ける仲間たちだった。二つ下のクリスとジルもなんとかスカルミリオーネと交戦するも、改造を施されているため防御力は数倍に跳ね上がっていたため苦戦していた。

「愚かな。自らの力の差も分からずに勝負を挑むとはな。一思いに殺してくれる!!」

その時、空が割れて艦隊のようなものは突如として現れた。

「なんだ!?!」

「おにいちゃああああああんんんんんんんんんんん!!!」

すると艦隊からの援護射撃で敵ゾンビは一瞬で灰と化した。さらに黄色と黒の影が降り立ち、敵を打ちのめしていった。

「アレは…! ドラミ!?!」

「それにセワシくん!?!」

「おじいちゃん、助けに来たよ!!」

第48話 明日へ

「おじいちゃん、助けに来たよ!!」

降り立ったセワシは緑色に発光した剣で次々と敵を切り捨てていった。

「なんだあの艦隊は!？」

ウエスカーにとつても想定外だったため取り乱している艦隊のリーダーらしき人物が現れた。

「我々はタイムパトロールである! アルバート・ウエスカー、君は時間犯罪者であるMr. キャツシュと共謀した容疑がかけられているため実力を行使する!!」

「なんだと!?!なぜ貴様らが…!」

「簡単さ、お前はキャツシュに関する管理を怠ったんだ!! あいつはウイルスに侵される前に時空転移をしていたんだけどお前がすぐにウイルスに感染させたために時空艇を破壊しなかつたから奴が来る6年前からずっと微弱な波動の変化が計測されたんだ!」
「だから時間の特定には苦戦したけど、私たちはこうして助けに来たの! 観念しなさい!!」

ドラミも空気砲でUBCSたちと共闘して敵を完全に撃破した。

「なんだなんだ？味方なのか？」

「俺に聞くなよリシー。ただでさえ色々頭いっぱいな中でまたなんか足されてもなんだよ。」

リシングスキーとエスターは何が何だかわからず困惑していたが、リシーツアとヤノフそしてセイカーはセワシのサポートに回っていた。

「ボヤくんじゃないよ！あたしからも気合入れんだよ！」

「そうですよ、俺だつて戦ってるんですから!!」

「戦いましょう…隊長。」

「ああ!!」

「セワシくん、ここは任せたわ！私は各階を通つて最上階に行くから！」

「うん!!気をつけて！」

セワシは迫り来る敵を次々と緑色の剣で切り裂いていった。

セワシの剣は未来の技術で開発したフォトンセイバーである。セワシ自身、元々は非戦闘員だった。しかしある日突然のび太やドラえもんや連絡が取れずすぐにタイムパトロールへ調査を依頼したところ、原因はバイオハザードによる時間改変の影響だと知るとすぐに助けに行くべく体を鍛え始め、わずか16歳でタイムパトロールの隊員に

なったのだ。

「おじいちゃんたちの未来は壊させない！皆さん、頼みます!!」

「ああ!!」

ドラミが一階に入ってミスクリエーションを空気砲で転倒させた。

「受け取って！これは未来の技術が生んだ武器、無限武器よ。それがみんなに最後の力をくれるわ！」

そういうとドラミはどこでもドアで各階に現れ、一人一人に武器を与えた。

「どうやら形成逆転だな。行くぜ、バケモノ！」

「あたし達にまだ仲間がいたのね。だったらこんなところで死ねないわ！」

武器を構えて仲間たちは武器を受け取り敵に休むことなく攻撃を続けた。しかしその弾薬は尽きなかった。

1階ではなおも襲いかかるミスクリエーション第2形態に全員無限マシンガンで一斉攻撃を放った。

「未来の科学には恐れ入るぜ、けどもう負けねえ！」

健治がへへと笑いながらひたすら攻撃を続けていた。全員の攻撃はミスクリエーションの顔面に集中的に向かい、やがて大ダメージを与えた。

「散々やってくれたじゃない！覚悟しなさい!!」

富藤がブレスレットについていた画面をタッチして無限コルトパイソンを構えた。

無限に放たれるマグナムの弾丸を受けてついにミスクリエーションは倒れた。

「化け物も未来の技術にはタジタジだな。よし！上に行くぞ！」

二階では無限マシンガンでリヘナラドールは体内の寄生体プラーガに構わずひたすら攻撃が続き、体全体があつさりと爆散していた。

「行くぜ！フォーメーションG!!」

ジャイアンとスネ夫と安雄も散開して強大なパワーを誇るスーパータイラントを三方向からロケットランチャー、アサルトライフル、グレネードランチャーで一斉に攻撃した。

「いくらパワーが強くて3方向から高火力で攻めれば！」

「お前みたいなやつでも倒せるんだよ！」

「ジャイアンズを舐めるんじゃないやあねえ!!」

スーパータイラントは3人のいるところを見回して困惑する中、攻撃を防げずに爆散した。

「大手柄だぜ、ジャイアンズ！」

ジャイアンがスネ夫と安雄の肩にポンと手を置いた。

その上の4階では、咲夜がフォトンセイバーの一つレッドクイーンを手にとってテイ

ロスの腕を一撃で切断した。

「すごい……」

翡翠もポカンした表情で無双する咲夜を見つめていた。

「終わりよー！」

咲夜のと振りりでテイロスは首を刎ねられ胴体は真つ二つに切り裂かれた。

「ふう……」

「うわあ……これはひどい位の攻撃ですねえ。」

「翡翠さん、先を急ぎましょう！」

「は、はい!!」

その後他の階の仲間たちもドラミの武器や自らの手で残りの敵をすべて撃破した。

「おのれえええええ!!何故だ!?!なぜ俺が破れなければならないのだ!?!」

「まだ分からないの!?!あなたは!」

ドラミが現れ、2人に武器を与えた。

「ありがとう、ドラミちゃん!そうさ、お前はこれを見てなんとも思わないのか!?!」

「なに?」

「おめでたいな。お前ほどの優れた力があっても分からないとはな。俺たちは優れた力

はないさ。けど一人なんかじゃない！心で繋がってる限り！」

「何度だって立ち上がる!!」

駆けつけた仲間たちも武器を構えていた。

「もういいだろう、ウエスカー観念しろ。お前は神じゃない！お前はただのアンブレラの残党に過ぎない！」

クリスがウエスカーの武器を銃で弾いた。

「フツ、いいだろう！どのみち貴様らは俺には勝てん。それを教えてくれる！俺こそが時期創造神だ！」

ヤケを起こしたウエスカーは手に持っていた装置のボタンを押した。

「貴様何をしたんだ!」

「ハハハハハ！ここを吹っ飛ばす!!」

「なんだって!」

全員ゾツと青ざめた表情を浮かべた。

「あと1時間でこの施設は木っ端微塵さ！そして！」

ウエスカーの合図で全ての扉が閉じた。

「なっ、ドアが開かない!」

「俺を倒してみろ…そうでなければ俺と共に死んでもらうぞ！」

「ケツ、ずる賢い奴だな！」

「そんなこと……！」

ドラミがポケットに手を伸ばしたが何故か道具を取り出せなかった。

「どうして!?!」

「Mr. キャツシユには感謝しないとな。奴の発明を横取りして俺のものにしたが最後の最後で小細工ロボットに引導を渡せたわ。」

ウエスカーが黒いブレードを構えた。

「それは……」

「ククツ……これも奴の発明さ。ダークブレードの錆にしてくれるー！」

「望むところだ！みんな行くぞ！これが最後の戦いだ!!」

再びウエスカーを取り囲むかのように全員が武器を構えた。

「があああああ!!!!」

ウエスカーも初戦とは打って変わってあらあらしく剣を振り回していた。

「のび太さん！」

「行くよ静香ちゃん!!」

のび太と静香が攻撃を交わして二人同時にハンドガンで攻撃した。

「無駄だ……特殊薬物で肉体をさらに強化した俺にそんなものが効くと思ってるのか!?!」

「ああ！思ってるさー！」

二人の頭上から大橋が黄色のフォトンセイバーを振りかざして来た。

「なに!？」

ウエスカーも逆手持ちで大橋に反撃をとるが、周囲からの援護射撃で動きにキレが見えずにいた。

「貴様ら、いい気になるな!!」

ウエスカーがダークブレードを振りかざして衝撃波を発生させた。その一撃で壁面が破壊され白峰、聖奈、晴夫、晴海、咲夜をはじめとした半分以上のメンバーが下に落ちてしまった。

「みんなが!!」

のび太が穴の方向を見るがドラミが空気砲で攻撃しているので、前を向くとウエスカーが走り出していた。

「来るわ!!」

大橋がフォトンブレードで積極的に攻めるようになってからウエスカーの注意は完全に大橋に向けられていた。

「まだだ!!」

背がガラ空きになったところにクリスのジャーマンスープレックスが掛けられたが

叩きつける寸前にウエスカーは両腕でそれを受け止めてしまった。

「今更こんなもので何になると思ってるのだ?」

しかし、横からジルの蹴りでウエスカーは転倒した。

「いい気になるな!!」

「スネ夫、安雄、健治、太郎!行くぞ!!」

「ああ!!」

全員各々がライフル、グレネードランチャー、マシンガンで一斉放火を放つもダークブレードを回転させたウエスカーに防がれてしまった。

「まだだ!!」

大橋もフォトンブレードで回転攻撃を受け流して腹部に斬撃を浴びせた。

「なんだと!」

「諦めろ!もうお前の野望は終わりだ!!」

「ふざけるなああああああ!!」

今度は十時斬で塔の屋根を完全に破壊してしまったウエスカーは息を切らして殺気を放っていた。

「みんな、早く行くぞ!」

「でもこいつは!」

「こいつは俺（僕）が食い止める!!」

「気をつけてねのび太さん！」

「のび太のくせに美味しいとこ持たなくなつて言いたいけど大橋がいるんなら安心だ
！」

「勝つてね!のび太くん!!」

静香、スネ夫そしてドラえもんがまずメツセージを残して飛び降りた。

「大橋くんも戻つて来てください!今まで話せなかつたこと、いっぱいお話ししたいですから…」

「お前たちを信じてる！」

「若さで思い切りぶつかれ！」

大橋はのび太と共にウエスカーを足止めすることになり残りのメンバーは一刻も早い脱出を果たすためウエスカーの攻撃で開けられた穴から飛び降りて塔から脱出した。最後に鳥柴、レオン、クリスも脱出した。

「馬鹿め!大人しく集団戦にすればいいものを!!」

「いいや、もう決めたんだ。お前は僕と大橋さんで倒す!!」

「やってみろ！」

ウエスカーがダークブレードを振りかざしたが大橋がフォトンセイバーでウエスカーと競り合いを始めた。両者は互いに気力を闘志に変えながら剣を振るっていた。

その中でのび太もウエスカーに追い打ちを仕掛けていた。

「邪魔をしておつてがああああ!!!」

「お前の相手は俺だ!」

大橋が隙を見せたウエスカーに正面から斬撃を喰らわせた。

「ぐっ!」

ウエスカーは距離を置いて剣を構えた。

「のび太、ここは俺が決めるぞ。」

「はい!」

大橋も剣を構えた。そして両者は互いに走り出して相手に斬撃を浴びせた。しかしまずは大橋が胸から出血してしまった。

「ぐわああああああ!!!」

「ふっ…やるようだな。しかしこれで1人減った!この俺の野望の妨げを一つ排除して

やったぞ!」

「大橋さん!?大橋さん!!」

ウエスカーは次にのび太を狙おうとしたが突如として足を滑らせた。

「な……に？」

ウエスカーが倒れるとウエスカーの腹部にも傷があった。

「くっ……あじな真似を……！」

「大橋さん！くそツ……意識を失ってる！」

「ふ、ハハハハハ！勝負に勝って死ぬとはな。まあ、いい……どうやら俺はここまでのようだな。だが、悪魔は何度でも蘇る……貴様らに安息などがあると思わないことだ……！」

「悪魔がどうか僕にはわからない。けど僕たちは1人じゃない！1人じゃないからみんなで助け合うことを忘れなければお前のような奴が何度蘇ったって負けない！」

のび太はそのまま大橋を抱えて飛び降りた。

「ふん……憎らしい奴め。俺の野望は終わらん……いつか……！」

ウエスカーを後にしてのび太たちは崩れゆく施設に残っていた。

「のび太くん！」

一行が安堵した表情を浮かべるも、負傷した大橋を見て不安なものに一転した。

「お兄ちゃん、時間が無いわ！早く船に乗って爆発に巻き込まれないようにしないと！」

「そうだね！みんな早く船に乗るんだ!!」

「待て、私も載せてくれ……」

一行が振り返るとそこには血を吐きながら死んだはずの狗波 冥月が立っていた。
「貴様！」

クリスが銃を構えたが狗波が制止した。

「私はもう戦うつもりはない。安全な島を知っているのは私だけだ。急いだ方がいいぞ。」

「…わかった、ついてくるなど言いたいけど今はそう言ってもらえないからな！」

クリスが銃を下ろすと全員タイムパトロールの船に乗った。

「行くぞ！ 総員何かに捕まってくれ！」

全員近くに柱に捕まって船の衝撃に備えた。そして船が消えたと同時に施設は跡形もなく爆発し、炎はウエスカアの塔にも回りやがて大爆発を起こした。

第48話 友は永遠に…

爆破地から数十キロ離れた小島にのび太たちは立っていた。

「これで終わったんだ。俺たち勝ったんだな？」

「ああジャイアン、間違いないぜ。」

「ほんと、怖かったけどみんながいたから僕も勇気を振り絞れたよ。」

ジャイアン、安雄に晴夫が戦いを終えて砂浜に座り込んでいた。

「ジャイアン、あんたも中々やるね。初めてあつた時はヤバイやつだったけど、ほんの少しだけ見てて分かった。」

ジャイアンに近づいてきたのはサーシャだった。

「あんたのガッツとリーダーシップはすごい。それで頼みたいんだけどあたしもジャイアンズに入れてほしい…」

「え!?! 本当か!?!」

サーシャの告白にジャイアンが驚愕した。すると晴夫と安雄は何かを察してジャイアンの背を押した。

「入れてやれよ、ボス！」

「俺たちも歓迎するぜ！」

それを聞いたジャイアンはへへッと笑い手を握った。

「サーシャ、あんたをこれからジャイアンズ新メンバーに認定します!!」

「お疲れ様、これで終わったのね。」

「うん戦いは終わった。けどこれからどうしたらいいのかな？」

「簡単だよそんなの。俺たちで変えてればいいさ。」

「そうだよ、健治にいの言う通りだよ！僕たちで未来を変えていくんだ！僕たちには明日があるんだ!!」

「あつ、てめ…俺の言いたいこと言いやがって!!でも、その通りだぜ。」

「本当の兄弟見たいね、そう思わない？富藤さん、聖奈ちゃん。」

「ふふ…そうかもね。」

聖奈と富藤、咲夜、健治に太郎も海を眺めながら話していた。

「はあくほんと大変だったなく戦いのたびに僕もちびつちやいそうだったけど、なんや感や生き残れてラッキーだったなって思うよ。」

「スネ夫くん、今回の件で遅しくなつたんじゃないかな？僕にはそう思えるよ？」

「ええ!?そう…かな？」

「出木杉の言う通りだ。」

近くの木から2人を見つめていた白峰がスネ夫の肩に手をポンと置いた。

「お前、初めてあつた時は意気地のなさそう奴に見えちまつたけど今は一皮向けて頼りになるやつだぜ。」

「白峰さん…よーし！僕も頑張らないと!!」

白峰の励ましで嬉しくなったのかスネ夫がガッツポーズを浮かべたが出来過ぎはその後ろで首を傾げていた。

(…何を頑張るんだろう?)

「ふう…俺らはどうしたもんかね?」

戦いを終えたUBCSたちは今後を決めかねていた。するとヤノフが静かに挙手した。

「俺は、帰って故郷で静かに暮らします…」

「ヤノフ…寂しくなるね。」

「俺はレオンにお願いでアメリカ軍の特殊部隊に戻るよう頼んでみるわ。アンブレラには無理矢理入れさせられたしな。」

「そうか…なありシートア、セイカー。俺についてきてくれるか?考えがあるんだ。」

「ああ、いいき。あんたにはどこだつてついてやるよ。」

「同じく…」

深く考えていたリシングスキーたち3人はやがてクリスとジル、エスターはレオンの元へ向かった。

「あーあ、まさか本当に生き残つちまうなんて思いもしなかったな。」

「でも、生きててよかつたでしょ？ 死んだら終わりなんだ。したいこともできないよ。」

座り込んだ久下の横に笹木が座り込んだ。

「ああ…俺つてぶつちやけこん中で必要だったか？」

「まだそんなこと言つて、久下さんはさ。度胸をつけなよ。みんな怖くても戦つてる。」

女の僕もね。」

「…」

「かー、お似合いのペアさんやな〜！」

「赤田…」

後ろから赤田が2人に声をかけていた。

「赤田さんだつて、頑張つてるんだよ。久下さんもこれから頑張ろうよ。」

「あ、ああ…」

戸惑いながらも久下は首を縦に振った。

戦いの後のび太と静香、ドラえもんはセワシとドラミと話していた。

「助かったよドラミ！」

「お兄ちゃんやのび太さんと繋がらなくて困ってたけど無事でよかったわ！」

「セワシくんもいつのまに武器を扱うようになってたんだね！」

「うん、そうなんだよ。僕もおじいちゃんのこと心配でタイムパトロールの人が来ておじいちゃんたちを救う為に訓練したんだ。勉強の合間だったけどね。」

「でも、これでもしもボックスを使えば元どおりね！」

静香の一言でセワシの表情が突如として暗くなった。

「そのことなんだけど…今回の事件はもう歴史が大きく変わりすぎてるんだ。もしもボックスを使っても、歴史が本来歩むべきものと完全に乖離されてるから使ってもアンブレラの残した爪痕は別のものになってしまうんだ。」

「そんな！もう何もかも戻らないのかい!？」

「そうなの…タイムパトロールの権限でもこれ以上の時間改変は時空犯罪になってしまうの。だから…」

辛い現実を知ったのび太は閉口したがやがて笑顔になった。

「大丈夫、たとえ未来が変わらなくなっても僕たちは生きてるんだ。みんながみんなを支

えあえばきつと悲しい未来は来ないよ。きつともつと明るくなるはずさ！」

のび太の一言に静香がふふと笑い出した。

「のび太さんらしいわね。でもそういうのは大切なことかもしれないわね。みんなで生きるチャンスが無駄にするのではなく大切にして使つて行く。その過程で時々理屈に合わないことだつてしたくなるものね。」

「静香ちゃん……」

「のび太くん、僕は……」

「ドラえもん、僕はもう大丈夫だよ。僕はもう一人じゃない！ いじめられて自分を何度も卑下して、何度み挫けそうになつても君がいた。でも、今の僕には大勢の仲間がいる。ドラえもんには未来で見ていて欲しいんだ！僕たちが作り出す未来を!!」

ドラえもんはその言葉を聞いて、涙を流して抱擁を交わした。

「本当に、遅しくなつたね。今の君は未来に突き進む若者そのものさ。」

「僕はもう泣かないよ……」

のび太は笑顔を浮かべてドラえもんと抱き合つた。すると感極まつたドラえもんは涙を流していた。

「お兄ちゃん、どうするの?」

ドラミが尋ねるとドラえもんは涙を拭いた。

「未来に帰るよ。僕の役目はのび太くんたちの未来を見守ることなんだ！またね、のび太くん。未来で、待ってるよ。」

最終話 日常の中へ

戦いは終わった。あの後、狗波冥月はクリスさんたちBSAAに身柄を確保された。

「最後に一言残してもいいかい？」

「？好きにしろ。」

「のび太くんたち！君たちの力は未来を築き上げられるだろう！私はそれを知った。君たちならば私たちとは異なった方法で世界を変えられる!!進む意思を忘れるな。」

「お前…」

そういうと狗波はおとなしく連行された。

「じゃあな、のび太。お前は若い。何かの宿命が眠っているなら自分にしかできない何かを考えろ。そして動くんだ。本当に困ったらもう一回呼んでくれ。助けに行くぞ。」

「それじゃあね、いつかまたどこかで会うのを楽しみにしてるわ。」

クリスのはのび太と握手を交わしてBSAAのヘリにジルとともに飛行船に向かった。

そしてレオンとアシユリー、エスターがそれに乗ろうとした。

「じゃあなのび太、お前の中にある可能性を大事にしろよ。そしてお前たちの仲間のおかげでバカやってた頃の熱さを思い出したよ。じゃあな。」

「はい！レオンさんと戦ったことを忘れません！」

「隊長！リシング、みんなあばよ！！また会おうぜ。」

「お前こそな！それじゃあな！！」

「はい、みなさん！お元気でええええ！！」

のび太たちが手を振って全員へりに乗った。行き先は一つはアメリカへ、一つはBS
AA本部へ、一つは東京へだった。

「ねえ、この後も予定が空いてるなら任務をお願いできるかしら？」

へりに乗ったレオンとアシュリーは手を振りながら話していた。

「ああ、そうだな。なあ、マイク。帰ったら早速新しいやつも入れて一緒に飲まないか
？」

「へえ、それはいい！って言いたいけどそここのやつを隊に戻すんなら上と交渉しねえと
いけないし何より今回の一件は国にも報告しねえとだぞ。」

それを聞いたレオンは苦笑いを浮かべた。エスターも早速親しげに笑顔を浮かべた。

「まっ、頑張ってくれよ。俺もやれることはするつもりだ。」

レオンはため息をついて泣けるぜとだけ呟いた。

「ウエスカー…」

クリスが島の方を見つめるとジルが肩に手をポンと置いた。

「あいつは死んだけど残したものは多いわ。私たちは戦い続ける。本当の未来を掴むまで。」

「ああ。お前たち3人に關しては本部への移動後、俺たちが判断する。いいな？」

「ああ、それで構わない。どうかこの戦うことしかできない3人を頼むぜ。」

リシングスキー、リシューツア、セイカーも輝く海を眺めていた。

「いいのかのび太。ドラえもんたちと別れて…」

「ジャイアン、僕は平気だよ。僕はもう一人でも…ううん、みんなとで何かをすることが出来たんだ。」

「つたく、のび太のくせに逞しくなりやがって!」

ジャイアンがのび太と肩を組みあっている中、今まで負傷していた大橋が目を覚ました。

「大橋くん!」

全員無事に目を覚ました大橋を見て安堵のため息をついた。

「ウエスカーは？」

「安心してください。ウエスカーは倒れました。」

のび太が大橋の手を握った。

「そっか…：そういうや何人かいないがどうしたんだ？」

それから鳥柴が今までの出来事を全て話した。

「みんな新しいところに向かったのか…」

「大橋くん、生きてて良かったです！」

鳥柴も安堵した表情を浮かべながら抱きついてきた。

「雪乃さん…：ありがとう。」

のび太たちはそのまま日本に戻りススキが原復興を目指していた。

全ての戦いから10年が経過した。ススキが原は瞬く間に回復してあの頃の仲間たちはそれぞれの道を歩いて行った。最後にその後をここに記す。

ジャイアン——剛田 武はその後遠くにいたジャイ子と再会して勉学に励み、サーシャと結婚してスーパーパーの経営を開始した。

「よし！剛田スーパー開店だ!!」

「おめでどう、お兄ちゃん！サーシャさん!!」

ジャイ子は立派な漫画家としてメディアにも広く取り扱われることになりサーシャもジャイアンを武呼びにしていた。

「武、頑張ろうな。」

「おっとお二人さん！俺がいることも忘れんなよ!!」

店員としてジャイアンは職がなくて困りかねてた晴夫を正規雇用して経営にあたりつていた。近所からも安心な品揃えと程よい価格と評判であった。最近はチエーン店がオープンするため大喜びだったようだ。

骨川 スネ夫は骨川財閥の後継ぎになった。ジャイアンたちのスーパーや様々な研究機関への見学や投資を行うとともに財閥経営の孤児院を設立した。ただ相変わらずの自慢グセがある模様。

「僕みたいな子供たちには知ってほしいからね。一人じゃできないことはみんなで解決させられることをね。」

ちなみにジャイアンに対してはスーパー開店の際に金を貸すよう頼まれてたらしいが少しづつ返済されてるらしい。さらにはアシユリーともメル友になったそうだ。

出木杉 英才はB・O・Wによる学歴的な問題で夢だった火星へと飛ぶ宇宙飛行士の夢は断られたが、宇宙工学の教授になった。

「僕には行けなかつた宇宙には多くの人が行つてほしい。そして夢を掴む、僕はそんな人たちの手伝いができるだけでも光栄だよ!」

そんな彼の協力で人は将来火星での居住もできるのではないかという話題が浮上りてきている。それから彼は研究中に知り合った外国人女性と恋仲になり結婚している。

田中 安雄は戦いの後、何を思ったのかロボット工学の道を進んでおり将来は人と歩くロボットを作ると言っている。

「理由？ さあな。ひたすら突き進んでたら忘れちまつたぜ。でもまあロボットの友達に嫉妬しちまつたつてのものもあるな。」

彼もスネ夫から金を借りては、研究を続けてるが成果はそこまでではなかった。しかし不撓不屈の意志が彼を突き動かしていた。

緑川 聖奈は夢だったテニス選手になって今も活躍中。最近では世界大会に惜しくもベスト4になってしまったものの挫けずに練習を続け、今度はアメリカで試合があるそうだ。

「今度の大会の意気込みを聞かせてください！」

記者の一言に対して笑顔を浮かべた聖奈はただベストを尽くすだけと言って飛行機のターミナルへと向かった。

翁蛾 健治は富藤と結婚して総合格闘家になり、今もリングで数々の強敵と戦っている模様。しかし……

「あんたもたまには家事を引き受けてよね！」

「今は忙しいんだよ。そんなこと……いいからやりさない！今日は休みなんでしょ。」
「つたく分かったよ。」

富藤 雪香自身は製薬会社に就職して今は癌などと言った重い病気を簡単に直せるようにする薬を開発中らしい。また、旦那を尻に敷いてるらしく翁蛾家は今絶賛かかあ天下であつた。

山田 太郎は大学へと進学した後、教師になつて自分と境遇の似た子供に寄り添うようになる。

「センコーに何がわかるんだよ！」

太郎は生徒の拳を笑顔を崩さずに受け止めた。

「君は家族がいらないそうだね。」

「てめーに何が分かるんだよ！」

最近では不良中学生にも自ら寄り添うことで家族関係の修復を計ったり、不登校生徒やいじめ問題にも真摯に関わり生徒たちを救おうとしていた。その胸にあるのは親を

小さい頃に無くした自分自身と重ね合わせたからこそその正義感からなのかもしれない。今でも健治を尊敬してらしく健治兄さんと呼んでいる。

「全く無茶をして！怪我でもしたらどうするの？山田先生！」

「そうは言いますけどね塩田先生……」

怪我をしていた太郎にお茶を出したのは晴海だった。彼女も教師になっていたところたまたま太郎と再開して今はススキが原の中学校で勤務している。

白峰は聖奈を嫌ってたが今はそうでもなく咲夜とともに砂漠の緑化に励む。

「なあ、この辺ってどうだ？」

白峰が地図の印を指差した。

「これは……もしかしたら行けるかもしれないわね！ここから始めましょう！」

「そう言うと思うてもう用意はしてるぜ。行くぞ。」

白峰と咲夜は設営されたテントから出て歩き出した。果てしなく続く砂漠に命を生まみ出す戦いはまだまだ先は遠い……

ヤノフは戦いの後傭兵を引退し、故郷で結婚して静かに暮らしている。

「あなた、今日は収穫よ。」

「うん、それじゃあ今日は豪勢に行こうよ。」

「あら？手伝ってくれるの？ありがとう。」

戦いが終わった後でもヤノフは時々UBCSだった頃のメンバーとよく飲みに行っていた。

そのセイカー、リシートアそしてリシングスキーはBSAAに転向し今もクリスマスやジェルたちと戦っている。

「ふう、ここもようやく制圧だぜ。2人とも無事か？」

「ああ、いつもみたいに生き残れましたね。にしても今度いい店が見つかったんで行きませんか？」

「おつ、いいね。クリスマスたちも誘いましょうよ。」

「ふつ、それはいい案だな。よし、早速予約してくるか！」

エスターは元いたアメリカ政府の軍隊に戻った。今でもレオンとは交流があるらしく時折飲みについていた。

「どうなんだ最近は？」

「ああ、あいも変わらずの激務だよ…そっちはどうなんだ？」

「俺は新人の訓練だよ。あいつら、思ったよりもダメダメさ。ほんと大変だよ。」

「お互い、仕事には苦労しそうな仲だな……」

「ハハッ！ちげえねえや！」

夜のバーで男2人の談笑がこだましていた。

青木 優作は戦いの後自らの戦いを題材にしたSF小説「プラネットNexus」シリーズでノーベル文学賞を受賞し、今も新作のネタを求めて全国を旅しているらしい。本人曰く「天才の俺でもまだわからないことが多くあるならそれを伝えるまでさ！」とノリノリだった。そして……

「全く、あの人は奔放なんですから。ふふ。」

翡翠はそんな青木と結婚して青木のスケジュール管理などを行なっている。本人も天才だ言ってる割にうっかりミスをするので彼女はそんな彼のサポートを心がけている。

「悪いな瑠璃子。いつもいつもも奔放で。」

「いいんですよ、むしろブレない人は嫌いじゃありませんから。」

「?おいおいそりやどういことだよ!?!」

「ふふ、別に。」

ただ、青木本人はどうやら女心を理解するのは少々難しくなっているようだ。

「お二人さんは相変わらずやな。」

「よっ、久し振りだな。赤田。」

赤田陽介は実家のお好み焼き屋屋を継いだ。

「新婚ラブラブとはいかへんけどまあゆつくりしてつてくださいな。オススメのKay Oスペシャルを持ってくるで！俺の自信作だ！」

「おう、楽しみに待ってるぜ！」

青木と翡翠はこの後お好み焼きデートを楽しんでいた。

久下新次郎はその後バイオテロの主犯組織の陰謀を暴き政府に提出したとして警察署長になった。

「なんでここまで俺が出世しちゃったかな…はあっ…」

以前よりも仕事が多くなってしまったために泣き言をよくいう日々になっていた。

「はいはい！旦那も情けないねえ〜！そんなんじや人を守れないんじやない？」

笹木はそんな久下に喝を入れるべく自分から同棲していた。久下は彼女の振り回しっぷりと仕事量に今後も苦勞することだろう。

大橋 裕太は鳥柴と共に父の孤児院を継ぐことになった。

「とうさーん。」

「ん？どうした雅也？」

「これ欲しい。」

雅也が見せたのは遊園地のポスターだった。

「遊園地か…なんで行きたいんだ？」

「みんなと遊びに行きたくて…」

「そっか、少しお母さんや先生たちと相談してみるな。雪乃さーん！」

大橋が鳥柴の部屋に入ると鳥柴はベットで横でになっていた。

「どうかしたんですか？」

「実は、雅也が遊園地に行きたいって言うてるんだけど雪乃さんもあと数週間で出産な

んだけど出産後にどうかな？」

「いいですね、この子にも笑顔を最初に覚えて欲しいですからね…」

「そろそろ名前も決めないのかな？」

「期待してますよ、パパ。」

そしてのび太は静香と結婚して大学受験で2浪する未来だったところなんと受験して1回で有名大学に進学した。のび太の見えない努力が彼にいつの間にか力を与えていたのだ。

それから彼は企業を立ち上げずになんと国家公務員の一つである環境保護局の自然調査員になっていた。

「お帰りのび太さん。」

「ただいま〜！」

「お風呂できてるわよ。」

「うん、ありがとう。それで再来週だったっけ？同窓会…」

「そうね。みんなもみんな自分の夢を叶えてる。きつとドラちゃんも見守ってるわ。」

玄関にはのび太たちと仲間が映った写真たてが置いてあって、2人はそつと微笑んだ。

「頑張れのび太くん。」

ドラえもんはあれ以来セワシの家に住み込みセワシの子守ロボットとして暮らしていた。

「のび太くんの未来は変わってる。それがどうなるのかはいま調査中だけでもきつと君なら幸せをつかめる！頑張れ!!」

「はっ！」

のび太は家になると振り返って玄関を見つめた。

「どうしたの？」

「ううん、頑張れって声が聞こえたんだ。」

のび太は静かに微笑んだ。